

姫路市

豆腐町遺跡 I

—JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—



2007年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

とうふまち

豆腐町遺跡 I

—JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—

航空写真（1）



市川左岸より姫路市街を望む（東から）

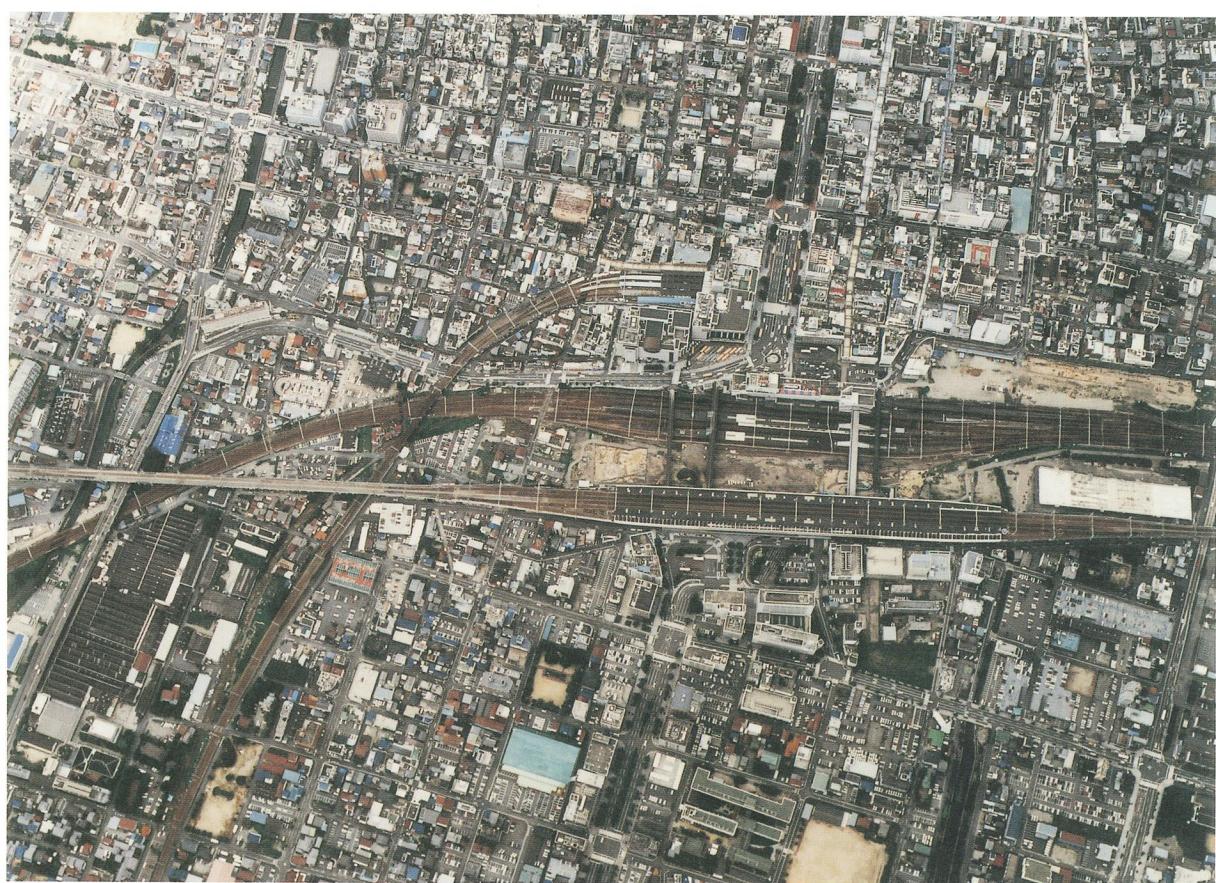


姫路城跡（手前）とJR姫路駅周辺（北から）

航空写真（2）



JR姫路駅高架事業と豆腐町遺跡（西から）



同上（真上から）



A区旧河道SR01出土土器



A区井戸SE02出土二彩陶器



A区旧河道SR01出土製塙土器



墨書土器群



A区出土「郡」銘墨書土器



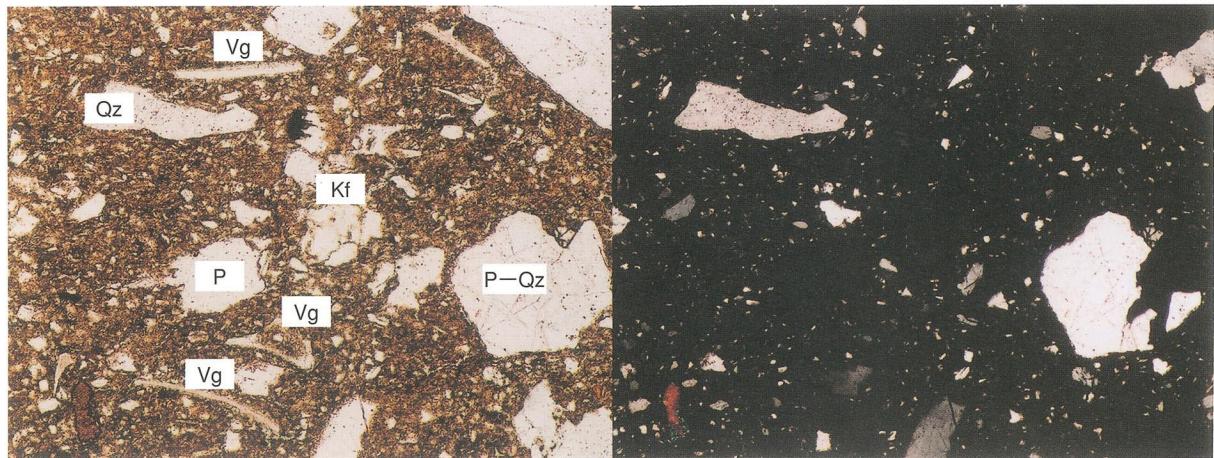
E区出土「郷」銘墨書土器



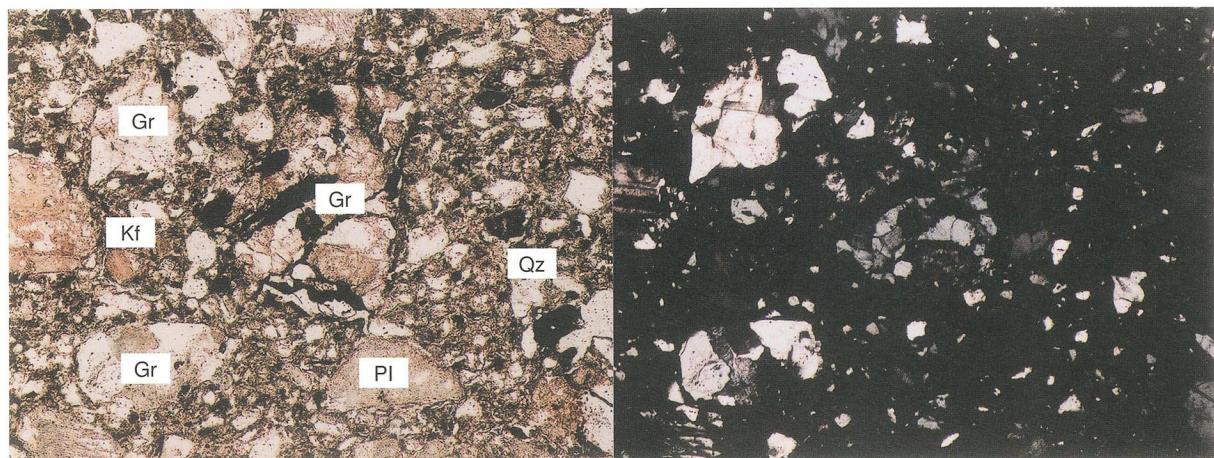
A区出土漆付着土器



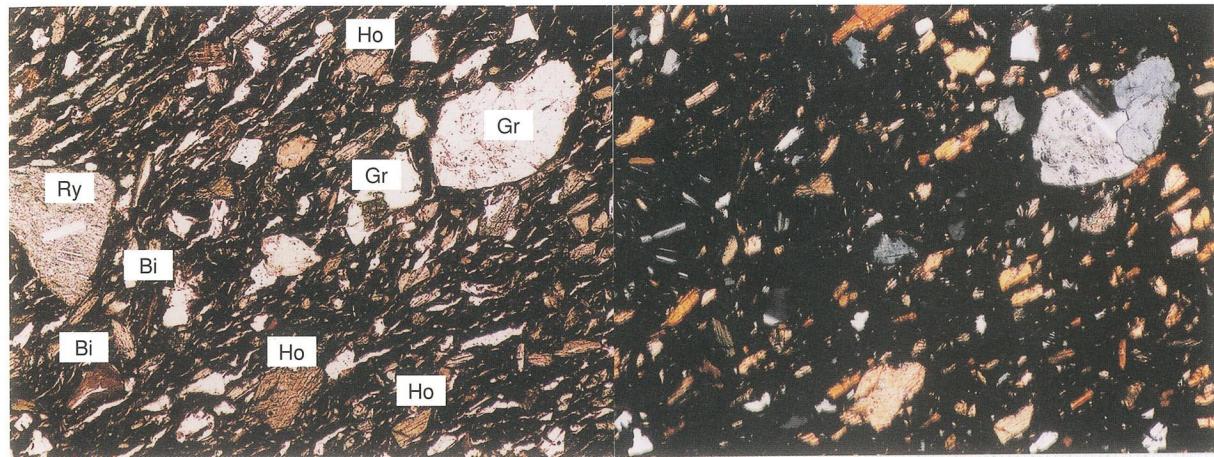
旧山陽鐵道関連施設煉瓦



1. 93210 サンプル1



2. 93210 サンプル2



3. 93210 サンプル5

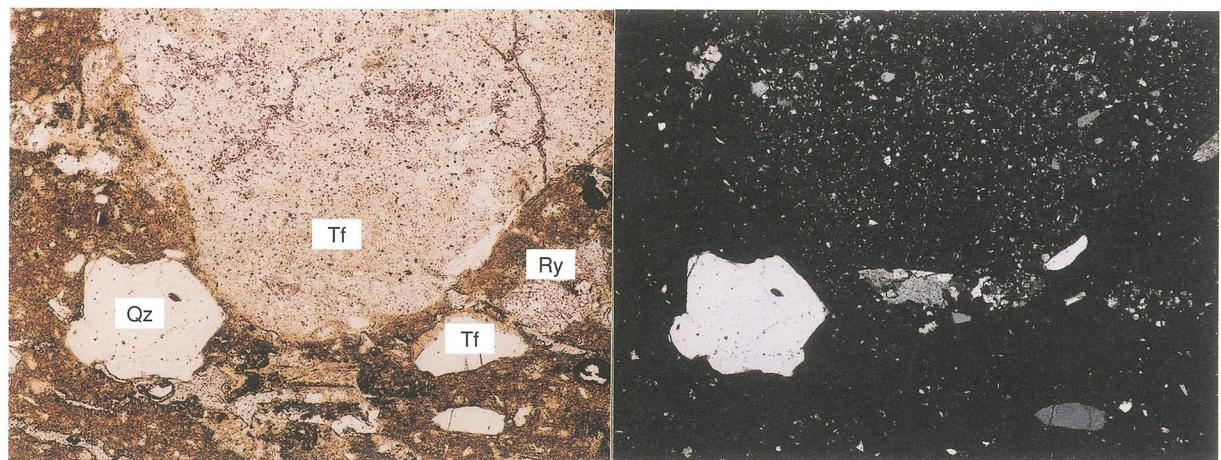
Qz:石英 Pl:斜長石 Kf:カリ長石 Bi:黒雲母 Ho:角閃石

Gr:花崗岩 Ry:流紋岩 P-Qz:多結晶石英

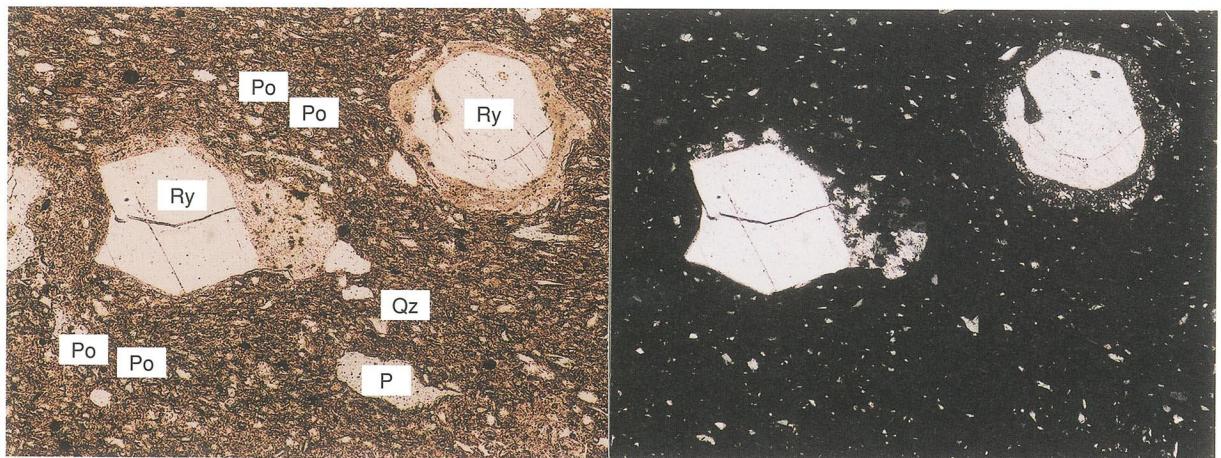
Vg:火山ガラス P:孔隙

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

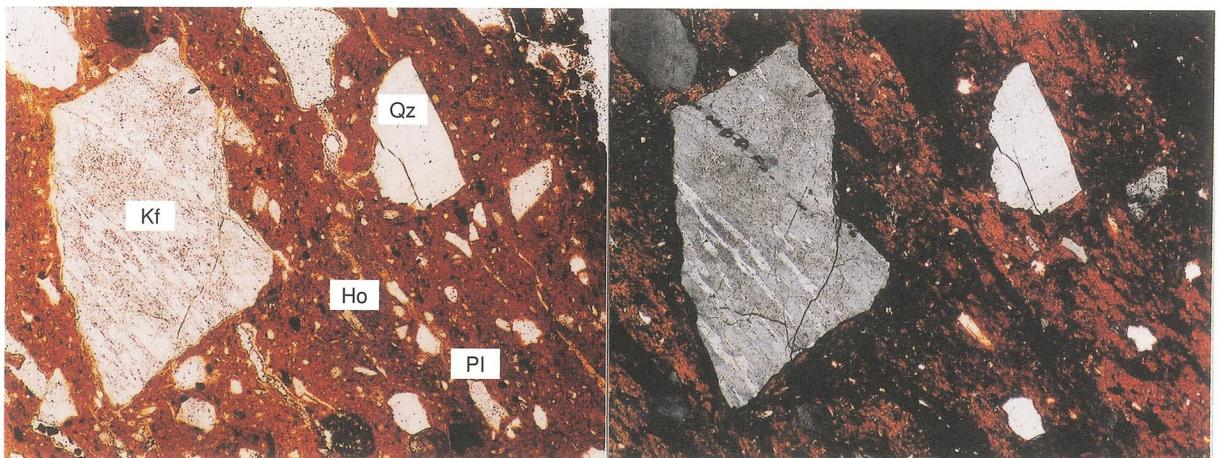
0.5mm



4. 93210 サンプル6



5. 93210 サンプル8



6. 93210 サンプル9

Qz:石英 Pl:斜長石 Kf:カリ長石 Ho:角閃石
Ry:流紋岩 Tf:凝灰岩

Po:植物珪酸体 P:孔隙

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

例　　言

1. 本書はJR山陽本線等連続立体交差事業に伴い、平成10・11・12・13年度に実施した、「豆腐町遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、姫路市豆腐町・南畠町1丁目に所在する
3. 発掘調査及び整理事業については、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行った。
4. 整理作業は平成14年度から18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
5. 遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所嘱託員が行った。
6. 図版に示す方位・座標は日本測地系国土座標第V系を基準とし、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした海拔高度である。
7. 本書に使用した地図は下記の通りである。

第3図 國土地理院1/25,000地形図「姫路北部」平成13年2月1日発行

「姫路南部」平成15年1月1日発行

8. 須恵器・土師器の器種名及び分類記号については、『平城宮発掘調査報告 X I』記載の器種表に従った。
9. 墨書き土器の判読は独立行政法人奈良文化財研究所史料調査室渡辺晃宏氏・山本崇氏の協力を得た。
10. 製塙土器の胎土分析及び井戸出土木製品の樹種同定を、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
11. 本文のうち遺構に関しては、中川 渉、多賀茂治（県立考古博物館開設準備室）、松岡千寿（兵庫陶芸美術館）が執筆した。また遺物については、弥生土器を中川、製塙土器を多賀、古代の土器を森内秀造、瓦を池田征弘、中世・近世・近代の土器・陶磁器を岡田章一、汽車土瓶・煉瓦を村上泰樹（県立考古博物館開設準備室）、木製品を藤田 淳、金属製品を岡本一秀、石器を久保弘幸（県立歴史博物館）がそれぞれ分担執筆した。
12. 写真図版19に掲載した古写真は、収蔵資料4『高橋秀吉コレクション 古写真I』兵庫県立歴史博物館（平成元年）及び収蔵資料5『高橋秀吉コレクション 古写真II』兵庫県立歴史博物館（平成元年）より転載した。
13. 本書の編集は、岡田が行った。
14. 出土品並びに写真、図面類は埋蔵文化財調査事務所に保管している。
15. 発掘調査および出土品整理に際しては、下記の機関並びに個人からご指導、ご教示を得た。ここに、貴機関名並びにご芳名を記して深甚の謝意を表する。
独立行政法人奈良文化財研究所、姫路市教育委員会、兵庫県立歴史博物館
巽淳一郎、西口壽生、渡辺晃宏、山本崇（独立行政法人奈良文化財研究所）、大村敬通（小野市立好古館）、北野信彦（くらしき作陽大学）、小川真理子（西脇市郷土資料館）
秋枝 芳、山本博利、小柴治子（姫路市教育委員会）、山本和子（姫路市市史編纂室）
(敬称略、順不同)

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	(岡田)	
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 発掘調査の経過と体制	3	
第3節 整理作業の経過と体制	9	
第2章 遺跡をとりまく環境	(岡田)	
第1節 地理的環境	11	
第2節 周辺の遺跡	11	
第3章 遺構		
第1節 A区	(多賀) 17	
第2節 B区	(松岡) 23	
第3節 C区	(松岡) 25	
第4節 D区	(中川) 27	
第5節 E区	(中川) 31	
第6節 F区	(中川) 32	
第4章 遺物	(岡田・森内・久保・藤田・中川・多賀・池田・岡本) 32	
第1節 A区	35	
第2節 B区	53	
第3節 C区	59	
第4節 D区	63	
第5節 E区	68	
第6節 F区	69	
第7節 近世の出土遺物	71	
第5章 自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	
第1節 製塩土器の胎土分析	73	
第2節 木製品の樹種同定	79	
第6章 総括		
第1節 古代（8世紀）の遺構と遺物	(森内・多賀) 83	
第2節 中世	(中川) 91	
第3節 汽車土瓶について	(村上) 93	
第4節 豆腐町遺跡出土の煉瓦について	(村上) 97	

挿図目次

第1図 豆腐町遺跡の調査位置図（1：2,000）	2
第2図 姫路駅周辺の微地形等高線図と主な遺跡（1：10,000）	12
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）	13
第4図 横板木口切断面	45
第5図 接合状況（1）	45
第6図 接合状況（2）	45
第7図 接合状況（3）	45
第8図 接合状況（1）	49
第9図 接合状況（2）	49
第10図 接合断面図	49
第11図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	77
第12図 胎土中の砂の粒径組成	78
第13図 孔隙・砂粒・基質の割合	79
第14図 A区S R01出土須恵器杯B法量分布比較図（文献3）	84
第15図 A区S R01出土須恵器杯A法量分布比較図（文献3）	84
第16図 古代の遺構の分布	89
第17図 土器の組成百分率	92
第18図 供膳具の法量散布図	92
第19図 汽車土瓶他	96

表目次

第1表 調査の経過一覧表	8
第2表 S E01の横板一覧表	45
第3表 墨書き器・刻書き器一覧表	70
第4表 薄片観察結果	75・76
第5表 樹種同定結果	80
第6表 川除・藤ノ木遺跡および美乃利遺跡の井戸材の樹種	82
第7表 豆腐町遺跡A区出土汽車土瓶分類	95
第8表 豆腐町遺跡出土煉瓦分類	102
第9表 A区煉瓦積み建物基礎出土の煉瓦	103
第10表 C区扇形庫出土の煉瓦	103
第11表 C区引き込み線出土の煉瓦	103
第12表 出土遺物一覧（1）	104
第13表 出土遺物一覧（2）近世の陶磁器他	
第14表 出土遺物一覧（3）汽車土瓶他	
第15表 出土遺物一覧（4）煉瓦	

図版目次

- | | |
|---|---|
| <p>図版1 兵庫県・姫路市・豆腐町遺跡の位置</p> <p>図版2 調査区配置図 (1:2,000)</p> <p>図版3 A区(1) 全体図</p> <p>図版4 A区(2) 断面図</p> <p>図版5 A区(3) 掘立柱建物</p> <p>図版6 A区(4) 井戸S E01</p> <p>図版7 A区(5) 井戸S E02</p> <p>図版8 A区(6) 土坑(1)</p> <p>図版9 A区(7) 土坑(2)</p> <p>図版10 A区(8) 溝</p> <p>図版11 B区(1) 全体図・断面図</p> <p>図版12 B区(2) 溝・土坑</p> <p>図版13 C区(1) 全体図</p> <p>図版14 C区(2) 断面図</p> <p>図版15 C区(3) 近代平面図</p> <p>図版16 C区(4) 奈良～平安時代・弥生時代 平面図</p> <p>図版17 C区(5) 転車台</p> <p>図版18 C区(6) 土坑</p> <p>図版19 C区(7) 溝</p> <p>図版20 C区(8) 落ち込み・柱穴</p> <p>図版21 D区(1) 全体図・断面図(1)</p> <p>図版22 D区(2) 北区 奈良～平安時代・弥生時代平面図、断面図(2)</p> <p>図版23 D区(3) 中世 掘立柱建物・土坑・池跡</p> <p>図版24 D区(4) 奈良～平安時代 井戸・溝</p> <p>図版25 D区(5) 奈良～平安時代 埋甕・土坑</p> <p>図版26 D区(6) 弥生時代 土坑</p> <p>図版27 E区(1) 全体図・断面図</p> <p>図版28 E区(2) 奈良～平安時代 井戸・土坑・溝</p> <p>図版29 F区(1) 中世全体図・断面図(1)</p> <p>図版30 F区(2) 中世 掘立柱建物</p> <p>図版31 F区(3) 中世 土坑・溝</p> <p>図版32 F区(4) 奈良時代・弥生時代平面図、断面図(2)</p> <p>図版33 F区(5) 奈良時代 掘立柱建物・土坑・溝</p> <p>図版34 D～F区の遺構変遷図</p> <p>図版35 A区(1) 旧河道出土土器(1)</p> <p>図版36 A区(2) 旧河道出土土器(2)</p> <p>図版37 A区(3) 旧河道出土土器(3)</p> <p>図版38 A区(4) 旧河道出土土器(4)</p> <p>図版39 A区(5) 旧河道出土土器(5)</p> <p>図版40 A区(6) 旧河道出土土器(6)</p> <p>図版41 A区(7) 旧河道出土土器(7)</p> <p>図版42 A区(8) 旧河道出土土器(8)</p> <p>図版43 A区(9) 旧河道出土土器(9)</p> <p>図版44 A区(10) 旧河道出土土器(10)</p> <p>図版45 A区(11) 旧河道出土土器(11)</p> <p>図版46 A区(12) 旧河道出土土器(12)</p> | <p>図版47 A区(13) 旧河道出土土器(13)</p> <p>図版48 A区(14) 旧河道出土土器(14)</p> <p>図版49 A区(15) 旧河道出土土器(15)</p> <p>図版50 A区(16) 旧河道出土瓦</p> <p>図版51 A区(17) 旧河道出土木器・勾玉・石器</p> <p>図版52 A区(18) 旧河道出土石器</p> <p>図版53 A区(19) 井戸S E01出土土器</p> <p>図版54 A区(20) 井戸S E01出土木製品(1)</p> <p>図版55 A区(21) 井戸S E01出土木製品(2)</p> <p>図版56 A区(22) 井戸S E02出土土器</p> <p>図版57 A区(23) 井戸S E02出土瓦(1)</p> <p>図版58 A区(24) 井戸S E02出土瓦(2)</p> <p>図版59 A区(25) 井戸S E02出土木製品(1)</p> <p>図版60 A区(26) 井戸S E02出土木製品(2)</p> <p>図版61 A区(27) 土坑・柱穴・溝出土土器</p> <p>図版62 A区(28) 溝・柱穴出土土器・土坑出土金属製品・石製品</p> <p>図版63 B区(1) 焼土坑2出土土器・石製品・瓦</p> <p>図版64 B区(2) 柱穴・溝出土土器・瓦</p> <p>図版65 B区(3) 溝S D01出土弥生土器</p> <p>図版66 B区(4) 溝S D01出土縄文土器・弥生土器・紡錘車</p> <p>図版67 C区(1) 柱穴・溝S D02出土土器・瓦</p> <p>図版68 C区(2) 溝・包含層出土土器・土製品</p> <p>図版69 C区(3) 土坑・溝出土弥生土器・石製品</p> <p>図版70 D区(1) 溝S 26出土土器</p> <p>図版71 D区(2) 土坑出土土器</p> <p>図版72 D区(3) 池跡・包含層出土土器</p> <p>図版73 D区(4) 金属製品</p> <p>図版74 E区 土坑・溝・柱穴出土土器</p> <p>図版75 墨書土器(1) (A区旧河道)</p> <p>図版76 墨書土器(2) (A区旧河道)</p> <p>図版77 墨書土器(3) (A区旧河道)</p> <p>図版78 墨書土器(4)・刻書土器(1) (A区旧河道)</p> <p>図版79 墨書土器(5) (A区旧河道)</p> <p>図版80 墨書土器(6) (A区井戸・土坑)・刻書土器(2) (A区旧河道)</p> <p>図版81 墨書土器(7) (C区 S D02・E区 S K05)</p> <p>図版82 近世の陶磁器・土製品</p> <p>図版83 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(1)</p> <p>図版84 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(2)</p> <p>図版85 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(3)</p> <p>図版86 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(4)</p> <p>図版87 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(5)・出土煉瓦刻印分類</p> |
|---|---|

写真図版目次

卷頭図版 1 航空写真(1)

- 1 市川左岸より姫路市街を望む（東から）
- 2 姫路城跡（手前）と JR 姫路駅周辺（北から）

卷頭図版 2 航空写真2

- 1 JR 姫路駅高架事業と豆腐町遺跡（西から）
- 2 同上（真上から）

卷頭図版 3 出土遺物(1)

- 1 A区旧河道 S R01出土土器
- 2 A区井戸 S E02出土二彩陶器
- 3 A区旧河道 S R01出土製塙土器

卷頭図版 4 出土遺物(2)

1 墨書き土器群

- 2 A区出土「郡」銘墨書き土器
- 3 E区出土「郷」銘墨書き土器

卷頭図版 5 出土遺物(3)

- 1 A区出土漆付着土器

卷頭図版 6 出土遺物(4)

- 1 旧山陽鉄道関連施設煉瓦

卷頭図版 7 自然科学分析(1)

- 1 土器胎土薄片(1)

卷頭図版 8 自然科学分析(2)

- 1 土器胎土薄片(2)

写真図版 1 A区(1) 航空写真(1)

- 1 JR 姫路駅と調査区（南上空から）
- 2 全景（北上空から）

写真図版 2 A区(2) 航空写真(2)

- 1 全景（北上空から）
- 2 全景（東上空から）

写真図版 3 A区(3) 全景 A - 1 区

- 1 全景（東から）
- 2 奈良時代遺構集中部（北から）
- 3 同上（東から）

写真図版 4 A区(4) 全景 A - 2 区

- 1 全景（南から）
- 2 奈良時代遺構集中部（南から）
- 3 旧河道 S R01（南西から）

写真図版 5 A区(5) 奈良時代 井戸(1)

- 1 井戸 S E01（東から）
- 2 同上 断面（東から）
- 3 同上 井戸枠（東から）

写真図版 6 A区(6) 奈良時代 井戸(2)

- 1 井戸 S E02 (SK13)（東から）
- 2 同上 断面（東から）
- 3 同上 井戸枠（北東から）

写真図版 7 A区(7) 土坑・溝

- 1 土坑 S K20（南から）
- 2 同左 断面（南から）
- 3 土坑 S K22（南から）
- 4 同左 断面（南から）
- 5 土坑 S K23（東から）

6 土坑 S K28（南から）

- 7 溝 S D01断面（南から）
- 8 溝 S D16断面（南から）

写真図版 8 A区(8) 調査風景

写真図版 9 B区(1) 全景(1)

- 1 全景（東から）
- 2 全景（西から）
- 3 全景（西から）

写真図版10 B区(2) 全景(2)・溝(1)

- 1 調査区西半部（東から）
- 2 調査区東半部（西から）
- 3 溝 S D01（北から）

写真図版11 B区(3) 溝(2)

- 1 溝 S D01A断面（北から）
- 2 溝 S D02~04（南から）
- 3 溝 S D05~07（南から）

写真図版12 B区(4) 溝(3)・柱穴群(1)

- 1 溝 S D01土器出土状況（南から）
- 2 溝 S D05土器出土状況（東から）
- 3 溝 S D09土器出土状況（東から）
- 4 P 29断面（西から）
- 5 B 14~15 ピット群（南から）

写真図版13 B区(5) 柱穴群(2)・焼土坑

- 1 調査区南東部ピット群（南から）
- 2 焼土坑 2 検出状況（西から）
- 3 同左 南北断面（西から）
- 4 同上 軒丸瓦・土師器出土状況（西から）

写真図版14 C区(1) 航空写真(1)

- 1 J R 姫路駅と調査区（西上空から）
2 同上（北上空から）
- 写真図版15 C区(2) 航空写真(2)
1 調査区全景（西から）
2 調査区北側（西から）
3 調査区全景（北西から）
- 写真図版16 C区(3) 全景(1)
1 調査区全景（東から）
2 同上（西から）
3 調査区北側（西から）
- 写真図版17 C区(4) 全景(2)
1 調査区北側（南西から）
2 調査区北西侧（東から）
3 溝 S D05・07・08（南から）
- 写真図版18 C区(5) 転車台(1)
1 S X02西壁（東から）
2 J R 姫路駅旧転車台（ターンテーブル）（西から）
3 調査区南西側車庫跡（東から）
- 写真図版19 C区(6) 転車台(2)
1 姫路駅航空写真（南から） 兵庫県立歴史博物館所蔵（高橋秀吉コレクション）
2 姫路駅機関庫（昭和29年） 同上
3 姫路駅機関庫（昭和50年） 同上
4 姫路駅機関庫（北から） 同上
5 姫路駅機関庫（南から） 同上
- 写真図版20 D区(1) 全景 南区
1 全景（西から）
2 同左（東から）
3 西半部（西から）
- 写真図版21 D区(2) 全景 中区
1 全景（南上空から）
2 同上（西から）
3 西半部（西から）
- 写真図版22 D区(3) 全景 北区
1 中近世面全景（東から）
2 奈良時代面全景（東から）
3 弥生時代面全景（東から）
- 写真図版23 D区(4) 中世(1) 北区・中区
1 掘立柱建物 S B01（南から）
2 中区西半部遺構群（南から）
3 同上（東から）
- 写真図版24 D区(5) 中世(2) 中区
1 池 S K02（東から）
2 同上 中央断面（北東から）
3 池 S K02・01断面（北から）
4 溝 S D03（正面から）
- 写真図版25 D区(6) 中世(3) 南区・中区
1 南区土坑 S K02断面（南から）
2 中区土坑 S K06断面（東から）
3 中区土器出土状況（西から）
- 写真図版26 D区(7) 奈良時代(1) 南区
1 溝 S D01北側断面（南から）
2 同上 南側断面（南から）
3 埋甕 S X01（真上から）
4 同上 断ち割り断面（南西から）
5 土坑 S K01断面（北東から）
6 土坑 S K09断面（南から）
7 土坑 S K13断面（南から）
8 土坑 S K12断面（南から）
- 写真図版27 D区(8) 奈良時代(2) 中区
1 土坑 S K07・井戸 S K08（南西から）
2 S K07（南西から）
3 同上 断面（西から）
- 写真図版28 D区(9) 奈良時代(3) 中区
1 井戸 S K08（西から）
2 同上 断面（西から）
3 同上 断ち割り（西から）
- 写真図版29 D区(10) 奈良時代(4) 北区
1 溝 S D26（北から）
2 同上 土器出土状況（西から）
3 同上（西から）
- 写真図版30 D区(11) 弥生時代 中区
1 全景（東から）
2 土坑群（南から）
3 下層のピット群（南から）
- 写真図版31 D区(12) 弥生時代 土坑
1 南区 S K06（北から）
2 同左 土器出土状況（南から）
3 南区 S K04断面（南東から）
4 南区 S K11断面（西から）
5 中区 S K11（西から）
6 中区 S K12 断面（北から）
7 中区 S K14 断面（北から）
8 中区 S K15 断面（西から）
- 写真図版32 D区(13) 調査区断面 中区
1 北壁断面（南から）
2 西壁断面（東から）
3 西壁断面アップ（東から）
4 北壁断面アップ（南から）
- 写真図版33 E区(1) 全景
1 全景（上空から）
2 同上（東から）
3 同上（西から）

写真図版34 E区(2) 奈良時代 井戸

- 1 井戸S K05周辺（西から）
- 2 S K05（南から）
- 3 同上 断ち割り（南から）

写真図版35 E区(3)

- 1 柱穴群（東から）
- 2 東壁断面（西から）

写真図版36 F区(1) 中世(1)

- 1 全景（南から）
- 2 溝S D01・02（西から）
- 3 同上 断面（東から）

写真図版37 F区(2) 中世(2)

- 1 土坑S K08（北から）
- 2 同左 断面（西から）
- 3 土坑S K03断面（西から）
- 4 土坑S K06断面（北から）
- 5 土坑S K09断面（北東から）
- 6 土坑S K10断面（北から）
- 7 柱穴P 11（南から）

写真図版38 F区(3) 奈良時代(1)

- 1 全景（南から）
- 2 全景（北から）
- 3 全景（西から）

写真図版39 F区(4) 奈良時代(2)

- 1 掘立柱建物S B201（南から）
- 2 掘立柱建物S B202（北から）
- 3 溝S D03（南から）

写真図版40 F区(5) 奈良時代(3)・弥生時代 他

- 1 柱穴P 212断ち割り（西から）
- 2 柱穴P 237・238断ち割り（西から）
- 3 土坑S K202断面（南から）
- 4 土坑S K301断面（南から）
- 5 弥生時代面全景（南から）
- 6 東壁断面（西から）
- 7 現地説明会風景
- 8 同左

写真図版41 A区(1) 旧河道出土土器(1)

写真図版42 A区(2) 旧河道出土土器(2)

写真図版43 A区(3) 旧河道出土土器(3)

写真図版44 A区(4) 旧河道出土土器(4)

写真図版45 A区(5) 旧河道出土土器(5)

写真図版46 A区(6) 旧河道出土土器(6) ,

写真図版47 A区(7) 旧河道出土土器(7)

写真図版48 A区(8) 旧河道出土土器(8)

写真図版49 A区(9) 旧河道出土土器(9)

写真図版50 A区(10) 旧河道出土土器(10)

写真図版51 A区(11) 旧河道出土土器(11)

写真図版52 A区(12) 旧河道出土土器(12)

写真図版53 A区(13) 旧河道出土土器(13)

写真図版54 A区(14) 旧河道出土土器(14)

写真図版55 A区(15) 旧河道出土土器(15)

写真図版56 A区(16) 旧河道出土製塙土器・瓦

写真図版57 A区(17) 旧河道出土木製品・勾玉・石
器

写真図版58 A区(18) 旧河道出土石器

写真図版59 A区(19) 井戸S E01出土土器

写真図版60 A区(20) 井戸S E01出土木製品(1)

写真図版61 A区(21) 井戸S E01出土木製品(2)

写真図版62 A区(22) 井戸S E02出土土器

写真図版63 A区(23) 井戸S E02出土瓦

写真図版64 A区(24) 井戸S E02出土木製品(1)

写真図版65 A区(25) 井戸S E02出土木製品(2)

写真図版66 A区(26) 土坑・柱穴・溝出土土器

写真図版67 B区(1) 焼土坑2出土土器・石製品・瓦

写真図版68 B区(2) 柱穴・溝出土土器・瓦

写真図版69 B区(3) 溝S D01出土弥生土器

写真図版70 B区(4) 溝S D01出土繩文土器・弥生
土器・紡錘車

写真図版71 C区(1) 柱穴・溝S D02出土土器・瓦

写真図版72 C区(2) 溝S D02出土弥生土器・石器

写真図版73 D区(1) 溝・土坑出土土器

写真図版74 D区(2) 土坑出土弥生土器

写真図版75 D区(3) 池跡・包含層出土の土器

写真図版76 D区(4) 金属製品

写真図版77 E・F区 土器

写真図版78 墨書き土器(1) (A区旧河道)

写真図版79 墨書き土器(2) (A区旧河道)

写真図版80 墨書き土器(3) (A区旧河道)

写真図版81 墨書き土器(4)・刻書き土器(1) (A区旧河道)

写真図版82 墨書き土器(5) (A区旧河道)

写真図版83 墨書き土器(6) (A区井戸・土坑)・刻書き土
器(2) (A区旧河道)

写真図版84 墨書き土器7 (C区S D02・E区S K05)

写真図版85 近世の陶磁器1

写真図版86 近世の陶磁器2・土製品

写真図版87 汽車土瓶(1)

写真図版88 汽車土瓶(2)

写真図版89 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(1)

写真図版90 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(2)

写真図版91 旧山陽鉄道関連施設煉瓦(3)

写真図版92 木材(1)

写真図版93 木材(2)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

1. 確認調査

豆腐町遺跡は姫路市豆腐町～南畠町1丁目に所在する弥生時代、古代（8～9世紀）、中世、近世、近代に及ぶ複合遺跡である。当該地については、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所（以下姫路土木事務所）によって、JR山陽本線等連続立体交差事業が計画されたため、兵庫県教育委員会（以下県教委）が事業に先立って確認調査を実施した。

まず平成7年10月から11月、平成8年2月の2次にわたって、姫路駅構内で行った確認調査では、現地表下に0.6mから1.5mの厚さで堆積した明治21年の旧山陽鉄道開通時の盛り土と、その下層の近世の水田面、及び中世から古代・弥生時代の遺構面の存在を確認した。これらの調査結果からA～C区について本発掘調査の必要性を認めた。

次いで平成10年度には9月から12月にかけて3次の確認調査を行い、A・C区の調査範囲を確定した。この時にC区には、明治時代の機関庫が存在することが判明した。

平成10年度末から13年度にかけては、駅の西外側についての確認調査を行い、中世・奈良時代・弥生時代の3時期の遺構面を検出した。これによって豆腐町遺跡の西限がおさえられ、D～F区の調査範囲を確定した。

さらに事業の進捗に伴い、平成18年度に駅構内の旧山陽本線軌道部分について確認調査を実施し、A区とC区の北側に遺構が広がることが判明した。

2. 本発掘調査

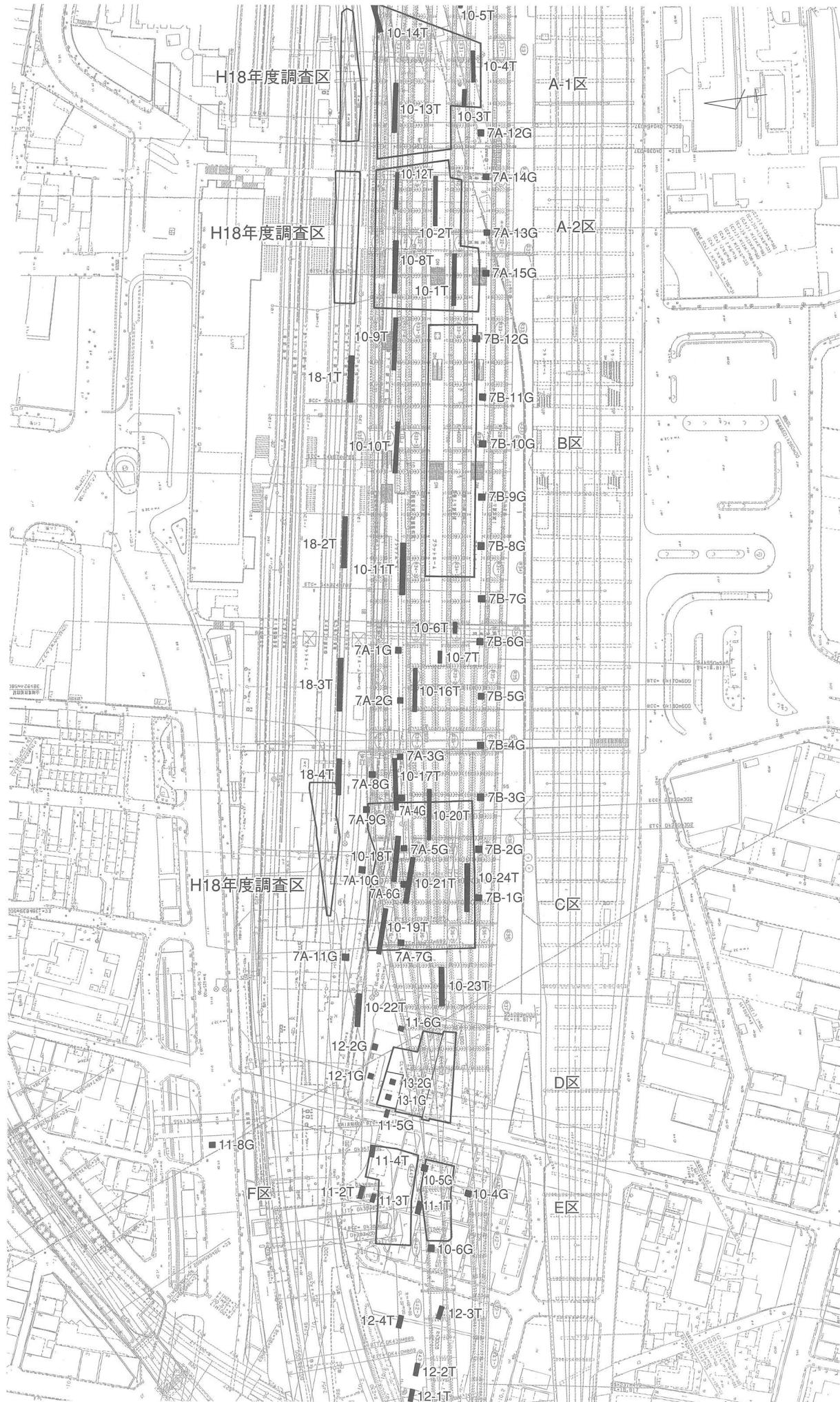
本発掘調査は事業の工程に基づき、平成10年度から13年度の4箇年度に、計8次に分けて実施した。

平成10・11年度は駅構内の在来線と新幹線の間の敷地を対象とし、調査範囲は大きく構内の東部にあるA・B区と、西端のC区に分けられる。A区については、東西でA-1・A-2区に分かれる。

平成12・13年度は駅の西外側に位置する市道を跨ぐ橋脚部分を対象とした（D～F区）。なお市道東側のD区については、用地取得の進捗に伴って3次に分けて実施したため、それぞれD-南・D-中・D-北区と呼び分ける。

その後、旧在来線のホーム・軌道部分について、平成18年度に本発掘調査を実施したが、その成果については後年度に別途報告することになる。

各調査の詳細については、次節に示すとおりである。



第1図 豆腐町遺跡の調査位置図（1：2,000）

第2節 発掘調査の経過と体制

1. 平成7年度

遺跡調査番号 950276

調査の種別 確認調査

調査期間 平成7年10月25日～10月27日、11月13日～11月14日

調査担当者 種定淳介

調査の概要

調査区は駅構内の西部と東部に分けられる。西部区域では柱穴と奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師器の細片が出土している。また、東部区域では、奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師器を含む遺物包含層を検出した。なお、調査対象地区は旧市川に挟まれた微高地を形成している。

遺跡調査番号 950389

調査の種別 確認調査

調査期間 平成8年2月5日～2月7日

調査担当者 種定淳介

調査の概要

旧山陽鉄道開通以前の水田土壤層を検出した。また、水田土壤層の下層で、奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師器及び中世から近世にかけての陶磁器片を検出した。

2. 平成10年度

遺跡調査番号 980050（B区=旧I区）

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成10年5月22日～8月12日

調査担当者 岡田章一・井本有二・松岡千寿

調査の概要

豆腐町遺跡における本発掘調査としては、最初に行われたものである。この調査では、明確な遺構群は検出されなかったものの、弥生時代から近代に及ぶ遺構・遺物が断片的ではあるが確認されている。近代に属するものでは、旧山陽鉄道に関連する施設は検出されなかったものの、播但線開通時まで存在した「馬車鉄道」に関連する施設ではないかと考えられる杭列が検出されている。

近世に関しては、少なくとも17世紀前半から幕末期には町屋は存在せず、水田として利用されていることが明らかになり、文政期の絵図の記載を裏付ける結果となった。

池田輝政入部以前については、遺構・遺物とも全く検出されず、初期城下町はこの付近にまで及んでいなかったことが明らかになった。中世の遺構面は調査区の西側で12世紀後半から13世紀前半の建物群がわずかに検出されたに過ぎなかつたが、この時期の遺構群は北側に延びてゆく可能性が指摘された。

8世紀から9世紀代の古代の遺構も、調査区の西側でわずかに検出されたに過ぎない。この時期の遺構面についても、調査区の東側及び南側に延びる可能性が指摘されている。

さらに、最下層では弥生時代の流路が検出されている。流路内から出土した土器があまり磨耗していないことから、北側に弥生時代の遺構が存在する可能性が高いことが想定されている。

遺跡調査番号 980131

調査の種別 確認調査

調査期間 平成10年9月7日～9月11日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

旧河道とその東側の微高地上で奈良時代から平安時代の土坑などを検出した。出土遺物には、土師器、須恵器などの他、製塩土器がある。

遺跡調査番号 980177

調査の種別 確認調査

調査期間 平成10年11月10日～11月13日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

奈良時代から平安時代の遺物が多量に出土する旧河道を検出した。また、密度はまばらであるが、奈良時代から平安時代の柱穴・土坑・溝などが検出され、この付近が遺跡の東限と推定される。

遺跡調査番号 980200

調査の種別 確認調査

調査期間 平成10年12月14日～12月16日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

明確な遺構は検出されていないが、一部で弥生時代、奈良時代から平安時代の遺物が出土している。洪水砂あるいは機関庫の建設時に大きく破壊されているものの、部分的に奈良時代から平安時代の遺構が存在する可能性が高い。

遺跡調査番号 980241

調査の種別 確認調査

調査期間 平成11年2月8日～2月9日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

明確な遺構は検出されなかったが、一部で奈良時代から平安時代の遺物が出土している。

遺跡調査番号 980242

調査の種別 確認調査

調査期間 平成11年3月4日～3月5日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

明確な遺構は検出されなかったものの、奈良時代の遺物を包含する土壌層及び弥生時代の遺物を含む土壌層が確認された。その結果、奈良時代の遺跡が調査地より西側まで広がること及び船場川左岸の自然堤防上に弥生時代中期の遺跡が存在することが明らかになった。

遺跡調査番号 980210 (A区=旧II区)

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成11年1月5日～3月8日

調査担当者 水口富夫・佐々木俊彦・多賀茂治

調査の概要

この調査では大きく分けて、奈良時代、平安時代後期から鎌倉時代、近世の3時期の遺構群が検出された。

奈良時代の遺構には掘立柱建物・縦板組隅柱横桟どめの井戸1基・横板組隅柱横桟どめの井戸1基などがある。旧河道から出土した大量の土器の中には、墨書き土器・製塩土器・転用硯・二彩壺・埴堀などといった特色のある遺物が含まれる。

平安時代後期から鎌倉時代の遺構はわずかに水田に伴うと考えられる溝が1本検出されているのみであり、須恵器・青磁などが出土している。

近世の遺構には水路・溝状遺構・土坑・掘立柱建物などがあり、いずれも水田に伴う水路・農作業小屋などの施設と考えられている。

3. 平成11年度

遺跡調査番号 990010 (C区=旧III区)

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成11年5月10日～8月16日

調査担当者 水口富夫・松岡千寿

調査の概要

この調査では、弥生時代、奈良・平安時代、近代の3時期の遺構群が検出されている。

弥生時代の遺構には、微高地と自然流路状の窪みとの境で検出された3本の溝及び、微高地上で検出された土坑がある。

奈良・平安時代の遺構には、規則性の乏しい柱穴群と土坑がある。

近代の遺構には、旧山陽鉄道時代の機関庫の施設がある。施設は引き込み線と扇形庫の煉瓦積み地下施設及びセメント製の円錐形転車台からなり、明治36年に作られた姫路駅では2代目の機関庫と考えられている。

遺跡調査番号 990247

調査の種別 確認調査

調査期間 平成11年11月8日～11月10日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

明瞭な遺構は検出されていないが、旧河道及び弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土している。調査地点の北端に設定した8Gは豆腐町遺跡の推定範囲内にあるが、遺構・遺物とも見つかっておらず、豆腐町遺跡の西端はここまで及んでいないと考えられる。

遺跡調査番号 990319

調査の種別 確認調査

調査期間 平成12年3月1日～3月2日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

奈良時代から中世の遺構が検出された。遺構の密度は高くないが、掘立柱建物の存在が予想された。また、弥生時代の土壤層が確認されている。

4. 平成12年度

遺跡調査番号 2000281 (D-南区・E区=旧IV・V区)

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成12年5月12日～8月11日

調査担当者 中川 渉・松岡千寿

調査の概要

調査地点は、D-南区（旧IV区）とE区（旧V区）の大きく2箇所に区分される。D-南区は飾磨街道の東側、E区は西側に位置している。

D-南区で検出された遺構には、弥生時代の土坑、奈良時代の埋甕・土坑・溝・柱穴、中世の柱穴、近世の井戸・方形石組み遺構などがある。

また、E区では、奈良時代の井戸・土坑・柱穴、中世の柱穴、近世の井戸・土坑などが検出された。

遺跡調査番号 2000295 (D-中区=旧VI区)

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成12年10月17日～平成13年3月16日

調査担当者 中川 渉・松岡千寿

調査の概要

この調査では、弥生時代末期の土坑群、奈良時代の土坑・井戸・柱穴・溝、平安時代後期の土坑・溝・柱穴、近世の土坑などが検出されている。特に平安時代後期には、土師器の小皿が100点ほどまとめて投棄されており、館跡の存在が想定されている。

遺跡調査番号 2000344 (F区=旧VII区)

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成13年1月22日～3月16日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

この調査でも、従来の豆腐町遺跡の調査同様、弥生時代、奈良時代、平安時代後期から鎌倉時代の遺構群が検出されている。

弥生時代の遺構は土坑1基のみで、遺物の出土は見られないが、層位から見て弥生時代前期を下るものではないと考えられる。

奈良時代の遺構には柱穴・土坑・溝がある。

さらに、平安時代後期から鎌倉時代の遺構群には、2棟の掘立柱建物・溝・土坑などがある。

遺跡調査番号 2000371

調査の種別 確認調査

調査期間 平成13年2月27日

調査担当者 中川 渉

調査の概要

調査地点は地表下1mまで攪乱されており、遺構・遺物とも検出されなかった。

5. 平成13年度

遺跡調査番号 2001047

調査の種別 確認調査

調査期間 平成13年4月3日

調査担当者 多賀茂治

調査の概要

中世（平安時代末から鎌倉時代）及び古代（奈良時代）の柱穴が検出され、古代から中世の遺構面がこの範囲にまで及んでいることが確認された。

遺跡調査番号 2001090（D-北区=旧Ⅷ区）

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成13年7月9日～8月10日

調査担当者 森内秀造・久保弘幸

調査の概要

3面の遺構面が検出された。第1遺構面は12世紀後半から13世紀を中心とする時期であり、中世の掘立柱建物の一部が検出されている。この他、この面では近世後半から末の土坑などが検出されている。第2遺構面は8世紀後半を中心とする遺構面で、掘立柱建物の一部と考えられる柱穴と溝が検出された。掘立柱建物は溝の埋没後に立てられたものと考えられ、柱穴内から出土した遺物は平安時代後半のものである。さらに、第3遺構面は柱穴と溝が1条検出されたのみで、その性格は明らかではないが、これまでの調査事例から、弥生時代のものと判断された。

6. 平成18年度

遺跡調査番号 2006064

調査の種別 確認調査

調査期間 平成18年5月26日～5月30日

調査担当者 山田清朝・鈴木敬二

調査の概要

4本のトレンチ調査の結果、平成10年度に調査したB区の北側には、調査範囲は拡大しないことを確認した。なおNo.4トレンチでは、C区で検出したものとは別の転車台の外壁を検出した。

遺跡調査番号 2006103

調査の種別 本発掘調査

調査期間 平成18年8月28日～11月17日

調査担当者 渡辺 昇・長濱誠司

調査の概要

東側のII区では、A区から続く旧河道で奈良時代の遺物が大量に出土し、周辺の微高地には掘立柱建物が存在する。

I区では、C区のものより古い段階とみられるレンガ積みの転車台を検出した。

第1表 豆腐町遺跡調査一覧表

年度	遺跡調査番号	所在地(姫路市)	調査種別	担当者	期間	面積(m ²)	調査箇所
H7	950276	豆腐町322他	確認	種定淳介	平成7年10月25日～10月27日、11月13日～11月14日	60	7a-1G～15G
	950389	豆腐町322他	確認	種定淳介	平成8年2月5日～2月7日	48	7b-1G～12G
H10	980050	豆腐町322他	本発掘	岡田章一・井本有二 松岡千寿	平成10年5月22日～8月12日	2,300	B区
	980131	豆腐町	確認	多賀茂治	平成10年9月7日～9月11日	180	10-1T～7T
	980177	豆腐町	確認	多賀茂治	平成10年11月10日～11月13日	310	10-8T～15T
	980200	豆腐町	確認	多賀茂治	平成10年12月14日～12月16日	240	10-16T～21T
	980210	豆腐町	本発掘	水口富夫・佐々木俊彦 多賀茂治	平成11年1月5日～3月8日	3,556	A区
	980241	豆腐町	確認	多賀茂治	平成11年2月8日～2月9日	88	10-22T～24T
	980242	南畠町	確認	多賀茂治	平成11年3月4日～3月5日	28	10-4G～6G
H11	990010	豆腐町	本発掘	水口富夫・松岡千寿	平成11年5月10日～8月16日	2,211	C区
	990247	南畠町	確認	多賀茂治	平成11年11月8日～11月10日	32	11-8G
	990319	南畠町他	確認	多賀茂治	平成12年3月1日～3月2日	46	11-1T～6G
H12	2000281	南畠町1丁目86・100・110～112	本発掘	中川涉・松岡千寿	平成12年5月22日～8月11日	539	D-南区・E区
	2000295	南畠町1丁目87・89	本発掘	中川涉・松岡千寿	平成12年10月17日～平成13年3月16日	389	D-中区
	2000344	南畠町1丁目109	本発掘	多賀茂治	平成13年1月22日～3月16日	477	F区
	2000371	南畠町1丁目95	確認	中川涉	平成13年2月27日	8	12-1G～2G
H13	2001047	南畠町	確認	多賀茂治	平成13年4月24日	8	13-1G～2G
	2001090	南畠町1丁目92	本発掘	森内秀造・久保弘幸	平成13年7月9日～8月10日	98	D-北区
H18	2006064	駅前町	確認	山田清朝・鈴木敬二	平成18年5月26日～5月30日	60	18-1T～4T
	2006103	駅前町	本発掘	渡辺昇・長濱誠司	平成18年8月28日～11月17日	1,063	18年度I・II区

第3節 整理作業の経過と体制

豆腐町遺跡からは、特に奈良・平安時代を中心に墨書き土器・須恵器杯転用硯、漆容器として使われた須恵器壺の底部、製塩土器、二彩壺などの土器・陶磁器のほか井戸枠などの大型の木製品などが大量に出土している。

このため、出土品整理作業は平成14年度から18年度にかけての5箇年計画として実施した。各年度の作業内容及び体制は以下の通りである。

1. 平成14年度

遺物の水洗い作業については、調査時に現場事務所で行った。従って平成14年度には、ネーミング、接合作業を埋蔵文化財調査事務所で行った。

整理担当職員	整理保存班 村上泰樹
	企画調整班 中川 渉
	調査第2班 松岡千寿
	調査第3班 岡田章一・久保弘幸

2. 平成15年度

平成14年度に引き続き、土器・陶磁器、金属製品、木製品の実測・拓本を埋蔵文化財調査事務所で行った。

整理担当職員	整理保存班 村上泰樹
	企画調整班 中川 渉
	調査第1班 岡田章一・松岡千寿
	調査第2班 久保弘幸
	調査第3班 森内秀造

3. 平成16年度

平成15年度に引き続き、土器・陶磁器、金属製品、木製品の復元、写真撮影、写真整理を埋蔵文化財調査事務所で行った。

整理担当職員	整理保存班 村上泰樹 中村 弘
	企画調整班 中川 渉
	調査第1班 岡田章一
	調査第2班 久保弘幸
	調査第3班 森内秀造
	(文化財室 多賀茂治)
	(県民政策部芸術文化課 松岡千寿)

4. 平成17年度

平成16年度に引き続き、図面補正、トレース、自然遺物の分析鑑定、木製品、金属製品の保存処理を

埋蔵文化財調査事務所で行った。

整理担当職員 整理保存班 森内秀造
藤田 淳（木製品保存処理担当）
岡本一秀（金属製品保存処理担当）
企画調整班 中川 渉
調査第1班 岡田章一
調査第2班 久保弘幸
調査第3班 村上泰樹
(県立考古博物館準備室 多賀茂治)
(県立陶芸美術館 松岡千寿)

5. 平成18年度

平成17年度に引き続き、レイアウトを行い、報告書を印刷刊行した。

整理担当職員 整理保存班 岡田章一・森内秀造
藤田 淳（木製品保存処理担当）
岡本一秀（金属製品保存処理担当）
企画調整班 中川 渉
調査第2班 池田征弘
(県立考古博物館準備室 村上泰樹・多賀茂治)
(県立陶芸美術館 松岡千寿)
(県立歴史博物館 久保弘幸)

また、平成14年度から18年度までの長きにわたり、多くの非常勤嘱託員が整理作業に携わった。整理作業を担当した嘱託員は以下のとおりである。

整理担当非常勤嘱託員

杉本淳子・柏原美音・前山三枝子・吉田優子・眞子ふさ恵・友久伸子・佐伯純子・岡田美穂・尾鷺都美子・西口由紀・柏木明子・藤川紀子・佐々木誓子・河上智晴・藏幾子・加藤裕美・又江立子・豊田貞代・栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美・高橋朋子・清水幸子・今村直子・早川亜紀子・小林俊子・渡辺二三代・伊藤ミネ子・衣笠雅美・家光和子・岡井とし子・村上令子・小林陽子・高田めぐみ・石野照代・中田明美・大仁克子・岡田祥子・長谷川洋子・川上啓子・川上緑・江口初美

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

姫路駅周辺は市街化が早かったため、現状で旧地形を観察することは困難である。そこで姫路市基本地形図（1:2,500）をもとに現地表面の微地形を、50cmコンタで復元したのが第2図である。これでもある程度の地形の傾向が読み取れるものと考えられる。これに市之郷遺跡の報告書で詳述されている地理的環境のデータをもとに、豆腐町遺跡周辺の地形を述べる。

まず豆腐町遺跡の調査範囲は、北東から南西に向かう大きな張り出しの上に乗っていることが見て取れる。これは大きく見れば礫層で構成される扇状地性の堆積で、A～C区はその中に細かく形成された自然堤防と低地を横断しており、微高地では遺構が、旧河道状の低地からは多量の遺物が出土する。調査区の西側には南畠町遺跡（2）との間に深い谷が入り込んでおり、D～F区はすでに谷の斜面にあたるため地形の形成が著しく、弥生時代・古代・中世の3面の遺構面が確認された。

調査区の東側には、北条遺跡（10）と豊沢遺跡（11）を分かつ谷が、仮称 姫路駅周辺第1地点（4）との間に延びてきている。さらに東の仮称 姫路駅周辺第3地点（市之郷遺跡）（28）との間には、市川の旧流路と目される、深く大きな谷が入っている。

参考文献

山田清朝 2005 「第1章第1節 地理的環境」『市之郷遺跡』兵庫県文化財調査報告第286冊 兵庫県教育委員会

第2節 周辺の遺跡

豆腐町遺跡は兵庫県姫路市豆腐町に所在する。姫路市は、県下第2の中核都市で、播磨地域の中心となる都市である。瀬戸内海に面し、播磨のほぼ中央部に位置し、東は高砂市、西はたつの市及び揖保郡太子町と境を接する。現在の姫路市は、慶長5年（1600）池田輝政によって築かれた姫路城の城下町として発展してきた。明治維新後は、姫路に陸軍の師団司令部が置かれたことから、軍都として繁栄し、その結果、第2次世界大戦末期には米軍による爆撃で壊滅的な損傷を蒙った。

戦後は播磨地域の中核都市として復興し、往時の繁栄を回復し現在に至っている。

ここでは、豆腐町遺跡で検出された弥生時代から近代に至る周辺の遺跡の概要を述べる。

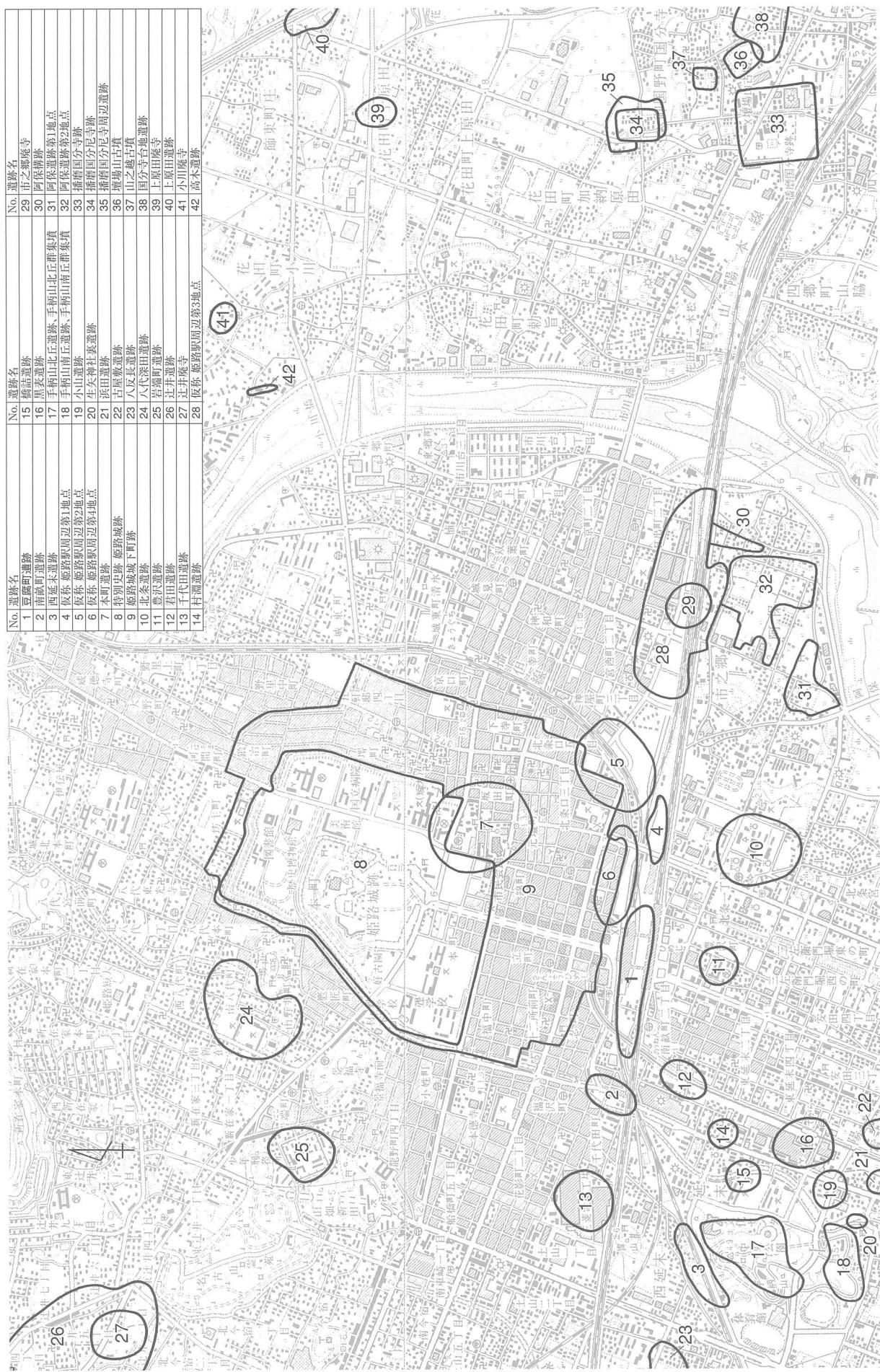
1. 弥生時代

弥生時代の遺跡には、仮称 姫路駅周辺第1地点（北条遺跡）（4）・仮称 姫路駅周辺第2地点（5）・仮称 姫路駅周辺第3地点（市之郷遺跡）（28）・南畠町遺跡（2）・船場川東区整遺跡・兼田遺跡・橋詰遺跡（15）・八代深田遺跡（24）などがある。

仮称 姫路駅周辺第1地点は豆腐町遺跡と同様に、JR山陽本線等連続立体交差事業に伴って平成8年度に兵庫県教育委員会が「北条遺跡」として調査を行い、前期末の旧河道が検出されている。また、姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い、姫路市教育委員会によって調査が行われ、前期の溝・土坑・中期後半の土器溜りなどが検出されている。



第2図 姫路駅周辺の微地形等高線図と主な遺跡 (1 : 10,000)



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

仮称 姫路駅周辺第3地点も同じくJR山陽本線等連続立体交差事業に伴う調査で、平成7・8年度に兵庫県教育委員会が本発掘調査を行い、「市之郷遺跡」として報告書が刊行済みであるため、ここからは市之郷遺跡で話を進める。弥生時代には前期～後期の各時期に遺構・遺物が検出されている。前期末には溝・土坑などの他、木棺墓が1基ある。遺構が最も集中するのは中期後半の段階で、竪穴住居・周溝墓・木棺墓及び大規模な溝などが見つかっており、居住域から墓域にかけての範囲が調査された。後期では前半と終末期の溝・土坑が見つかっている。

仮称 姫路駅周辺第2地点では姫路市教育委員会による調査で、前期の溝・土坑、中期後半の土坑・竪穴住居跡・溝・土器溜りなどが検出されている。

船場川東区整遺跡は区画整理事業に伴い調査が実施され、第10次調査では弥生時代から古墳時代初頭の竪穴住居跡が、第13次調査では中期の竪穴住居跡・土壙墓、後期から古墳時代初頭の竪穴住居跡・柵列・溝・井戸などがそれぞれ検出されている。また、第14次調査では、中期・後期の竪穴住居跡が、第15次調査では、弥生時代の土壙墓が、第16次調査では中期・後期・古墳時代初頭の竪穴住居跡が見つかっている。

兼田遺跡は市川の左岸山頂に立地し、後期の竪穴住居跡が検出されている。橋詰遺跡では遺物包含層が確認され、前期から後期にかけての土器が出土している。八代深田遺跡でも遺物包含層が確認され、中期と後期の土器がまとまって出土している。

2. 古墳時代

古墳時代の遺跡には、宮山古墳のほか、船場川東区整遺跡・市之郷遺跡がある。

宮山古墳は市川の左岸、小富士山の北側に位置する小山塊の東斜面に位置する。5世紀前半の竪穴式石室を主体とし、金製垂飾付耳飾・初期須恵器・鉄鋌など朝鮮半島に起源を持つ遺物で注目されている。

船場川東区整遺跡では中期の竪穴住居跡・掘立柱建物、後期の掘立柱建物が検出されている。第13次調査では、中期から後期の竪穴住居跡・掘立柱建物が検出されている。また第14次調査でも、6世紀前半代の竪穴住居跡が検出されている。

市之郷遺跡の古墳時代中期には居住域としての利用が一定期間継続し、竪穴住居・掘立柱建物の建て替えが繰り返されている。特にSH18から出土した韓式土器は、甌・鍋・平底鉢が完形に近い状態で出土した良好な一括資料である。また初期須恵器の資料も播磨地域の基準となるもので、宮山古墳との関係も視野に入れる必要がある。

3. 古代

播磨国風土記によれば、この時期、当地は播磨国の飾磨郡英保里に編入されていた。この時期の遺跡には本町遺跡（7）、北条遺跡（10）、市之郷遺跡などがある。

本町遺跡では、郵便局の建て替えに伴い調査が行われ、検出された建物跡及び出土瓦から、播磨国府の一部との指摘がなされている。北条遺跡では、姫路市教育委員会によって調査が行われ、7世紀末から8世紀初頭の掘立柱建物の柱穴列・溝・大型土坑・素掘り井戸などが検出されている。また、旧河道内からは、当該期の土器をはじめ、布目瓦・円面鏡などが出土している。

市之郷遺跡では古墳時代後期末から平安時代前半にかけて、居住域が継続している。竪穴住居は飛鳥時代をもって姿を消すとともに、白鳳期には大量の瓦が出土する。これは古くから塔心礎の存在が報告

されている市之郷廃寺に伴うもので、平安時代前半まで存続する。

4. 中世

中世の姫路については、不明な点が多い。奈良時代から平安時代にかけて、整備拡充されていったと考えられる国府は律令制の衰退とともに、次第にその機能を失い、院政期には事実上、播磨国府は院の御分国と化してしまう。平安時代末期には平忠盛・清盛父子が播磨守に任せられ、清盛の子宗盛は播磨の知行国主となる。平氏滅亡後、播磨は後白河院の御分国とされ、院の近臣が受領に補任された。

鎌倉時代に入ると、播磨守護に後藤氏が任せられ、守護所が加古川に置かれたことから、国衙の機能はいっそう衰退したと考えられる。しかし、国衙機能は完全に無くなつたわけではなく、国衙目代小河氏を中心とする国衙機構は鎌倉時代を通じて健在であったと考えられる。

国衙機構が完全に衰退するのは、小河氏が守護赤松氏の被官化し、守護所となった書写坂本城の守護代館に移り住むようになる明徳年間以後と考えられる。以後、姫路が播磨の中心として再び歴史上に登場するのは、黒田氏による姫路城の築城期、さらには羽柴秀吉による初期城下町の形成期まで待たねばならない。

平安時代から室町時代の中世の遺構・遺物は阿保遺跡（31・32）、船場川東区整遺跡、仮称 姫路駅周辺第2地点、仮称 姫路駅周辺第4地点、北条遺跡、市之郷遺跡などで検出されている。

阿保遺跡では鎌倉時代から室町時代の溝・井戸などが確認されている。船場川東区整遺跡では中世の柱穴・溝・土坑・井戸が検出されている。第13次調査では、平安時代後期～鎌倉時代の柱穴・土壙墓が検出されている。第14次調査でも、平安時代後半の掘立柱建物跡が検出されている。仮称 姫路駅周辺第2地点は姫路駅周辺土地区画整理事業に伴い姫路市教育委員会によって調査が行われており、平安時代後期の掘立柱建物・溝が検出されている。また、同第4地点の調査でも、平安時代後期の井戸が検出されている。

JR山陽本線等連続立体交差事業に伴って調査を実施した北条遺跡では、平安時代中期の夥しい柱穴群を検出した。同じく市之郷遺跡では、平安時代後期の掘立柱建物群からなる4単位の屋敷地を調査した。

5. 近世

姫路城の起源については従来、赤松貞範が貞和年間（1345～49）に築いた姫山の城が最初であるとされてきた。しかし、最近の研究の結果、天文24年（1555）から永禄4年（1561）の間に御着城の出城として黒田重隆によって築かれたとする説が有力となっている。

天正4年（1577）播磨に入国した羽柴秀吉は、三木城、英賀城を相次いで攻略し、播磨平定を終える。ついで姫路城に入城した秀吉は、中国攻略の本拠地として新たに築城工事を起こし城下町の経営を開始する。以後羽柴秀長、木下家定が姫路城に入り、近世城下町の母胎となる初期城下町が形成される。

慶長5年（1600）、関ヶ原合戦の論功行賞によって池田輝政が播磨に入国し、姫路城主となった。輝政は入城すると市川を東に付け替え、城下町の建設に着手した。文献や絵図などによると、内堀、中堀、外堀の三重の堀を設け、内曲輪に本城と居館、中曲輪に武家屋敷、外曲輪に町屋と寺社を配した。

その後、城主は本多氏に移り、化粧櫓の築造、西の丸の拡張、三の丸御殿の造営、城下町の整備などが行われ、ここに近世城下町としての姫路が成立する。

本多氏以後、姫路の藩主は、寛延2年（1749）酒井忠恭の入城まで4家、9代の藩主が目まぐるしく入れ替わるが、酒井忠恭の入城以後は酒井氏が明治維新に至るまで城主として在住することになる。

姫路城の発掘調査はここ30年来、現在まで、施設の建て替え、増築、移転などに伴って数多く実施

されている。

秀吉の初期城下町に関する調査としては、大天守地下、二の丸上山里跡、藤本ビル、淳心学院、県立歴史博物館、姫路東高校などがある。この内、大天守地下では、秀吉時代の石垣、礎石建物が検出され、出土遺物には、16世紀後半代の土師器皿、備前焼甕・擂鉢、瀬戸・美濃系灰釉皿、中国製磁器碗・皿などがある。また、輝政以後の近世城下町の調査には、姫路聾学校、姫路東高校、県立歴史博物館、本町遺跡、国立病院、白鷺中学校、淳心学院などがある。

県立歴史博物館建設に伴う調査では、江戸時代の遺構面が3面にわたって検出され、道路、道路側溝、雨落ち溝、暗渠排水溝、築地基礎、石積井戸、建物跡、集石遺構、門跡、漆喰土坑、土坑、炉状遺構などの遺構が検出されている。また、出土遺物には、土師器、備前系陶器、丹波系陶器、肥前系陶磁器、京焼系陶器、瀬戸・美濃系陶磁器、東山焼などがある。

6. 近代

明治維新により、姫路は城下町から大きく変化する。内・中曲輪内の武家屋敷は次々と撤去され、かわって、大阪鎮台分営などの兵舎が設置され、明治29年（1896）旧陸軍の第10師団が置かれ、姫路は軍都としての色彩を強める。さらに、明治21年（1888）山陽鉄道会社が設立され、まず、21年6月に兵庫明石間が、12月には明石姫路間が相次いで開通した。また、22年9月には兵庫神戸間が開通し、神戸で官営鉄道東海道線と連絡することになった。山陽鉄道はその後、西に延伸され、明治34年（1901）には神戸下関間全線が開通した。山陽鉄道は私設鉄道として発足したが、国内の幹線鉄道として重要な地位を占めていたことから、明治39年（1906）鉄道国有法によって国に買収され、国有鉄道山陽本線となつた。

鉄道の開通により工業も発達し、日清・日露戦争以降、各種工業が勃興し、大工場が建設されて、市街地が城郭の外へと拡大していった。このように、播磨地域の交通・工業の中心地として、また、軍都として、明治以降、姫路は発展・拡大して行く。このような市街地形成に大きな変化はもたらすのは第2次世界大戦末期の米軍による空襲である。

空襲によって市街地の大部分を焼失した姫路市は、奇跡的に戦禍を免れた大天守を中心とする内曲輪内の建造物群を中心として、戦後の復興期を迎えることになる。

参考文献

- 山田清朝 2005「第1章第2節 歴史的環境」『市之郷遺跡』兵庫県文化財調査報告第286冊 兵庫県教育委員会
石田善人 1991「播磨の国府と国庁をめぐる歴史的環境」『城郭研究室年報』第1号 姫路市立城郭研究室
兵庫県立歴史博物館 1984『特別史跡姫路城跡—兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告—』
秋枝 芳 1991「姫路城昭和の大修理の成果と展望(1)」『城郭研究室年報』第1号 姫路市立城郭研究室
秋山一郎 1983「山陽鉄道」『兵庫大百科事典』神戸新聞出版センター

第3章 遺構

第1節 A区

1. 概要

位置と範囲

豆腐町遺跡A区は、連続立体交差事業で調査した範囲の最も西側に位置する。調査区の北側はJR山陽本線の下り線線路際、南側は山陽新幹線の高架際までであり、西側は既に調査が終わっていたB区の東端に接するところまで、東側は確認調査の結果遺構が認められた範囲までとした。調査対象範囲の中央部を南北方向に信号ケーブルが走るため、この部分については鉄道運行の安全を確保するために調査範囲から除外した。また調査区を跨いで跨線橋（人道）があり、その脚柱の基礎部分についても調査対象範囲から除外した。調査区の大きさは東西115m、南北41m、調査面積は3,556m²である。なお調査区中央の信号ケーブル部分の掘り残しを境に、東側をA-1区、西側をA-2区と呼称して、以下の記述をおこなう。

基本層序

調査区の基本層序は、調査区東半のA-1区では上から鉄道敷設時の盛土（0.7m）、鉄道敷設前の旧耕作土（0.2m）、暗灰色砂層（0.1m、土壤化層）、黄褐色砂層（ベース面）である。所々、削平のため旧耕作土、暗灰色砂層を欠き、盛土直下でベース面が検出された。また攪乱坑を観察すると、黄褐色砂層の下層には砂礫層の堆積が認められた。調査区西半のA-2区は大半が旧河道SR01の流路の中の堆積であるため、層序については旧河道の項で詳説する。

調査区の地形

調査前の地盤（鉄道軌道敷面）高は10.1～10.2mであり、調査区全体がほぼフラットであった。鉄道軌道敷の盛土を外すと、鉄道敷設前の明治時代初頭の地表面があらわれるが、その高さは9.4m前後であり、A-2区の中央部が0.1mほど低くなる。この低くなっている部分が古代以前の旧河道SR01にあたる。遺構検出は耕作土、暗灰色砂層を除去した黄褐色砂層の上面で行ったが、この面はA-1区の東端から約40m付近まで高さ9.2m前後で続き、この付近から急激にレベルを下げる。ここからは黄褐色砂層の上に堆積した褐色砂層が古代以降の遺構のベース面となる。この褐色砂層からは遺物は出土していないが、褐色砂層を切り込んで形成された旧河道SR01内の出土遺物から考えて、弥生時代以前の堆積であると考えられ、A-1区東端から40m付近に、弥生時代以前に形成された段丘崖の存在が推定できる。

旧河道SR01は調査区を北西から南東方向に東向きに湾曲しながら流れしており、この旧河道に向かってA-2区の東端付近から次第にベース面が下がっていく。旧河道は幅約20mであり、出土遺物から弥生時代以降に形成され、中世頃には埋没していることがわかる。旧河道の西側は、東側に比べて約0.5m低くなっている。A-2区西端で高さ8.5mである。A-2区からB区の東端部にかけては、この旧河道の谷筋にあたる低地となっている。A-2区の東端から5m付近に近世まで機能していた大畦畔と水路があり、この畦畔から西側は近世の水田面の高さが一段低くなっている。鉄道敷設前まで谷筋の名残があったようである。

遺構の検出状況

A区では奈良時代～近世に至る各時期の遺構を検出した。A-1区は全体に近世以降の耕作による削平が著しく、これに鉄道関係施設による攪乱も加わり、遺構の残存状況は良くなかった。特に元々レベルが高いA-1区の東半部は削平によりほとんど遺構が失われている。このため、残存する遺構から見ると、旧河道に沿って遺構が集中するよう見えるが、これはたまたまレベルが低いところにあった遺構が削平されずに残存したためであると考える。

A-1区の遺構は井戸、土坑、溝、掘立柱建物、柱穴、旧河道などがある。遺構の時期は古代～近世であるが、大半の遺構は奈良時代のものである。最も遺構が集中しているのは、調査区の南半の旧河道沿いの部分であり、内部に炭・焼土が堆積した小型の土坑や柱穴を狭い範囲でかたまって検出している。調査区には鉄道関連施設として近代の煉瓦積み建物の基礎や、竜山石製の見地石を積んだ溝などがあつたが、調査時点では遺構としては扱わず近代以降の攪乱として扱っている。このため煉瓦のサンプルを採取したのみで、詳細な記録はとっていない。

A-2区の遺構は旧河道、溝、柱穴、掘立柱建物がある。遺構の時期は、旧河道が弥生時代から継続している以外は、古代以降のものに限られる。最も大きな遺構はA-2区の中央部にある旧河道であり、奈良時代にはほとんど埋没しているが、その東肩部から大量の土器が出土している。古代の遺構はこの旧河道の東側に集中しており、西側には顕著な遺構は認められない。

2. 旧河道

SR01（図版3 写真図版4）

A-2区の中央部を北西から南東へと流れる旧河道である。この河道は調査区付近で東側へと湾曲し、A-1区の南端（遺物はSK01及びSD02で取り上げ、レイアウトしている）をかすめて、南東方向へと続いている。河道の幅は弥生時代～古代の時期では約20m、深さは弥生時代には約2.5m、奈良時代には約1mである。河道の調査は鉄道運行の安全を確保する必要から、全体を掘削するのは古代の遺物が出土する層付近でとどめ、深さや堆積状況の確認は河道中央部を重機で深堀したトレーニングで行った。河道内の堆積は大きく分けると、I：近世の堆積（第2層～第3層）、II：中世の堆積（第4層～第6層）、III：古代の堆積（第7層～第10層）、IV：弥生時代～古墳時代の堆積（断ち割りトレーニングの各層）に分かれる。

古墳時代以前の堆積は、最下層から砂礫層、有機物を多量に含むシルト層、砂層、再びシルト層の順に堆積している。砂礫層の上の断ち割りトレーニング第23層から弥生時代後期の土器が出土しているので、弥生時代中期～後期頃の洪水によります埋没がはじまり、その影響で流れが悪くなって湿地化し、その後も洪水による埋没、湿地化を繰り返しながら次第に深さを減じていったことが読み取れる。第11層からは古墳時代の勾玉が出土しているので、この時代までにはほとんど流れがなくなる程度まで埋没していたようである。

奈良時代には深さ1m程度の窪地として河道の名残りを留めており、ここに河道の東側に存在した施設から、土器や炭など多量の廃棄物が投棄されている。古代の遺物が出土するのは第7層～第10層のシルト～極細砂層であり、特に河道の東肩に集中していた。中世（12世紀）以降はさらに埋没が進み、水田土壤が認められるので水田化していたようである。近世には河道内に溝が掘られているが、この窪地の排水をおこなうためのものであろう。

出土遺物は奈良時代の須恵器、土師器、土師質竈、瓦、製塩土器のほか、古墳時代の滑石製勾玉、磨

石、木製品（建築部材）、石器がある（図版35～52）。遺物の大半は第7層～第10層から出土した奈良時代のものであるが、この層のうち最も上層である第7層、第8層には炭・焼土が多量に含まれており、多量の土器もこの炭や焼土とともに出土している。奈良時代の遺物が河道の東側の火を用いる作業をおこなう場所で使用され、作業の結果生成した炭や焼土などの廃棄物とともに捨てられたことを示している。

3. 掘立柱建物・柱穴

柱穴はA-1区の南側とA-2区の東側で多く検出した。奈良時代～近世のものがあるが、奈良時代の柱穴は暗褐色の埋土、中世の柱穴は明るい灰色の埋土、近世の柱穴は青みがかった灰色の埋土であり、埋土の違いによりおおよその時期が推定できる。

奈良時代の柱穴はA-1区の南側とA-2区の東側、旧河道SR01に沿った部分に集中しており、他の場所では検出されていない。他の部分は近世以降の削平が著しいためもともと存在した遺構が失われた可能性も考えられるが、柱穴の深さを考えるとわずかでも残存する可能性が高いので、もともとこの付近に柱穴が集中していたと考えるのが妥当であろう。柱穴は直径20～30cm、深さ20～30cmほどのものが大半を占め、方形や円形の大型の柱穴は存在しなかった。A-1区の柱穴は列をなさず、建物にはならない。周辺に炭や焼土が入る土坑が多くあり、製塩土器が多量に出土しているので、ここで行われた何らかの作業に伴う柱穴である可能性が考えられる。A-2区の柱穴も建物になるものはほとんどないが、やや配列がいびつながらSB02のみが建物である可能性が高いと考える。

中世の柱穴はA-1区の北側にわずか、A-2区のSR01沿いにわずかにあるのみであり、建物が復元できるものはない。近世の柱穴はA-1区の東半部にまばらに分布しており、SB01のみが建物となる。この他に柱穴ではないが松杭がA-1区の北側にあるが、これは近代以降の鉄道関連施設に伴うものであろう。

SB01（図版5 写真図版3）

A-1区の南側、近世の水路に沿って建つ掘立柱建物である。柱の埋土から近世のものであると判断した。南北2間、東西4間の建物であり、南北1.9m、東西3.7m、柱間は0.9mである。柱穴は直径30cm前後、深さ10～20cmであり、柱内には礎板として径20cm前後、厚さ3～5cmほどの石が入る。この建物の中央からやや西よりのところには直径50cm、深さ5cmほどの木製の埋桶があり、底板のみが残存していた。この建物付近は近世には水田として利用されているので、農作業に伴う小屋であろう。

SB02（図版3 写真図版4）

A-2区の東側、SR01に沿った場所にある奈良時代の柱穴のうち、建物となる可能性がある唯一のものである。やや柱の配列がいびつであるが、建物と考えてよいであろう。南北2間、東西2間の建物であり、規模は南北4.5m、東西3.2mである。柱穴は直径30cm前後、深さ20cm程度であり、柱穴の配列がいびつであるので、恒久的な建物ではなく作業小屋程度の建物であった可能性が高いと考える。

4. 井戸

A-1区においてSE01、SE02（SK13）の2基の井戸を検出している。井戸はいずれもA-1区の西部にあり、周辺に柱穴、土坑などは存在しない。井戸が位置する場所は、弥生時代後期以前に埋没した段丘崖の西側の谷部であり、比較的浅いところに伏流水がある。井戸は廃棄された時期が異なるので、SE02（SK13）の廃棄後にSE01が掘られた可能性が高い。

SE01（図版6 写真図版5）

A-1区の西南隅で検出した奈良時代の井戸である。掘方は検出面で南北2.26m、東西2.30mの隅円方形の平面形であり、検出面から0.25mのところまでは緩やかな傾斜であるが、ここから下は垂直に近い角度で掘り込まれている。掘方の底面の規模は南北1.85m、東西1.88mであり、検出面から底までの深さは1.85mである。掘方はシルト層を掘りぬいて砂層まで達しており、底には10cmほどの円礫が敷かれている。掘方と井戸枠の間は、灰色シルト、暗灰色シルトのブロックで埋められている。

井戸枠は横板組隅柱横桟どめの型式である。9~10cm角、長さ145cm以上の角材4本を隅柱として四隅に立て、この間に径7~8cm、長さ118cmの丸材を横桟として上下2段に入れて支え、この枠に沿って幅12~25cm、長さ135~139cm、厚さ4~5cmの横板を7~9段積み重ね、さらに部分的に横板の外側から縦板をあてている。検出時には最上段の横板が内側に傾いていた。隅柱には2面に横桟を受けるための長方形の枘穴があけられているが、ふたつの面の枘穴は高さを10cmずらして配置している。横桟は底から0.2mのところと、1.2mのところに入る。

井戸は奈良時代の末に人為的に埋められており、埋土中から「井」の墨書のある土師器杯A（366）が出土しているほか、須恵器（361~364）、土師器（365~368）、製塩土器（369）、曲物（W13）などが出土している。

SE02（旧SK13）（図版7 写真図版6）

A-1区の西部中央で検出した奈良時代の井戸である。掘方は検出面では南北1.35m、東西1.40mの円形の平面形であり、底部まではほぼ垂直に掘り込まれている。底面は現状では直径1.30mの円形であるが、これは縦板抜き取り後に壁面が崩落して袋状に掘方が広くなったものであり、もとは隅柱がギリギリ納まる程度の大きさであったと考える。掘方はシルト層を掘りぬいて砂層まで達していた。底部には石敷等は認められなかった。

井戸枠は縦板組隅柱横桟どめの型式であり、幅10~12cm、厚さ7~8cm、長さ220cm以上の角材を隅柱として四隅に立て、これを幅7~9cm、厚さ5~7cm、長さ70~75cmの角材の横桟を3段入れて支えている。縦板は、わずかに1枚の基部（底側）約60cm分が残存していただけである。縦板は幅11cmで厚さが2.5cmのものである。隅柱には2面に横桟を受けるための長方形の枘穴があけられているが、ふたつの面の枘穴は高さを10cmずらして配置している。横桟は底から0.3m、1.0m、1.7mのところに入り、枘で隅柱と結合する。

この井戸は奈良時代の中ごろに人為的に埋められており、埋める前に縦板を全て抜き取り、その後土、石材、瓦などを中に充填している。埋土内からは二彩（372）、土師器（373~378）、須恵器（379~384）、製塩土器（385~392）、瓦（K3~K8）が出土している。いずれも最終の廃絶時に投棄されたものである。

5. 土坑

A-1区では土坑を多数検出しているが、出土遺物などの情報が乏しいこともあり、用途を推定できるものは少ない。その中でも南側の旧河道SR01沿いに集中する小型の土坑は、内部に炭・焼土が入るという共通する特徴をもつ。これらの特徴的な土坑は、周辺から土師質カマドや製塩土器など、火の使用を伴う遺物が多く出土しているので、火力が必要な作業（炊事など）に伴うものである可能性が高い。これ以外の土坑は用途の推定は困難である。

SK03（図版8）

A-1区の北東隅にある大型の土坑である。3.2×1.6m以上の大きさがあるが、用途は不明である。

径1～5cmの灰色の砂礫で埋まっている。埋土内から奈良時代の須恵器（394）が出土しているが、近世の土器も出土しているので、掘削されたのは近世以降である。

SK11（図版8）

A-1区の北側にある土坑である。幅3m、長さ4m以上、深さ0.1mの浅いものであり、底部の凹凸が著しく形も不整形である。用途は不明である。地山（黄灰色粘土）のブロックが混じった灰色シルトで埋没しており、人為的に埋められたものである。埋土内から奈良時代の須恵器（395・396）が出土しているが、近世の土器も出土しているので、掘削されたのは近世以降であろう。

SK19（図版8）

A-1区の中央部にある奈良時代の土坑である。北側を現代の攪乱のため削られている。残存する大きさは1.5×0.7m、深さ0.1mである。埋土は上層が暗灰色シルト質極細砂、下層が灰色極細砂である。土坑の用途は不明である。埋土から奈良時代の須恵器（399）が出土しているが、掘削時期は近世に下がる可能性が高いと考える。

SK20（図版9 写真図版7）

A-1区の旧河道SR01の北側にある奈良時代の土坑群のひとつである。北側を柱穴に切られている。平面形は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形であり、深さは0.3mである。埋土は第1層が炭・土器・焼土が混じった灰色シルト、第2層が黄褐色粘土ブロック混じりの灰色シルト、第3層は灰色シルト混じりの黄褐色粘土ブロックである。第2層、第3層は土坑の底を埋める人為的な埋土である。第1層には炭・焼土・土器が入るので、火力を使用する作業に伴う土坑であると考える。

SK22（図版9 写真図版7）

SK20の東側に隣接する奈良時代の土坑である。平面形は長軸1.0m、短軸0.6mの楕円形であり、深さは0.3mである。第1層は黄褐色粘土ブロックが混じる暗灰色シルトであり、炭・土器・焼土が入る。第2層は黄褐色粘土ブロック混じりの灰色シルトであり、炭・土器・焼土が入る。第3層は土質や混じりものは第2層と同じであるが、土器の大型の破片を多く含んでいる。地山の黄褐色粘土のブロックが入るので、埋土はいずれも人為的なものである。これもSK20同様、火力を使用する作業に伴う土坑であると考える。

この土坑からは奈良時代の須恵器（400～402）、土師器（403・404）とともに、多量の製塩土器（405～421）が出土している。

SK23（図版9 写真図版7）

A-1区の南端、SR01の際にある長さ2.9m、幅1.2m、深さ0.1mの土坑である。埋土の上層は炭・焼土・土器片が多く入った灰色シルトである。下層は黄褐色粘土ブロック混じりの灰色シルトであり、遺物の量は少ない。いずれの層も人為的な埋土である。奈良時代の土師器（422）が出土している。

SK25（図版9）

SK20・22の東側にある奈良時代の土坑である。L字形に折れ曲がり、長さ1.9m、幅0.6m、深さ0.05mである。埋土は黄褐色粘土ブロック混じりの灰色シルトである。土坑の用途は不明である。

SK26（図版9）

SR01の際にある奈良時代の土坑である。直径0.5mの円形であり、深さは0.3mである。地山のブロックが入った土で人為的に埋められており、各層に炭・土器・焼土が入る。これも火力を使用する作業に伴う土坑であると考える。

SK27（図版9）

SR01の際にある奈良時代の土坑である。直径0.5mの円形であり、深さは0.2mである。壁はほぼ垂直であり、底面は平らである。最上層は多量の炭・土器・焼土が入った黄褐色粘土ブロック混じりの灰色シルトである。第2層は粘土ブロックが大半であり、最下層は土器、炭が少ない。これも火力を使用する作業に伴う土坑であると考える。

SK28 (図版9 写真図版7)

SR01の際にある奈良時代の土坑である。長軸1.0m、短軸0.5mの橢円形であり、深さは0.2mである。第1層は淡灰色シルトであり、第2層と第3層は炭・焼土が入った黄褐色粘土ブロック混じりの灰色シルトである。これも火力を使用する作業に伴う土坑であると考える。

6. 溝

SD01 (図版10 写真図版7)

A-1区の中央部付近を南北方向に走る溝である。攪乱のため残りが悪いが、約20mの長さを検出した。幅は約2.6m、深さは0.3mほどである。溝底は凹凸が激しい。埋土内からは奈良時代～平安時代の土器が出土しているが、埋土内に奈良時代の土壤層と同質の土がブロック状の固まりで入っており、溝を最終的に埋める時に掘削した土の中に包含されていた土器である可能性が高いと考える。溝の時期は中世以降に下がるであろう。

SD15 (図版10)

A-2区の旧河道SR01の東肩部にある溝である。高い側は削平されて残存しておらず、検出した長さは1.5mである。深さは0.1mである。埋土内から奈良時代の土器が出土している。

SD16 (図版10 写真図版7)

A-2区の旧河道SR01の東肩に沿って走る溝である。検出した長さは8.5m、幅は0.5m、深さは0.1mである。埋土から奈良時代の土器が出土している。

7. その他の遺構

A-1区では遺構として調査対象にはしなかった近代以降の鉄道関連施設がある。近代以降の遺構を調査対象に含めるかどうか、まだ方針が定まらない時期であったため、重機掘削の途中でサンプル的に遺物や構造材を採取する程度の調査しか行っていない。

このような遺構としては、煉瓦積みの基礎、竜山石製の見地石を積んだ溝、煉瓦積み建物の基礎と思われる松杭などがある。遺構の立地場所から考えて、鉄道関連の施設であろう。煉瓦積みの基礎については、煉瓦をサンプルとして持ち帰っている。また見地石を積んだ溝は、1) 溝の片側にのみ見地石を積む、2) 見地石を積んだ側の地盤が周辺よりも1段高いことが観察できた。

第2節 B区

1. 概要

B区は、豆腐町遺跡の中では東側にあたり、微高地であるA区のすぐ横に位置し、そこから地形がやや低くなっている部分であり、この場所では何条かの河道が南北に流れている。

当地区の基本層序は以下の通りである。1層 山陽鉄道開通時の盛土層 2層 近世の水田層 3層 弥生～近世の遺物包含層 4層 明黄褐色極細砂層 5層 にぶい黄褐色細砂層である。今回の調査では、2層上面で近世以降の遺構（第1遺構面）を、3層上面で弥生時代～中世の遺構（第2遺構面）を検出した。また、4層上面では、主に弥生土器を含む流路が検出された（第3遺構面）が、その他の遺構は希薄であった。

今回の調査で検出した溝SD01を含んだ東側は、弥生時代から低地であったと考えられ、その範囲はA区の旧河道SR01まで続く。この低地には、弥生時代の前期以前から場所を変えながら、大小の流路が流れていたと考えられる。奈良時代には、低地は完全に埋没し、今回検出した平安時代～鎌倉時代の集落が営まれる。近世になると、姫路城の外堀のすぐ外側の立地のため、町屋は存在せず、水田として使用され、その後、山陽鉄道姫路駅からJR姫路駅として現在に至っている。

2. 近世以降

第1遺構面からは、明治20年の山陽鉄道開通以前の水田面と水田面に打ち込まれた柵列を検出した。柵列は調査区中央を挟んで東側と西側に平行に立地し、南北方向に伸びる方形区画を呈している。この方形区画は一辺9m四方あり、杭の直径は10～20cmとかなり太く、直径30cmの掘方をもっている。この柵列がどのようなものなのは現在のところ不明だが、明治20年の前後の地図では、この場所付近に、明治9年に竣工し、播但線開通時まで存在した生野と姫路を結ぶ「馬車鉄道」が存在していたため、その馬車道の付帯施設の遺構の可能性も考えられる。

その下にある水田面は、幅30cm、高さ10cmの畝がほぼ、南北に伸びている。水路、大畦畔は検出されていない。耕土中からは、姫路製の銘をもつ弥七コンロがみつかっていることから、少なくとも、明治20年代までは、この地は水田として利用されていたことがわかる。上限については、唐津焼の砂目ものがわずかに含まれていることから、17世紀前半まで溯ることができる。その結果、この地は、17世紀前半から明治20年代まで、水田として利用されていることが明らかとなり、文政期の絵図の記載と一致する結果となった。

3. 中世

弥生から中世の遺構を検出した第2遺構面は、第3層上面を検出面とする遺構面である。中世の遺構は、微高地となっている調査区の西側に集中している。遺構としては、西側で12世紀後半から13世紀前半代の建物群がわずかに検出されているのみであるが、この集落は、調査区の西側に延びていく可能性がある。

焼土坑2（図版12 写真図版13）

調査区の西端に位置する最大径1.8m、深さ1.62mの円形の土坑である。溝であるSD11にとりつく形で作られており、埋土には土器とともに、焼土・炭、大礫が多く含まれていた。このことから、廃棄された井戸の可能性がある。中から土師器皿・托、須恵器壺・甕・擂鉢、瓦などが出土した。

柱穴群（図版11 写真図版12）

調査区の西側では、建物跡として復元はできなかったが、柱穴が約100個みつかっている。いずれも、径20～30cmの円形で、深さは10～35cmを測る。この柱穴群は、南西方向の調査区外に延びており、西側では、中世の集落が広がっていたと考えられる。

溝SD09（図版11 写真図版12）

長さ3.5m、幅60cm、深さ8cmを測る。柱穴群の中に立地し、土師器皿が出土している。

溝SD12（図版12 写真図版9）

調査区の西側の後世に削平を受けた部分にかろうじて残った、残存長7m 幅1.6m、深さ25cmの溝である。白磁碗が出土した。

4. 奈良時代

溝SD05（図版11 写真図版11）

長さ6m、幅1.2m、深さ20cmの溝で、底の部分がかろうじて残っていた。土師器・須恵器・瓦が出土した。

5. 弥生時代

溝SD01（図版11・12 写真図版10・11）

調査区の中央を流れる最大幅9.5m、長さ9.5m以上、深さ0.6mの流路である。埋土から、掘削→埋没→掘削と埋没と掘削を繰り返した痕跡が認められる。この流路を境に西側は微高地になっており、平安時代～鎌倉時代の集落が形成されているが、埋土には、平安時代～鎌倉時代の遺物が含まれていないことから、SD01は、この時期にはすでに埋没していたと考えられる。弥生時代の壺・鉢・高杯・紡錘車・縄文時代の鉢を出土した。

第3節 C区

1. 概要

C区は、山陽鉄道時代に作られた機関庫の跡地であり、攢乱が多数見られた。弥生時代の遺構と奈良時代の遺構、そして、明治期の姫路駅の扇形機関庫・転車台を検出している。

C区の基本層序は、以下の通りである。上から盛土、旧耕土があり、その下に遺構検出面である橙色極細砂を検出した。

C区西側では、弥生時代前期の溝と土坑を検出した。また、奈良・平安時代については、建物は復元できなかったものの柱穴がみつかっている。そして、SD02の自然流路状窪みの埋土上層には、奈良・平安時代の土器を包含していた。

近代の遺構として、偶発的に近代の姫路駅の機関庫を検出した。現在まで、明治時代の鉄道施設の発掘例は東京都汐留遺跡などがあるが、数は少なく、文献・古地図・写真などでは明確ではなかった鉄道施設の構造について復元することができたことは、鉄道史を考える上で有意義であったと考えている。

2. 近代

調査区の西側と南半部で、山陽鉄道時代の姫路駅の機関庫の施設がみつかった。山陽鉄道は、明治21年に姫路駅まで開通し、C区の北側に初代の機関庫が作られた（平成18年に発掘調査で検出）。その後、列車の本数が増加したことによって手狭となり、明治36年（1903）に2代目の機関庫が作られた。これが今回報告する機関庫である。検出したのは、引き込み線と扇形の煉瓦積み機関庫と、セメント製の円錐形転車台である。

転車台（図版15・17 写真図版18）

調査区南西側でセメント製の転車台を検出した。外径直径21.6m、内径20.4m、比高差1.3m、中央台一辺4.0m、高さ1.1mを測る。転車台本体を支える円形線路用の枕木列が内側と外側の2列並んでいた。つまり、転車台の拡張が少なくとも1回はあったと考えられる。外側の枕木の設置に際し、セメントによって内側の枕木の跡を埋められた痕跡が認められた。下部の施設については、セメントの下を掘り抜いていないため不明である。

機関庫（写真図版18）

調査区西端で扇形機関庫の一部がみつかった。残存高1.1mで、煉瓦積みの基礎部分のみが検出できた。機関庫は転車台に沿って扇形を呈し、ぐり石を基礎に国内産煉瓦（第6章第4節参照）をフランス積みで積み上げている。また、ピットと呼ばれる下部施設にも煉瓦が使われていた。山陽鉄道は、明治21年（1888）に兵庫～姫路間が開通し、それとともに、姫路駅に初代の機関庫ができた。この初代機関庫は、トンネル式の車庫で、小型機関車6両を収容するだけの設備であったとされる。そこから山陽鉄道はさらに西側に延伸し、明治34年（1901）には下関まで開通する。このため、列車が増加し、姫路駅の機関庫も手狭となり、明治36年（1903）には、2代目の機関庫が作られることになった。この機関庫は車庫が15庫もあり、当時としては、大変立派なものであったようで、この機関庫の写真は記念絵はがきにもなっている。今回検出したのは機関庫の北東端であり、機関庫本体はC区からさらに南西に広がっていたと考えられる。

引き込み線（図版15 写真図版16）

調査区の東側で、転車台への引き込み線2本の基礎部分がみつかっている。検出長16.8m、幅2.5m、高さ1.2mで、いずれも煉瓦積みである。

3. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、調査区の西側の微高地上に柱穴と土坑を検出した。

平均直径30～40cm、深さ20cmの柱穴を約50個検出している。しかし、規則性は認められず、建物規模については不明である。

4. 弥生時代

弥生時代の遺構は、西側の微高地と自然流路状の窪み（SD02）との境に3本の溝（SD05・07・08）と西側の微高地に土坑（SK07）を検出した。

溝SD02（図版13・16 写真図版16・17）

南北に流れる緩やかな自然流路状の窪みで、長さ39m以上、幅30m、検出面からの深さ0.6mを測る。埋土は、シルトの堆積がいくつかの単位でみられ、洪水砂は部分的にみられるものの、大きな単位は認められない。この部分的な洪水砂の中に弥生時代中期の土器が出土している。

また、SD02の埋土上層には、奈良・平安時代の土器が多く出土している。以上のことから、SD02は弥生時代前期以前には形成され、洪水砂があまり堆積していないことから、短期間で埋没したとは考えられず、徐々に埋没しながら平安時代には完全に埋没したと考えられる。

溝SD05（図版13・16 写真図版17）

長さ17m以上、幅0.5m、検出面からの深さ10cmを測る南北方向に流れる溝である。

溝SD07（図版13・16 写真図版17）

長さ15m以上、幅0.8m、検出面からの深さ0.1mを測る南北方向に流れる溝である。壺が出土した。

溝SD08（図版13・16 写真図版17）

長さ38m以上、幅3.5m、深さ0.3mを測る溝である。SD02・SD07に平行している。土器と石器が出士している。

第4節 D区

1. 概要

姫路駅西側の豆腐町踏切から南北に続く道は、以前は飾磨街道と呼ばれ、古くからの街道筋となっている。この道に面した東側の調査区をD区とする。D区は用地買収等の関係で、南側から3回に分けて調査しており、それぞれ南区・中区・北区と呼び分ける。遺構番号は調査時のものを踏襲しているため、重複した番号については何区の何番と但し書きする。

見つかった遺構・遺物には、中世・奈良時代・弥生時代のものがある。街道に面しているため、近世以降の遺物も多く出土しているが、掲載は割愛している。

調査区の東半部では扇状地性の礫層が遺構検出面まで上がっており、各時期の遺構は1面で検出できる。西半部では礫層は深く潜り、その上に堆積した砂質シルト層に、複数時期の土壤層（旧地表面）が形成される。北区ではその中で、3時期の遺構面について調査した。南・中区では、実質的には奈良時代の遺構面で、中世～奈良時代の遺構を検出・調査している。

中世の遺構には掘立柱建物・池跡・土坑などがある。遺構は調査区の西端に限られ、中央より東側には広がらない。

奈良時代の遺構には溝・井戸・埋甕・土坑の他、柱穴もあるが掘立柱建物は復原できなかった。遺構は調査区の西半部に集中する。

弥生時代の遺構には土坑・溝・柱穴がある。土坑群は東半部の礫層上面で検出した。西半部では、北区で溝・柱穴を検出したのみである。

なお南区東端の石組み溝は、近代以降のものである。また近世以降の井戸についても掘り抜きはしていない。

2. 中世

掘立柱建物SB01（図版23 写真図版23）

調査区の西端で中区と北区にまたがっており、東西1間×南北2間を検出した。西側の延長部分は調査区外へ続くものとみられ、北側の延長も攪乱によって失われている可能性がある。検出した範囲の規模は、東西方向が2.0～2.5m、南北方向が6.0mで、床面積は12.75m²。南北の柱間はほぼ均等で3.0m。南北方向の方位はN17～20° E。柱穴は直径25～40cmの円形掘り方である。

池SK02・SK01・SD03（図版23 写真図版24）

中区の西端に位置する。攪乱で大きく損なわれているが、大まかな形状は窺える。平面は不整長方形で、底面を水平に掘り込む。規模は長辺6.7m×短辺4.9m、深さ35cmである。埋土からは土器が焼土・炭とともに大量に出土した。出土土器は土師器皿・小皿が大半で、他に須恵器椀・こね鉢、白磁碗、土師器羽釜・鍋なども含まれる。

池跡の北西側には幅1.75mほどの掘り込みがあり、そこから幅2m、深さ20cmほどの浅い掘り込み（SK01）につながっている。底のレベルはSK01がSK02より約30cm高い。この両者の合流部で、土器が最も集中していた。SK01は調査区の西外側へ続いており、池の溢水を受ける排水機能をもつと考えられる。

池跡の北東隅には幅40cm、深さ10cmの溝状遺構（SD03）が取り付いている。取り付き口の両側には、自然石が立てられたような状況で出土した。埋土からは土師器片が出土した。取り付き口とSK02の底面の比高差は約25cmで、SK01のレベルよりも低いが、SD03の傾斜がきついため、導水側になるものと

考えられる。

導水部と排水部をもつSK02は排水溝の枠状の遺構とも考えられるが、土師器の皿類が多量に投棄される状況は、各地で調査された屋敷内の池跡と共に通する様相を示す。

土坑SK06（図版23 写真図版25）

中区の西端、SK02の西側に位置し、北半部をSK01に切られている。平面は円形で、上半部は垂直に、下半部は斜めに掘り込む。規模は直径0.75m、深さ0.5mである。

土坑SK05(中区)・SK02(南区)（図版23 写真図版21）

調査区の西端で中区SK02の西側に位置し、南区と中区にまたがって検出した。平面は不整橢円形で、垂直から袋状に掘り込み、底面は平らである。規模は径1.65×1.2m、深さ0.9mである。

3. 奈良時代

井戸SK08（図版24 写真図版27）

中区の中央やや西寄りに位置する。掘り方は攪乱で大きく損なわれているが、井戸側部分は遺存していた。掘り方の規模は径3.7×3.3m、検出面からの深さ2.1m。井戸側を北寄りに設けているため、掘り方の北側は垂直近く、南側は30°～70°ほどの勾配がついている。井戸側部分は円形で、直径は上面で0.8m、底面で0.6m。井戸枠等は残っておらず、礫層で埋まっていた。

埋土の上層からは中世の土器、下層からは奈良時代の土器が出土している。井戸自体の遺存状況はよくないが、E地区の井戸との類似性からみて、本例も奈良時代の所産と考えられる。

溝SD01（図版21・24 写真図版26）

中区から南区の西端を、北東～南西方向に延びており、延長約20m分を検出した。形状は中区で直線的に延びた後、南区で東へ緩やかに弧を描く。溝の延長は北区では検出されなかった。

南区では断面が逆台形を呈し、幅0.35～0.5m、深さ25～30cm、中区では断面が浅い皿状を呈し、幅0.7m、深さ10～15cmである。底面のレベルは南西端が北東端より0.25/20m低い。

検出時に須恵器・土師器片が多数出土した。

溝S 26（図版22 写真図版29）

北区の中央を、北東～南西方向に延びており、延長約 6 m 分を検出した。形状は直線的で明瞭に掘り込まれているが、中区には続いていない。

断面は浅い逆台形を呈し、幅0.95～1.2m、深さ15cmである。底面のレベルは北東端が南西端より0.1/6m低く、南・中区のSD01と逆勾配になっている。SD01と S 26が連続しないのは、この勾配が原因かもしれない。

埋土からは、須恵器・土師器が多量に出土した。

溝SD02(南区)（図版21・24 写真図版20）

南区の西端で、SD01の西側に位置する。北～南方向に延びており、延長約 5 m 分を検出した。形状は緩やかに蛇行し、北端が調査区西壁外へ続く。断面は浅い皿状を呈し、幅0.4m、深さ 8 cm 程度である。

埋土から須恵器片が出土した。

溝SD03(南区)・SD04(中区)（図版21・24 写真図版20）

中区から南区の西端で、北東～南西方向に延びており、延長約10m分を検出した。SD01に北端を切られる形で重複している。形状は直線的で、南端が調査区西壁外へ続く。断面は浅い皿状を呈し、幅

0.30m、深さ8cm程度である。

溝SD02（中区）（図版21・24 写真図版23）

中区の西寄りで、SD01の東側に位置する。北東～南西方向に延びており、延長約5m分を検出した。形状は直線的で、北端は北区に続かない。断面は浅い皿状を呈し、幅0.35m、深さ8cm程度である。

埋土から須恵器片が出土した。

埋甕SX01（図版25 写真図版26）

南区の中央やや西寄りに位置する。掘り方の平面は橢円形で、断面逆台形に掘り込み、底面は平らである。径0.47×0.38m、検出面からの深さ30cmである。

掘形の中央に完形の土師器長胴甕1個体を垂直に据えている。上からほぼ同径の別個体の土器を被せて合わせ口としているが、上部をほとんど削平されていて、口縁部の先端しか残っておらず、図化できていない。甕の中には破損した土器片・礫などが落ち込んでいたが、その他の遺物は出土しなかった。

土坑SK07（図版25 写真図版27）

中区の西寄りで、SK08の西側に位置する。南西側が削平されていてはっきりしないが、平面は不整な方形もしくは橢円形で、浅い皿状に掘り込んでいる。長径3m以上、短径2.3m、検出面からの深さ30cmである。

埋土からは須恵器・土師器片が出土した他、焼土・炭が含まれており、工房的な性格も考えられる。

土坑SK01（図版25 写真図版26）

南区の西寄りで、SD01より東側に位置する。両端が削平されているが、平面は溝状で、皿状に掘り込んでいる。残存長1.6m、幅0.8m、深さ35cmである。

埋土からは須恵器・土師器が出土した。

土坑SK03（図版25 写真図版20）

南区の西端で、SD01の西側に位置する。平面は橢円形で、浅い皿状に掘り込んでいる。径1.0×0.65m、深さ12cmである。

土坑SK09（図版25 写真図版26）

南区西側の北端で、SD01の東側に位置する。北端が失われているが、平面は橢円形で、浅い逆台形に掘り込んでいる。残存長0.7m、幅0.55m、深さ15cmである。

埋土からは須恵器・土師器が出土した。

土坑SK13（図版25 写真図版26）

南区の西寄りに位置する。平面は不整形で、皿状に掘り込んでいる。径1.1×0.85m、深さ25cmである。

埋土からは土器の小片が出土した。

土坑SK10（図版25 写真図版20）

南区の西側で、SD01より東側に位置する。西側が削平されているが、平面は橢円形で、箱型に掘り込んでいる。長0.65m、残存幅0.45m、深さ20cmである。

土坑SK12（図版25 写真図版26）

南区西側で、SK09の南側に位置する。南端が失われているが、平面は溝状で、浅い逆台形に掘り込んでいる。残存長0.9m、幅0.5m、深さ10cmである。本来はSK09と一連のものであったかもしれない。

4. 弥生時代

土坑SK06（図版26 写真図版31）

南区中央の北端に位置する。北端が失われているが、平面は不整な方形もしくは楕円形で、底面の南寄りに二段に掘り込んでいる。上面は径1.65m、深さ30cm、底面の掘り込みは径0.8×0.65mである。

二段掘りの底面から、弥生土器の小型器種（587・591）が出土した。

土坑SK04（図版26 写真図版31）

南区中央の東寄りに位置する。平面は楕円形で、浅い皿状に掘り込んでいる。径0.55×0.3m、深さ10cmである。

埋土から弥生土器片が出土した。

土坑SK11（南区）（図版26 写真図版31）

南区の中央に位置する。平面は円形で、逆台形に掘り込んでいる。径0.7m、深さ30cmである。

土坑SK11（中区）（図版26 写真図版31）

中区中央に位置する。平面は不整楕円形で、西側に片寄せて掘り込んでいる。径1.1×0.8m、深さ30cmである。

底面から弥生土器の小型器種（588・589・592）が出土した。

土坑SK12（図版26 写真図版31）

中区中央の南寄りに位置する。平面は不整三角形で、逆台形に掘り込んでいる。径0.9×0.75m、深さ30cmである。

底面から弥生土器の小型器種（590）が出土した。

土坑SK14（図版26 写真図版31）

中区中央の南端に位置する。南端が失われているが、平面は楕円形で、ボウル状に掘り込んでいる。径0.6m、深さ25cmである。

底面から弥生土器の小型器種（593）が出土した。

土坑SK15（図版26 写真図版31）

中区の中央に位置する。平面は楕円形で、ボウル状に掘り込んでいる。径0.7×0.5m、深さ30cmである。

埋土から弥生土器片が出土した。

第5節 E区

1. 概要

D南区から旧飾磨街道を挟んだ西側に位置する調査区をE区とする。調査区の東半部には既存建物の基礎が残っており、西半部でも広い範囲で攪乱を被っていたため、遺構の残存状況はよくない。

見つかった遺構・遺物には、中世・奈良時代のものがある。検出面の状況はD区西端と同様で、堆積した砂質シルト層に、複数時期の土壤層が形成されているが、実質的には奈良時代の遺構面で、中世～奈良時代の遺構を検出・調査した。

中世の遺構には柱穴が多くあるものの、調査範囲内では掘立柱建物の復原はできなかった。

奈良時代の遺構には井戸・土坑・溝の他、柱穴もあるが掘立柱建物の復原はできなかった。なお奈良時代とした遺構も、年代の判別が付く遺物が乏しいため、時期の帰属は不安定である。

2. 奈良時代

井戸SK05（図版28 写真図版34）

調査区西側の北寄りに位置する。掘り方は円形で、垂直に近く掘り込み、底面は平らである。規模は径2.4m、検出面からの深さ1.75mで、砂質土層下の砂礫層にまで達していた。井戸側部分は円形で、直径は上面で1.25m、底面で1.1m。井戸枠等は残っておらず、人頭大の礫で埋められていた。

埋土からは奈良時代の土器・墨書き土器・銅錢が出土している。

土坑SK02（図版28 写真図版33・35）

調査区東側の北端に位置する。両端が削平されていて平面形は不明で、皿状に掘り込んでいる。幅0.8m、深さ20cmである。

埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK03（図版28 写真図版33）

調査区の中央に位置する。両端が削平されているが、平面は溝状で、逆台形に掘り込んでいる。残存長1.9m、幅0.9m、深さ30cmである。

埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK06（図版28 写真図版33）

調査区の西側で、SK05の南に位置する。両端が削平されていて平面形は不明で、皿状に掘り込んでいる。幅0.7m、深さ7cm程度である。

埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK07（図版28 写真図版33）

調査区の西側で、SK05の西に位置する。東半部が削平されていて平面形は不明である。残存長0.8m、深さ20cmである。

溝SD01（図版27・28 写真図版33）

調査区中央を、南北方向に延びており、延長約2.5m分を検出したが、既存建物の下では削平されていた。断面は皿状で、幅0.35m、深さ10cmである。

埋土からは土器の細片が出土している。

第6節 F区

1. 概要

D中・北区から旧飾磨街道を挟んだ西側で、E区の北側に位置する調査区をF区とする。

見つかった遺構・遺物には、中世・奈良時代・弥生時代のものがある。検出面の状況は、東半部ではD区西端と同じく複数時期の土壤層が形成されており、3時期の遺構面で遺構を検出・調査した。西半部では攪乱が著しくて土壤層が残っておらず、遺構は1面で検出している。

中世の遺構には掘立柱建物・土坑・溝などがある。遺構は調査区の東半部に限られ、中央より西側には広がらない。復原できた建物以外にも多数の柱穴があり、さらに複数時期の建物群が重複するものと考えられるが、確定にはいたらなかった。

奈良時代の遺構には掘立柱建物・土坑・溝などがある。遺構は調査区の東半部に集中し、復原できた建物以外にも同一線上に柱穴が並ぶため、さらに複数回の建て替えがなされたものとみられるが、確定できなかった。

弥生時代については土坑・柱穴を検出したものの、まとまった遺構群は存在しなかった。

なお調査区西端の石垣は、近代以降のものである。

2. 中世

掘立柱建物SB101（図版30 写真図版36）

調査区の北東隅に位置する。総柱建物で、東西4間×南北3間分を検出したが、東・北側の延長部分は調査区外へ続いている。検出した範囲の規模は、東西方向が9.0m、南北方向が7.0mで、床面積は63.0m²。柱間は東西2.2~2.3m、南北2.2~2.4m。南北方向の方位はN14° E。柱穴は直径25~40cmの円形掘り方である。遺構の切り合い関係は、柱穴P46がSB103のP47に切られている。柱穴P11からは土師器皿（648）が出土している。

掘立柱建物SB102（図版30 写真図版36）

調査区の南東隅に位置する。総柱建物で、東西2間×南北3間分を検出したが、東・南側の延長部分は調査区外へ続いている。検出した範囲の規模は、東西方向が4.4m、南北方向が6.6mで、床面積は29.04m²。柱間はほぼ均等で、東西2.2m、南北2.1~2.3m。南北方向の方位はN18° E。柱穴は直径25~40cmの円形掘り方である。柱穴P17からは土師器甕（646・647）が出土している。

掘立柱建物SB103（図版30 写真図版36）

調査区の北東隅でSB101と重複している。総柱建物で、東西2間×南北2間分を検出したが、東側の延長部分は調査区外へ続いている。北側については不明である。検出した範囲の規模は、東西方向が4.4m、南北方向が4.5mで、床面積は19.8m²。柱間は東西・南北とも2.2~2.3m。南北方向の方位はN8° E。柱穴は直径25~40cmの円形掘り方である。遺構の切り合い関係は、柱穴P47がSB101のP46を切っている。

土坑SK01（図版31）

調査区東側で、SB101とSB102の間に位置する。東半部を削平されているが、平面は隅丸方形で、逆台形に掘り込む。規模は一辺0.95m、深さ10cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK02（図版31）

調査区東側の北端で、SB101と重複する。南半部のみ検出したが、平面は円形で、逆台形に掘り込む。

規模は径0.55m、深さ15cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK03（図版31 写真図版37）

調査区東側で、SB101と重複する。平面は隅丸方形で、浅い皿状に掘り込む。規模は0.75×0.6m、深さ10cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK04（図版31）

調査区東側で、SB101とSB102の間に位置する。中央を削平されているが、平面は不整橜円形で、逆台形に掘り込む。規模は径1.0×0.75m、深さ30cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK05（図版31）

調査区東側で、SB101とSB102の間に位置する。平面は円形で、逆台形に掘り込む。規模は径0.55m、深さ12cmである。

土坑SK06（図版31 写真図版37）

調査区東側で、SB101と重複する。平面は橜円形で、皿状に掘り込む。規模は径1.35×1.05m、深さ18cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK08（図版31 写真図版37）

調査区東側で、SB101と重複する。土坑の底面で柱穴を検出しており、建物より後出する遺構である。平面は長方形で、逆台形に掘り込み、底面は水平である。規模は1.95×1.7m、深さ20cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK09（図版31 写真図版37）

調査区東側で、SB102の西側に位置する。東端を削平されているが、平面は不整形な溝状で、皿状に掘り込む。規模は残存長1.2m、幅0.45～0.7m、深さ17cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK10（図版31 写真図版37）

調査区東側で、SB102の西側に位置する。北半部を削平されているが、平面は橜円形で、浅い皿状に掘り込む。規模は残存長0.85m、幅0.9m、深さ5cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

溝SD01・02（図版29・31 写真図版36）

調査区南東隅から南壁に沿って、2本の溝が並んで東西方向に直線的に延びており、延長約13m分を検出した。重複するSB102の柱穴を切っているため、建物より後出する。南側のやや幅広い溝SD01は、断面が逆台形で、幅0.7～1.0m、深さ20cmである。北側の狭い方の溝SD02は、断面が逆台形で、幅0.6m、深さ20cmである。底面のレベルは西端が東端より0.1/13m低い。溝の方位はおよそN80°Wである。両者の関係は、SD02がSD01を切っている。埋土からは土器の細片が出土している。

3. 奈良時代

掘立柱建物SB201（図版33 写真図版39）

調査区東端の南寄りに位置する。東西2間×南北2間の側柱建物と考えられるが、さらに東へ続く可能性もある。建物の規模は、東西方向が3.6m、南北方向が4.2mで、床面積は15.12m²。柱間はほぼ均等で、東西1.8m、南北2.0～2.2m。南北方向の方位はN21°E。柱穴は一辺30～50cmの方形掘り方である。

掘立柱建物SB202（図版33 写真図版39）

調査区東端の北寄りに位置する。東西1間×南北2間の側柱建物と考えられるが、さらに東へ続く可能性もある。柱穴が重複していて、建て替えが行われたことが分かる。

先行する建物 a の規模は、東西方向が4.2m、南北方向が4.8～5.2mで、床面積は21.00m²。柱間は梁間が広く、東西3.8～4.2m、南北2.0～2.8m。南北方向の方位はN 20° E。柱穴は一辺30～60cmの方形掘り方である。

建て替え後の建物 b の規模は、東西方向が3.6～3.9m、南北方向が4.4mで、床面積は16.50m²。柱間は梁間が広く、東西3.8～3.9m、南北2.0～2.4m。南北方向の方位はN 18～21° E。柱穴は一辺20～60cmの方形掘り方である。

溝SD202（図版29）

調査区中央で、南北方向に延長約5m分を検出した。断面は垂直に近く掘り込み、幅0.75m、深さ35cmである。溝の方位はおよそN 25° Eである。埋土からは土器の細片が出土している。

溝SD03（図版32・33 写真図版39）

調査区西側で、南北方向へ直線的に延びており、延長約11m分を検出した。断面は垂直に近く掘り込み、幅0.75m、深さ35cmである。溝の方位はおよそN 9° Eである。埋土からは土器の細片が出土している。

土坑SK201（図版33）

調査区北端に位置する。平面は不整橢円形で、浅い皿状に掘り込んでいる。径1.0×0.85m、深さ7cm程度である。

土坑SK202（図版33 写真図版40）

調査区北端に位置する。北半部を削平されているが、平面は橢円形で、逆台形に掘り込んでいる。幅0.5m、深さ13cmである。

土坑SE201（図版33）

調査区中央付近に位置する。平面は不整橢円形で、垂直に近く掘り込み、底面は水平である。当初は井戸状の遺構と考えたが、断面観察ではその証拠は得られなかった。径1.6×1.2m、検出面からの深さ40cmである。埋土からは土器の細片が出土している。

4. 弥生時代

土坑SK301（図版33 写真図版40）

調査区北端に位置する。南半部のみを検出しており、平面形は不明である。掘り込みの底面は凹凸が激しい。幅0.95m、深さおよそ40cmである。

第4章 遺物

第1節 A区

SR01

須恵器

杯B蓋 (1~30)

天井部の頂部が平らな笠形を呈するが、11・18・23のように天井部全体が丸い笠形のものもある。21は天井部に丸みがなく、直線的である。天井部頂部にはヘラ削りを施して調整し、比較的丁寧に仕上げている。23も天井部全体に特に丁寧なヘラ削りを施し、胎土も精良である。これに対して、7はヘラ切り後の仕上げが軽くナデ調整を施すのみで、口縁端部の折り曲げもわずかである。つまみは扁平な宝珠形を呈するものが多いが、10のように高さのある本来の宝珠形をしたものもある。また、4・7・9・13・16・21・23のような頂部が陥没したボタン状のものや、8・25のような乳頭形のものがある。口縁端部はほぼ直角に屈曲させるが、7・8・11・18のように屈曲はわずか、若しくはほとんどないものもある。24は口縁部端面が平坦であり、壺の蓋かもしれない。

胎土は全体に白い砂粒を多く含む。2・14・16・23の胎土は精良である。また、色調は1のように酸化焰焼成による赤褐色を呈するものもあるが、全体に明るい灰色を呈するものが多い。

10・12・17・29・30の天井部外面に墨書がある。12は「上」(図版75)、17は「□宅□」(図版75)と判読されるが、10(図版75)・29(図版78)・30(図版78)については判読できなかった。

3・10・17・19・20・22・24・26は内面に墨の磨痕を残し、硯に転用されている。このうち、墨書のある10・17は割れ口面にも墨痕があり、破損後に破片の一部が硯として再利用されたことがわかる。

27・28は口縁部を欠く。つまみが大きいので、皿B蓋の可能性もある。

杯B (31~39・41~74)

口径の違いによって、(I) 口径10.7~13.0cm (31~33・41~52)、(II) 口径13.6~15.2cm (34~36・53~61)、(III) 口径18.3~21.1cm (62~70) の大きく3つの群に分けることができる。IIIの一群の器高は5cm以上で、5cm以下の低いものはないが、IIの一群は逆に器高は5cm以下で、5cm以上の高いものはない。Iは高い一群 (31~33・47~52) と低い一群 (41~46) の高低2者ある。

高台は幅が狭いタイプが多いのが特徴で、特定の生産地からの供給の可能性がある。該当するものは31~35・37・38・41・43~44・46~50・53・55・56・58・62・65・66・69・70・74がある。このほかに42・56のように三日月形の高台をもつものもある。また、43・54・63~65・69・70の底部はヘラ切り後にロクロ削りを施している。

31~39の底部外面には墨書がある。このうち、32・35・37には「大山」(図版76)、34(図版76)も「大山」の記号化した墨書であろう。36・39は「蜂」(図版76・図版75)、33は「尾」(図版75)である。31と38は記号のようなもので判読できない(図版76・図版75)。39は硯にも転用されている。

41・71には黒漆が付着する。71は内面全体と外面体部から高台・底部にかけて黒漆が付着しているが、底部外面中央部に墨の磨り痕が認められる。53~55・62・72~74は底部外面に墨の磨り痕があり、硯に転用されている。

杯A (75~98・109~112)

口径10.4～17.2cm、器高3.3～4.7cm前後を測るが、93～95のように4.6～5.7cmの高いものも若干数ある。

いずれも体部と底部の境は明瞭で、底部はヘラ切り後に軽く撫でるかヘラ調整を施す程度に留めるA群（75・77・78・80～82・84・88）と丁寧にヘラ削りを施すA b群（76・79・83・86・87・89・91～93・95～98）の2者がある。A b群のうち、87・96・98の胎土は精良で、作りが丁寧である。95は全体に作りが丁寧で、底部外面は丁寧なヘラ削りを施す。また、78・85・88には火擣が明瞭に残る。

底部外面に墨書を有するものがある。このうち、82は「□（志カ）」（図版77）、109は「田中寺」（図版79）、110は「□（栗カ）女」（図版79）と判読できるが、78（図版77）、79（図版77）、80（図版77）、81（図版79）、111（図版78）、112（図版78）は判読できない。

94は内面全体と割れ口面に生漆が付着している。また、82は口縁部内面に黒漆らしき付着痕が認められる。

皿A（99～103・105～108）

器高2.6cm以下の器高の低い一群を皿Aとした。底部全体に丁寧なヘラ削りを施し、火擣があるのが特徴である。口径14.2～16.8cmの小型の一群と口径20.7～26.7cmの大型の一群がある。小型の一群には99～103があるが、103は内外面にヘラ磨きが施され、明るい灰色を呈する。また、100・101・103の底部外面に墨書がある（図版77・78）。103は「郡」（図版78）と判読できるが、100と101は判読できない。大型の一群には105～108がある。105は胎土が精良で、外面にヘラ磨きの痕跡が残る。

杯L蓋（113～115）

天井部が平坦で、環状のつまみをもつ。天井部と口縁部の境は段をなす。天井部の外面はヘラ削りを施す。

杯L（117～126）

いわゆる稜椀である。いずれも内面に降灰が認められず、共蓋を伴って焼成されたことがわかる。

杯Lにはいくつかの形態がある。1つは118・119のように、高台の径が小さく、体部の稜線が比較的上位にあり、稜線より下は丸みをもつタイプである。118は口縁端部が大きく外反し、端面は平坦である。2つめは117・120・121のように、体部の稜線が下位にあるタイプである。このうち117は高台径が小さい。また、121は高台の踏ん張りがない。121・122は器高が高い一群である。122は体部の稜線が比較的下位にあり、口縁部は大きく開く。3つめは123のように体部の稜線が比較的上位にあり、体部下半に重ね焼きの痕跡を残すタイプである。口縁端部は平坦で、稜線より下はヘラ削りを施す。高台は外方への踏ん張りがない。前2者より時代的に下る可能性が高い。このほか、125の高台は三日月形で丁寧な調整を施している。126は底部片のみで体部以上を欠く。底部外面に墨書（図版75）があるが判読できない。高台は三日月状で、底部全体をヘラ削りで調整する。高台をもつ皿の可能性が高い。

皿B蓋（127）

口径26.4cm。天井部が丸い笠形の形状を呈する。天井部外面には径25.0cm、内面に径18.8cmの重ね積みの痕跡が残る。

皿B（129～134）

底部外面全体にヘラ削りを施す。高台は底部周縁部に付くが、134のようにかなり内側に付くものもある。129は胎土が精良で、ヘラ磨きの痕跡を残し、丁寧な調整を施している。132も底部内面に磨きの痕跡を残す。130は内面に墨の磨り痕が認められ、割れ口断面にも墨痕が残る。134は土師質に近い焼成で、他の皿Bとはやや異質である。底部外面に墨書（図版79）があるが判読できない。

皿D (128)

口縁端部は平坦に仕上げられ、体部外面には磨きを施す。底部外面はロクロ削りを施す。

高杯 (135～139)

出土した高杯はいずれも口径27cm以上の大型のものであるが、皿部から脚部まで接合できるものはなかった。皿部は浅く、口縁端部は丸く納める。内面はヘラ磨きを行なう。138・139とともに脚柱部は太く、裾部は大きく広がる。

壺K (140～152)

算盤形の体部に長い口頸部が付く。頸部の接合は三段構成である。140～144のように、漆が内面に付着するものがある。付着の漆はいずれも生漆である。これらは頸部から体部まで接合できるものではなく、頸部か体部のどちらか一方に分かれる。漆は内面以外に割れ口面に付着している。このことは壺Kが運搬用の漆壺として利用され、当地で頸部が破碎されたことを示す。140・141はともに体部との接合箇所を破碎しており、頸部内面と口縁部割れ口面および頸部割れ口面に漆が付着している。142～144は体部片で、内面および肩部の割れ口面に漆が付着している。142は小型の長頸壺で、溝内のあらゆる箇所から破片が採取された。漆は稜線部の割れ口面や肩部と頸部の接合部の割れ口面や体部外面にも付着しており、当地で破碎され、多数の破片が生じたことを示している。143は内面に生漆が付着しており、横方向に搔き取った跡がある。144は肩部の破片内面と割れ口面に生漆が付着している。

漆の付着していない壺Kには145～151があり、頸部から体部まで残存しているものが多い。145は小型の壺Kではほぼ完形である。146は体部・肩部は丸みがなく、直線的である。肩に緑色の自然釉がかかり、肩と体部の境に沈線を巡らす。148は口頸部を欠くが、体部はほぼ完形で、肩部に自然釉がかかる。152は底部外面に墨の磨り痕が残る。

壺C (155～157)

小型の短頸壺である。155は完形品で、口径4.0cm、器高6.0cm、底径3.9cmを測る。器壁が厚く、重量感がある。外面だけでなく、底部内面にも降灰がある。底部周縁は手持ちのヘラ削りで調整している。156は155に比べて器壁が薄い。157は内面にコテ状工具の使用痕跡がある。

壺E (153・154・160)

短く立ち上がる頸部をもつ。154は口径10.6cm、器高5.7cm、底径7.3cmを測る。底部周縁に溝を巡らし、底部周縁の粘土を削り取ることによって高台を作り出している。胎土は精良で、調整も丁寧である。160は口縁部を欠くが、形態から154と同じ壺Eとした。体部はヘラ削り調整を行い、底部の高台は短く、あまり踏ん張らない。貼り付けか削り出しかは不明である。

壺A (161・162・164・165・168)

161は口径9.4cm、器高12.4cm、底径7.9cmを測り、完形品である。外面全体に自然釉の流下があるが、口縁部には自然釉の掛かりがないので共蓋を伴って焼成されたことがわかる。165は口縁部を欠く。肩部は平坦で、高台径は小さい。164は他の壺Aとは異なり、高台がなく肩の張りが少ない。底部はヘラ切り後、ヘラを縦方向に動かしてヘラ切り痕を消して面を整えている。

壺A蓋 (158・159)

天井部は平坦な箱形の壺蓋である。158は口縁端面に段が付き、端部が尖る。159は小片である。口縁端面に溝状に段が付き、内端面はわずかに内側に突出する。端面には壺Aの口縁部の付着痕跡が認められる。

壺 (163)

体部は卵形で、口縁部を欠く。長い頸をもつ壺Lの器形になる可能性が高い。底部は外方に踏ん張る。底部外面に「寺」(図版78)の墨書がある。

壺 (166)

小片で、器形は不明である。黒漆が内外面とも全体に付着する。外面の漆の付着状況は全体に均質で、こぼれた状況を示す付着ではなく、塗布された可能性が高い。

壺B (167)

底部は平底である。形態から肩に稜をもつ短頸壺か164の形態の可能性が高い。内面に生漆が付着する。

壺Q (169~174)

広い口縁部と肩部に稜をもつ体部を有する。169と170は体部径より口縁部径のほうが小さいのに対して、171は口縁部径と体部径に対して、底径が小さいので安定感に欠ける形状を呈する。肩部と体部の境に沈線を有するもの(171・174)がある。体部外面に叩きの痕跡を残すものとヘラ切り痕を残すものがある。高台は外方に踏ん張るもの(171~174)と170のように踏ん張りのないものがある。

鉢 (175・176)

底部が平らでバケツ形の形状を呈する。小さな片口を有する。

甌 (177)

底部片のみである。底部周縁に推定7個の楕円形の孔と、各孔の間に径0.4cm前後の円孔を穿つ。中央部に円孔を穿っているものと思われる。各孔は底部の成形後に穿たれたもので、小円孔は内面側と外側の両側から穿たれており、底部周縁の孔は底部成形の後、ヘラによってくり抜かれている。

鉢A (178~181)

いわゆる鉄鉢である。底部はいずれも尖底である。口縁部はゆるやかに内側に傾くが、端部をやや上方に立ち上がらせるもの(178)と口縁端部が平坦なもの(179・180)がある。179・180・181は体部外面にヘラ磨きをほどこし、胎土も精良である。これに対して178はやや粗雑な調整で、底部もきれいな尖底ではなく、小さな平底である。

平瓶把手 (182)

上面部から側面部は緑色の自然釉が掛かる。下面側はヘラによる調整痕がある。

土錘 (183~186)

中央部が膨らみ、両端が狭まる。表面はヘラで仕上げられている。

甌A (187~190)

卵形の体部に外反する口頸部をもつ。口縁端部の形態にはいくつかのタイプがある。1つは187・188のように口縁端部を上方につまみあげるもの、2つめは190のように口縁外端部を外側につまみ出しが、端面を水平に仕上げるものである。

甌B (191)

頸部は「く」の字形に開くが、口縁部は僅かに内傾し、端部は内側に突出する。口縁端面は平坦である。肩の張りはほとんどない。

甌C (192・193)

口径に対して、器高の低い甌で、肩の張りはほとんどない。

土師器

杯C (194~198)

口縁部はわずかに外反し、内面は溝または小さな段を有する。杯Aのように内側への巻き込みはない。194・195の底部は丸底に近いが、これに対して、197と198は平底である。196は底部木ノ葉手法で成形した後、削り調整を行なう。194は底部外面にヘラ削りの痕跡を残す。他は黄灰色の化粧土の塗布や器面の剥落により調整は不明である。196・197は内外面に黄灰色の化粧土が掛けられた痕跡を残す。198は口縁端部をわずかに内側に巻き込む。内外面とも剥落が激しく調整不明である。

杯A (199~215)

口縁端部を内側に巻き込む。内面に沈線を巡らし、巻き込み状に見せているものもある。外反しながら、端部を内側に巻き込んでいるものもあり、杯Cと区別がつきにくいものもある。器高の高い一群(199~206)と低い一群(207~215)がある。

杯C類とともに器面全体に黄灰色の化粧土をかけるものが目立つ。化粧土を掛けたものには砂粒を多く含むものが多く、胎土の悪さをカバーするために使用した可能性が高い。化粧土塗布の痕跡を明瞭に残すものに205・209・216~219・223・224がある。このうち、205・209は化粧土をコテ状工具またはハケ状工具で、回転させながら伸ばした跡が明瞭に残る。底部の調整は化粧土により見えない。

体部は横ナデ調整を行なう。底部は214と215のように木ノ葉痕が残るものがあり、いわゆる木ノ葉手法が用いられている。後述のように器表面にかけられた黄灰色の化粧土や表面の剥落により調整手法が把握できないものが大半である。

内面に黒漆が付着するものがある。200・201が該当する。漆塗りパレットとして使用されたものであろう。214は周縁部はヘラ削り調整が行なわれているが、底部外面中央部には木ノ葉痕が残されており、葉脈の間に、「大山□」の刻書がある(図版78)。体部側面は横ナデ調整が施されている。

皿A (216~219)

口縁端部を巻き込む。219は端部を丸く納める。杯Aとの区分は難しいが、口径16cm以上で器高が2.4cm以下のものを便宜的に皿Aとした。皿Aにおいても黄灰色の化粧土をかけた痕跡が認められ、このうち、218の化粧土は剥落しているが、削り等の調整痕は見えない。213の底部外面には指押さえの痕のような凹凸がある。207は口縁端部は内側への巻き込みがあり、肥厚する。内外面とも剥落が激しいが、底部外面に木ノ葉痕らしきものが認められる。体部は直上方向に立ち上がる。219は口縁端部が丸く納められている。口縁部内外面に油煙状の痕跡が残り、灯明皿として使用された可能性が高い。

椀A (221~224)

底部と体部の境は丸く不明瞭で、体部は湾曲しながら立ち上がる。221は調整が粗く、黒褐色を呈するが、222・223・224は内外面に黄灰色の化粧土をかける。223の口縁端部は平坦に仕上げるが、222・224は丸く納める。

杯その他 (220・225~228)

225は口縁部が大きく外反する。底部と体部の境は丸く不明瞭で、体部は湾曲しながら立ち上がる。体部外面から底部外面にかけて粗いハケ目調整を施す。また、砂粒を多く含むが、化粧土でハケ目の粗さと砂粒の多さを消している。220は杯か皿の底部である。黒漆が内面全体に付着する。小さなダマ状になっている箇所もあるので、パレットの可能性も否定できないが、全体に膜状になっており、また、ヘラで搔き取った痕跡がないので漆仕上げ土師器の可能性の方が高い。

高杯 (229~231)

皿部と脚部が接合できるものはなかった。229は脚部を欠く。口径は31.6cmで、内面にはヘラ磨き痕跡が残る。230・231はともに脚柱部である。ヘラで面取りがしてあり、ともに11面を数える。231は脚

裾部まで残存するが、脚裾部は柱状部を挟み込むように接着している。柱状部径は230が3.5cm、231が4.7cmを測り、230は231に対し、脚高も高く、細身の脚形態である。柱状部内面は外側からの加圧による縦皺が生じている。

杯B蓋（226）

内外面とも赤彩が施されている。天井部は丸みをもち、口縁端部は屈曲しない。天井部外面はロクロ削りが行なわれている。つまみは扁平なボタン形を呈する。

杯B（227・228）

ともに口縁部が外反する。227は内面に段を有する。228は内面にコテ状工具使用と思われる回転状の条線が残る。外面に赤彩の一部が残る。

土錘（232）

長径8.7cm、短径5.6cm、厚さ3.5cm、手づくねにより楕円状に作る。側面に上端幅1.3cm、深さ0.5cm前後のV字形状の溝を掘り込んでいる。

鉢（233・234）

233はほぼ完形で、口径17.9cm、体部最大径23.3cm、高さ15.2cmを測る。口縁部は内傾し、端面を平坦に仕上げる。片口を有し、底部は丸く、全体に球状を呈する。体部外面はハケ目調整、内面は指押さえの後、ナデ調整を施す。234は口径20.0cm、体部最大径23.0cm、高さ13.7cmを測る。口縁部は内傾するが、233ほどは内側に傾けない。口縁端面は平坦である。体部外面は横または斜めの方向のハケ目調整を施す。内面は表面が荒れていて調整痕が残らない。外面に煤が付着しており、煮沸容器として使用されている。

甕A（237～244）

小型の甕を主体とする。口径と器高並びに体部の最大径がほぼ等しい丸形の形状を呈する。体部外面は縦方向のハケ目調整、口縁部外面は横ナデ調整をそれぞれ施す。内面は指押さえの後、ハケ目調整もしくはヘラ削り調整を行なう。

頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端面は丸く納めるものが大半であるが、244のように端面をやや上方につまみ上げるものがある。体部外面には煤が付着するものと全く付着しないものがある。前者の煤の付着状況は239を除いて、甕Cのように全体に厚く付着するのではなく、きわめて薄く痕跡程度に留まる。煤の付かない一群は付く一群に比べて残存状況が良好である。特に240と241は完形品で、煮沸容器とは異なる用途に使用されている。また、外面は黄灰色を呈し、特に241は表面の黄灰色の部分が膜状に剥離した状況を呈しており、黄灰色の化粧土を塗布して仕上げた可能性がある。

甕B（236）

体部がもっともふくらむ箇所の左右に把手を付ける。把手は先の部分が欠損している。頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。外面に煤の付着の痕跡が残る。

甕C（245～252）

口頸部が大きく開く長胴の甕で、体部径は口径よりも小さい。体部外面全体に煤が厚く付着する。

体部外面は縦方向のハケ目調整、口縁部外面は横ナデ若しくは横方向のハケ目調整を施す。体部内面は指押さえの後、軽いヘラ削りを行なう。247・250の内面には縦方向のヘラ削りの痕が残る。251は残存状況がよく、土器の調整痕や煤の付着状況が比較的よく看取できる。

甕D（235）

口径14.7cm、高さ8.2cmの小型品である。把手先端は欠損している。把手を取り付けたあとにハケ目

調整が行なわれている。

鍋（253）

口径38.8cmを測るが、器高は不明である。体部外面は縦方向の後、横方向のハケ目調整を施す。内面は指押さえの後、縦方向の軽いヘラ削りを行なう。頸部外面は横ナデ調整を行い、内面は横方向のハケ目調整を施す。

竈（254～264）

曲げ庇付き竈である。掲載図以外にも多数出土しているが、実測可能なもののみを掲載した。体部を魚籠形に作った後、側面の一部を切り取って焚口を作り、焚口の周縁に庇をつける。260は庇の天部分がすべて残る。全体としては鞍の形状に似る。

受口は粘土を継ぎ足して厚みをもたせて強度を高めている。受口の形態には次の3つのタイプがある。

Aタイプ（254・255）

254は受口径25.6cm、下底部復元径45.8cm、復元高41.9cm。体部はゆるやかに立ち上がり、受口付近で角度を変えて反り上がる。受口は粘土厚を厚くして、強度を高めている。受口直下に庇が付き、庇から連続して脚に至る。鉤形に体部下底部を挟み込むようにして接着する。体部外面には下から上への粗いハケ目調整が行なわれている。正面左側に把手の痕跡を残す。255は受口が肥厚する。体部の成形後、粘土帯を継ぎ足して作る。外面に貼り付け時の指押さえの痕が明瞭に残る。庇から連続して脚に至る。脚は鉤形で体部下底部を挟み込むようにして接着している。

Bタイプ（256～259）

受口を断面三角形に肥厚させて、受口の強度を高めている。256は体部外面に細かいハケ目調整、内面はヘラ削り、下底部は外面と同じハケ目調整を行う。257は256と同一個体と思われる下部の破片である。前面に脚がつき、脚は体部下底部を挟み込むようにして接合している。258は外面に粗いハケ目調整を行い、内面は粘土紐の指押さえ後の凹凸の凸部を板状工具で削り取る。焚口の両側面に三角形の耳を貼り付ける。耳の尖頭部は下向きである。259は庇がすべて残存し、水平である。受口は断面三角形であるが、端面は平坦に仕上げる。

Cタイプ（261・262）

受口は断面三角形であるが、突出しないタイプである。261は受口が内傾し、断面三角形を呈する。庇から受口までの距離は離れている。受口内面には下側から受口側へ粘土を塗り上げた痕跡を残す。この部分から受口の肥厚が始まっており、体部を作った後に粘土帯を貼り付けて受口を成形した可能性が高い。262は受口がほぼ残存する。外面には粘土帯を貼り付けた痕跡が残る。受口は内傾し、断面三角形を呈する。庇は一部が残存する。焚口の上端部は粘土を貼り付けて成形した跡が残されており、焚口は通常、体部を切開して作られるが、本例は最初から焚口を開けた状態で体部が成形された可能性が考えられる。体部外面は細かいハケ目調整、内面はヘラ削り調整が行なわれている。264は262と同一個体の可能性が高い破片である。

製塩土器（265～350・352・353・355～360）（図版48・49 写真図版56）

旧河道SR01からは多量の製塩土器が出土しているが、ほとんどが二次焼成を受けた後に破碎され細片化しており図化できるものは少なかった。製塩土器は粗製のものであり、個体毎の変異が大きいが、以下のとおりに分類できる。（註1）

A類（288・289・291・292）

薄手で深い椀形のもの。底部は不明である。器壁の厚さは0.5～0.8cm程度である。外面には指

頭圧痕が残り、内面は丁寧にナデで仕上げる。丸底ならば大阪湾岸における丸底Ⅱ式（広瀬1994）、播磨・摂津におけるⅢ式B類（山本1994）にあたるが、B類と共に伴しているのでB類の器壁が薄いグループになる可能性もある。

B 1 類（265～287・290・293・294～335・355～360）

厚手で深い鉢形のもの。底部は尖底になる。外面には指頭圧痕が残る。内面の仕上げは、指頭厚痕があるもの、ユビナデするもの、板ナデするもの、ハケで仕上げるもの、貝殻条痕のあるものなどバリエーションがある。大阪湾岸における丸底Ⅲ式（広瀬1994）、播磨・摂津におけるⅣ式B 1 類（山本1994）にあたる。

B 2 類（336～353）

厚手で深い鉢形のもののうち、内面に布目压痕があるものである。布を巻いた内型に粘土紐を巻き付け、外から指で押さえて成形した型作りのものである。播磨・摂津におけるⅣ式B 2 類（山本1994）にあたる。

瓦（K 1・K 2）

K 1は平瓦である。凸面はやや平行四辺形気味の長方形の格子タタキが施されている。タタキの原体は傷んでいる。凹面の布目は6本/1cmである。側面のケズリは2面で、凹面側の側縁も削られている。焼成は軟質である。

K 2は脛斗瓦である。凸面はやや摩滅気味で、明瞭なタタキの痕跡は見出せない。凹面の布目は10本/1cmである。側面のケズリは1面で、部分的に凹面側の側縁が面取りされている。幅は11.8cmである。焼成は軟質である。

木製品（W 1）

角材（W 1）はSR01の東肩から出土した。8×10cmの二方柱に製材され、一面に浅い抉りが1段設けられ、さらに上に続いているようである。両端を欠損し、表面は風蝕による傷みが進んでいるため、加工痕などはほとんど残っていない。建築部材あるいは何らかの施設材であると考えられる。

石製品・石器（J 1・S 1～S 7）

J 1は、SR01を埋積する、灰色粗砂より出土した滑石製勾玉である。全体に断面径の変化が少ない、整ったC字形を呈している。頭部の穿孔は図左面からのみおこなわれており、表裏で孔径の差が顕著である。長さ25.3mm、幅15.0mm、断面長径8.6mm、短径7.1mm。

S 1は、すり石である。やや扁平な球形の礫を用いており、周縁部の一部は、敲打により整形されたものと思われる。長さ91.0mm、幅85.5mm、厚さ65.5mm、重量770.0g。

S 2は、大型の磨石である。河川の転礫を用い、その一面（右図下面）を、ほぼ平坦な状態に至るまで使用している。石材は暗緑色の結晶が目立つ火成岩である。長さ117.5mm、幅96.5mm、厚さ86.5mm、重量1510.0 g。

S 3は、すり石あるいは叩石である。長卵形の円礫を用いたものであり、使用の痕跡は希薄であるが、図示した器表面の一部に不鮮明な研磨痕をとどめている。また礫の膨らんだ一端も、使用された可能性がある。長さ128.0mm、幅65.0mm、厚さ59.5mm、重量794.0 g。

S 4は、楔形石器または削器の断片と考えられる資料である。サヌカイト剥片を素材としており、その一側縁の表裏に二次加工が施される。他の縁辺は折れ面となっている。長さ21.8mm、幅33.8mm、厚さ6.3mm、重量3.9 g。

S 5は、サヌカイト剥片である。縁辺をすべて折損しており、打面もとどめていないが、本来は大型

の剥片であったと思われる。背面側は腹面側と同一方向、および直交方向の大剥離痕で構成されており、大型・厚手の剥片が剥離された結果と考えられる。長さ60.8mm、幅76.6mm、厚さ18.4mm、重量124.2g。

S 6は砥石端部の破片である。図上部は大きな破断面となっている。表裏両面と両側面いずれも、研磨による擦痕が認められる。石材は流紋岩と思われる。長さ124.5mm、幅133.0mm、厚さ87.0mm、重量1835.0g。

S 7は、サヌカイトの大型剥片である。左図の右および下面是気泡状の自然面であることから、この剥片を剥離した石核の幅は、剥片の長さに近いものと判断される。背面側は、一枚の平坦な剥離面と一枚の大剥離痕、および打面縁に形成された剥離痕群で構成されている。平坦な剥離面は、わずかにネガティブな面を形成していることから、石材の分割面である可能性が考慮される。打面縁の剥離痕群は、本剥片の剥離に際しての調整と考えられる。なお本剥片の打面部は、きわめて薄い線状を呈している。石器素材として搬入されたものであろう。長さ133.3mm、幅167.0mm、厚さ21.0mm、重量560.0g。

SE01

須恵器

杯B蓋 (361)

完形品である。天井部は平らで、ヘラ削りを施す。有機物のようなものが付着しているが、有機物の種類については不明である。

杯B (363)

口径13.0cm、器高4.6cmの小型品である。体部内面から底部内面全体に使用痕跡がある。

杯A (362)

内面全体に黒漆が膜状に付着している。体部および底部外面にも黒漆が部分的に付着しているが、本来全面に存在していたものと思われる。漆の厚さは均等で、塗布されていた可能性が高い。

壺 (364)

口縁部を欠くが、壺Qであろう。体部外面にヘラ削りを施している。

土師器

杯 (365～367・370・371)

365は口径8.5cmの小型品である。手づくねで成形し、体部内外面は横ナデを行なうが、成形は粗い。

366・367はともに完形品である。口縁端部内面の肥厚または段は認められない。口縁部を横ナデし底部外面は手持ちのヘラ削りを行なう。内外面に黄灰色の化粧土を塗布しているが、特に367の内面には化粧土を引き伸ばした跡が残る。また、366の底部外面には「丼」の墨書がある（図版80）。370・371はともに破片で、化粧土を掛ける。内面に連弧状暗文が認められる。それぞれの底部外面には墨書がある（図版80）。370は記号のようなもので、判読できないが、371は「大八」と判読できる。

高杯 (368)

368は高杯の脚部である。皿部に連弧状暗文が認められる。柱状部は面取りされている。面は10面を数え、ヘラ磨きが施されている。なお、すべての面にあるわけではないが、いくつかの面に刻線が認められる。刻線は面の中央部にあるものや端に寄っているものがある。また上半部のみで下半部が消えているものやきわめて細く浅い針状のものがある。脚部の面取りにあたっての区画割りであろう。

製塩土器 (369)

369はC類の製塩土器である。厚手の筒型のものであり、外面に指頭圧痕が残る。

SE01の井戸部材と出土木器（W2～W13）

SE01は横板組み隅柱横桟留め井戸であり、隅柱4本、横桟8本、横板31枚が残されていた。このうち、隅柱4本（W2～W5）、横桟2本（W6・W7）、横板4枚（W8～W11）を図示している。

隅柱（W2～W5）は、広葉樹環孔材が使用されている。8×9cm～9×10cmの角柱で、上部が残存していないため全長は分からぬが、W4の144cmが最も長い。材は樹芯に近い部分で分割されている。表面は平滑であり、ハツリなどの加工痕は認められない。

横桟を受ける枘穴は相交わる2面に、高さを違えて2段認められる。下段は下端から17cmと25cmほどの位置に穴の下端がある。上段はほとんど失われているものの、下端から約114cmの位置に1つ目の下端がある。枘穴は3.5～4cm角ほどで、深さは約4cmである。

横桟は下段に4本、上段に4本が揃っており、北面上段の1本（W6）と南面下段の1本（W7）を図示した。上段と下段では樹種、木取りなどが異なっている。

上段の4本はすべて針葉樹の丸太芯持ち材で、径は6～7cm、折れて接合できない1本を除き、枘を除いた長さは115cmと揃っている。表面の傷みが著しく、加工痕は不明。枘の大半は遺存しておらず、端部は抉れたようになっている。

下段の4本はすべて広葉樹が使用されており、W7だけは丸太芯持ち材であるが、他の3本は芯を外した割り材で、断面が円形状あるいは隅丸方形状に加工されている。径あるいは1辺の長さは7～7.5cm、長さは115～117.5cmとほぼ揃っている。端部には2.5cm角ほどの枘が削り出されているものがある。

横板は西面に9段、残りの3面はそれぞれ7段が積まれた状態で発見されており、内部に転落した1枚を含め31枚が出土している。東面2段目（W8）、東面最下段（W9）、西面6段目（W10）、西面2段目（W11）の4点を図示した（段数は下からの順）。

すべて分厚い針葉樹の板材で、仕口の加工はない。上から2段目ぐらいまでの材は劣化し遺存状態が悪いが、下の方は比較的残りが良く、表面の加工痕などが明瞭に認められるものがある。木取りを見ると、図では柾目取りが3枚示されているが、全体の中では柾目取りは8枚にとどまり、他の23枚は板目取りである。

図示した4枚の表面には縦方向のハツリ痕が規則的に並んでおり、裏面や側面も同様である。しかし、これらのように全面にハツリが及ぶものはかえって少なく、木裏側はハツリがあっても、木表側は部分的に打ち割りによる製材時の凹凸を残したものが多い。

木口の切斷加工は、W8の右端では両面からハツリが加えられて、楔状の縦断面形を呈する。しかし、このような例は、他に不確実なものが1例あるだけで、大半は垂直に切り落とされ、真っ直ぐ通った平坦な面となっている。遺存状態の良いものでは、年輪が潰れたようになっている状況が認められ、チヨウナ等によって切り落とされた切削面の様子とは異なっている（第4図）。鋸による切斷が想定されたため、互いに接合を試みたところ、後述のように6組12点の接合が確認できた（第2表A～F、第5・6図）。

その他の加工痕は、W8とW9に径2mm程の穿孔があり、他にもう1例確認している。W9では側辺に寄った位置に6孔が不規則に並んでいる。また、径2cm程度の穿孔がある板も1例ある。

次に、板材の大きさを見ると、長さは131～135.5cmの間に収まり、特に133cmと134cmに7割以上が集中する。これより短い4枚の横板は上から1、2段目に限られ、風食等の劣化により短くなったと考えられるので、長さの規格性はさらに高いものであったに違いない。厚さも遺存状態の良いものでは3

第2表 SE01の横板一覧表

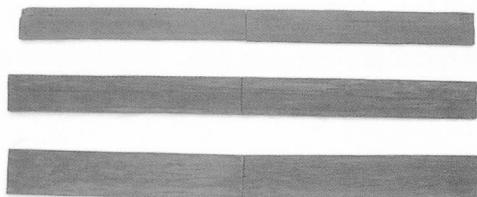
登録No.	出土位置	報告No.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	接合	辺材	備考
980210-01	内部転落		131.0	26.5	3.0	柾目			一端面ハツリ落としか?
980210-02	東7段目		133.0	21.0	2.5	板目			劣化
980210-03	東6段目		134.0	21.0	3.0	板目			小孔有り
980210-04	東5段目		135.5	17.5	3.0	板目			
980210-05	東4段目		133.0	25.5	3.5	板目	C		
980210-06	東3段目		134.0	21.0	4.0	板目	E		
980210-07	東2段目	W8	135.0	24.5	5.5	柾目		有り	一端面ハツリ落とし 小孔有り
980210-08	東1段目	W9	133.0	24.0	4.0	柾目	F	有り	小孔有り
980210-09	西9段目		131.0	22.5	3.0	板目			劣化
980210-10	西8段目		132.0	18.5	5.0	板目			
980210-11	西7段目		133.0	13.0	3.5	板目			
980210-12	西6段目	W10	133.0	13.0	4.5	板目			
980210-13	西5段目		133.5	17.5	3.5	板目	D		
980210-14	西4段目		134.5	22.0	3.5	板目	B		
980210-15	西3段目		134.0	18.5	4.0	板目	D		
980210-16	西2段目	W11	135.0	25.0	3.5	柾目	F	有り	
980210-17	西1段目		133.0	19.5	5.0	柾目	A	有り	
980210-18	南7段目		(128.0)	25.0	3.0	柾目			劣化
980210-19	南6段目		133.0	17.0	3.5	板目			劣化
980210-20	南5段目		133.0	25.5	3.5	板目	C		
980210-21	南4段目		134.0	31.5	4.0	板目			
980210-22	南3段目		134.0	21.5	4.0	板目	E		
980210-23	南2段目		134.0	15.0	4.0	板目			
980210-24	南1段目		134.0	26.0	4.0	板目			
980210-25	北7段目		133.0	18.0	4.0	板目			
980210-26	北6段目		135.0	16.5	3.0	柾目			孔有り
980210-27	北5段目		134.0	25.0	3.0	板目			
980210-28	北4段目		134.0	30.0	4.0	板目			
980210-29	北3段目		134.0	22.0	4.0	板目	B		
980210-30	北2段目		133.0	27.5	4.5	板目			
980210-31	北1段目		133.0	19.0	4.5	柾目	A	有り	



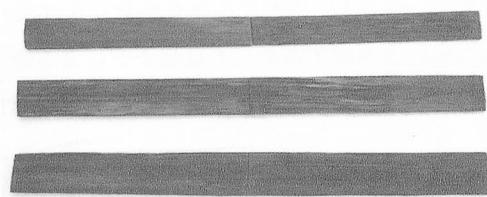
第4図 横板木口切断面



第7図 接合状況(3)



第5図 接合状況(1)



第6図 接合状況(2)

～5cmと規格性が高い。これに対して幅は13～31.5cm（平均21.3cm）の間に散らばり、特定の幅に集中することもない。

一般に横板積みの井戸では、横板の長さは井戸の平面的な大きさに左右されるが、相欠き仕口横板積み井戸では、仕口の位置を調整することで多少の融通を利かせることができる。幅についても最終的な組み上がりの高さが揃えば良いので、仕口の深さで調整することができる。SE01の場合、隅柱と横桟で組まれた4面に長方形の横板を積み上げていくだけなので、同じ幅の材を用いる必要はない。では、長さはどうであろうか。隅柱の一辺を9cm、横桟の長さを115cmとすると一辺の長さは133cmとなり、丁度、横板の長さと同じになる。つまり、各辺の横板が干渉しあわないよう長さを切り揃えているものと思われる。

このような長さの揃った板を得るには、鋸による切断が適している。実際、接合を確認した6組では、接合面にほとんど隙間が無く、鋸を用いたと判断できる（第7図）。接合後の長さは266cmあるいは268cmで、いずれも正確に二等分されている。両端の幅はほぼ同じであるか、最大でも1.5cm程の差があるに過ぎない。また、表裏面や側面のハツリ痕は、切断前に行われた加工であることが明確となった。

さらに、接合した板の両端も鋸で切断されているが、3枚が接合することは無かった。また、年輪に沿った接合も見出しえなかった。板の本来の長さは、切り落とされた部分が両端とも15cm程とすれば約3mとなる。また、2枚以上の接合が無いことから、3枚分（約4m）の長さよりは短かったと考えられる。

孔あきの板（W12）は南面横板の裏側から出土した。幅10cmの板材の一端近くに方形の孔があけられている。端部から20cmほど離れた所に段差があり、厚みを増す。風蝕による劣化が進んでいる。針葉樹。

曲物（W13）は井戸底から出土している。径22cm（底板の径20～20.5cm）、高さ約11cm、小型の円形曲物である。側板には幅1.5cmのタガを回し、木釘6ヶ所で底板と結合する。側板の内面には1cm以下の間隔で全面にケビキが入り、2列で綴じ合わせている。タガにはケビキは無いが、2ヶ所で綴じている。木取りはすべて板目取りである。小型で底板があることから、紐をかけて釣瓶として利用されていた可能性がある。

SE02 (SK13)

二彩壺（372）

黄褐色釉を基礎釉としてその上に緑釉を掛ける。胎土は精良で黄灰色を呈する。やや外側に踏ん張る短い高台を付す。底部外面は黄褐色釉の基礎釉のみで、緑釉は掛からない。高台の底部は露胎である。高台は削り出しか貼り付けかは不明である。

土師器

杯B（373）

口縁端部は外反し、内面に小さな段若しくは浅い溝を巡らす。外面にはヘラ磨きの痕跡が認められる。体部内外面にコテ状工具若しくは横ナデによる細かい平行の条線が認められるが、条線の深さからみてコテ状工具使用の可能性の方が高い。内面に連弧状暗文と1段の斜放射状暗文を施す。胎土は精良である。

杯A（374・376）

374は口縁端部を内側に巻き込む。内面に小さな段若しくは浅い溝を巡らす。体部内外面にコテ状工

具若しくは横ナデによる細かい平行の条線が認められる。底部内面はナデ仕上げを行なう。底部外面は手持ちのヘラ削りを行なう。内面に連続する弧状暗文と1段の斜放射状暗文を施す。胎土は精良である。体部内面に放射状暗文、底部内面に連弧状暗文を施す。

376は口縁端部をわずかに内側に巻き込む。体部内外面にコテ状工具若しくは横ナデによる細かい平行の条線が認められる。底部内面はナデ仕上げを行なう。底部外面指押さえのみで、ヘラ削りの痕跡は認められない。

杯底部 (378)

口縁部を欠く。底部外面には手持ちのヘラ削りを施す。内面全体に緑がかかった色調の黒漆が付着。漆の厚さは均等で、膜状に残る。ハケ目の跡が残り、漆仕上げ土師器の可能性が高い。

椀 (377)

小さな底部に湾曲して立ち上がる体部をもつ。手づくねで成形されたもので、器壁はきわめて厚い。内外面ともナデ仕上げを行なうが、調整は粗く、口縁部も水平ではなく波を打ったようになっている。口縁部内面から外面にかけて油煙と思われる痕跡が残されており、灯明皿として使用されたと思われる。

高杯 (375)

柱状部上面に連弧状暗文の一部が残存する。柱状部側面はヘラで面取りがしてあり、13面を数える。各面にはヘラ磨きを施す。

製塩土器 (385～392)

385～392はB類の製塩土器である。漏斗状に開いた口縁部をもつ厚手の筒型のものである。外面には指頭圧痕が残り、内面はユビナデで仕上げる。387のみ内面に布目圧痕が残るB2類であり、他はB1類である。

須恵器

高杯 (380)

皿部と脚端部を欠く。脚部は大きく「ハ」の字状に開く

杯 (379)

底部外面はロクロ削りが施され、「大福」の墨書がある。また、底部外面に黒漆と生漆痕が付着し、内面には墨の磨り痕が残る。

杯 (383)

底部外面に「□□(家カ)」(図版80)の墨書がある。

壺 (381)

上半部を欠く。壺の器形については不明であるが、体部下半が丸みをもつことから壺Kではなく、壺Lの可能性が高い。内面全体と割れ口面に生漆が付着する。また、漆は外面や底部外面にも部分的に付着しており、壺内部の漆すべての搔き取りのために、壺の体部の中心付近を破碎した際に飛散したものと判断される。漆は縮皺ができている。

甕 (384)

口径36.2cm。二重口縁風の口縁部をもつ。口縁内面は強くナデられ、口縁端面は平坦である。

壺A (382)

卵形の体部を有し、外方に踏ん張る高台を付す。肩と体部の境に1条の沈線を施す。肩部に鷺色の自然釉が掛かる。口頸部を欠くが、形態からみて短頸壺であろう。

瓦 (K3～K8)

K3は丸瓦である。丸瓦部外面は横方向のナデで、端面はケズリが施されている。内面の布目は7本/1cmである。焼成は軟質である。

K4～K8は平瓦である。凸面のタタキは1辺1cmの斜格子で、凹面の布目は7～8本/1cmである。側面のケズリは2面のものが多い。焼成は軟質である。

井戸枠部材 (W14～W22)

SE02 (SK13) は縦板組み隅柱横棧留め井戸であり、隅柱4本、横棧11本、縦板2枚が残されていた。このうち、隅柱4本 (W14～W17)、横棧4本 (W18～W21)、縦板1枚 (W22) を図示している。

隅柱 (W14～W17) は、針葉樹の割り材が使用されている。一辺7～12cmの断面が台形状の角柱で、上部が残存していないため全長は分からぬが、残存長は約225cmである。材はミカン割りの後に、年輪に沿って分割されているため、木取りは二方柾となる。表面は平滑でハツリなどの加工痕は認められないが、W15とW16の側面には分割時の凹凸が目立つ。また、下端面はハツリ痕によってほぼ垂直に落とされている。

横棧を受ける枘穴は、相交わる2面に、高さを違えて3段が認められる。上段と中段の間隔は約60cm、中段と下段は約70cmの間隔が空く。大半の穴は貫通しないが、北東隅と南西隅の2本 (W15、W17) では、各段とも下側の穴が貫通している。枘穴の大きさは7×5cm角～3.5×4.5cm角で、深さは4～6cmである。

なお、W14とW17、W15とW16が側面の分割面で接合した（第8～10図）。材の幅は、前者は約18.5cm、後者は木表側で24cm、木裏側で20cmとなった。分割が年輪にそって行われていることから、断面図を用いて原木の直径を推定すると、約1mの大径木であったと推定される。また、接合によって、W14とW17の下端近くにある深い抉り込みが、筏穴であることが判明した。筏穴は貫通部分で3.5×6cmあり、両面からのハツリによって穿孔されている。

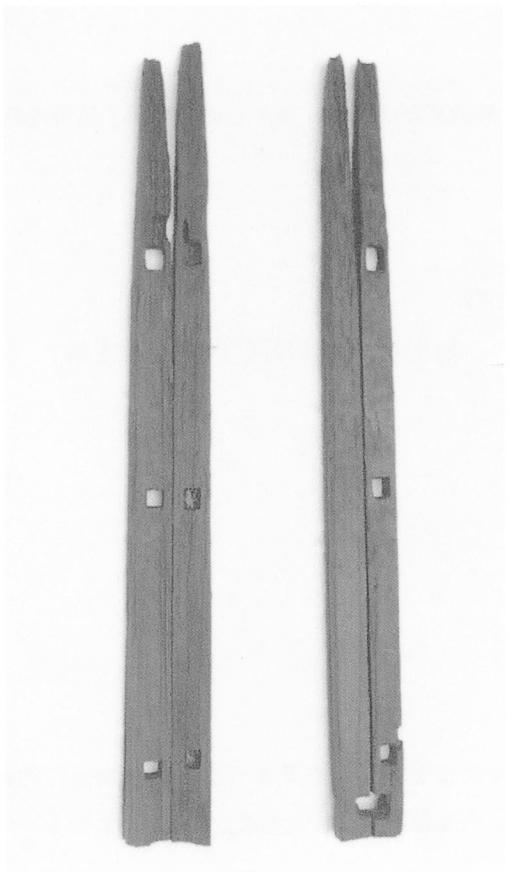
横棧は下段と中段に各4本が完存し、上段のみ東面が失われて3本が遺存している。北面中段 (W18) と東面下段 (W19)、南面下段 (W20)、西面下段 (W21) の4本を図示した。

用材はすべて針葉樹であるが、年輪の状況から少なくとも2樹種に分かれる可能性がある。一つは晩材幅が広くはっきりとしていて年輪界が明瞭なもので、年輪幅も広い。全体に暗い色調を呈する。W18とW20など南面と北面に使用されている。もう一つは年輪幅が狭く、晩材と早材の差が少ないので、W19、W21など東面と西面に使用された5本が相当する。5本のうち4本は明るい色調を呈する。

いずれも割り材をそのまま切斷して枘を作り出しておらず、断面形は一辺が5～10cmくらいの台形状を呈するものが多い。長さについても用材と同じく南・北面と東・西面で違いがあるため、井戸の平面形はやや長方形となる。南面と北面は枘を除いた長さが約75cmであるが、東面と西面では約71cmとなり、4cmほど短くなる。横棧の全長では約10cmの差が生じている。枘は一辺が3～4cmで、長さも同じくらいであるが、上述の貫通する枘穴に対応する北面と南面の横棧では、一方の枘を長く作り出している。

なお、W20の一方の枘は他とは異なり、先細りに削っているだけである。また、W20の一端は枘を楔で固定しており、他に同様な例が1例認められる。

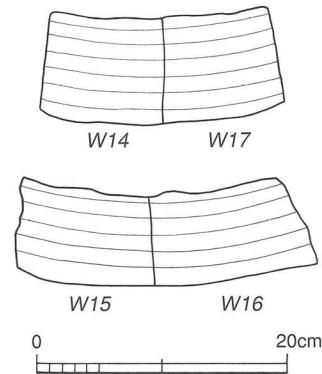
縦板は大半が抜き去られて、遺存していたのは南面にあった2枚の小片に過ぎない。1枚を図示する (W22)。2枚とも針葉樹で、幅約10cm、厚さ約1.5cmの板目取りされた割り材である。長さは本来、隅柱と同じであったはずであるが、60cmほどが残存しているに過ぎない。



第8図 接合状況(1)



第9図 接合状況(2)



第10図 接合断面図

SK01 (SR01)

須恵器甕B (393)

頸部は外反し、口縁部は内側に突出する。口縁端面は平坦である。肩部に「庚」の刻書がある（図版80）。

SK03

須恵器皿A (394)

口径24.9cm。体部と底部の境は丸く、不明瞭。器壁の摩滅は著しいが、ヘラ磨きの痕が体部内外面に認められる。

SK11

須恵器杯L蓋 (395)

天井部は丸みをもち、口縁部は天井部から屈曲して続く。径4.6cmの環状つまみをもつ。天井部外面全体にヘラ削りを施す。杯Lとセットで焼成されたことを示す痕跡が口縁内面に残る。

須恵器杯A (396)

口径13.1cm、器高3.5cm。体部はわずかに湾曲しながら立ち上がる。底部外面はヘラ切りのまま調整を行なっていない。

SK12

須恵器硯 (398)

硯面部のみの破片である。陸部に使用痕跡をもつ。外縁部が突出し、透かしの痕跡が1箇所残るが、大きさ、数については不明である。

SK19

須恵器皿D (399)

口縁部端面は平坦で、高台の幅は狭い。体部外面はヘラ削りを施し、内面も丁寧な調整を施す。

SK21

製塩土器 (397)

397はC類の製塩土器である。

SK22

須恵器

杯B蓋 (400)

天井部は平坦で、軽いナデのみの仕上げでヘラ切りの痕を残す。天井部外面に径15.0cm、内面に11.0cmの重ね焼きの痕跡を残す。内面側に降灰があり、内面側を上にして焼成したことがわかる。

杯B (402)

完形品である。体部と底部の境は明瞭で、箱形の形状を呈する。高台は体部との境より内寄りに貼り付けられている。

杯A (401)

体部は丸みをもつ。底部外面はヘラ切り後、ロクロ削り調整を行なう。重ね焼きと火櫻が内外面に残る。

土師器

杯A (403)

口縁端部内面にわずかな段がある。底部は手持ちのヘラ削りが施されているが、木ノ葉の一部らしき痕跡が認められる。器表は全体に赤褐色を呈する部分と黄白色を呈する部分が混在するが、黄白色の部分は化粧土をかけている可能性がある。内面の暗文は器面の剥落により見えない。

杯 (404)

口径11.5cm。器高3.6cmの小型品である。砂粒を多く含む粗製品である。内面は暗茶褐色に変色し、器壁の一部が剥落している。

製塩土器 (405~421)

405~412、414~420はB1類の製塩土器である。厚手で内外面に指頭圧痕がみられる。413と421はB2類の製塩土器である。内面に布目圧痕が残る。

SK23

土師器高杯 (422)

柱状部だけが残り、皿部と脚部を欠くが、柱状部ではヘラで面取りがしてあり、11面を数える。各面

には砂粒の動きによる線条痕が目立つ。

SD01

須恵器

皿 A (423)

体部外面にはヘラ磨き、底部外面は丁寧なロクロ削りをそれぞれ施す。底部外面には明瞭な火櫻が残る。白灰色を呈し、胎土精良である。

杯 B (424)

口径18.0cm、器高5.4cm、底径12.3cmを測り、直線的に立ち上がる体部をもつ。高台は底部外縁よりやや内側にはいった位置に付く。

杯 L (425)

体部下半に稜線がある。体部はほぼ直上に立ち上がり、口縁部は外反する。体部上半はナデ調整、下半はロクロ削りを行なう。

壺 K (426)

肩部には深い緑色の自然釉がかかり、火膨れがある。高台の踏ん張りはほとんどなく、高さもあまりない。高台周縁には爪形圧痕が残る。

甕 (427)

口径23.0cm。口縁端部内面の強いナデにより、口縁部はやや外半する。

P 34

須恵器杯 B 蓋 (428)

口径14.2cm。頂部が陥没したつまみを有する。天井部外面にヘラ削りを施す。口縁端部の屈曲は小さい。

P 20

土師器甕 (430)

口径14.4cm、器高13.8cm。小型の丸底の甕である。頸部は「く」の字状に外反し、口縁端部を外側にひねり返す。体部外面は縦方向のハケ調整を施す。ハケ調整は底部内面に及ぶ。内面には粘土紐の痕が残る。

P 28

土師器甕 (429)

頸部は「く」の字状に外反し、肩は張らない。

SD02 (SR01)

製塩土器 (431~433)

B類1の製塩土器である。

A区包含層

製塙土器 (434)

A類の製塙土器である。薄手で、外面に指頭圧痕が残る。

SK31

石器 (S 8)

SK31より出土したサスカイト製石鏃である。器長がやや長い五角形を呈し、両側縁は内彎する。基部は平基である。サスカイト剥片を素材とし、縁辺に粗略な二次加工を施している。長さ28.4mm、幅17.0mm、厚さ3.8mm、重量1.8 g。

SK34

釘 (図版62 M 1)

図化できたのは1本である。頭部が残存しておらず、型式は不明である。

第2節 B区

焼土坑 2

土師器

皿 (435~445・447)

土師器皿は、成形技法からロクロ成形のもの（435~439・443）と非ロクロ成形のもの（440~442・444・445・447）とに分けられる。435~439・443はいずれもロクロ成形で、平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整が施され、底部外面は未調整でヘラ切り痕が残る。色調はにぶい橙色（435・437・438）、にぶい黄橙色（436）、浅黄橙色（439・443）などを呈する。440~442・444・445・447は非ロクロ成形である。440は平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部内外面は強い横ナデ調整を施し、底部内外面は指おさえの後ナデ調整を加える。441・442は器形は全体に著しく歪み、体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。444・445は器形は同様に全体に歪み、底部と体部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部内外面には強い横ナデ調整を施し、底部内外面は指おさえの後、ナデ調整を加える。447はやや大型で、体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部内外面は強い横ナデ調整の後、ハケ目調整、底部内外面は指おさえの後、ナデ調整を加える。色調は橙色（440）、にぶい橙色（441・442・444・447）、にぶい黄橙色（445）をそれぞれ呈する。

托 (446)

ロクロ成形で、体部は大きく内傾し口縁部は大きく外方にひらく。口縁部から体部内外面に回転ナデ調整を施し、口縁部外面には強いナデ調整を加える。色調は浅黄橙色を呈する。

須恵器

椀 (448)

平底で、底部と体部の界は不明瞭である。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部から体部内外面には回転ナデ調整を加える。底部外面は不調整で糸切り痕が残る。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器椀で13世紀前半代に比定される。

鉢 (449)

体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を加える。色調は灰色を呈する。東播系須恵器鉢で13世紀前半代に比定される。

壺 (450)

体部は直線的にはほぼ直上に延びる。粘土紐巻上げ成形で、内外面とも回転ナデ調整の後、板ナデ調整を加える。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

甕 (451)

体部は内彎して斜め上方に延び、口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内外面に強い横ナデ調整を施す。体部外面には斜め方向の平行叩き目が残る。色調は灰白色を呈する。東播系須恵器で13世紀前半代の製品と考えられる。

白磁

碗 (452)

底部の器壁が非常に厚く、高台は浅く削り出す。内面は透明釉を施し、灰白色に発色する。外面は露胎である。横田・森田分類白磁碗IV類相当で、12世紀後半代に時期が求められる。

皿 (453・454)

453・454は平底で体部は緩やかに斜め上方に立ち上がる。底部内面に沈線が1条廻る。内外面とも透明釉を施釉し、底部外面は露胎である。華南産白磁皿で13世紀前半代に比定される。

石製品

石鍋（S 9）

体部は内彎してほぼ直上に延び、口縁部外面に断面三角形状の幅の狭い鍔をもつ。内面には幅の広い鑿痕が、外面には細かい鑿痕がそれぞれ残る。色調は灰色を呈する。

瓦（K 9～K 12）

K 9・K 11は軒丸瓦である。K 9の文様は単弁八葉蓮華文である。連弁と中房の輪郭は線で表現されるだけの単純な文様で、蓮子は1+4である。瓦当裏面はナデが施され、焼成は硬質である。酷似する同文例は京都市鳥羽離宮跡第65次調査で出土している（注2）。K 11は複弁八葉蓮華文である。瓦当裏面はナデが施されている。焼成は硬質である。神戸市神出窯跡群の垣内支群NM4類（注3）と同範で、明石市林崎三本松窯跡群（注4）・神戸市楠・荒田町遺跡（注5）でも同範品が出土している。

K 10・K 12は平瓦である。K 10の凸面のタタキは1辺5mmの正格子で、凹面の布目は8本/1cmである。側面のケズリは2面で、端面と凹面の端面側を削り、凹凸面両側の端縁に面取りを施している。焼成は硬質である。K 12の凸面のタタキは繩目で、凹面の布目は8本/1cmである。側面のケズリは2面で、凸面側側縁を面取りしている。焼成は軟質である。

ピット群

P 29

須恵器皿（455）

平底で、体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加える。底部外面は不調整で糸切り痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半代の製品と考えられる。
土師器皿（456）

ロクロ成形で、底部は平底高台風に削り出す。内外面とも回転ナデ調整を加え、底部外面は不調整でヘラ切痕が残る。

P 30

土師器皿（457）

ロクロ成形で、体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加え、底部外面はヘラ切りの後、ナデ調整を加える。色調はにぶい黄橙色を呈する。

P 85

土師器皿（458）

ロクロ成形で、器壁は全体に薄く、体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加え。底部外面はヘラ切りの後、ナデ調整を加える。色調はにぶい黄橙色を呈する。

P 37

土師器皿（459）

ロクロ成形で、器壁は全体に薄く、体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加え、底部外面はヘラ切り痕が残る。色調はにぶい橙色を呈する。

P 52

須恵器椀（460）

体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。口縁部内外面に強い回転ナデ調整が加えられる。体部内外面にも回転ナデ調整を加える。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

P 40

土師器皿（461）

ロクロ成形で、体部は内彎して斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加え、色調は鈍い褐色を呈する。焼成は堅緻である。

P 82

土師器皿（462）

ロクロ成形で、体部は緩やかに直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加えるが、特に口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。底部外面はヘラ切りの後、ナデ調整を加える。色調はにぶい橙色を呈する。

P 31

須恵器椀（463）

体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもち、内側に引き出す。内外面とも回転ナデ調整を加える。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で、12世紀後半～13世紀前半代の所産である。

P 53

須恵器椀（464）

463とほぼ同形の須恵器椀である。

P 97

須恵器椀（465）

平底で若干平底高台風に削り出す。体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも回転ナデ調整を加える。底部外面は不調整で糸切り痕が残る。焼成はやや軟質で、灰白色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半代に比定される。

P 78

須恵器椀（466）

器壁は全体に薄く、器高も465に比べ低い。平底で体部は緩やかに斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加える。底部外面は不調整で糸切り痕が残る。焼成はやや軟質で、灰白色を呈する。東播系須恵器で13世紀前半代に比定される。

SP24

須恵器皿（467）

平底で、体部は短く直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を加える。底部外面は不調整で糸切り痕が残る。焼成は軟質で、灰白色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

須恵器甕（468）

体部は内彎し、口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部に沈線が1条廻る。口縁部内外面に横ナデ調整を加え、体部外面には平行叩き目が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

SD09

土師器皿（469～472）

皿はいずれも非ロクロ成形である。470は器形は全体に歪み、器壁は比較的厚い。平底で体部は緩やかに斜め上方に延びる。内外面とも横ナデ調整を施し、色調は浅黄橙色を呈する。471は平底で底部と体部の界が不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。内外面とも横ナデ調整し、底部外面は指おさえの後、ナデ調整を加える。色調は灰白色を呈する。京都系土師器と考えられる。472も471同様に京都系と考えられる皿である。平底で、体部は直線的にほぼ直上に延びる。口縁部内外面には強い横ナデ調整を加え、底部外面は指おさえの後、粗いナデ調整を加える。色調は浅黄橙色を呈する。

SD12

白磁碗（473）

体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類白磁碗IV類相当で、12世紀後半代に比定される。

SD05

須恵器

杯B（474）

内外面は丁寧な調整を行なう。高台は三日月形に仕上げている。

台付皿（475・476）

皿型の器に高い高台がつく。皿の体部はほぼ真っ直ぐ立ち上がり、内外面にヘラ磨きを行なう。口径は17.6cm、16.7cm、高台径は13.4cm、12.5cmを測る。高台の高さは2.4cm、2.1cmあり、ほぼ直立し、皿の周縁から1.5cm、1.4cm内側に入ったところに付けられている。内面には重ね積みの痕が残る。その径は12.5cm、13.5cmあり、当該器種の高台径と一致する。

皿A（477・478）

477は口径24.6cm。内外面ともヘラ磨きを施す。底部外面はロクロ削りを行なう。478は口径18.7cm。体部内外面にヘラ磨きの一部が見える。底部外面はヘラ切りの後、軽くなるのみで、477のような丁寧なロクロ削りは認められない。口縁内面にわずかな段が認められる。底部内面に使用痕が残る。

壺Q（479）

口径16.6cm。底部を欠く。口径と体部稜線の径はほぼ同じである。

土師器

竈（480）

移動式の竈である。受口の器壁断面は先の尖った山形を呈する。受口は体部全体を成形した後に、粘土帯を貼り付けたもので、受口内面に貼り付けの痕跡が残る。このため受口は体部より肥厚し、受口の強度を高めている。体部外面は縦方向のハケ調整を行なっている。体部側面には三角形の把手を尖頭部分を下にして貼り付けている。

瓦（K13）

K13は平瓦である。凸面のタタキは1片7mmの斜格子で、布目は7本/1cmである。側面のケズリは1面である。焼成は軟質である。

溝SD01

弥生土器

壺 (481～484・500)

481は長頸壺の口頸部である。頸部がほぼ直立し、口縁部は外へ開く。口縁端部は外側に面を取り、2条の擬凹線文を施す。頸部外面は縦方向、内面は横方向のハケメで調整する。口径14.5cm。

482は広口壺の口縁部～肩部の部位である。口縁部は頸部から緩やかに外反するが、端部を欠失する。口縁部内面には断面三角形の突帯を貼り付け、その外側に2個1組の孔を穿つ。頸部には断面三角形の突帯を2条貼り付ける。頸部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。口径14.2cm。

483・484は広口壺の口縁部片である。483は口縁部が水平に大きく開き、下垂した端部の外面に円形浮文を貼り付ける。浮文の単位は不明である。口径約25cm。484は大きく開いた口縁端部の外側に面を取り、2条の擬凹線文を施す。擬凹線文の上から数個～8個が1組となった竹管文を数単位施す。口径20.7cm。この2点は器台になる可能性もある。

500は底部片で、平底から体部が上外方に開く。内外面ともハケメで調整する。底径13.9cm。

鉢 (485・486)

485は大型の鉢の胴部片である。最大径付近に施した4条の凹線文の下に突帯を貼り付け、突帯上にキザミメを加える。胴径は約42cmである。

486は楕形の鉢で、平底が高台風に突出する。底部外面には木ノ葉の圧痕が残されている。外面はタタキ成形の後、ヘラミガキで仕上げる。外面に黒斑が認められる。口径22.4cm、器高15.7cm。

小型器台 (487・489)

487は浅い皿状の杯部をもち、口縁部が外反気味に短く立ち上がる。脚部は中実の柱部から裾部が屈曲して広がり、円形の穿孔をもつ。杯部はナデ、脚部外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。口径10.0cm。

489は杯部を欠失する。脚部はやや外彎気味の円錐形で、上半部に円形の穿孔を4方向にもつ。底径12.15cm。

高杯 (488)

杯部を欠失する。脚部はラッパ状に広がり、円形の穿孔を4方向にもつ。底径14.7cm。

甕 (490～499)

490・494は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部を肥厚させて、外面に2条の擬凹線文を施す。体部は口径より大きくなり、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。口径はいずれも15.6cm。

491・492は口縁部が水平近くに深く屈曲し、端部を肥厚させるものの、外面は無文である。体部は口径より大きくなり、外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。口径は491が15.5cm、492が16.2cm。

493は緩やかに外反する口縁部片で、端部が平坦に収まる。体部は外面をハケメで調整する。口径15.05cm。

495は口縁部が「く」の字に屈曲し、端部をわずかにつまみ上げる。体部は外面をハケメで調整する。口径22.75cm。

496は口縁部が「く」の字に屈曲して内彎気味に開く。体部は外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整するが、胎土には粗い砂粒が目立つ。口径17.35cm。

497は口縁部が「く」の字に屈曲して短く開き、端部を丸く収める。タタキ成形で、タタキの痕跡は口縁部にまで及ぶ。体部内面はナデで調整する。口径15.4cm。

498は平底の底部で、外面を縦方向のハケメ、内面をナデで調整する。底径5.9cm。

499はやや突出した平底の底部で、外面にタタキ痕が残る。底径5.2cm。

紡錘車（501）

土器片を再利用した紡錘車で、1/3を欠失する。直径がおよそ4.3cmで、中心に孔を穿つ。

縄文土器

深鉢（502）

口頸部～体部下半までが残る。口縁部が緩く開き、端部を丸く收める。無文で、内外面とも横または斜め方向の条痕が残る。口径27.0cm。

第3節 C区

P 14・P 17

P 14からは須恵器杯B蓋の小片（503）が1点出土しているのみである。蓋は縁部が屈曲するタイプのものである。P 17からは杯類が出土している。504は須恵器の杯Bで、高台は底部周縁に付き体部は高台脇から斜め上方に直線的に立ち上がる。505は須恵器の杯Aである。焼成が悪く、瓦質で、全体に摩滅している。506は土師器の杯で、口縁端部にかすかに段が残る。底部外面に指押さえの跡が残る。

溝SD02

上層遺物

須恵器 梗（507）

糸切りの平高台を持つ梗である。口径13.5cm、器高4.9cm、高台径5.3cm。高台高は0.3cmで、高台側面部の調整は行なっていない。底部内面は段が付く。白灰色で焼成は甘い。

土師器 托（508～513）

すべて底部糸切りである。508～511は底径4.7～5.6cmで、内面に大きな段をもつ。上半部に斜め横方向に開く皿が取り付く形態である。512・513は底径5.6cm、6.3cmを測り、内面に段をもつが、前者の一群とは異なり、やや斜めに開く楕形の体部が取り付く。

下層遺物

須恵器

杯B（514・515）

器高4.9cmの低いもの（514）と6.7cmの高いもの（515）がある。ともに高台は底部の周縁にあり、体部は高台脇から斜め上方に直線的に立ち上がる。514は底部外面不調整であるが、515はロクロ削り調整を行なう。515は口縁部がわずかに外反し、作りも比較的丁寧である。

杯L（518・519）

518は体部上半は大きく外反し、体部中央に段がつく。高台は踏ん張るが、高台幅に厚みはなく、径も小さい。体部下半はヘラ削りで仕上げる。体部外面上半は自然釉がかかる。519は底部のみで上半部を欠く。体部外面はヘラ削りされている。高台内端部は突出する。底部内面に使用痕が認められる。

梗A（516）

口径9.9cm、器高4.1cm。底部は丸みをもち、湾曲して立ち上がる。底部はヘラ切りの後、ヘラ削りを行なう。

杯A（517・520・521）

517は径に対して底径が小さく、体部は大きく斜めに開く。底部外面はヘラ切り後、軽くナデ調整を行なう。520は底部外面はヘラ切り放しのままで、調整を行なっていない。内面全体に黒漆が付着するが、ハケ塗りをしたような膜状の付着状況を呈しており、漆仕上げ須恵器の可能性が高い。体部外面にもごく一部黒漆が付着する。521の底部外面はヘラ切り後にロクロ削り調整が行なわれており、内面全体には黒漆が付着する。漆は塗布されたような状態を示しており、漆仕上げ須恵器の可能性が高い。

杯（522）

杯または皿の底部破片である。外面はヘラ切り後、ナデ調整を行なう。外面に「吉」の墨書がある（図版81）。内面に使用痕跡が認められる。

皿B蓋 (523)

1/6程度の破片で、つまみ部を欠く。天井部内外面はロクロ削り調整が行なわれ、内面も軽いヘラ削り調整が行なわれている。

皿B (524)

高台は底部の周縁に付き、体部は高台脇から立ち上がる。体部内外面ともヘラ磨きが施され、底部外面はロクロ削りが行なわれている。灰白色を呈し、焼成は甘い。

高杯 (525)

皿部のみで脚部を欠く。内面はヘラ磨きが施され、外面はロクロ削りが行なわれている。

壺Q (526)

口頸部を欠くが、形態からみて壺Qであろう。肩部に鶯色の自然釉が降下している。体部外面はヘラ削り調整が行なわれている。底部内面には爪形圧痕が残る。

土師器

杯 (527)・杯A (528)・杯 (529)

527は体部は直上に立ち上がり、口縁部は外反する。体部外面は横ナデ、底部外面はナデまたはヘラ状工具で調整されている。528は口縁端部内面に狭い溝を巡らし巻き込み風に見せている。赤色塗彩が施されている。529は小片で、内外面に黒漆が付着する。外面の漆痕は膜状に付着し、塗布したように見えるが、底部内面の漆痕は縮み皺の状態であり、パレットとして使用されたようにも見える。

土師器甕A (530)

口径14.9cmの小型の甕である。底部を欠く。体部外面上半部に縦方向のハケ目調整を行い、下半部に斜め方向のハケ目調整を行なう。

瓦 (K14)

K14は軒丸瓦である。文様は単弁蓮華文で、子葉の尖端が二又に割れている。復元すると14葉と考えられる。焼成は軟質である。古大内式系の軒丸瓦で、小犬丸I NM02(注6)、小犬丸第2群瓦軒丸瓦A類(注7)と同文と考えられる。

SD02付近

土師器

椀 (531)

体部は湾曲して立ち上がる。高台は三日月状の貼り付け高台である。器壁は薄く、体部内外面ヘラ磨きを施す。

須恵器

椀 (532)

体部外面に2本の沈線を施す。

杯B蓋 (533)

天井部が丸い傘形の形状を呈する。天井部外面はヘラ切り後、軽いヘラ削りを行なう。内面側に降灰があり、径9.0cmの別製品の重ね置き痕が残る。また、外面にも径15.6cmの重ね置き痕が残る。

杯B (534・535)

534は口径13.3cm。底部外面はヘラ切り不調整である。535は口径10.7cmで、口縁端部はわずかに外反する。底部外面はロクロ削りを行なう。

杯A (536・537)

ともに明灰色で明瞭な火櫻痕が残る。底部外面はヘラ切り後ナデ調整のみである。

壺A (546)

短く直立する口縁をもつ。口縁の端面は平坦で、口縁部及び周縁部には降灰がなく、共蓋をして焼成されたことがわかる

土師器

杯C (539・540)

ともに口縁部は外傾し、内面に小さな段をもつ。器壁は全体に摩滅し、調整は不明であるが、底部には凹凸がある。

杯A (541)

体部は直上に立ち上がるが、口縁部付近ではやや開き気味になる。口縁端部内面は肥厚し、巻き込み状に仕上げる。器壁は全体に摩滅し、調整は不明であるが、底部には凹凸がある。

杯 (542)

体部は湾曲して立ち上がり、口縁部付近では内傾し、端部は丸く納める。全体に摩滅しているために調整は不明である。底部外面に黒斑がある。砂粒を多く含む。

杯 (543・544)

内面に黒漆が付着している。543は大半の漆痕が剥がれ、点状に残存するのみであるが、膜状に残っており、塗布された可能性が高い。544は内面全体に漆が付着するが、縮み皺状態で、塗布したようには見えない。パレットとして使用された可能性が高い。

甕B (545)

把手のすぐ上側の位置に、斜め上方向に穿たれた孔がある。穿孔の数は小片のため不明である。体部外面はハケ目調整が施されている。甕の可能性もある。

柱穴 P 15

弥生土器

甕 (547)

平底の底部片で、外面の調整は不明である。底径6.05cm。

土坑SK07

弥生土器

壺 (549・550)

549は広口壺の頸部で、縦方向のハケメの上から11条の沈線を施す。

550は広口壺の肩部で、3条以上の沈線を施し、体部がなだらかに大きく膨らむ器形である。

甕 (548・552)

548は上半部を欠失する。平底から体部が内彎気味に立ち上がる。外面の調整は不明である。壺の体部の可能性もある。底径9.75cm。

552は内彎気味の体部から、口縁部が如意形に短く外反する。口縁直下に4条の沈線を施し、端部にはキザミメを加える。口径は、体部最大径にほぼ等しい。

溝SD02

弥生土器

甕 (551)

口縁部は「く」の字に屈曲し、端部に1条の沈線を施す。体部外面はハケメ、内面はナデで調整する。
口径35.3cm。

石器 (S10)

サヌカイト製有茎石鎌である。鎌身部の両側縁はわずかに膨らみをもつ。茎部との境界は丸みをもった形態を示しており、返しを作らない。先端と茎部下端は折損している。長さ23.5mm、幅15.0mm、厚さ4.5mm、重量1.6g。

溝SD08

弥生土器

甕 (553)

口縁部は逆L字状に屈曲し、口縁直下に3条以上の沈線、端部にキザミメを施す。

鉢 (555)

扁球形の体部から、口縁部が屈曲して開く。体部は内外面ともハケメで調整する。底部は欠失する。
口径27.4cm。

壺 (556)

上半部を欠失する。平底から体部が大きく膨らみ、壺の底部と考えられる。体部外面はハケメで調整し、底部外面は再調整する。底径7.0cm。

縄文土器

深鉢 (554)

突帯文土器の深鉢で、口縁部は緩く外反し、4～5cm下に突帯を1条貼り付ける。細片のため、以下は不明である。

石器 (S11)

SD08より出土した楔形石器である。略台形を呈し、ほぼ平行する上縁と下縁に、両極打撃による顕著な剥離と潰れが認められる。右図の左側縁には、上方からの打撃による截断面が形成されている。サヌカイト剥片を素材としている。長さ47.0mm、幅31.5mm、厚さ5.0mm、重量9.7g。

包含層

弥生土器

壺 (557)

広口壺の頸部で、縦方向のハケメの上から5条の沈線を施す。

鉢 (558)

大型の鉢の体部で、口縁部と下半部を欠失する。口縁直下に5条の沈線を施す。

第4節 D区

溝S 26

須恵器

杯B蓋 (559・560)

559は天井部はわずかに丸みをもつが、ほぼ平坦で、口縁部へは屈曲して続く。天井部はヘラ切り後、ナデ調整を施す。周縁部のみに降灰があり、別品を上に載せて焼成されたことを示す。赤褐色を呈する。560は天井部が平坦で、口縁部へは屈曲して続く。ヘラ切り後、軽くヘラ削りを行なう。

杯B (562・563)

562は小型の杯B小片である。内外面とも丁寧な調整を施し、胎土も精良である。体部外面に火櫻を残す。563は口径18.1cm、器高5.7cm。外面にはヘラ磨きの痕が残る。口縁端部はわずかに外反する。

杯L蓋 (561)

天井部は中心部に径8.1cmの環状つまみを付す。外面はヘラ削りが行なわれている。天井部から口縁部へは屈曲して続く。内面に径10.3cmの製品の積み置きの痕が残る。

杯L (564)

体部は稜線部から直上方向に立ち上がり、口縁端部は外反する。体部下半はヘラ削りが施されている。高台径は小さく、内側に付く。

杯E (565)

口径10.8cm、器高4.3cm。口縁部は外反する。体部と底部の境は明瞭で、底部外面はヘラ削りが行なわれている。

杯A (566)

口径14.0cm、器高2.8cm。底部外面はヘラ削りが行なわれ、内外面に火櫻が残る。

壺 (567・569)

567は壺Lの口頸部であろう。頸部は短く直立し、口縁部はL字状に屈曲し端部を上方につまみ上げる。569は口頸部を欠く。形態と内面の灰の付着の状況から判断して壺Qの可能性が高い。肩部に1条の沈線が巡る。器面の一部に火膨れ痕が認められる。

皿D (568)

体部は高台脇から斜め上方に立ち上がる。口縁端部は平坦に仕上げる。体部外面に火櫻が残る。体部外面下半と底部外面はロクロ削り調整が行なわれている。底部外面に墨書（図版70）があるが、文字は判読できない。

土師器

甕 (570・571)

570は口径20.1cm。口頸部は「く」の字状に外反する。体部と最大径と口径がほぼ同じである。粒の大きい砂粒を多く含み、縦方向のハケ目調整を行なう。571は口径15.9cmで、口頸部は「く」の字状に外反するが、口頸部の長さは短く、口縁端部を上方に短くつまみ上げる。縦斜め方向のハケ目調整を行なう。外面に煤が付着する。

高杯 (572)

柱状部だけが残り、皿部と脚部を欠く。柱状部ではヘラで面取りがしてあり、11面を数える。各面にはヘラ磨きを施す。

杯 (573・576・577)

573は口縁端部を丸く納める。全体に摩滅しているが、一部に磨きの痕が残る。576も全体の摩滅が著しいが、底部のヘラ削り調整が観察できる。577は小片であり、表面の摩滅のために調整は不明である。

杯C (574)

底部は丸く、体部と底部の境は不明瞭である。口縁端部は肥厚せず、内端面に溝状の段をもつ。全体に摩滅しているが、赤色顔料の塗布の跡が残る。底部外面の調整は不明である。

杯B (575)

体部は湾曲して立ち上がり、口縁部内面は強くナデられているが、端面は肥厚しない。高く踏ん張る高台を付す。外面には赤色塗彩の跡がわずかに残る。

土坑SK01

578は口径15.8cmの須恵器杯Aである。灰白色を呈しており、焼成温度はあまり高くない。底部外面はロクロ削りが行なわれている。579は土師器鉢の破片である。体部上半は縦方向のハケ目調整を施し、下半は斜めないしは横方向のハケ目調整を施す。

SK08

須恵器杯B (581)、皿A (582)、片口鉢 (583) が出土している。いずれも小片である。

SD02

須恵器甕片 (584) が1点出土している。

溝SD01

須恵器壺E (585)

正面逆台形の体部に短く直立する口縁をもつ。底部には高さの低い輪高台を付す。底部外面はヘラ切り不調整である。

土師器杯A (586)

口縁部内面の肥厚はないが、口縁内端面に溝状の段がある。体部内外面は横ナデの後、ヘラ磨きを施す。底部外面は手持ちのヘラ削りを行なう。内外面にヘラ削りを施す。

SX01

土師器甕C (580)

口径27.5cm、器高27.1cmの長胴の甕である。胴の最大径は24.3cmで、口径よりも小さい。体部には縦方向の粗いハケ目調整を施す。ハケ目調整は口縁部外面まで及び、口縁部では縦ハケの後、横方向にハケ目調整を行なう。口縁部の一部と底部の一部が欠失しているが、完形品である。

P 43

土師器皿 (594)

平底でやや上げ底気味である。底部と体部の界は不明瞭で、体部は緩やかに斜め上方に延びる。口縁部内外面に強い横ナデ調整を加え、底部内外面は、指押さえの後、ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

池SK01

土師器Ⅲ（595～599）

全て非口クロ成形である。平底で、体部は緩やかに斜め上方に延びるもの（595）、直線的に斜め上方に延びるもの（596・598）、内彎気味に斜め上方に延びるもの（597・599）などがある。いずれも口縁部から体部内外面に強い横ナデ調整を加え、底部内外面は指押さえの後、ナデ調整を加える。色調は橙色（596・597）あるいはにぶい橙色（595・598・599）を呈する。

池SK02

土師器

Ⅲ（600～618）

製作技法から、ロクロ成形のもの（614）と非ロクロ成形のものとに大きく分類される。非ロクロ成形のものは、その形態から、底部と体部の界が比較的明瞭なⅠ類と不明瞭なⅡ類に区分される。さらにⅠ類は体部が直線的に斜め上方に延びるⅠ-1類（601・605・607・611・613・615・616・617）と体部が緩やかに斜め上方に延びるⅠ-2類（600・602）、体部がほぼ直上に延びるⅠ-3類（610・612）に細分される。またⅡ類も同様に、体部が緩やかに斜め上方に延びるⅡ-1類（604・606・608）と体部が僅かに内彎気味に延びるⅡ-2類（603・609・618）に細分される。

甕（626）

体部は内彎し、口縁部は僅かに外方にひらく。体部外面は斜め方向の粗いハケ目調整の後、横ナデ調整を加える。体部内部は指おさえの後、ナデ調整を施す。色調は橙色を呈する。

鍋（627）

口縁部は大きく「く」の字状に屈曲して外方にひらく。体部外面は多方向のハケ目調整、口縁部内部は横方向の粗いハケ目調整、体部内部は斜め方向のハケ目調整がそれぞれ加えられる。色調はにぶい橙色を呈する。

瓦器

椀（621）

体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも横ナデ調整が施される。色調は暗灰色を呈する。

羽釜（625）

体部は内彎し、口縁部は大きく内傾する。口縁部外面に断面台形状の比較的幅の狭い鐸を貼り付ける。さらに鐸の直下に脚を貼り付ける。外面は横ナデ調整が施され、色調は灰色を呈する。いわゆる足鍋で13世紀代に比定される。

須恵器

椀（619・620）

619・620はほぼ同形で、平底で体部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は未調整で糸切り痕が残る。口縁端部には重ね焼き痕が残り、色調は灰白色を呈する。東播系須恵器で13世紀前半代に比定される。

鉢（622）

体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は断面三角形状に上方につまみ上げる。内外面とも指押さえの後、ナデ調整を施し、口縁部内外面は強い回転ナデ調整を加える。口縁部から体部外面に指

頭圧痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

白磁

碗 (624)

口縁部が玉縁状に肥厚する。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。横田・森田分類白磁碗IV類相当で、12世紀後半代に比定される。

青磁

碗 (623)

口縁部は外反し、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。龍泉窯系青磁である。

包含層

土師器皿 (631)

ロクロ成形で、器壁は比較的厚い。体部は直線的に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は未調整で糸切り痕が残る。近世の灯明皿の可能性が考えられる。

須恵器椀 (628・629)

628・629はいずれも同形で、平底で体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は未調整で糸切り痕が残る。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で13世紀前半代に比定される。

無釉陶器壺 (630)

体部は大きく内彎し、頸部は短く直立する。口縁部は玉縁状を呈し、端部を僅かに横方向につまみだす。体部外面上位に5条1単位の櫛描きの波状文を施し、内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は灰色を呈する。備前焼III期相当で14世紀前半代に比定される。

土坑SK06

弥生土器

鉢 (587)

小型の椀形の鉢である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデで仕上げる。口径9.5cm、器高5.2cm、底径3.5cm。

器台 (591)

小型器台の杯部とみられ、口縁部はつまみ上げるように立ち上がる。内外面ともナデで調整するが、内面には粗い砂粒が露出しており、仕上がりは良くない。脚部を欠失するが、接合部には円盤充填を行う。口径9.5cm。

土坑SK11（中区）

弥生土器

高杯 (588)

小型の高杯の脚部で、杯部を欠失する。中実の脚柱部から裾部が短く開く。手捏ね成形で、ユビオサエの痕跡が多く残る。底径7.4cm。

甕 (589)

小型の甕である。頸部の屈曲が弱く、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。タタキで成形し、内面にはあて具の痕跡が残る。底部外面には木ノ葉の圧痕が認められる。口径10.65cm、器高9.35cm、底径4.05cm。
鉢（592）

小型の椀形の鉢で、底面は明確な平底をなさない。手捏ね成形で、強いユビナデ、ユビオサエの痕跡が残る。口径9.3cm、器高5.85cm。

土坑SK12

弥生土器

高杯（590）

小型の高杯で、椀形の杯部をもつ。内外面ともナデで仕上げる。脚柱部は中実で、裾部を欠失する。口径11.05cm。

土坑SK14

弥生土器

鉢（593）

小型の椀形の鉢で、底部はやや突出する。内面はナデで仕上げ、外表面は不明である。口径9.65cm、器高4.05cm、底径2.2cm。

金属製品

釘類（図版73 M2～M6）

図化したものは5本である。M2、M5は頭部に作り出しのない切釘である。M3、M4は頭部が基部より曲がった形状の角かい折である。M6は頭部を作り出した形状の巻頭釘である。

札（図版73 M7）

甲冑の札である。札足部以外は完存している。札の孔が三行であることから三目札である。通常の三目札は上の7孔の威（おどし）の孔と下段の12孔の横縫（よこぬい）の孔が穿たれている。M7は下段の横縫の孔のうち上の2段目までは明瞭に残っていたが、3段目は腐食のためX線写真でかろうじて確認できる程度であり、保存処理の際あえて復元はしなかった。4段目の孔は完全に欠損している。M7は単独で出土しているために、どの部分の札であったかは断定には至らなかった。

銭貨（図版73 M8～M12）

銭貨のうち、図化できたのは5枚である。本邦銭と渡来銭があり、渡来銭は北宋銭である。

神功開寶（M8）、咸平元寶（M9）、寛永通寶（M10、M11、M12）が出土している。

神功開寶は1/4強しか残存していない。咸平元寶（初鋤年998年、北宋）は、暗褐色のシルト層より出土した。寛永通寶は寛永13年（1636）から天明元年（1781）までの145年の間に渡って各地で鋤造された。鋤造期間は一般に3期に大別されている。1期は寛永13年（1636）～万治2年（1659）、2期は寛文8年（1668）～天和3年（1683）、3期は元禄10年（1697）～延享4年（1747）である。1期に鋤造されたものを古寛永、2期に鋤造されたものを背面に「文」の字があることから文銭、3期のものを新寛永とそれぞれ称している。M10は、古寛永に分類される。その他は新寛永に分類される。

第5節 E 区

SK02

土師器杯 A (632)

平らな底部に直線的に斜めに立ち上がる体部をもつ。底部と体部の境は明瞭である。口縁部はわずかに外反し、口縁部内面に段をもつ。

SK05

須恵器

杯 B 蓋 (636・637)

天井部は平坦で、口縁部へは屈曲して続く。天井部はヘラ切り後、軽くヘラで整える。

杯 B (638)

口径17.3cm、器高6.2cm。高台は底部の周縁に付けられ、体部は高台脇から立ち上がる。底部外面はヘラ削り調整が行なわれており、「郷」の文字が墨書されている（図版81）。灰白色を呈し、調整は比較的丁寧であるが、大粒の石も含み、砂粒がやや多い。

杯 A (641)

底部はヘラ切り後、軽くナデ調整を施すのみである。歪みにより中央部が内側に盛り上がる。胎土は精良である。

壺 (640)

体部下半部のみで上半部を欠く。器種は不明であるが、底部全面に鶯色の自然釉が降下しているので、口の広い短頸壺のような器形の可能性がある。体部に叩きの痕跡を残す。高台の端部は丸く仕上げている。

土師器

杯 A (633・635)

633は平らな底部から直線的に立ち上がる体部をもつ。口縁端部内面は巻き込み風に肥厚させる。口縁部外面は横ナデ、体部下半はヘラ削りが行なわれている。底部外面は手持ちのヘラ削りによって調整されている。内面は摩滅が著しいが、コテ状工具の使用痕らしき条線が見える。635は口縁端部には小さな段はあるが、肥厚は認められない。体部外面はヘラ磨きが行なわれ、底部外面はヘラ削りが行なわれている。

杯 (634)

口縁部外面を横ナデし、わずかに外反させる。底部外面全体に手持ちのヘラ削りを行なう。口縁端部は丸く納める。

第6節 F区

SD01・02

土師器皿（642・643）や須恵器椀底部（644）・須恵器鉢底部（645）が出土している。土師器皿は体部が斜めに立ち上がり、端部を上方に摘み上げる。底部はナデ調整である。643は底部と体部の境は不明瞭で、端部は丸く納める。

P 17・P 11

P 17からは土師器甕2個体（646・647）が出土している。体部の最大径は口縁よりわずかに小さい。647は底部まで残存する。体部外面を細かいハケ目調整を行なった後、底部周辺を粗いハケで調整する。外面全体に煤が付着する。646は器壁は厚く、砂粒を多く含む。上半は縦方向のハケ目調整、下半は横ないし斜め方向のハケ目調整を施す。また、P 11からは完形の土師器杯（648）が出土している。底部は平らで、体部は斜めに直線的に立ち上がる。底部はヘラ切り不調整である。底部内面には凹凸がある。

第3表 墨書き土器・刻書き土器一覧表

墨書き土器

報告 No.	記 文	備 考	出土地区遺構
10	□	方向不詳	
12	上		
17	□宅□		
29	□		
30	□	記号	
31		記号	
32	杏	大山	
33	尾		
34	□□ □	大山を記号化したものか	
35	大山		
36	峰	峰	
37	大山□		
38	□□		
39	峰		
78	□□		
79	□□		
80	□	方向不詳	A区 SR01
81		文字ではない	
82	[志カ] □		
89		記号	
100	□	ネ、木ヘンの字	
101	□		
103	郡		
109	田中寺		
110	[栗カ] □女		
111	□□		
112	□		
126	□□		
134	□		
163	寺		
199	[] 万		
366	井	記号	
370	○	記号か	A区 SE01
371	大八		
373		記号	
379	[大福] □□		A区 SE02 (SK13)
383	[家カ] □□		
522	吉		C区 SD02
638	[郷カ] □	郷	E区 SK05

刻書き土器

報告 No.	記 文	備 考	出土地区遺構
214	大山□	3文字目は「人」の文字が二つ重なっている様に見えるが判読できない	A区 SR01
393	[庚カ] □	刻書	A区 SK01 (SR01)

第7節 近世

B区

SD01

染付磁器

皿 (649・650)

649は高台は浅く削り出し、底部の器壁は非常に厚い。内面に呉須で草花文を描く。肥前系波佐見産の製品で18世紀前半代の時期が考えられる。650は高台は低く細い。底部の器壁は比較的厚い。底部内面に呉須で草花文を描く。高台脇付に砂が付着する。肥前系初期伊万里で17世紀前半代の所産である。

包含層

無釉陶器

甕 (655)

口縁部は断面橢円形状に肥厚し、内外面ともナデ調整を施す。備前焼IV期相当で、15世紀代に比定される。

蓋 (661)

型作り成形で、内面に布目压痕が見られる。上面に茎状のつまみが見られ、穿孔が1箇所認められる。煎茶用の急須の蓋であろう。

施釉陶器

瓶 (652)

平底で体部は直立する。外面に鉄釉を施釉し、茶褐色に発色する。体部外面の下位にスタンプが見られる。近代以降の時期が考えられる。

秉燭 (653)

体部は中空で大きく外反し、口縁部は外方にひらく。口縁部内面に凸帯が1条廻る。口縁部内面から外面は透明釉を施釉し、内面及び底部外面は露胎である。底部外面には糸切り痕が残る。京・信楽系の製品で19世紀前半以降の時期が与えられる。

蓋 (654)

落とし蓋で、体部はほぼ直立し、口縁部は外方に水平に折り曲げる。上面の中央部につまみを貼り付ける。外面は灰釉を施釉し、内面は露胎である。京焼系で19世紀前半以降の時期が考えられる。

椀 (663)

高台は比較的細く高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。外面にナマコ釉を施釉する。

陶胎染付

蓋 (651)

体部は僅かに内彎し、つまみは比較的高く、「ハ」の字状に外方にひらく。外面に呉須で文字文を描く。碗蓋と考えられる。

白磁

碗 (658)

底部の器壁が非常に厚く、内外面とも透明釉を施釉する。

皿 (659)

底部の器壁は非常に厚く、高台は比較的幅が広く低い。高台裏をト巾状に削り残す。内外面とも透明釉を施釉するが、外面の高台脇以下は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の皿で18世紀前半代に比定さ

れる。

青磁

蓋 (668)

つまみは比較的幅が広く低い。体部は内彎し、器壁は比較的厚い。外面は青磁釉を施釉し、内面は呉須で斜格子文、コンニャク印判で五弁蓮花文などを描く。肥前系の碗蓋で18世紀後半代の製品と考えられる。

染付磁器

小碗 (664)

高台は細く低い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁部は僅かに外反する。外面には呉須で草花文を描き、内面は無文である。19世紀前半以降の肥前系磁器の可能性が考えられる。

角皿 (665)

型作り成形で、平面形状は菱形を呈する。内面に馬文および唐草文が、外面には菱形文がそれぞれ描かれる。

蓋 (666)

つまみは比較的細く高く、体部は僅かに内彎する。外面は巴文、内面は界線を1条それぞれ描く。

徳利 (667)

平底で体部は僅かに内彎してほぼ直上に延びる。外面は鮮やかな呉須で山水樓閣文を描く。

土製品

面子 (662)

型作り成形で、上面に型押して木ノ葉状文を施文する。内外面ともナデ調整を施す。彩色は全て剥落している。

(注1) これらの土器はA類が煎熬用の土器の可能性があるが、B1類・B2類が焼塩用の土器である。B1類と同様の土器は明石市赤根川遺跡や赤穂市堂山遺跡などから出土しており、B2類と同様のものは家島群島から出土している。B1類とB2類が混じり、B1類の中にも胎土の違いがあるので、播磨灘沿岸部の複数の製塩遺跡から焼塩までの加工を行った製品として持ち込まれた可能性が高い。

(注2) 京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』昭和55年度
1981年

(注3) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『神出窯跡群』1998年

(注4) 明石市教育委員会『平成10年度明石市文化財年報』2000年

(注5) 平成15年度兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査

(注6) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『小犬丸遺跡I』1987年

(注7) 今里幾次「龍野市小犬丸遺跡の古瓦」『播磨古瓦の研究』1995年

(注8) 兵庫県教育委員会『兵庫津遺跡II』2004年

(注9) 横田賢次郎・森田 勉 「大宰府出土の中国陶磁器について」『九州歴史資料館論集』4 1978

(注10) 大橋康二 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社 1993年

第5章 豆腐町遺跡出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

姫路市に所在する豆腐町遺跡では、平成10年度に行われた第2次調査（A区）において、奈良時代中期から末期とされる時期の井戸や柱穴などの遺構が検出され、また旧河道跡とされる範囲から多量の土器が出土している。中でも多量の墨書土器の出土や製塩土器の出土などから、官衙的な性格とともに厨房兼工房の職能も担っていたと考えられており、播磨国府の実態に迫る糸口になる遺跡として注目された。

本報告では、遺跡の性格に係わる重要な遺物の一つである製塩土器を対象にして、その材質（胎土）の特性を明らかにし、当時の製塩に係わる基礎資料を作成する。また、検出された井戸に使用されていた木材の樹種同定も行い、当時の植物利用に関する情報を得る。

第1節 製塩土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

矢作健二・石岡智武

1. 試料

試料は、豆腐町遺跡A区旧河道SR01で出土した製塩土器片10点である。時期は奈良時代中期～末期とされている。試料には、サンプル1～サンプル10までの試料名が付けられている。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。土師器のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成の土器の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報が多い。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。さらに、薄片観察法の中でも、松田ほか（1999）が示した仕様に従ったデータを呈示する。これは、胎土中の碎屑物の情報をより多く獲得し、胎土の特徴把握や分類を可能ならしめることを目的としている。以下に手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

結果を第4表、第11～13図に示す。各試料の胎土中に含まれる砂粒の種類構成は、鉱物片では、いず

れの試料も石英、カリ長石、斜長石が比較的多く、試料によっては微量の角閃石や黒雲母などを含んでいる。岩石片では、試料によって主体的に含まれる種類の違いが明瞭である。10点の試料のうち、サンプル1～4、7、9、10の7点は花崗岩を主体とし、サンプル5は流紋岩と花崗岩、サンプル6と8は凝灰岩と流紋岩をそれぞれ主体とする。さらにサンプル8は、微化石の植物珪酸体を多量に含むことも特徴となる。また、花崗岩を主体とする試料の中でもサンプル2の花崗岩の大部分はグラノファイアであることが指摘される。

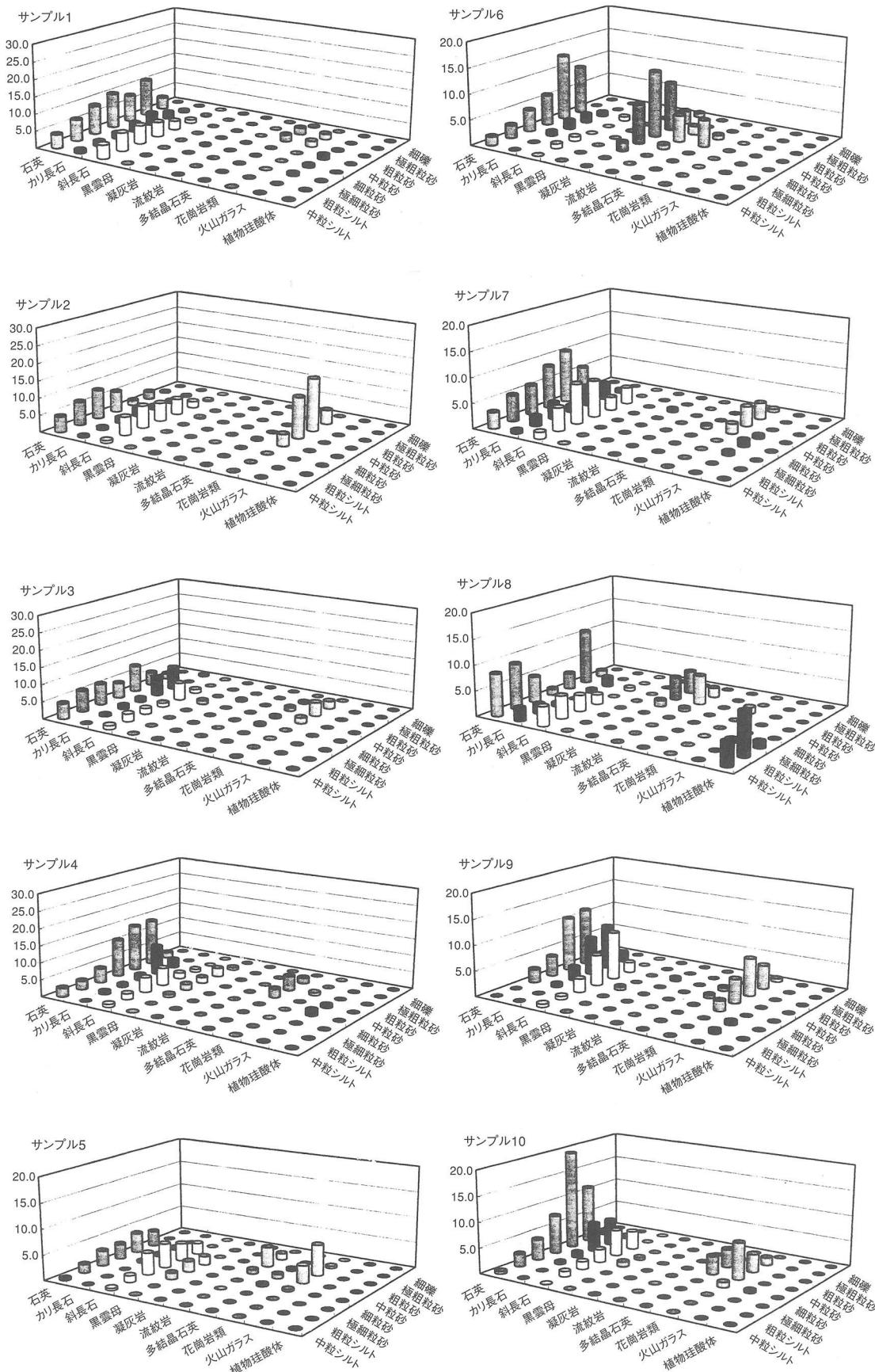
一方、砂粒の粒径組成をみると、花崗岩を主体とする7点は、明瞭なピークを持たないサンプル1、2、7と粗粒砂と中粒砂に明瞭なピークのあるサンプル3、4、9、10の2つのグループに分かれる。流紋岩と花崗岩を主体とするサンプル5の粒径組成は明瞭なピークがなく、凝灰岩と流紋岩を主体とするサンプル6は粗粒砂と中粒砂に明瞭なピークがある。また、凝灰岩と流紋岩および多量の植物珪酸体を含むサンプル8は、粗粒砂とシルト径の2つのピークを示す。

第4表 薄片観察結果(1)

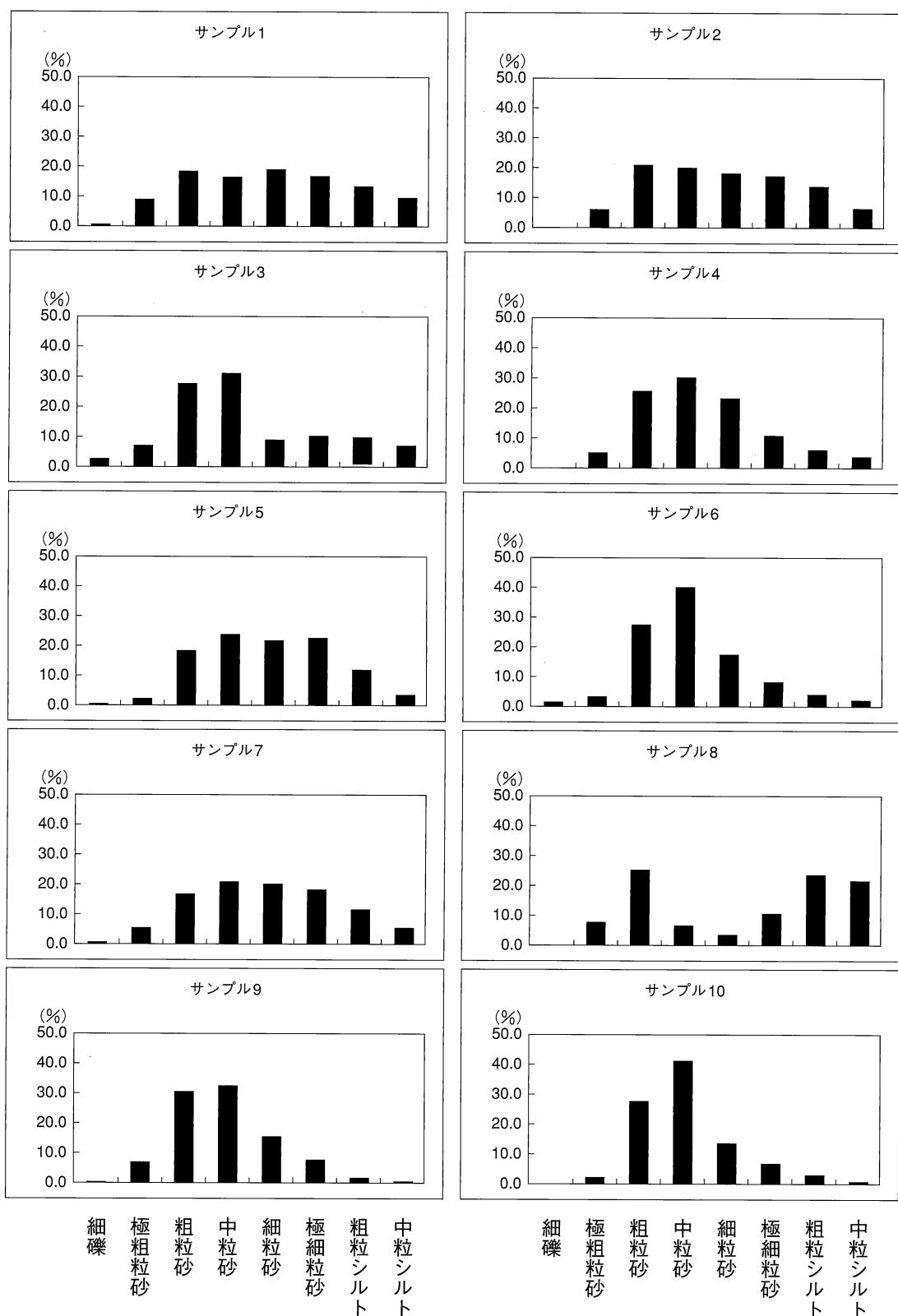
サンプル	砂粒区分	砂粒の種類構成																		合計							
		鉱物片									岩石片																
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	閃綠岩	はんれい岩	ホルンフェルス	ミロナイト	泥質片岩	塩基性片岩	塩基性変質岩	粘土塊	火山ガラス	珪藻
1	砂	細礫														1											1
		極粗粒砂	11	2	1											6	5									25	
		粗粒砂	33	6	3											6	5									54	
		中粒砂	24	11	8		1												1							4	49
		細粒砂	31	8	13		1								1											2	56
		極細粒砂	26	5	16																					2	49
		粗粒シルト	19	4	16																						39
		中粒シルト	12	3	12																						27
		基質																								333	
		孔隙																								31	
2	砂	細礫																								0	
		極粗粒砂	1	1	1											11										14	
		粗粒砂	6	2	5											40										53	
		中粒砂	4	3	12									1			31									51	
		細粒砂	16	6	14											1	9									46	
		極細粒砂	22	4	17									1												44	
		粗粒シルト	18	2	14									1												35	
		中粒シルト	12	1	2																					15	
		基質	※花崗岩類の大部分はグラノファイア。																		331						
		孔隙																							20		
3	砂	細礫	1																1	2						4	
		極粗粒砂	3													1	4									12	
		粗粒砂	7	12	2										1	2	7	1	5	7	4					48	
		中粒砂	14	10	9		1	1	2						1	3	5	5	3	5						54	
		細粒砂	8	2	2									1		1				1						15	
		極細粒砂	11	2	3	1																				17	
		粗粒シルト	11	1	4																					16	
		中粒シルト	8		2									1												11	
		基質																							337		
		孔隙																							17		
4	砂	細礫																								0	
		極粗粒砂	2												1		2									5	
		粗粒砂	16	3	1									3			5	1								29	
		中粒砂	16	10	2									2			3				1					34	
		細粒砂	13	2	6	1								2							2					26	
		極細粒砂	5	1	5									1												12	
		粗粒シルト	3	1	2																					6	
		中粒シルト	3		1																					4	
		基質																								196	
		孔隙																								20	
5	砂	細礫																								0	
		極粗粒砂														3		1								4	
		粗粒砂	7	1	5	3										9	1	14	1							41	
		中粒砂	9	1	8	18								4			2	2	8							53	
		細粒砂	7	1	11	22								5	1			1	1							49	
		極細粒砂	7		10	29								3	2											51	
		粗粒シルト	4		3	18								1												26	
		中粒シルト	1		1	4																				6	
		基質																								297	
		孔隙																								29	

第4表 薄片観察結果(2)

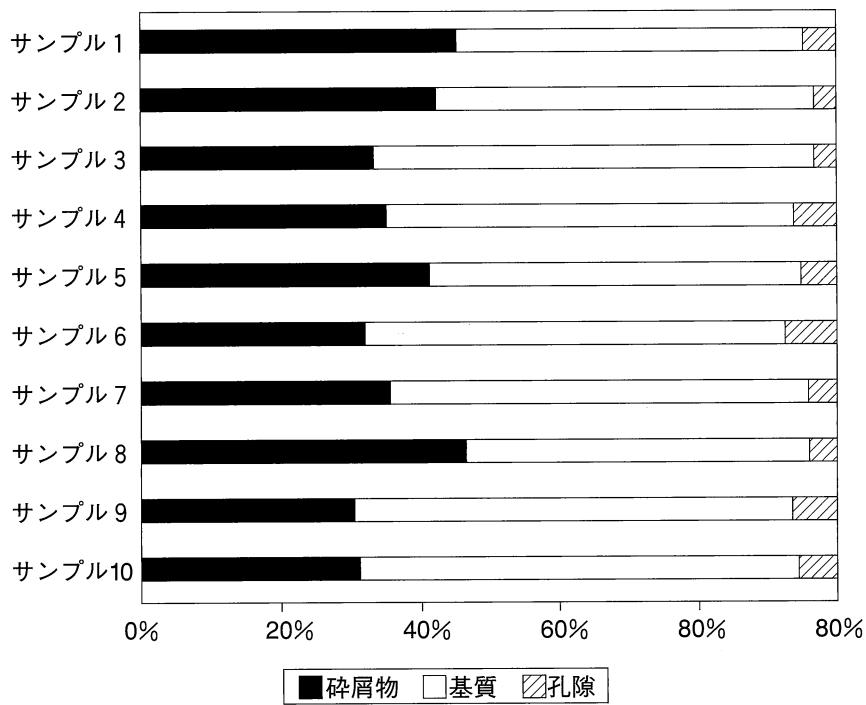
サンプル	砂粒区分	砂粒の種類構成																合計									
		鉱物片								岩石片																	
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	ざくろ石	緑簾石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	閃綠岩	はんれい岩	ホルンフェルス	ミロナイト	泥質片岩	塙基性片岩	粘土塊	火山ガラス	珪藻	植物珪酸体
6	砂	細礫													1												1
		極粗粒砂													3												3
		粗粒砂	11	1	1							3	1	11	2	1										31	
		中粒砂	15	2							1		15	6	6		1									46	
		細粒砂	7	2											9	1										19	
		極細粒砂	5	1	1										2											9	
		粗粒シルト	3		1																					4	
		中粒シルト	2																							2	
		基質	※凝灰岩は流紋岩質で溶結凝灰岩様(相生層群)。																	218					27		
7	砂	孔隙																							27		
		細礫															1									1	
		極粗粒砂	2	1												5										8	
		粗粒砂	9	5	5										1		6									26	
		中粒砂	16	6	4		1								1	3									32		
		細粒砂	13	2	11	1	1					1													31		
		極細粒砂	9	5	12		1																		28		
		粗粒シルト	8	3	7																				18		
		中粒シルト	5	1	2																				8		
8	砂	基質	※凝灰岩は流紋岩質で溶結凝灰岩様(相生層群)。																	258					258		
		孔隙																		18					18		
		細礫																								0	
		極粗粒砂	2												7	3										12	
		粗粒砂	17	3	1										7	9	2									40	
		中粒砂	5	1		1									2	1									10		
		細粒砂	2		3																				5		
		極細粒砂	8	1	5															1	2				17		
		粗粒シルト	14	3	7															1	13				38		
9	砂	中粒シルト	13	4	6															4	7				34		
		基質	※凝灰岩は流紋岩質で溶結凝灰岩様(相生層群)。																	166					166		
		孔隙																		14					14		
		細礫															1									1	
		極粗粒砂	1	3												7										11	
		粗粒砂	17	13	3										1		11									47	
		中粒砂	16	11	14										1		7									50	
		細粒砂	6	4	9	1					1						3									24	
		極細粒砂	4	1	4	1					1															12	
10	砂	粗粒シルト			1						1															3	
		中粒シルト			1																					1	
		基質	※粘土塊は碎屑物を含まないカオリン鉱物質(またはパイライト質)な塊り。																	309					309		
		孔隙																		31					31		
		細礫																								0	
		極粗粒砂	1	1												3										5	
		粗粒砂	22	10	7										7	7		1								56	
		中粒砂	38	11	10						1				7	14		2								83	
		細粒砂	15	2	5					1	2				2											28	
		極細粒砂	8	1	3					1	2															15	
11	砂	粗粒シルト	5		2																					7	
		中粒シルト	1																							1	
		基質																		394					394		
		孔隙																		36					36		



第11図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



第12図 胎土中の砂の粒径組成



第13図 孔隙・砂粒・基質の割合

4. 考察

姫路市の位置する播磨平野の背後に広がる地質については、猪木（1981）や日本の地質「近畿地方」編集委員会編（1987）などにより概観することができる。背後の山地に広く分布する地質は、相生層群と呼ばれる流紋岩質やデイサイト質の溶岩および火碎岩（凝灰岩）からなる地質である。また、相生層群が広がる中に白亜紀～古第三紀に貫入した花崗岩類の岩体が点在する。したがって、播磨平野を構成する碎屑物には、相生層群に由来する流紋岩や凝灰岩の岩石片が比較的多く含まれていると考えられる。したがって、今回の試料の中で、胎土中に凝灰岩および流紋岩の認められたサンプル 6 と 8 は、播磨平野の地質学的背景と一致する。すなわち、播磨平野という範囲での在地の土器と言うことができる。これは、流紋岩と花崗岩を含むサンプル 5 についても同様に考えることができる。

これらに対して、凝灰岩および流紋岩がほとんど含まれずに花崗岩を主体とする 7 点の試料は、播磨平野の地質学的背景と異質であるといつてよい。その岩石片の構成から、花崗岩類が広く分布する地質学的背景を持った地域との関わりが考えられる。花崗岩類を背景とする地域は近畿・中国地方に広く分布するために、現時点で関わりのある具体的な地域名は不明であるが、近接地で言えば神戸や大阪平野あるいは岡山平野なども想定される。

今後は、古代の製塩土器にかかわる事情も考慮した上で関係する地域の試料も分析するなど、継続して胎土の特徴を捉えることができれば、製塩事情の解析に有意な資料の作成が期待される。

第2節 木製品の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦

1. 試料

試料は、A-1区出土の井戸SE01・SE02 (SK13) の構築材 6 点である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を第 5 表に示す。木材は、針葉樹 2 種類（スギ・ヒノキ科）と広葉樹 2 種類（クリ近似種・ツブラジイ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

- ・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。放射組織の一部に樹脂の充填が認められる。分野壁孔はスギ型、ヒノキ型、トウヒ型のいずれかであるが、保存が悪く形態の詳細は不明。放射組織は単列、1-15 細胞高。

- ・クリ近似種 (*cf. Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

試料は晩材部のみで早材部は端部に僅かに認められるのみ。年輪界は含まれていない。早材部から晩材部にかけて道管径が大きく変化することから環孔材と推定される。晩材部の小道管は、木口面で多角形となり、多くが集合して漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。複合放射組織や集合放射組織は認められない。

晩材部道管の配列は、ブナ科のクリ、コナラ節、シイノキ属等に見られる特徴によく似ている。複合放射組織や集合放射組織が認められることから、クリかシイノキ属のスダジイの可能性が高い。現生標本との比較では、小道管の道管配列がスダジイよりもクリに似ていることからクリ近似種とした。

- ・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1-2 個幅で放射方向に配列する。孔圈部は 3-4 列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高のものと、集合～複合放射組織とがある。

第5表 樹種同定結果

地区	遺構	時期	番号	位置	樹種
A-1区	SE01	8世紀中期	W7	横桟(南の下)	ツブラジイ
			W8	横板(東)6段目	スギ
			W3	隅柱(北東)	クリ近似種
A-1区	SE02 (SK13)	8世紀中期	W19	横桟(東)下	ヒノキ科
			W22	縦板(南)	スギ
			W14	隅柱(北西)	スギ

4. 考察

SE02は縦板組隅柱横桟どめの井戸、SE01は横板組隅柱横桟どめの井戸とされる。出土した部材は、SE02が全て針葉樹材で横桟がヒノキ科、縦板と隅柱がスギであった。一方、SE01では針葉樹材と広葉樹材が混在しており、横桟がツブラジイ、横板がスギ、隅柱がクリ近似種であった。

確認された木材は、針葉樹のスギとヒノキ科が木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。また、ヒノキ科には耐水性の高い種類が多い。広葉樹のクリとツブラジイは、比較的重硬で強度が高く、加工はやや困難な部類に入る。なお、クリについては、耐朽性も高い。

SE01とSE02の種類構成を比較すると、板材（縦板・横板）にスギが利用されていることは共通するが、他の部材では種類構成が異なる。SE02では、板材も含めて加工性の高い針葉樹材が利用されている。一方、SE01では、加工性はやや低いが強度の高い木材が利用されている。

兵庫県内では、三田市川除・藤ノ木遺跡や加古川市美乃利遺跡で平安時代の井戸部材について樹種同定を実施した例がある（島地・林、1992；伊東、1997）。各遺跡の樹種同定結果を第6表に示す。川除・藤ノ木遺跡では、平安時代中期から鎌倉時代にかけての井戸9基から出土した部材について樹種同定が実施されている。確認された樹種は、針葉樹が6種類（複維管束亜属・モミ・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・カヤ）、広葉樹2種類（クリ・ツバキ）であるが、針葉樹類が多く、広葉樹は各1点出土したのみである。

利用されている種類数は、調査試料数の少ない井戸では1種類のみの場合があるが、調査試料数が多い場合にはほぼ複数種類が利用されている。種類構成をみると、平安時代中期から後期にかけての井戸ではモミ、平安時代末の井戸ではヒノキがそれぞれ多く利用される傾向がある。なお、部位による樹種の違いは明確ではない。一方、美乃利遺跡では、平安時代後期の井戸1基の部材にスギ、ヒノキ、コウヤマキの3種類が認められ、川除・藤ノ木遺跡と同様に複数種類で構成される。ヒノキの利用が多く、次いでスギが利用される。コウヤマキは隅柱に2点認められたのみである。部位別に見ると、縦板ではヒノキと共にスギが利用されるが、横桟は全てヒノキである。また、隅柱はヒノキとコウヤマキが各2点認められている。

今回の井戸材は、川除・藤ノ木遺跡や美乃利遺跡よりも時期が古く、地域もやや離れているため、厳密な比較は困難であるが、SE02の針葉樹のみで構成される結果は、これまでの井戸材の樹種同定結果と傾向が似ている。一方、SE01の結果は、広葉樹が多い点ではやや傾向が異なる。しかし、いずれも樹種を明らかにしたのは3点のみであり、井戸全体の部材数に比較すれば少ない。そのため、今後残りの部材についても樹種を明らかにした上で種類構成の比較・検討を行う必要がある。

引用文献

- 猪木幸男,1981,20万分の1地質図幅「姫路」.地質調査所.
- 伊東隆夫,1997,美乃利遺跡から出土した木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第165冊 美乃利遺跡 -本文編- -一級河川別府川河川改良工事に伴う発掘調査報告書-」,兵庫県教育委員会,339-344.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質6 近畿地方.共立出版,297p.
- 島地 謙・林 昭三,1992,川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第104冊 三田市 川除・藤ノ木遺跡 -武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書- 第2分冊」,兵庫県教育委員会,771-786

第6表 川除・藤ノ木遺跡および美乃利遺跡の井戸材の樹種

遺跡・遺構・時期・部位			樹種	複維管束亞属	モミ属	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	カヤ	クリ	ツバキ	不明	合計
川除・藤ノ木遺跡	SE01	平安後期～鎌倉	隅柱		1		1		1				3
			横桟							1			1
			縦板		1				1				2
	SE02	鎌倉	隅柱	1	2			2					5
			縦板		1			1					2
	SE03	平安後期	隅柱		2								2
			横桟		2						1		3
			縦板		1								1
	SE06	平安末	隅柱		1			1					2
			縦板					2					2
	SE08	平安後期	隅柱					1					1
			縦板		1								1
	SE09	平安中期	隅柱		1								1
			横桟					4					4
			縦板		10	9	4						23
	SE10	平安末	支柱					10					10
			横桟			1		11					12
			縦板		11			18					29
	SE11	平安末	横桟					3					3
	SE12	平安末	隅柱					2					2
			横桟					2					2
			縦板		1	1	5						7
美乃利遺跡	SE01	平安後期	隅柱				2	2					4
			横桟					16					16
			縦板			24	48				2	74	
			水溜					3					3
合 計					1	35	35	3	135	2	1	1	215

第6章 総括

第1節 古代（8世紀）の遺構と遺物

I 遺物

1. 遺物の年代について

A・B区出土遺物

8世紀代の遺構として、A区ではSR01、SE01、SE02（SK13）、SK群（03・12・11・12・19・21～23）、P（20・28・34）、B区ではSD05が該当する。

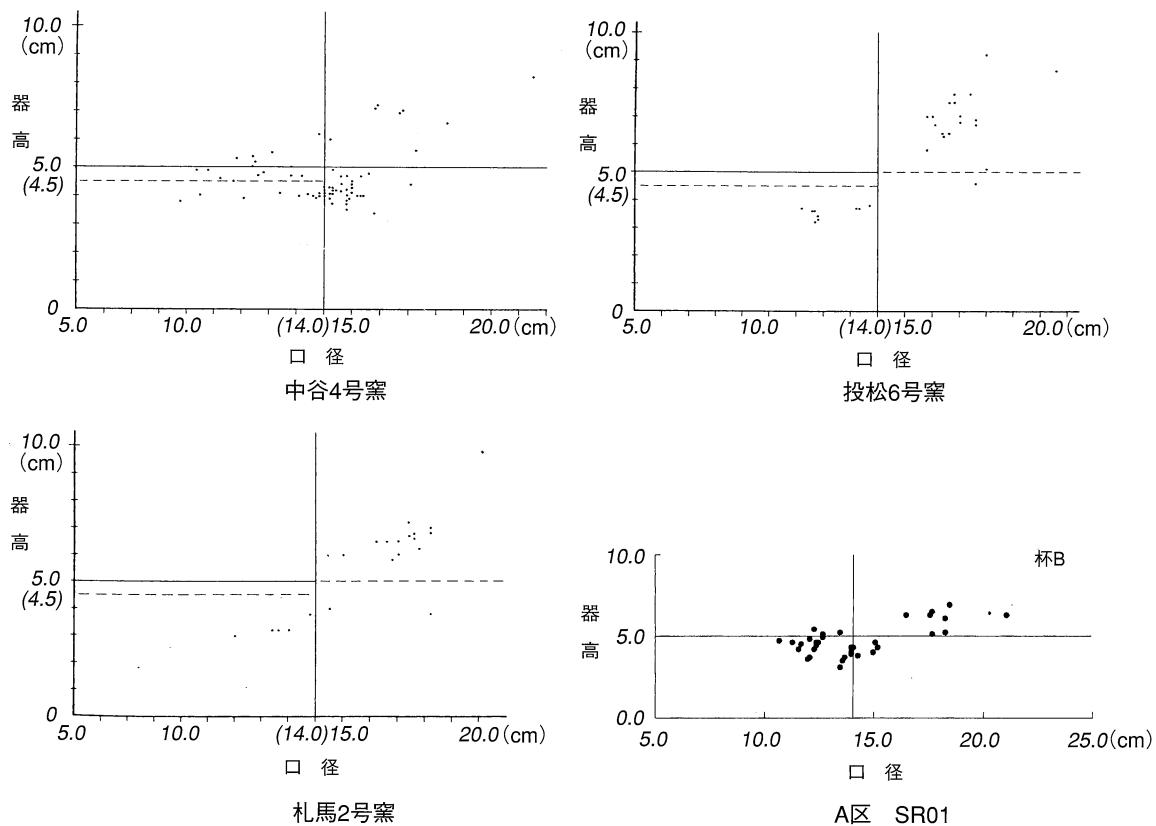
須恵器

杯B蓋の形態には、頂部が丸い笠形で縁部の屈曲のないB形態と、頂部が平らで縁部が屈曲するA形態がある。形態としては前者のほうが古く、次第にA形態がB形態にとってかわって主流となる。両者の交替の時期については、播磨においては8世紀の中頃と考えている。豆腐町遺跡A・B区の蓋をみると、頂部は扁平な笠形を呈し、ヘラ削りが行なわれ、また、縁部に段がなく、8世紀前半の特徴を示す。一方、杯B身についてみると、平城宮では8世紀前半の杯Bは、5種の口径に分かれ、そのそれぞれに器高の高い一群と低い一群があるが、時代が下るにつれて、器高の高い一群は姿を消し、法量の縮小化が指摘されている。これに対して、播磨においては時代の変化とともに口径の縮小化はあるが、器高は平城宮とは逆で、後半期は次第に高い一群が主体となる。第14図はSR01出土の杯Bの口径と器高の法量分布を示したものである。計測数字は実測可能なものに限ったもので、あくまでも時期判断の目安資料の1つにすぎないが、比較のため、中谷4号窯（平城宮土器Ⅲ古段階）（文献1）・札馬2号窯（平城宮土器Ⅲ～Ⅳ段階）（文献2）・投松6号窯（平城宮土器Ⅳ～Ⅴ段階）（文献3）の杯Bの法量分布図を掲載した。同時期の土器であっても生産地と消費地の法量分布が必ずしも一致するとは限らないし、また、SR01出土土器の年代幅の有無の問題もあるが、法量分布の比較では中谷4号窯と札馬2号窯との間の中間的な分布を示している。（註1）

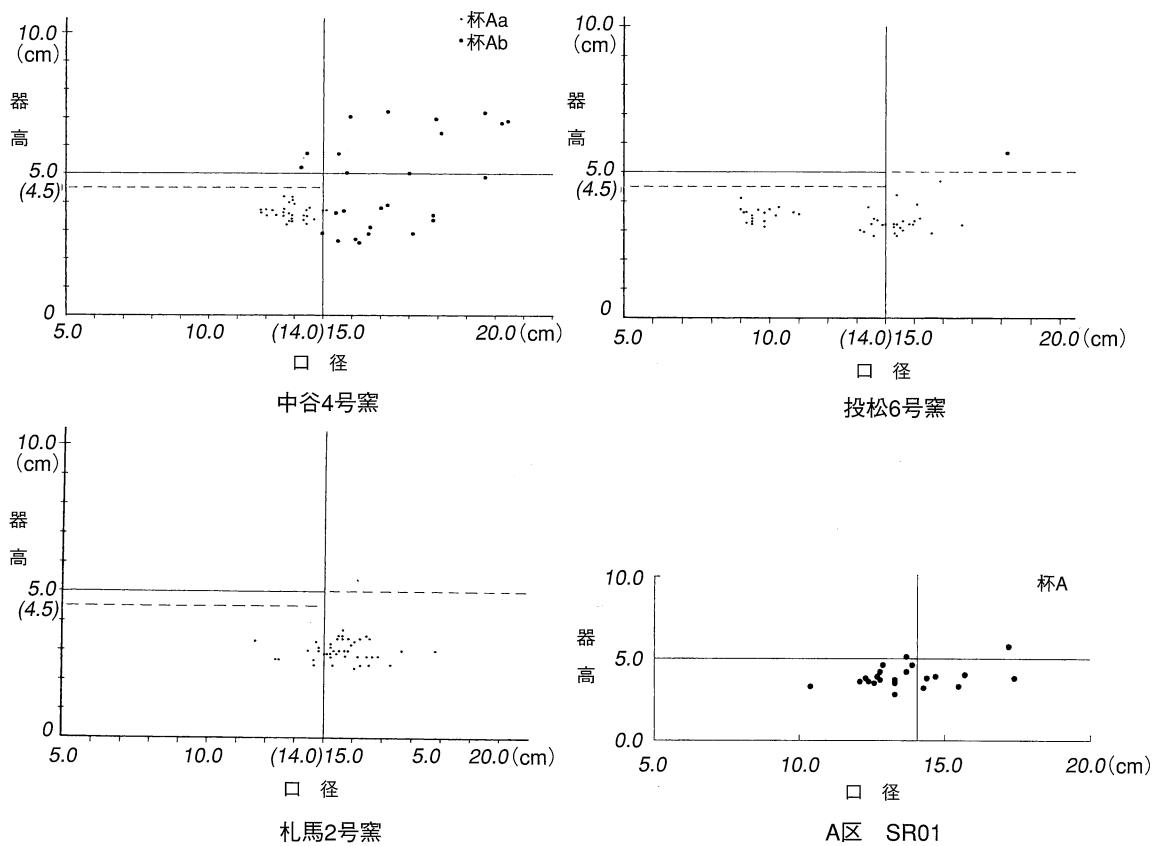
杯Aについては、8世紀前半では口径と底径の差が小さく、断面が箱形の形状を呈するが、8世紀後半期以降になると、口径と底径の差が大きくなり、体部は斜めに大きく開くようになる。A・B区出土の杯Aは、体部が斜めに開き気味の傾向はあるが、全体としては口径と底径の差は小さく箱形の形状を保持している。第15図は杯Aの法量分布図である。比較のため杯Bと同じく中谷4号窯、札馬2号窯・投松6号窯の法量分布図を掲載した。この比較表においても杯Bと同じく中谷4号窯と札馬2号窯との間の中間的な分布を示している。

杯Lは複数のタイプがあり、それぞれのタイプが時期差を示すのか产地の違いを示すのかあるいは型式差を示すのか、現段階では判断するのが難しい。ただ、いずれもヘラ磨きではなく、ロクロ削りも底部周囲に限られており、前述の中谷4号窯出土杯Lと比して調整技法の省略が行なわれており、中谷4号窯期より新しい要素をもつ。また、この中でも117・122・123については形態・調整技法ともに他の稜椀類と異にしており、若干時期的に下る可能性がある。また、117は8世紀後半の中谷1号窯の製品と形態・胎土ともに酷似する。

壺Kの存続年代は、平城宮では平城宮土器Ⅳ段階（定点年代760年）までとされている。播磨地方では平城宮土器Ⅲ古段階の中谷4号窯段階までは確実に存続するが、それ以降は存在が希薄で、8世紀後



第14図 A区SR01出土須恵器杯B法量分布比較図（文献3）



第15図 A区SR01出土須恵器杯A法量分布比較図（文献3）

期の投松 6 号窯段階の須恵器窯では生産は行なわれていないので、8世紀中葉以降は消滅する器種と考えてよい。当遺跡では漆工房関係の遺物が多く出土しており、壺Kも漆容器として使用されているので、当遺跡の活動中心期の確実な資料である。

このほか、鉢Aは8世紀中葉以降になると小さな平底になり、ヘラ磨きがなくなる。当遺跡の鉢Aは尖底で全体にヘラ磨きを施しているので、中期以前の様相を示す。また、平城宮における小型の壺類の生産の最盛期は平城宮土器I・II段階であり、播磨地方においても、8世紀後葉の窯跡には見当たらぬ。SR01からは小型の壺類の出土点数も少くないが、この点においても中葉以前の様相を示している。

土師器

播磨地方の土師器編年は確立していないので、実年代について言及するまでには至らないが、年代の参考となる杯類の特徴を以下列挙する。

1. 杯類については器面の残存状況が悪く、暗文の有無については確認できないものが多いが、何点かは暗文が残存しているものがある。確認できた暗文は1段の斜め放射状暗文と連弧状暗文の組み合わせである。平城宮土器編年では杯A・Bの暗文は2段の斜め放射状暗文+連弧状暗文（平城宮土器I段階）から1段の斜め放射状暗文+連弧状暗文（平城宮土器II段階）の順に変化し、平城宮土器III新段階では無文化が進むとされる。この平城宮編年を参考にすれば、平城宮土器III段階に中心年代を求められそうである。

2. 杯類の成形方法については、暗文と同様に器面の残存状況が悪いために、観察ができないものが多いが、残存状態のよいものを観察すると、木ノ葉手法を用いナデのみで仕上げるa手法と底部外面を削るb手法が認められ、外面全体を削るc手法は皆無である。底部外面に木ノ葉痕を残すものも残存する。

3. 杯Aの口縁部形態には、端部を内側に巻き込み肥厚させるA形態のものと肥厚が小さく杯Cとの区別が難しいB形態の2種ある。杯Cについては、丸底で確実に杯Cに分類できるものと197・198のように平底で杯Aと区別のつきにくいものがある。数は少ない。

C～E 区出土遺物

C 区出土遺物

8世紀代の遺構としては、P14、P17、SD02下層が該当する。

須恵器杯B蓋は頂部のヘラ削りではなく、ナデ調整である。また、平らな天井部から屈曲して縁部に続く（533・503）。杯Bは高台が底部の周縁に付き、体部が高台横から直ちに立ち上がる（504・514）や口径に比して器高の高いもの（515）がある。杯Aは体部と底部の境は明瞭で、口径と底径の差が大きく、体部は斜めに大きく開く特徴をもつ。また、土師器杯もSR01出土の杯Aや杯Cのような底部に丸みをもつものは少なく、全体に須恵器と同じような箱形の形状を呈し、口縁端部の巻き込みも形骸化している。

以上の通り、C区出土遺物は磨きを施している須恵器III Bや漆付着の土師器杯などA・B区出土の遺物群と共に古いたる要素をもつ土器を含むが、土器群全体としてはA・B区の土器群よりも後出の様相を呈している。

D 区出土遺物

8世紀代の遺構としては、S26、SK01、SK08、SD02の遺構が該当する。

須恵器の杯B蓋は頂部のヘラ削りではなく、ナデ調整で、平らな天井部から屈曲して縁部に続く。また、

須恵器杯Jや杯Dは磨きやロクロ削りを行なっているが、形態からみて出現初期に遡るタイプではない。土師器杯はヘラ磨きを行なっている点や口縁端部に段を有する点など古い要素を残しているが、全体的にはC区同様、A・B区の土器群よりも後出の様相を呈している。

E区出土遺物

8世紀代の遺構としては、SK02、SK05が該当する。

須恵器の杯B蓋は、平らな天井部から屈曲して縁部に続くa形態である。杯Bは口径に比して器高が高く、体部がやや斜めに立ち上がり、杯B形態としては新しい傾向をもつ。杯Aは体部と底部の境は明瞭で、口径と底径の差がそれほど大きくなく、体部の開きはあまりない。また、土師器杯もSR01に見られるような底部の丸みはなくなり、須恵器と同じような形態の角張った形状である。口縁端部の巻き込みも形骸化している。

A・B区出土遺物とC～E区出土遺物の年代

以上、A・B区出土の遺物について、須恵器および土師器の諸特徴を列記し、年代的検討を加えた。このうち須恵器については、年代は天平年間前半の中谷4号窯期（平城宮土器Ⅲ古段階）を上限として8世紀中葉を中心とする年代が想定される。この年代は、土師器杯の暗文、成形手法・形態などの特徴から判断する年代観とも齟齬はない。C～E区出土の遺物については、やや古い要素を残すものもあるが、杯B蓋はすべて縁部が屈曲するa形態で、杯B身は口径に比して底径が小さくなり、体部が斜めに開く特徴をもつ。形態的には投松2号・6号窯と共通するもので、8世紀後葉の平城宮土器Ⅲ新段階から、IV・V段階の間に収まる。

以上述べた通り、各区の遺構出土遺物を概観すると、A・B区の土器群は8世紀中葉前後の特徴を示すのに対して、C～E区のそれは8世紀後葉の遺物の特徴を示しており、両区の間では土器様相に年代的な差が認められる。

2. 遺物からみた豆腐町遺跡の特徴

墨書・刻書土器

A区を中心に40点の墨書・刻書土器（記号を含む）が出土しており、その大半がSR01からの出土である。SR01に関しては、平成18年度調査区においても多くの墨書土器が出土しているが、遺物整理を実施していない。従って、豆腐町遺跡の出土墨書・刻書土器については平成18年度調査区の遺物整理の完了を待って検討したいと思うので、今回は主な墨書・刻書土器についての概要のみの記述に留めておきたい。

1. A区SR01から「大山」銘の墨書土器が4点、刻書土器が1点出土している。人名を示したものか、地名を示したものかは不明である。また、正式な筆跡鑑定を経る必要はあるが、筆跡は32と35が同じで、34・37の墨書と214の刻書はそれぞれ異なり、複数の人物の手によるものと判断される。筆法は稚拙であり、いわゆる知識層が書いたものとは思われない。例えば、32と35および217は「大」の字の左払えと右払えの間に「山」の文字を書き込み、2文字を一体化したような書き方をしており、34もいわゆる幼児期特有の鏡面文字に似た書き方で、記号のように見える。ともに文字を知らない人が見よう見まねで「大山」の文字を墨書または刻書した可能性が高い。

2. 「郡」銘の墨書土器がA区SR01から出土している。「郡」は皿Aの底面に墨書されており、皿Aは胎土が精良でヘラ磨きとロクロ削りの丁寧な調整が施されている。「郡」銘の墨書土器は、木簡と違い、

国衙関連遺跡から出る性格のものではないので、豆腐町遺跡（A・B区）は郡衙（飾磨郡）に関連する遺跡の可能性が高い。SR01からは「寺」「田中寺」など「寺」関係銘の墨書土器が出土しているが、A区では寺の存在を示す遺構は検出されていない。なお、当該遺跡から約1.5km東に白鳳時代から奈良時代の市之郷廃寺（文献4）が所在しているが、墨書の「寺」が市之郷廃寺を指すかどうかについても現段階では判断できない。

このほか、E区SK05から「郷」銘の墨書土器（639）が出土している。639の墨書土器については、「郡」の文字の可能性も指摘されたが、最終的に「郷」と判読された。E区土器群は、「郡」銘の墨書土器が出土したA区土器群よりも年代的に新しく、また、E区はA区とは位置的に離れていることもあり、「郷」銘墨書土器と「郡」銘の墨書土器とは、今のところ直接的な繋がりを見出すことはできない。

土師器

いわゆる畿内系土師器の杯A・杯C形態の杯類が多く出土しているが、特徴的なことは内外面に黄灰色系の化粧土を施すものを多く含んでいることである。化粧土の塗布厚は厚いものから薄いものまであり、塗布厚の厚いものは剥落した漆喰壁状に見えるものが多い。刷毛塗りの痕が観察できるものもあるが、漬け掛けと思われるものもあり、漬け掛けと刷毛塗りの両方を使い分けていると考えた方が妥当かもしれない。いずれにしても胎土を観察すると多くの砂粒を含んでおり、素地の悪さを補うために表面をコーティングしたと思われる。このように化粧土を施した土師器は国衙推定地の本町遺跡周辺からも出土している（註2）。平城宮跡では出土していないようであるので、地域的な特徴として注目してよい。

須恵器

当該遺跡周辺の須恵器窯跡群としては姫路市の峰相山窯跡群、加古川市の志方窯跡群があり、両生産地から製品が供給されている。志方窯跡群の製品は峰相山窯跡群の製品と比較して砂粒が少なく明るい灰色を呈するのが特徴である。豆腐町遺跡出土須恵器にはこのような特徴をもつものが多く、色調・胎土で判断する限りでは、製品は志方産が主体である。但し、これはあくまでも肉眼的な観察によるもので、胎土分析による科学的検証が必要である。

二彩

大村敬通氏の研究（文献5）によれば、兵庫県内における多彩釉陶器の出土地は14箇所を数え、二彩の出土地は豆腐町遺跡を含め2箇所である。当遺跡出土の二彩は生産地不明であるが、国内産であることはほぼ間違ないとされる（註3）。

漆関係遺物

漆運搬容器の壺K、漆パレットなど漆工房関係遺物が出土している。漆運搬容器の壺Kはいずれも口頸部と体部の境が打ち割られ、体部内の漆が搔き取られている。漆運搬容器内に付着する漆はすべて生漆で、杯などに付着する漆は精製し掃墨を加えた黒漆である。なお、漆は原液のままでは使用できないので、天日か弱い熱で熱を加えながら攪拌し、余分な熱をとばして精製する作業が必要とされる。この作業は「くろめる」と呼ばれるが（文献6）、この「くろめる」作業での使用容器についてはA区からは出土していない。また、黒漆付着の土器のうち、須恵器166や344のように内外面に漆膜が付着し、その漆膜には刷毛塗りした痕跡を有するものや付着漆膜が器面に塗布した様相を呈する土師器などパレットの器としての使用ではなく、漆塗りが行なわれている可能性のある土器が含まれている。同様の漆付着土器は本町遺跡周辺から出土（註4）している。

3. 遺物からみた豆腐町遺跡の性格

A・B地区ではSR01だけで遺物コンテナ約70箱出土した。今年度（平成18年度）に発掘調査を実施したA区の北地区においてもSR01から同じく多量の遺物が出土している。構成器種は供膳形態、貯蔵形態、煮沸形態の3種のすべてが揃い、これ以外に多量の製塩土器および漆運搬壺・漆パレットなど漆工房関係遺物が出土している。また、官衙関係の特殊遺物として、二彩・稜椀・鉄鉢・皿A・皿B・瓦ならびに墨書き土器や転用硯がある。

これらの遺物のうちで、特に注目される遺物の1つに「郡」の墨書き土器がある。「郡」の墨書き土器の存在は、木簡と違い、国衙からは出土するものではないので、郡衙に関連する遺物の可能性が高い。但し、「田中寺」・「寺」など寺との関連も窺わせる墨書き土器があり、「郡」と「寺」の関係をどのように理解するかは今後の検討課題であろう。

また、豆腐町遺跡が郡衙もしくは郡衙に準ずる官衙遺跡に関連する遺跡とすると、多数の杯・皿類の出土は多人数の供膳容器として使用されたものであろうし、煮沸容器と多数の竈および多数の製塩土器は賄いの調理場の存在を窺わせる。このほか、漆運搬用の壺Kや漆塗り用パレット・漆仕上げ土師器の存在から漆工房の存在を窺わせるものである。

II 遺構

1. 古代の遺構の分布・機能・時期

各地区において検出された遺構

今回報告する豆腐町遺跡の調査範囲（A～F区）では、全ての地区において8世紀代の遺構を検出している。A区においては掘立柱建物、柱穴、溝、土坑、井戸、旧河道（廃棄場所）が、B区では溝が、C区では柱穴、土坑が、D区では井戸、溝、埋甕、土坑、柱穴が、E区では井戸、土坑、柱穴、溝が、F区では掘立柱建物、土坑、溝がそれぞれ検出されている。調査区はA・B区とC～F区の東西二つのブロックに分かれるので、それぞれを東ブロック（A・B区）、西ブロック（C・D・E・F区）と呼称してそれぞれのブロック毎に遺構の内容から推測される、それぞれの地区の機能をまとめておく。

東ブロックの遺構

東ブロックはA区の旧河道SR01をはさんで西側（A-2区西半及びB区）は、遺構が希薄である。明確な建物はなく、土坑もない。遺構が集中するのはSR01の東側（A-1区及びA-2区東半）である。第3章で述べたとおり、A-1区の東側は後世の削平のために遺構が失われている可能性も考慮する必要はあるが、遺構はSR01の東側沿いに集中している。この遺構群は井戸、炭・焼土を伴う土坑、小規模な掘立柱建物、土器等の廃棄場所から構成されており、大型の柱穴を持つ建物を伴わないことから、恒久的な建物を伴わない作業空間である可能性が高いと考える。

その作業の具体的な内容であるが、井戸で水を汲み、土坑で焼土・炭を生成する加熱作業をおこない、作業の廃棄物及び食器類を当時埋没が進み窪地となっていた旧河道に捨てる、という一連の行為が想定できる。SR01からは製塩土器（塩・調味料）、竈・甕（調理具）、杯・皿類（食器）が多量に出土しているので、この一連の作業は炊飯を含む食物の調理、供膳であった可能性が高いと考える。ただしSR01からは漆容器なども出土しているので、近辺で漆の精製や塗りなどの作業も行われていたようである。東ブロックの機能としては厨房が想定されるが、近辺には工房も存在した可能性があると考えておく。

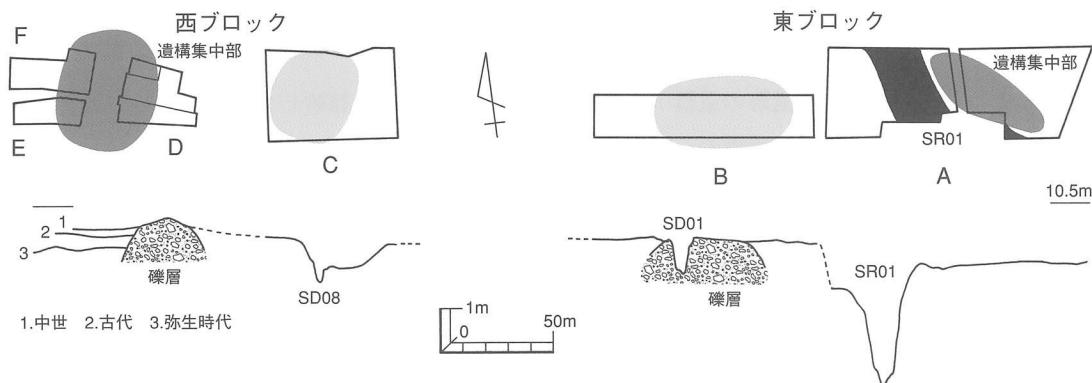
西ブロックの遺構

西ブロックでは、D区の西側及びE区・F区の東側の幅30mほどの範囲に遺構が集中している。中央部に小規模な建物が南北に連なって複数棟あり、その東西に井戸や溝などが存在する。南北の広がりは調査区外まで遺構が延びているので不明である。

建物は2間×2間の小規模なものであり、井戸も素掘りの簡素なものである。特殊な遺構としては、D地区で埋甕や炭・焼土を伴う土坑が検出されている。工房的な性格をもった空間である可能性もあるが、具体的な機能を想定することは困難である。

遺構の時期

遺物のまとめで述べたように、東ブロック（A区・B区）と西ブロック（C～F区）から出土している遺物には若干の時期差があり、東ブロックが8世紀中葉、西ブロックが8世紀後期の年代が与えられる。若干の重複する可能性はあるが、最初に東ブロックの遺構群が形成された後に西ブロックの遺構群が形成されたものである。



第16図 古代の遺構の分布

2. 遺構からみた豆腐町遺跡の性格

官衙遺跡の可能性について

豆腐町遺跡については、出土遺物からは郡衙もしくは郡衙に準ずる官衙に関連する遺跡である可能性が指摘できるが、遺構からはこれを補強するデータはあまり多くは提示できない。

建物はわずかに3棟が検出されているのみであり、調査範囲外に延びる可能性があるもののいずれも2間×2間の極めて小型のものである。この規模の建物は、加古川市溝之口遺跡（賀古郡衙推定地）（文献7）や神戸市吉田南遺跡（明石郡衙推定地）（文献8）などでも存在するが、一般集落でも見られる規模なので特に官衙関連遺跡であることを示すものではない。

井戸はA区で2基、D区、E区で各1基の合計4基が検出されている。A区の2基の井戸は木組みのものであり、規模も比較的大きなものであるが、その存在だけで官衙関連遺跡であることを証拠だてるものではない。その他の遺構としては溝や土坑があるが、いずれも官衙特有のものとは言い難い。遺構群全体を取り囲む区画施設も明確ではない。

以上のように、遺構からは豆腐町遺跡の性格を明確にはできないが、官衙に関連する遺跡であることを否定する要素も存在しないので、出土遺物の検討から導き出された郡衙もしくは郡衙に準ずる官衙に関連する遺跡、という評価に基づき、豆腐町遺跡の遺構を位置づけてまとめとしておく。

郡衙関連施設の中での位置づけ

山中敏史によると、郡衙には各種の実務を分掌する曹司が存在する（文献9）。その中には郡衙全体の食事供給などを司る厨家という施設があり、そこには井戸や竈屋が存在する。豆腐町遺跡の東ブロックの遺構群は、その内容から見て、この厨家である可能性が高いと考える。ただし山中が指摘するように厨家には出先機関も存在する（播磨国明石郡藤江里例、文献9による）、この遺跡がイコール、飾磨郡衙の厨家本体とするにはまだ資料が不十分である。また「寺」の墨書土器の存在であるが、厨家では郡衙のみではなく寺院にも給食を供給する例があり（福岡県久留米市ヘボノキ遺跡例、文献9による）、同様の事例として考えてもいいのではないだろうか。

また漆関係の遺物は、郡衙クラスの遺跡（丹波国氷上郡衙関連遺跡など）ではよく見られるものであり、郡衙の曹司のひとつとして、木製品製作工房と言うべき施設が普遍的に存在したようである。今回の東ブロックが厨家とすれば、その近辺には木製品製作工房が存在した可能性が考えられる。

東ブロックについては以上のような位置づけが可能であるが、西ブロックについては出土遺物に乏しいこともあり、判断は難しい。ただD区には工房らしき施設があるので、これも郡衙の曹司のひとつである可能性が考えられる。

以上をまとめると、豆腐町遺跡の遺構・遺物のあり方から総合的に判断して、この遺跡が飾磨郡衙もしくは飾磨郡衙に関連する官衙施設の一部分である可能性は極めて高いと言えるであろう。

註

註1 中谷4号窯産と推定される遺物群が平城宮SD5100から出土している。SD5100出土土器は恭仁宮への遷都以前の天平年間前半の年代が確実に与えられる一括資料で、平城宮土器Ⅲ古段階の土器の基準資料となっている。

註2 姫路市教育委員会 小柴治子氏のご教示による。

註3 小野市立好古館 大村敬通氏のご教示による。

註4 姫路市市史編纂室 山本和子氏のご教示による。

文献

文献1 森内秀造・仁尾一人・岡本一秀『志方窯跡群I－中谷支群－』2000年 兵庫県教育委員会

文献2 中村浩・岡本一士・上月昭信『札馬古窯跡群発掘調査報告』1983年 加古川市教育委員会

文献3 森内秀造・仁尾一人・岡本一秀『志方窯跡群II－投松支群－』2001年 兵庫県教育委員会

文献4 山田清朝『市之郷遺跡』2005年 兵庫県教育委員会

文献5-1 大村敬通「唐三彩と奈良三彩の序章」『兵庫県埋蔵文化財 研究紀要』創刊号 2001年
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

文献5-2 大村敬通「続・兵庫県出土の三彩」『兵庫県埋蔵文化財 研究紀要』第2号 2002年
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

文献6 玉田芳英「漆付着土器の研究」『奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢II』1995年
奈良国立文化財研究所

文献7 加古川市教育委員会『溝之口遺跡発掘調査報告書』1992年

文献8 田辺昭三「吉田南遺跡」『兵庫県史 考古資料編』1991年

文献9 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』1994年

第2節 中世

1. 集落の立地について

今回の調査範囲では、中世の遺構はB～F区の各地区から検出された。地形的にみるとB・C区では、網目状に流れる自然流路の西側に面した自然堤防状の微高地で、柱穴群が検出された。それぞれの微高地は小規模で、建物跡も復原できておらず、短期間の利用、もしくは集落域の末端であったとみられる。

D・E・F区は扇状地性の礫層が落ち込む傾斜面にあたり、弥生時代・古代・中世の遺構面が層位的に検出されている。調査区の東側は礫層が露出して1段高くなっているものの、中世の遺構はそこまで広がらない。以西は低地になっていて、豆腐町遺跡の西限を示す。中世の遺構の広がりは、豆腐町踏切から南北に通じる市道（旧飾磨街道）を挟んだ、東西約40mのエリアにほぼ限られることになる。

2. 各地区的遺構と遺物

C区

中世の遺物で最も古い年代を示すのは、C区の溝SD02の埋土上層から出土した土器群で、須恵器椀(507)の形態から、12世紀前半頃に自然流路が完全に埋没したものと考えられる。

D・E・F区

D・E・F区では掘立柱建物を計4棟復原したが、それ以外にも攪乱のために復原にいたらなかった柱穴群が多数存在する。それらも含めて建物の方位は概ね現在の市道と同じくN20°E前後を示す。おそらく旧飾磨街道の元になる道が存在し、その道の両側に面して家屋が軒を連ねていた状況が想定される。奈良時代の建物も方位はほぼ同一なので、この道筋自体は古代から現代にいたるまで踏襲されてきていて、当然条里地割りを反映したものと考えられる。古代山陽道の復元ラインが飾磨郡域ではおおよそN70°W前後の傾きに想定されている点とも符合している。なおF区のSB103のみは南北軸がN8°Eを示し、新しい段階には方位がずれる建物もある。

F区では建物の周辺に方形・円形の土坑が存在する。特に土坑SK08のような方形で平底の土坑が、建物の方位を意識して付属する状況は、中世条里内に位置する集落遺跡では一般的な現象である。

D中区のSK02は、一辺5～6mの不整長方形を呈し、導水部・排水部を備え、埋土に非口クロ成形の「かわらけ」類が一括廃棄されている状況などから、屋敷地内の庭園の池であると考えている。ただし今回の調査範囲内では、屋敷地を区画する溝等の遺構は認められず、全体的な関連性については、不明な点が多く残されている。

B区

B区の焼土坑2は井戸が廃棄された遺構とも考えられ、埋土から出土した須恵器椀(448)・鉢(449)などからみて、13世紀前半の年代が与えられる。共伴する軒丸瓦(K9・K11)は国府や市之郷廃寺が廃絶した後のもので、由来は不明である。

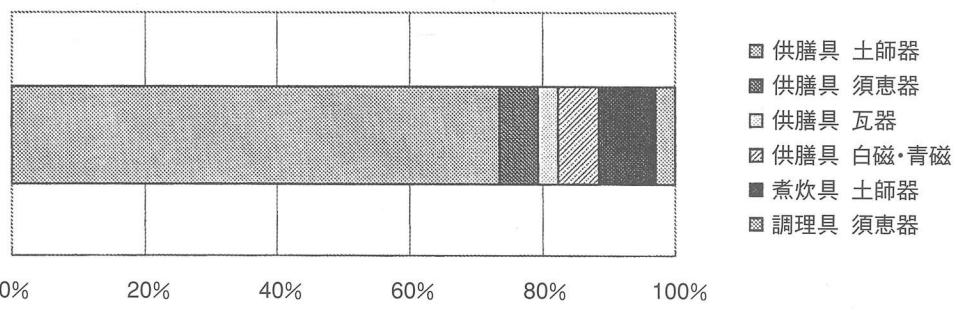
SK02の出土土器には後述するように、13世紀前半の年代が与えられる。ただし掘立柱建物には切り合ひ関係があり、ある程度の年代幅が想定できる。

3. D区の池SK02・01出土遺物の検討

D中区で検出したSK02は6.7×4.9mの不整方形を呈する落ち込みで、屋敷地内の池であろうと考えている。遺構の北西隅から池の排水部にあたるSK01にかけて、供膳具の一括廃棄に伴い、土師器の皿類

が集中的に出土している。それ以外にも煮炊具・調理具が出土しているため、これを検討材料として屋敷地内の土器様相を考察する。

SK02・01では未掲載の1点を含めて、計34点の遺物を図化している。それらを用途・種別ごとに百分率で表したのが第17図の棒グラフである。総数34点のうち主体となるのは供膳具で、土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦器の皿・椀類が全体の88.2%（30点）を占める。それ以外には煮炊具の土師器甕・羽釜が8.8%（3点）、調理具の須恵器片口鉢が2.9%（1点）で、全体の1割強の割合である。土器組成の9割を供膳具が占めるのは、他の遺跡の居館などでも一般的な様相である。



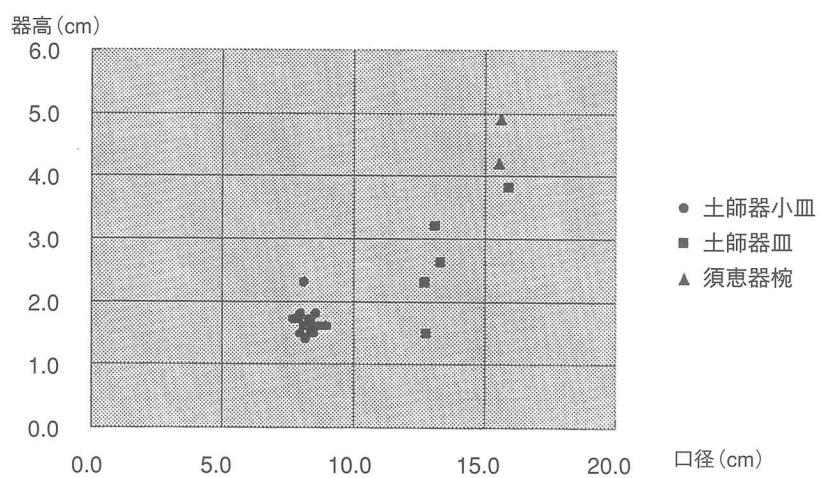
第17図 土器の組成百分率

供膳具の器種の法量を第18図のグラフに掲げる。土師器小皿は口径8～9cm、器高1.5cm前後、皿は口径13cm前後、須恵器椀は口径15.5cm前後、器高4～5cmの値を示す。これを東播磨地域の玉津田中遺跡の土器編年に照らすと、12世紀後半の中世III－1期の資料より矮小化傾向を示すため、13世紀前半の範疇で捉えられる。

参考文献

中川 渉 1996 「第2部第1章第6節 中世の土器」『玉津田中遺跡 第6分冊（総括編）

兵庫県文化財調査報告第135-6冊』兵庫県教育委員会



第18図 供膳具の法量散布図

第3節 汽車土瓶について

豆腐町遺跡では、機関車庫や転車台など近代以降の鉄道関連施設が発見されている。これらの遺構からは、汽車土瓶を中心とした鉄道関連の遺物が出土している。汽車土瓶は豆腐町遺跡A地区でのみ出土しており、その多くは攪乱土坑（塵穴）・煉瓦積道路側溝より出土している。汽車土瓶・湯呑・落し蓋を含め、その数はコンテナに換算して5箱程度である。

1. 汽車土瓶の概要

汽車土瓶は、湯呑・落し蓋・茶瓶が出土している。それぞれ器形・胎土・釉薬など共通した特徴があり、分類の基準とした。

とくに茶瓶については、成形・「キ」の有無・施釉箇所・釉調・胎土を基準に分類した。

湯呑 (670~674)

汽車土瓶に付属する湯呑である。湯呑の形状は4種類に大別した。

- I. 体部から口縁部にかけての立ち上がりが直線的で、高台部と体部の境に明瞭な段をもつもの。
- II. 口縁部が外反し、高台部と体部の境に段がないもの。
- III. 口縁部が内弯し、高台部と体部の境に段がないもの。
- IV. 僅かに突出した高台をもつもの。

I類は670・671が該当する。削り出し高台。高台部には釉薬を施していない。釉調は透明度が高く、浅黄褐色を呈している。

II類は672が該当する。削り出し高台。体部下半には回転ヘラ削り痕が明瞭に残り、施釉後釉薬を削り取っている。釉薬は透明度が高く、灰白色を呈している。

III類は673が該当する。削り出し高台。体部には回転ヘラ削り痕が顕著に残る。釉調は透明度が低く、暗茶褐色を呈する。

IV類は674が該当する。胎土は磁器質で型作りと思われる。

落し蓋 (675~679)

上面に摘みをもつ落し蓋である。下面是無釉で、底部に回転糸切り痕を残す。摘みの形状から3種類に大別した。

- I. 球状のもの。
- II. 擬宝珠状のもの。
- III. 円筒状のもの。

I類は675が該当し、II類は676~678が該当する。II類のうち676・677は部分的に釉薬が掛かっておらず、粗雑な作りである。

III類は、679が該当する。上面に白化粧地に鉄絵を施した蓋である。

茶瓶 (680~703)

口縁部が欠損している685・687・692・697を除き、内面に蓋受けの「キ」を有する内キ型の茶瓶である。釉掛け部位の違いによる分類基準（眞野 修 1994）では、2種類に分かれる。

- A 脳部外面上半部と内面下半部・注ぎ口内に施釉するもの。
- B 脳部外面上半部に施釉するもの

A類は輶轎成形の681と、泥漿鑄込製法等を用いた型作りの684・699~702が該当する。それ以外は内面が無釉のB類である。

胎土・釉調

670～703の汽車土瓶・落し蓋・湯呑は、胎土（焼き締め状況も含む）・釉調の状況から、4種類に大別でき、さらに10種類に細別が可能である。

a類 軟質の仕上がりで、胎土が黄褐色～黄橙色を呈するもので、釉および加飾法の違いで4類に細別できる。

1類：釉色が灰黄色を呈し、透明度が低いもの。

2類：釉色が灰白色を呈し、透明度の低いもの。

3類：釉色がオリーブ色を呈し、透明度の高いもの。灰釉系。

4類：白化粧地に鉄絵を施したもの。

b類 硬質の仕上がりで、胎土が灰白色～灰色を呈するもので、釉の違いで3種類に細別できる。

1類：透明度の高いオリーブ色を呈する。灰釉系。

2類：透明度の低いクリーム色を呈する。

3類：透明度がやや高い茶褐色を呈する。鉄釉系。

c類 半磁器質で、胎土が灰色～灰黄色を呈する。釉は透明釉を施す。

d類 磁器質で、胎土は灰白色を呈する。釉の違いで2種類に細別できる。

1類：透明度の高い灰白色釉を施す。

2類：透明度の高い浅黄色釉を施す。

軟質系a類は、1類：湯呑670・671・673、落し蓋675・676、茶瓶681・682・688・691・693～695・697・698、2類：落し蓋677・678、茶瓶686、3類：茶瓶683がそれぞれ該当する。

硬質系b類は、1類：湯呑672、茶瓶685・687・689・690・692・696、2類：茶瓶680、3類：茶瓶684がそれぞれ該当する。

半磁器質c類は、茶瓶699・701・702が該当する。

磁器質d類は、1類：茶瓶700、2類：湯呑674、茶瓶703がそれぞれ該当する。

2. その他（1）

汽車土瓶以外に、蒸気機関車を描いた碗が出土している。

碗（669）

端反の施釉陶器である。厚い白釉地に鉄顔料で蒸気機関車を描いた鉄絵の碗である。虫喰いと粗い貫入が際だっている。瀬戸・美濃焼の範疇で捉えられる。

以上が豆腐町遺跡から出土した汽車土瓶（湯呑、落し蓋、茶瓶）の状況である。土瓶は軟質系（a類）・硬質系（b類）・半磁器質（c類）・磁器質（d類）の4種類あり、釉薬は9種類（a類：3種類、b類：3種類、c類：1種類、d類：2種類）確認した。この分類が生産地の違いを示すかについては、今後の検討課題としておきたい。

轆轤成形の一群の多くが、内キ型で内面無釉のB類である。しかし一例、内外面に施釉するA類（681）が確認されている。内キ型土瓶は明治後期から大正期に盛行する土瓶で、外面に駅名・販売店名を記すこともこの時期の特徴である。豆腐町遺跡から出土した土瓶は破片が多く、したがって書かれた文字も断片的である。693の沼津以外は確定できるものではなく、残りは推定の域をでないが、米原・横浜・山北・平沼・静岡など東海道線の駅名と理解できるものがある。駅名が付された汽車土瓶は、内キ型－施釉A・B類－a1・b1類に限られている。

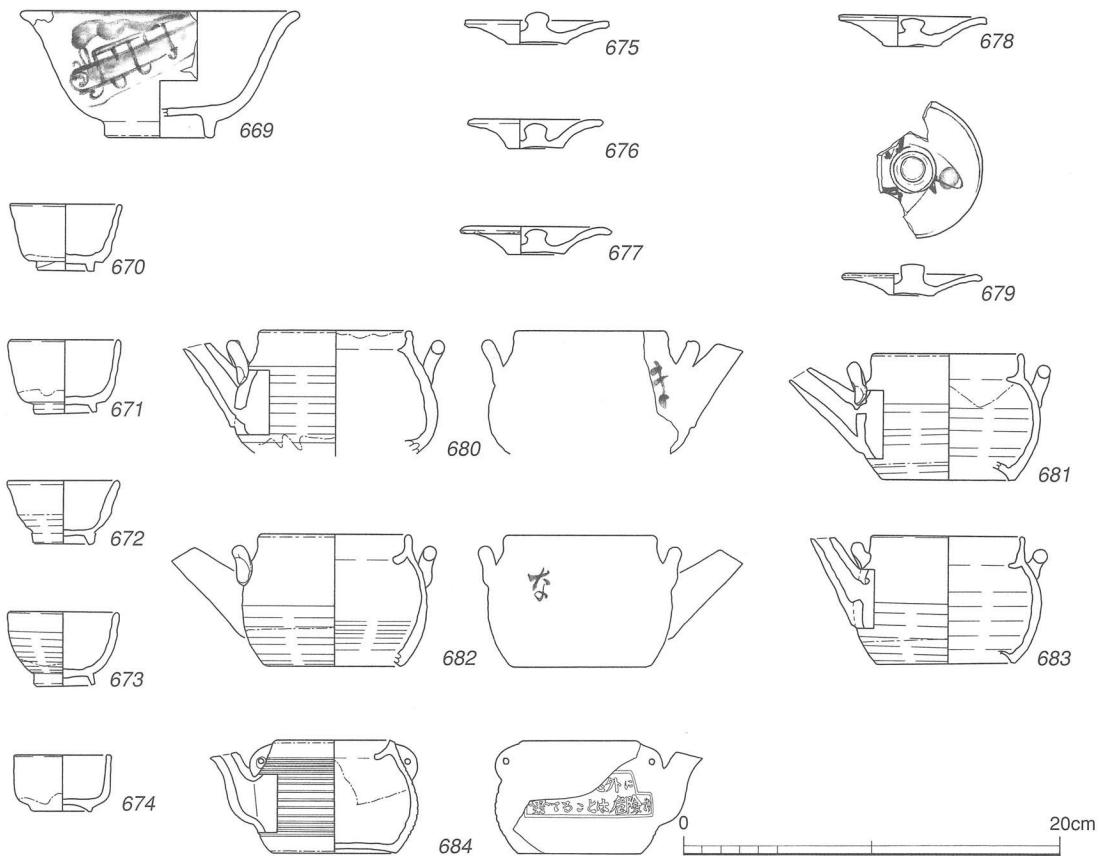
近代の豆腐町遺跡は、明治21年（1888）に設立された私設鉄道・山陽鉄道会社の姫路駅に該当する。同社は神戸市に本社を置き、明治22年（1889）には神戸・姫路間が開通し、東海道線と連絡している。汽車土瓶の出現は明治25年（1892）以降とされており、この時期にはすでに東海道線と結ばれている。東海道線の駅名が記された内キ型－施釉A・B類－a1・b1類土瓶が出土することに矛盾はない。

煉瓦側溝掘方内出土の汽車土瓶は、内キ型で「キ」なし型土瓶は出土していない。また同型土瓶に付随する湯呑・平蓋の出土はない。「キ」なし型土瓶の出現は大正5～6年（1916～17）頃と考えられていることから、この煉瓦側溝の構築時期は大正初年頃に遡る可能性が考えられる。

泥漿鋳込製法の一群はこの製造法の出現が昭和3年（1928）頃であることから、昭和期の土瓶と理解できる。

第7表 豆腐町遺跡A区出土汽車土瓶分類

報告番号	出土遺構	分類					駅名(推定)
		釉調・胎土	成形	形状	す穴	施釉	
681	煉瓦側溝掘方	a1類	轆轤成形	内キ	3	A類	米原？
682	—	a1類	轆轤成形	内キ		B類	名古屋？
688	煉瓦側溝掘方	a1類	轆轤成形	内キ		B類	大阪？
691	煉瓦側溝掘方	a1類	轆轤成形	内キ		B類	静岡？
693	SK35	a1類	轆轤成形	内キ		B類	沼津
694	精査面	a1類	轆轤成形	内キ		B類	静岡？
695	精査面	a1類	轆轤成形	内キ		B類	静岡
697	煉瓦側溝掘方	a1類	轆轤成形	内キ		B類	
698	精査面	a1類	轆轤成形	—		B類	
686	煉瓦側溝掘方	a2類	轆轤成形	内キ		B類	
683	煉瓦側溝掘方	a3類	轆轤成形	内キ	1	B類	
685	攪乱中	b1類	轆轤成形	—		B類	平沼（銀月亭）？
687	煉瓦側溝掘方	b1類	轆轤成形	—		B類	
689	煉瓦側溝掘方	b1類	轆轤成形	内キ		B類	山北？
690	煉瓦側溝掘方	b1類	轆轤成形	内キ		B類	横浜？
692	煉瓦側溝掘方	b1類	轆轤成形	—		B類	
696	精査面	b1類	轆轤成形	内キ		B類	米原？
680	SD01	b2類	轆轤成形	内キ	1	B類	
684	—	b3類	型作り	内キ	1	A類	
699	精査面	c1類	泥漿鋳込製法			A類	
701	攪乱	c1類	泥漿鋳込製法			A類	
702	精査面	c1類	泥漿鋳込製法			A類	鉄道?局指定
700	道路側溝	d1類	泥漿鋳込製法			A類	
703	SE01	d2類	泥漿鋳込製法			B類	



第19図 汽車土瓶他

第4節 豆腐町遺跡出土の煉瓦について

1. はじめに

煉瓦は、現在のJR山陽本線の前身である山陽鉄道（明治21年兵庫・姫路間で開通）関連施設のC区扇形庫の煉瓦積み地下施設・引き込み線およびその可能性のあるA区中央の煉瓦積み建物基礎に使用されていた。煉瓦の全体量は不明であるが、刻印の有無等を判断基準として、44個の煉瓦をサンプルとして採集した。ここでは、この44個の煉瓦について報告する。

2. 煉瓦の分類（第8表）

刻印の種類による分類

採集したサンプル煉瓦は、別表のとおり刻印の有無、刻印の種類を基本にしてI類からXIII類に分類した。さらに同形の刻印のなかで細分が可能な刻印については、「」を付し細分した結果、19類の分類が可能になった。

押印位置による分類

さらに刻印が押印された位置に注目し、刻印が片面（表面）のみ押印の場合は1、両面押印（表・裏面）の場合は2を付した。

調整による分類

櫛目文の有無で分類した。裏面に櫛目文を施すものをa類、施さないものをb類とした。

以上、煉瓦の分類基準は、刻印の種類・押印の位置・櫛目文の有無ということになる。また分類表記については、刻印の種類による分類（I～XIII類）の後に押印位置による分類を表記し、その後ハイフンを付し調整による分類を記した。たとえばII2-a類の分類表記は、II類の刻印を表・裏面の両面に押印し、裏面には櫛目文を施した煉瓦を示す。数種類の刻印が押印されている場合、たとえばIV2・V2・VI2・XI'2-b類の表記は、IV・V・VI・XI'類の刻印がそれぞれ両面に押印され、裏面には櫛目文を持たない煉瓦を表している。また、IV・V2-b類の表記は、表面のみIV類の刻印、両面にV類が押印され、裏面に櫛目文をもたない煉瓦をあらわす。

煉瓦の部分名称と計測部位

櫛目文が施されている「平」の面を裏面とし、櫛目文が無い場合は抜き砂が無い、あるいは反対の「平」面より少ない面を表面とした。また長手を側面、小口を小口面と呼称した。煉瓦の使用事例から考えると、煉瓦建造物で我々が目にすることが可能な面は、煉瓦の側面（長手）あるいは小口面（小口）である。いわゆる「平」の面は、表・裏面の表記は必ずしも適切な用語とは思えないが、本稿では便宜上これらの名称を使用する。

煉瓦寸法の計測については、表面の中心部で長さ（長手長）と幅（小口幅）を計測し、厚さについては側面の中央部で計測した。

煉瓦の分類

I 類（I-a類：B1・B2・B4, I-b類：B3）

刻印のない煉瓦である。裏面に櫛目文を施すI-a類と櫛目文を施さないI-b類がある。全面に極細砂の抜き砂が施されるが、表面の抜き砂は密度が疎らである。I-a類は長さ21.5cm、幅10.2cm、厚さ5.3cm前後、I-b類は長さ23.0cm、幅11.0cm、厚さ6.0cmとa類に比べ大型の煉瓦で、規格寸法が異なる。

II 類 (II 1-a類 : B5, II 1-b類 : B6・B7, II 2-a類 : B8～B10, II' 2-a類 : B11・B12)

一重線の井桁刻印と二重線による井桁刻印がある。前者を II 類、後者を II' 類とした。

II 類

表面のみ刻印を施す II 1 類と、表・裏面に刻印をもつ II 2 類がある。II 1 類は裏面に櫛目文をもつ a 類ともたない b 類の両者がある。これに対して、II 2 類は櫛目文をもつ a 類のみ確認されている。

II 類の寸法は、長さ 21.6cm、幅 10cm、厚さ 5.0cm と規格化されているが、B6 の II 1-b 類は長さ 22.0cm、幅 10.5cm、高さ 6.5cm と II 類の中でも大型の煉瓦である。

II' 類

表・裏面の両面に刻印をもつ II' 2 類のみ確認した。裏面に櫛目文を施す a 類のみで、櫛目文を持たない b 類は確認できていない。寸法は長さが 21.7～22.0cm、幅 10.3cm、厚さ 2.3cm 前後である。

III 類 (III 2-a 類 : B13～B16, III 2-b 類 : B17, III' 2-a 類 : B18・B19, III・III' -a 類 : B20・B21・B23・B24, III・III' -b 類 : B22)

十字形と、二度押しし十字形を重ねた刻印がある。前者を III 類、後者を III' 類とした。

III 類

表・裏面に刻印を施した III 2 類がある。片面のみ刻印した III 1 類は確認していない。III 2 類には、裏面に櫛目文を施した a 類と櫛目文をもたない b 類の両者がある。III 2-a 類は長さ 22cm 前後、幅 10.6cm、厚さ 5.2cm 前後と寸法が規格化している。III 2-b 類は長さ・幅は III 2-a 類と同じであるが、厚さが 7.1cm と III 2-a 類より厚く作られている。後述する III・III' 類についても、a 類の厚さが 5.2cm 前後であるのに対し、櫛目文を持たない b 類は厚さ 7.1cm と同様の傾向が見てとれる。このことは、III 2 類には 2 種類の規格寸法が存在すると理解できる。

III' 類

十字形を 2 度押し重ねた刻印をもつ III' 類は、両面に刻印をもつ III' 2 類のみ存在する。寸法は長さ 22.2cm、幅 10.6cm、厚さ 5.2cm 前後と規格化している。

III・III' 類

表面に III 類の刻印、裏面に III' 類を押印している。裏面に櫛目文をもつ a 類ともたない b 類の両者がある。寸法は長さが 21.6～22.8cm、幅 10.3～10.5cm と比較的均一であるが、III・III' -b 類は厚さが 7.1cm と厚く作られている。前述した III 2 類のように、III・III' 類は 2 種類の規格があると考えられる。

VII 類 (VII 2-a 類 : B32・B33, VII 2-b 類 : B34, VII' -b 類 : B35)

各先端を四角くまとめ、星形状に突き出した刻印を VII 類、先端が尖る星形のものを VII' 類とした。

VII 類

両面刻印の VII 2 類のみ確認した。裏面に櫛目文を施す a 類と櫛目文を施さない b 類の両者がある。

寸法は VII -a 類の長さが 21.4cm、幅 10.2cm、厚さ 4.8cm で、VII 2-b 類が長さ 22.6cm、幅 10.6cm、厚さは 5.4cm と VII 2-b 類が多少大型である。

VII' 類

裏面に櫛目文をもたない b 類のみ確認された。寸法は長さ 22.6cm 前後、幅 10.5cm 前後、厚さ 5.4cm 前後である。

IV～VI・VII～XIII 類

IV～VI・VII～XIII 類は単独で押印されることなく、この群に含まれる刻印と併用されている。さらにこの類の煉瓦すべてに両面刻印されている点が特徴である。この類の煉瓦に含まれる礫も小さく、さ

らにその量は極めて少なく、精緻な仕上がりになっている。

IV 類

釘をそのまま押印した刻印である。V・V'・VI・VI'・VII・X・X'・XI・XII・XIII類の刻印と併用されている。片面（表面刻印）と両面刻印のものがある。

V 類

円の三方が突出し、円内には花弁様（三弁）のマークが施された刻印である。花弁部分の切り込みが深いものをV'とした。単独で押印された例はなく、V類はIV・VII・X・X'・VI'・XII・XIII類の刻印と、V'類は、IV・IX・X'・XIと併用されている。両面刻印のものに限られる。

VI 類

漢字の「改」の刻印である。やや崩した「改」をVI'類とした。単独で煉瓦に使用された例はなく、IV・V・VII・XI類の刻印と併用されている。両面刻印のものに限られる。

VII 類

カタカナの「マ」の刻印である。単独で使用される例はなく、IV・V類の刻印と併用されている。両面刻印のものに限られる。

IX 類

カタカナの「イ」の刻印である。両面刻印のみ確認されている。V'・VI類の刻印と併用されている。

X 類

カタカナの「ワ」の刻印である。字体を簡略化したものをX類、明確なものをX'類とした。X類は明確に「ワ」と識別できない刻印も含めている。この刻印はひらがなの「つ」とも読み、あるいは細分する必要があるのかも知れない。単独で使用される例はなく、両類はともにIV・V類と併用される。両面刻印のものに限られる。

XI 類

カタカナの「ホ」の刻印である。IV・V'類の刻印と併用される。両面刻印のものに限られる。

XII 類

アルファベットの「K」の刻印と考えられる。IV・V・VI'類と併用される。

XIII 類

アルファベットの「E」の刻印と考えられる。IV・V・VI'類と併用される。両面刻印のものに限られる。

3. 刻印について

近代の煉瓦については、水野信太郎氏の研究（水野1999・2001）がある。水野氏は煉瓦に押印された刻印の集成を行っており、その成果は「国内煉瓦刻印集成」（以下集成という）としてまとめられている。

ここではこの集成を参考に、豆腐町遺跡出土煉瓦の刻印について対比を行なう。

豆腐町遺跡出土刻印煉瓦のなかで、対比が可能な刻印は、II・III類・V・V'類・VII類の刻印がある。

II類（B5～B10）の井桁の刻印は、集成によれば貝塚煉瓦株式会社（大阪府貝塚市）の可能性が指摘されている（集成No.31）。同社の操業は明治27年6月からであり、その製品は西日本製糖株式会社（旧大日本製糖門司工場）の敷石に使用されている。また類似の刻印煉瓦は日立造船株式会社舞鶴工場

(京都府舞鶴市) でも確認されている。同市内では、さらに※京都府舞鶴市所在の舞鶴倉庫・海上自衛隊倉庫（明治35年着工～大正11年竣工）などの煉瓦建物群でⅡ類の刻印煉瓦が確認されている。

十字形のⅢ類の刻印（B13～B17）は、集成によれば岸和田煉瓦株式会社（大阪府岸和田市並松町）製造のものに比定できる（集成No.32・48）。同社の操業は明治20年7月からであり、日本銀行大阪支店（明治32年着工～36年竣工）をはじめ明治44年竣工した※同志社静和館（1994 同志社埋蔵文化財委員会）・山口県旧庁舎（大正3年着工～5年竣工）で使用されている。またこの刻印と同系譜と判断した二度押しした十字形の刻印Ⅲ'類（B18・B19）については、集成に記載がない。しかしⅢ類とこのⅢ'類は併用されている例がある（Ⅲ・Ⅲ'類：B20～B24）。このことから、Ⅲ'類についても岸和田煉瓦株式会社製と理解できる。Ⅲ'類の例としては、※西舞鶴駅前水路に使用された煉瓦が確認されている。

円の三方に突出部をもち円内に花弁様の文様をもつV・V'類（B25～B29・B36～B44）に近似する刻印が、集成のなかに認められる。花弁の切り込みの深いV'類は、集成のNo.51に近似する。集成によるとV'類は、明治21年12月より操業した大阪窯業株式会社（大阪府城東区鳴野）製で、辰馬組（兵庫県西宮市）南隣の敷地より採集された刻印煉瓦に押印されていた。またV類は、集成のNo.103に近似し、やはり大阪窯業株式会社製である。ただこのV類の刻印が押印された煉瓦は、プレス成形の可能性がある舗装用高質席瓦で、東京都文京区より採集された煉瓦であるという。この煉瓦の使用開始年代は大正9年となっている。豆腐町遺跡出土のV類刻印煉瓦はいわゆる通常の赤煉瓦である。文京区より採集された煉瓦の寸法は集成によると、 $21 \times 9.3 \times 7.5\text{cm}$ であるのに対し、豆腐町遺跡出土のものは、小さい煉瓦（B27）でも $22.5 \times 10.5 \times 5.5\text{cm}$ である。豆腐町遺跡出土のV類煉瓦よりは長さ・幅ともに小さいが、厚みがあるのが特徴である。通常の鍊瓦（豆腐町遺跡出土煉瓦）に比べ小型で厚さが大きい点は道路舗装専用煉瓦と考えられ、特殊な規格（硬質・寸法）をもっている。今回の豆腐町遺跡V類の刻印煉瓦の発見は、V類刻印が特殊な煉瓦のみに押印されたものではないことを裏付けている。

V・V'類の刻印は、IV類・VI類・VI'類・VII類・VII'類・VIII類・IX類・IX'類・X類・XI類・XI'類の刻印のいずれかと併用されている。このことは、V・V'類を含む一群（B25～B29・B36～B44）の煉瓦は、大阪窯業株式会社製造の煉瓦であることを示している。この一群のV・V'類刻印は、いわゆる社印に相当すると考えるのが妥当であるが、その他の刻印については、水野氏のいう製造所を示す社印、製造担当者の暗号・符牒である責任印の機能（水野2001）をもつと考えられる。

星形状の刻印であるVII類は、集成No.51が該当する。集成によると明治26年7月創業の堺煉瓦株式会社（大阪府堺市吾妻橋通2丁目）の可能性が指摘されている。VII類の刻印煉瓦は川崎重工業神戸造船所本社事務所（明治41年竣工）より確認されている。

以上、水野信太郎氏の研究成果と、豆腐町出土の刻印煉瓦について比較検討した。この結果、豆腐町遺跡出土の煉瓦は、貝塚煉瓦株式会社（大阪府貝塚市）・岸和田煉瓦株式会社（大阪府岸和田市並松町）・大阪窯業株式会社（大阪府城東区鳴野）・堺煉瓦株式会社（大阪府堺市吾妻橋通2丁目）の各社より供給された、あるいはその可能性が高いことが判明した。豆腐町遺跡の旧山陽鉄道関連施設に使用された煉瓦は、姫路に近い大阪地域から供給されたことが刻印資料から明らかになった。

またⅡ'類（二重線井桁）・VII'類（星形）の刻印については、集成に該当する資料がなかったため、今後の検討課題となった。

4. 煉瓦遺構と使用煉瓦

豆腐町遺跡の煉瓦は、大きく3カ所の地点からサンプル採集したものである。A区では調査区の中央

部にあった煉瓦積みの建物基礎、C区では、鉄道関連施設である引き込み線・扇形庫の北壁部分の3カ所より採集した。

C区の扇形庫は、扇形をした機関庫のことで中央に転車台を設け、機関庫と転車台の間には、引き込み線が設けられている。機関庫は15台の機関車を収納することが可能で、明治36年10月に建造されている。多少の誇張はあるが当時としては日本一の規模を誇り、昭和4年まで運用されている（高橋1963・田中 1972）。

第9～11表は、遺構単位に刻印煉瓦をまとめたものである。この集計結果をみると、A区の中央部にある煉瓦積建物基壇には、堺煉瓦株式会社製の可能性がある煉瓦と大阪窯業株式会社製の煉瓦、製造所不明の煉瓦の3種類が使用されている。

これに対し、C区の鉄道関連施設である扇形庫・引き込み線から出土した刻印煉瓦は、II類の貝塚煉瓦株式会社製の可能性がある煉瓦とIII・III'類の岸和田煉瓦株式会社製の煉瓦が共通して使用されていることがわかる。

さらに扇形庫では無刻印のI類を除くと、堺煉瓦株式会社製の可能性がある煉瓦（VII類）と製造所不明のII'類煉瓦が加わる。

明治27年創業の貝塚煉瓦株式会社製のII類刻印煉瓦は、現在のところ明治35年～大正11年着工・竣工された建物に使用されていることが確認されている。また、明治20年創業の岸和田煉瓦株式会社製のIII類煉瓦は、現在のところ明治31年～大正5年着工・竣工された建物で使用されている。明治36年竣工の機関庫およびその付帯施設から出土した煉瓦群の製造時期は、各製造所製の煉瓦の使用時期と矛盾することではなく、機関庫建設時に使用された鍊瓦と考えられる。

さらに注目すべきことは、A区煉瓦積み建物基礎とC区鉄道関連施設では、煉瓦の供給先会社構成が異なっていることである。煉瓦積み建物基礎については、おそらく山陽鉄道関連施設と理解しているが確証はない。仮にこの建物が山陽鉄道関連施設と考えた場合、同時期に異なった業者によって建築された可能性か、機関庫と煉瓦積み建物の建築時期が異なっている可能性も考えられる。あるいは山陽鉄道の関連施設でない可能性も残される。この点については、堺煉瓦株式会社製の可能性が指摘されているVII類煉瓦が両者に共通して使用されている事実を考慮し検討する必要がある。

5. おわりに

C地区の調査で確認された転車台をはじめ、これに関係する引き込み線・機関庫などの近代遺構は兵庫県下最初の私鉄鐵道である山陽鉄道の関連施設である。山陽鉄道は、明治21年に兵庫・姫路間が開通し、翌22年には兵庫・神戸間が完成し、東海道線と連結している。明治34年には神戸・下関間が開通し、私鉄鐵道でありながら国内幹線鐵道として重要な役割を担ってきた。

今回の刻印煉瓦の分析により、姫路地域における近代建築部材である煉瓦が、主に大阪方面より供給されていたことなど、近代兵庫県の実態の一端を明らかにすることができた。これは、水野氏などの先学諸氏の研究によるところが大きい。

参考文献

- 1963 高橋秀吉 『姫路の交通五十年』
1972 田中久文 『姫路鐵道百題』
1994 同志社大学埋蔵文化財委員会編 『京の公家屋敷と武家屋敷－同志社女子中・高校静和館地点、交友会

新島会館別館地点の発掘調査－』同志社大学埋蔵文化財委員会調査報告Ⅰ 学校法人同志社
 1999 水野信太郎 『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局
 2001 水野信太郎 「国内煉瓦刻印集成」『産業遺産研究 第8号』中部産業遺産研究会
 ※ 水野信太郎監修「刻印レンガ」『MAIZURU.NET』 <http://www.maizuru.n>

第8表 豆腐町遺跡煉瓦分類

刻印の種類		I類	II類	II'類	III類	III'類	IV類
		刻印なし					
押印の状況	片面押印:1		○			○	○
	両面押印:2		○	○	○		○
刻印の種類		V類	V'類	VI類	VI'類	VII類	VII'類
押印の状況	片面押印:1					○	○
	両面押印:2	○	○	○	○	○	
刻印の種類		VIII類	IX類	X類	X'類	XI類	XII類
押印の状況	片面押印:1						
	両面押印:2	○	○	○	○	○	○
刻印の種類							XIII類
押印の状況	片面押印:1						
	両面押印:2						○

第9表 A区煉瓦積み建物基礎出土の煉瓦

No.	分類	製造所
B33	VII-2-a	
B34	VII-2-b	堺煉瓦株式会社か
B35	VII'-b	不明
B25	IV・V2-b	
B26	IV・V2-b	
B27	IV・V2-b	
B28	IV2・V2-b	
B29	IV2・V2-b	
B30	IV2・VI2-b	
B31	IV2・VI2-b	
B36	V'2・X I 2-b	
B37	IV2・V2・VII2-b	
B38	IV2・V'2・X I 2-b	
B39	IV2・V'2・X'2-b	
B40	IV2・V2・X'2-b	
B41	IV2・V2・X2-b	
B42	V'2・VI2・IX2-b	
B43	IV2・V2・VI2・X III2-b	
B44	IV2・V2・VI'2・X II2-b	

第10表 C区扇形庫出土の煉瓦

No.	分類	製造所
B1	I -a	
B2	I -a	不明
B3	I -b	
B4	I -a	
B5	II 1-a	
B7	II 1-b	
B8	II 2-a	
B9	II 2-a	
B10	II 2-a	
B11	II'2-a	
B12	II'2-a	不明
B13	III 2-a	
B14	III 2-a	
B15	III 2-a	
B16	III 2-a	
B18	III'2-a	
B19	III'2-a	
B20	III・III'-a	
B21	III・III'-a	
B23	III・III'-a	
B24	III・III'-a	
B32	VII-a	堺煉瓦株式会社か

第11表 C区引き込み線出土の煉瓦

No.	分類	製造所
B6	II 1-b	貝塚煉瓦株式会社か
B17	III 2-b	
B22	III・III'-b	岸和田煉瓦株式会社

第12表 出土遺物一覧(1)

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
1	35		須恵器	杯B蓋	(12.1)	—	—	A区	SR01 西肩		
2	35		須恵器	杯B蓋	(12.7)	—	—	A区	SR01 東肩		
3	35		須恵器	杯B蓋	(13.1)	—	—	A区	SR01 東肩		転用硯
4	35		須恵器	杯B蓋	(13.2)	—	—	A区	SR01 中央部		
5	35	41	須恵器	杯B蓋	(14.0)	—	—	A区	SR01 東肩		
6	35	41	須恵器	杯B蓋	13.5	—	—	A区	SR01 東肩		
7	35	41	須恵器	杯B蓋	13.9	—	—	A区	SR01 東肩		
8	35	41	須恵器	杯B蓋	14.0	—	—	A区	SR01 西肩		
9	35		須恵器	杯B蓋	(14.0)	—	—	A区	SR01 東肩		
10	35·75	78	須恵器	杯B蓋	(14.1)	—	—	A区	SR01 東肩		墨書、転用硯
11	35	41	須恵器	杯B蓋	14.4	—	—	A区	SR01 東肩		
12	35·75	78	須恵器	杯B蓋	15.0	—	—	A区	SR01 中央部		墨書
13	35	41	須恵器	杯B蓋	15.1	—	—	A区	SR01 東肩		
14	35		須恵器	杯B蓋	15.3	—	—	A区	SR01 東肩		
15	35		須恵器	杯B蓋	15.4	—	—	A区	SR01 東肩		
16	35	41	須恵器	杯B蓋	16.0	—	—	A区	SR01 東肩		
17	35·75	78	須恵器	杯B蓋	(16.3)	—	—	A区	確認調査	灰色シルト	墨書、転用硯
18	35	41	須恵器	杯B蓋	16.3	—	—	A区	SR01 中央部		
19	35		須恵器	杯B蓋	(16.4)	—	—	A区	SR01 中央部		転用硯
20	35		須恵器	杯B蓋	(16.8)	—	—	A区	SR01 東肩		転用硯
21	35	41	須恵器	杯B蓋	16.9	—	—	A区	SR01 東肩		
22	35		須恵器	杯B蓋	(19.0)	—	—	A区	SR01 東肩		転用硯
23	35	41	須恵器	杯B蓋	20.5	—	—	A区	SR01 中央部		
24	35		須恵器	杯B蓋	(19.7)	—	—	A区	SR01 東肩		転用硯
25	35		須恵器	杯B蓋	—	—	—	A区	SR01 東肩		
26	35		須恵器	杯B蓋	—	—	—	A区	SR01 東肩		転用硯
27	35		須恵器	杯B蓋	—	—	—	A区	SR01 中央部		
28	35		須恵器	杯B蓋	—	(2.2)	—	A区	SR01 東肩		
29	35·78	81	須恵器	杯B蓋	—	—	—	A区	SR01	灰色シルト	墨書
30	35·78	81	須恵器	杯B蓋	—	—	—	A区	SR01 東肩		墨書
31	35·76	79	須恵器	杯B	(10.7)	(4.7)	(8.7)	A区	SR01 中央部		墨書
32	35·76	79	須恵器	杯B	(12.1)	4.8	(9.6)	A区	SR01 中央部		墨書
33	35·75	42·78	須恵器	杯B	(12.4)	(4.4)	(8.9)	A区	SR01 中央部		墨書
34	35·76	42·79	須恵器	杯B	14.3	3.8	10.6	A区	SR01 中央部		墨書
35	35·76	79	須恵器	杯B	(15.4)	3.8	(12.1)	A区	SR01	灰色シルト	墨書
36	35·76	79	須恵器	杯B	(13.6)	(3.5)	(10.2)	A区	SR01 東肩		墨書
37	35·76	79	須恵器	杯B	—	(3.1)	(8.4)	A区	SR01 中央部		墨書
38	35·75	78	須恵器	杯B	—	(2.7)	(8.6)	A区	SR01 中央部		墨書
39	35·75	78	須恵器	杯B	—	(1.3)	(11.0)	A区	SR01 東肩		墨書、転用硯
40	欠番										
41	36	42	須恵器	杯B	(12.0)	3.6	(8.8)	A区	SR01 西肩		黒漆付着
42	36		須恵器	杯B	(13.5)	3.1	(10.0)	A区	SR01 東肩		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
43	36		須恵器	杯B	(12.1)	(3.7)	(9.0)	A区	SR01 東肩		
44	36	42	須恵器	杯B	12.3	4.2	9.7	A区	SR01 東肩		
45	36	42	須恵器	杯B	11.7	4.5	8.4	A区	SR01 中央部		
46	36	42	須恵器	杯B	(11.6)	(4.2)	7.9	A区	SR01 中央部		
47	36	42	須恵器	杯B	(12.7)	4.9	8.8	A区	SR01 東肩		
48	36		須恵器	杯B	(12.4)	4.6	(9.0)	A区	SR01 東肩		
49	36	42	須恵器	杯B	(12.5)	(4.6)	(8.7)	A区	SR01 東肩		
50	36		須恵器	杯B	(11.3)	(4.6)	(6.6)	A区	SR01 河		
51	36	42	須恵器	杯B	12.3	5.4	9.5	A区	SR01 東肩		
52	36	42	須恵器	杯B	(12.7)	(5.1)	(10.5)	A区	SR01 東肩		
53	36		須恵器	杯B	(14.0)	4.0	(10.6)	A区	SR01 中央部		転用硯
54	36		須恵器	杯B	(14.0)	3.9	(10.4)	A区	SR01 東肩		転用硯
55	36	42	須恵器	杯B	(13.7)	3.7	10.3	A区	SR01 西肩		転用硯
56	36		須恵器	杯B	(14.0)	4.3	(9.6)	A区	SR01 東肩		
57	36	42	須恵器	杯B	14.1	4.3	11.2	A区	SR01 東肩		
58	36	42	須恵器	杯B	(15.0)	(4.0)	(11.8)	A区	SR01 東肩		
59	36		須恵器	杯B	(13.5)	5.2	(11.0)	A区	SR01 東肩		
60	36	42	須恵器	杯B	15.1	4.6	12.1	A区	SR01 東肩		
61	36		須恵器	杯B	(15.2)	4.3	(11.4)	A区	SR01 東肩		
62	36		須恵器	杯B	(18.3)	(5.2)	(13.6)	A区	SR01 中央部		転用硯
63	36	42	須恵器	杯B	(17.7)	(5.1)	(10.9)	A区	SR01 中央部		
64	36	42	須恵器	杯B	(16.5)	6.3	12.5	A区	SR01 東肩		
65	36	42	須恵器	杯B	(17.6)	6.3	13.0	A区	SR01 中央部		
66	36		須恵器	杯B	(17.7)	6.5	(11.8)	A区	SR01 中央部		
67	36		須恵器	杯B	—	—	(8.5)	A区	SR01 西肩		
68	36	42	須恵器	杯B	(18.5)	6.9	(14.0)	A区	SR01 西肩		
69	36		須恵器	杯B	(18.3)	6.1	(13.5)	A区	SR01 西肩		
70	36	42	須恵器	杯B	21.1	6.3	15.7	A区	SR01 中央部		
71	36	42	須恵器	杯B	—	—	12.1	A区	SR01		黒漆付着
72	36	42	須恵器	杯B	—	—	11.4	A区	SR01 中央部		転用硯
73	36		須恵器	杯B	—	—	(12.0)	A区	SR01 中央部		転用硯
74	36		須恵器	杯B	—	—	(12.6)	A区	SR01 中央部		転用硯
75	37	41	須恵器	杯A	10.4	3.3	7.7	A区	SR01 中央部		
76	37		須恵器	杯A	(12.1)	3.6	9.7	A区	SR01 西肩		
77	37	41	須恵器	杯A	12.3	3.8	8.2	A区	SR01 東肩		
78	37·77	41·80	須恵器	杯A	12.4	3.6	9.9	A区	SR01 西肩		墨書
79	37·77	80	須恵器	杯A	(12.6)	3.5	9.3	A区	SR01 西肩		墨書
80	37·77	41·80	須恵器	杯A	12.7	3.9	8.2	A区	SR01 東肩		墨書
81	37·79	82	須恵器	杯A	(12.8)	3.7	(10.0)	A区	SR01 東肩		墨書
82	37·77	80	須恵器	杯A	(12.8)	(4.2)	(9.6)	A区	SR01 中央部		墨書、黒漆付着
83	37		須恵器	杯A	(12.9)	4.6	(9.9)	A区	SR01 東肩		
84	37	41	須恵器	杯A	(13.3)	(3.5)	(9.7)	A区	SR01 中央部		
85	37	41	須恵器	杯A	(13.3)	(3.7)	(9.8)	A区	SR01 東肩		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
86	37		須恵器	杯A	(13.4)	4.2	(10.0)	A区	SD02(SR01)		
87	37	41	須恵器	杯A	(13.3)	(2.8)	(10.1)	A区	SR01 東肩		
88	37	41	須恵器	杯A	14.3	3.2	11.1	A区	SR01 西肩		
89	37·79	82	須恵器	杯A	(14.7)	3.9	(11.2)	A区	SR01 中央部		墨書
90	37	41	須恵器	杯A	(13.7)	4.2	8.7	A区	SR01 中央部		
91	37	41	須恵器	杯A	(14.4)	3.8	(12.0)	A区	SR01 東肩		
92	37	41	須恵器	杯A	(15.7)	(4.0)	(13.0)	A区	SR01 中央部		
93	37		須恵器	杯A	(13.9)	4.6	(10.0)	A区	SR01 東肩		
94	37	41	須恵器	杯A	(13.7)	5.1	(10.7)	A区	SR01 東肩		生漆付着
95	37		須恵器	杯A	(17.2)	5.7	(12.0)	A区	SR01 東肩		
96	37	41	須恵器	杯A	(15.5)	(3.3)	(12.3)	A区	SR01 中央部		
97	37	41	須恵器	杯A	(17.4)	3.8	(13.6)	A区	SR01 東肩		
98	37		須恵器	杯A	(17.2)	4.4	(12.2)	A区	SD02(SR01)		
99	37	41	須恵器	皿A	14.2	2.3	11.7	A区	SR01 東肩		
100	37·77	80	須恵器	皿A	(14.7)	2.6	(12.3)	A区	SR01 中央部		墨書
101	37·77	41·80	須恵器	皿A	(15.9)	(2.3)	(14.2)	A区	SR01 東肩		墨書
102	37	41	須恵器	皿A	(15.4)	(1.9)	(12.7)	A区	SR01 中央部		
103	37·78	81	須恵器	皿A	(16.8)	(2.1)	(15.0)	A区	SR01 東肩		墨書、転用硯
104	欠番										
105	37	41	須恵器	皿A	20.7	2.4	18.0	A区	SR01 東肩		
106	37	41	須恵器	皿A	(22.0)	2.5	(20.4)	A区	SR01 中央部		
107	37		須恵器	皿A	(25.6)	(2.0)	(23.4)	A区	SR01 中央部		
108	37		須恵器	皿A	(26.7)	(1.9)	(23.7)	A区	SR01 東肩		
109	37·79	82	須恵器	杯A	-	-	(7.0)	A区	SR01 中央部		墨書
110	37·79	82	須恵器	杯A	-	-	(10.8)	A区	SR01 東肩		墨書
111	37·78	81	須恵器	杯A	-	-	-	A区	SR01 中央部		墨書
112	37·78	81	須恵器	杯A	-	-	-	A区	SR01		墨書
113	38		須恵器	杯L蓋	(14.9)	-	-	A区	SR01 東肩		
114	38	43	須恵器	杯L蓋	(21.8)	-	-	A区	SR01 東肩		
115	38	43	須恵器	杯L蓋	-	-	-	A区	SR01 西肩		
116	欠番										
117	38		須恵器	杯L	(16.7)	4.7	(8.8)	A区	SR01 東肩		
118	38	43	須恵器	杯L	(19.4)	(5.4)	(9.0)	A区	SR01 東肩		
119	38	43	須恵器	杯L	(19.5)	5.6	(9.3)	A区	SR01 西肩		
120	38	43	須恵器	杯L	(18.3)	(5.8)	(11.5)	A区	SR01 東肩		
121	38	43	須恵器	杯L	18.6	6.3	10.5	A区	SR01 中央部		
122	38	43	須恵器	杯L	(18.0)	6.3	(9.2)	A区	SD02(SR01)		
123	38	43	須恵器	杯L	(18.3)	8.3	9.2	A区	SR01 東肩		
124	38	43	須恵器	杯L	(16.9)	-	-	A区	SR01 西肩		
125	38		須恵器	杯L	-	-	(10.2)	A区	SR01 中央部		
126	38·75	43·78	須恵器	杯L?	-	-	(9.5)	A区	SR01 東肩		墨書
127	38	43	須恵器	皿B蓋	(26.4)	-	-	A区	SR01 東肩		
128	38		須恵器	皿D	(19.2)	(2.3)	(15.8)	A区	SR01 東肩		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
129	38		須恵器	皿B	(25.6)	4.8	(22.1)	A区	SR01 中央部		
130	38		須恵器	皿B	(24.0)	4.3	(20.8)	A区	SR01 東肩		転用硯
131	38	43	須恵器	皿B	(24.9)	(3.4)	(20.9)	A区	SR01 中央部		
132	38	43	須恵器	皿B	(23.5)	(3.8)	(20.3)	A区	SR01 東肩		
133	38	43	須恵器	皿B	(23.9)	5.1	(20.0)	A区	SR01 東肩		
134	38・79	43・82	須恵器	皿B	(25.2)	5.8	(15.4)	A区	SR01 東肩		墨書
135	38		須恵器	高杯	(27.2)	—	—	A区	SR01 中央部		
136	38		須恵器	高杯	(27.8)	—	—	A区	SR01 東肩		
137	38	43	須恵器	高杯	29.3	—	—	A区	SR01 東肩		
138	38		須恵器	高杯	—	—	—	A区	SR01 東肩		
139	38		須恵器	高杯	—	—	—	A区	SR01 中央部		
140	39	45	須恵器	壺K	—	—	—	A区	SR01 東肩		生漆付着
141	39	45	須恵器	壺K	—	—	—	A区	SR01 東肩		生漆付着
142	39	45	須恵器	壺K	—	—	(8.0)	A区	SR01 中央部		生漆付着
143	39	45	須恵器	壺K	—	—	(9.4)	A区	SR01 中央部		生漆付着
144	39	46	須恵器	壺K	—	—	—	A区	SR01 東肩		生漆付着
145	39	44	須恵器	壺K	(7.5)	(13.5)	6.4	A区	SR01 西肩		
146	39	44	須恵器	壺K	—	—	(9.3)	A区	SR01 西肩		
147	39	44	須恵器	壺K	(11.8)	—	—	A区	SR01		
148	39	44	須恵器	壺K	—	—	9.5	A区	SR01 中央部		
149	39	44	須恵器	壺K	(11.9)	20.2	(11.1)	A区	SR01 東肩		
150	39	44	須恵器	壺K	—	(23.0)	12.5	A区	SR01 中央部		
151	39		須恵器	壺K	—	—	10.7	A区	SR01 西肩		
152	39		須恵器	壺K	—	—	10.4	A区	SR01 中央部		転用硯
153	40		須恵器	壺E	(9.8)	—	—	A区	SR01 東肩		
154	40	48	須恵器	壺E	(10.6)	5.7	(7.3)	A区	SR01 東肩		
155	40	48	須恵器	壺C	4.0	6.0	3.9	A区	SR01 中央部		
156	40		須恵器	壺C	(4.7)	—	—	A区	SR01 東肩		
157	40		須恵器	壺C	—	—	4.0	A区	SR01 東肩		
158	40		須恵器	壺A蓋	(13.8)	—	—	A区	SR01 中央部		
159	40		須恵器	壺A蓋	(13.9)	—	—	A区	SR01 東肩		
160	40		須恵器	壺E	—	—	(6.6)	A区	SR01 東肩		
161	40	48	須恵器	壺蓋	9.4	12.4	7.9	A区	SR01 西肩		
162	40		須恵器	壺蓋	(12.7)	—	—	A区	SR01 中央部		
163	40・78	81	須恵器	壺	—	—	(6.9)	A区	SR01 中央部		墨書「寺」
164	40	48	須恵器	壺A	—	—	7.5	A区	SR01 西肩		
165	40	48	須恵器	壺A	—	—	9.9	A区	SR01 東肩		
166	40	46	須恵器	壺	—	—	—	A区	SR01 中央部		黒漆付着
167	40	46	須恵器	壺B	—	—	(11.5)	A区	SR01 東肩		生漆付着
168	40		須恵器	底部(壺?)	—	—	(12.9)	A区	SR01 東肩		
169	40	47	須恵器	壺Q	(16.8)	—	—	A区	SR01 中央部		
170	40	47	須恵器	壺Q	(15.9)	14.6	11.2	A区	SR01 中央部		
171	40	47	須恵器	壺Q	(19.7)	(16.9)	(9.0)	A区	SR01 東肩		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
172	40	47	須恵器	壺Q	—	—	12.3	A区	SR01 東肩		
173	40	47	須恵器	壺Q	—	—	11.8	A区	SR01 中央部		△記号?
174	40	47	須恵器	壺Q	—	—	(13.3)	A区	SR01 中央部		
175	41	48	須恵器	片口鉢	(19.5)	—	—	A区	SR01 東肩		
176	41	48	須恵器	片口鉢	(25.2)	15.4	15.4	A区	SR01 西肩		
177	41	48	須恵器	甌	—	—	(15.2)	A区	SR01 東肩		
178	41	48	須恵器	鉢A	(21.5)	(12.0)	—	A区	SR01 東肩		
179	41	48	須恵器	鉢A	(21.5)	(9.7)	—	A区	SR01 東肩		
180	41		須恵器	鉢A	(23.3)	—	—	A区	SR01 東肩		
181	41		須恵器	鉢A	—	—	—	A区	SR01 西肩		
182	41		須恵器	平瓶の把手	—	—	—	A区	SR01 東肩		
183	41	48	土師器	土錘	長4.5	径1.0	厚1.2	A区	SR01 東肩		
184	41	48	土師器	土錘	長4.8	径1.6	厚1.6	A区	SR01 東肩		
185	41	48	須恵器	土錘	長4.6	径2.1	厚2.0	A区	SR01 東肩		
186	41	48	須恵器	土錘	長4.2	径2.3	厚2.3	A区	SR01 中央部		
187	42	49	須恵器	甌A	(24.7)	—	—	A区	SR01 東肩		
188	42	49	須恵器	甌A	(24.2)	—	—	A区	SR01 中央部		
189	42	49	須恵器	甌A	(20.4)	—	—	A区	SR01 西肩		
190	42	49	須恵器	甌A	17.0	31.9	—	A区	SR01 西肩		
191	42	49	須恵器	甌B	(24.9)	—	—	A区	SR01 西肩		
192	42	49	須恵器	甌C	(33.2)	—	—	A区	SR01 東肩		
193	42	49	須恵器	甌C	(38.0)	—	—	A区	SR01 中央部		
194	43	50	土師器	皿C	(14.4)	3.9	10.4	A区	SR01 東肩		
195	43	50	土師器	皿C	17.7	4.2	13.2	A区	SR01 東肩		
196	43		土師器	皿C	(19.5)	4.5	12.8	A区	SR01 中央部		化粧土
197	43		土師器	皿C	(13.8)	3.7	(11.6)	A区	SR01 西肩		化粧土
198	43	50	土師器	皿C	15.3	2.4	11.8	A区	SR01 東肩		
199	43	50・81	土師器	杯A	14.1	3.6	9.6	A区	SR01		墨書
200	43	50	土師器	杯A	(13.8)	3.7	(11.5)	A区	SR01 西肩		黒漆付着
201	43	46	土師器	杯A	(15.3)	4.1	(12.0)	A区	SR01 東肩		黒漆付着
202	43		土師器	杯A	(20.4)	4.6	(17.3)	A区	SR01 西肩		
203	43	50	土師器	杯A	(17.5)	(4.6)	(14.2)	A区	SR01 東肩		
204	43	50	土師器	杯A	18.2	4.0	13.3	A区	SR01 東肩		
205	43	50	土師器	杯A	(20.1)	(3.9)	(17.0)	A区	SR01 中央部		化粧土
206	43	50	土師器	杯A	17.7	3.2	16.1	A区	SR01 西肩		
207	43	50	土師器	杯A	17.8	2.9	—	A区	SR01 中央部		木ノ葉痕
208	43	50	土師器	杯A	(14.5)	(2.6)	(11.7)	A区	SR01 中央部		
209	43	50	土師器	杯A	(13.9)	(2.7)	(11.9)	A区	SR01 東肩		化粧土
210	43	50	土師器	杯A	(16.4)	(2.4)	(11.2)	A区	SR01 東肩		
211	43	50	土師器	杯A	(16.8)	(2.8)	(15.2)	A区	SR01 中央部		
212	43・78		土師器	杯A	(20.0)	(2.9)	—	A区	SR01 東肩		
213	43	50	土師器	杯A	17.4	2.8	14.7	A区	SR01 西肩		
214	43	50・81	土師器	杯A	16.5	2.4	14.3	A区	SR01 中央部		刻書

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
215	43	50	土師器	杯A	14.0	2.8	—	A区	SR01 中央部		木ノ葉痕
216	43		土師器	皿A	(18.6)	(2.4)	(16.0)	A区	SR01 東肩		化粧土
217	43		土師器	皿A	(20.6)	2.2	(19.2)	A区	SR01 西肩		化粧土
218	43	50	土師器	皿A	16.6	2.3	16.0	A区	SR01 東肩		化粧土
219	43	50	土師器	皿A	(17.2)	(2.3)	—	A区	SR01 西肩		灯明?、煤付着、化粧土
220	43	46	土師器	杯	—	—	—	A区	SR01 中央部		黒漆付着
221	43	50	土師器	椀A	(8.0)	3.5	—	A区	SR01 東肩		
222	43	50	土師器	椀A	12.8	4.1	—	A区	SR01 東肩		
223	43	50	土師器	椀A	13.1	3.7	—	A区	SR01 東肩		化粧土
224	43·78		土師器	椀A	(13.8)	5.0	—	A区	SR01 東肩		化粧土
225	43	50	土師器	杯	22.8	(5.8)	—	A区	SR01 中央部		
226	43	50	土師器	杯B蓋	(13.4)	—	—	A区	SR01 中央部		
227	43	50	土師器	杯B	(12.5)	(3.1)	(8.6)	A区	SR01 中央部		
228	43	50	土師器	杯B	18.2	5.0	(12.6)	A区	SR01 中央部		
229	43		土師器	皿	(31.6)	3.3	(25.5)	A区	SR01 西肩		
230	43		土師器	高杯	—	—	—	A区	SR01 西肩		
231	43		土師器	高杯	—	—	—	A区	SR01 中央部		
232	43		土製品	土錘	縦8.7	横5.6	厚3.5	A区	SR01 東肩		
233	44	51	土師器	片口鉢	17.9	15.2	—	A区	SR01 東肩		
234	44	51	土師器	鉢	20.0	(13.7)	—	A区	SR01 東肩		
235	44	51	土師器	甕D	(14.7)	(8.2)	—	A区	SR01 東肩		
236	44	52	土師器	甕B	(27.5)	—	—	A区	SR01 中央部		
237	44	52	土師器	甕A	(14.8)	—	—	A区	SR01 中央部		
238	44	52	土師器	甕A	(15.2)	—	—	A区	SR01 東肩		
239	44	52	土師器	甕A	(16.7)	—	—	A区	SR01 中央部		
240	44	51	土師器	甕A	16.7	14.2	—	A区	SR01 西肩		
241	44	51	土師器	甕A	16.7	14.3	—	A区	SR01 東肩		
242	44	51	土師器	甕A	21.7	(19.1)	—	A区	SR01 西肩		
243	44	52	土師器	甕A	(22.3)	—	—	A区	SR01 中央部		
244	44	52	土師器	甕A	(26.7)	—	—	A区	SR01 中央部		
245	45	52	土師器	甕C	(31.1)	—	—	A区	SR01 西肩		
246	45	52	土師器	甕C	(28.0)	—	—	A区	SR01 西肩		
247	45		土師器	甕C	(25.2)	—	—	A区	SR01 中央部		
248	45	51	土師器	甕C	25.7	—	—	A区	SR01 東肩		
249	45	52	土師器	甕C	(26.0)	—	—	A区	SR01 東肩		
250	45	51	土師器	甕C	28.6	—	—	A区	SR01 西肩		
251	45		土師器	甕C	(28.8)	—	—	A区	SR01 中央部		
252	45		土師器	甕C	(35.3)	—	—	A区	SR01 中央部		
253	45		土師器	鍋	(38.8)	—	—	A区	SR01 中央部		
254	46	53	土師器	竈	25.6	41.9	45.8	A区	SR01 西肩		
255	46	55	土師器	竈	25.8	44.5	45.5	A区	SR01 東肩		
256	46	54	土師器	竈(裾部)	29.2	—	—	A区	SR01 中央部		
257	46	54	土師器	竈(裾部)	—	—	(53.7)	A区	SR01 中央部		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
258	47	53	土師器	竈	(24.2)	—	—	A区	SR01 東肩		
259	47	55	土師器	竈	26.4	—	—	A区	SR01 中央部		
260	47	55	土師器	竈	—	—	—	A区	SR01 東肩		
261	47	55	土師器	竈	(26.8)	—	—	A区	SR01 西肩		
262	47	55	土師器	竈	25.2	—	—	A区	SR01 西肩		
263	47	55	土師器	竈(裾部)	—	—	—	A区	SR01 東肩		
264	47	55	土師器	竈(裾部)	—	—	—	A区	SR01 中央部		
265	48		土師器	製塙土器	(10.0)	4.5~	—	A区	SR01 東肩		
266	48		土師器	製塙土器	11.8	5.7~	—	A区	SR01		
267	48	56	土師器	製塙土器	(13.5)	(7.0)	—	A区	SR01 中央部		
268	48	56	土師器	製塙土器	(13.6)	(9.7)	—	A区	SR01 中央部		
269	48		土師器	製塙土器	(18.8)	残高6.0~	—	A区	SR01		
270	48		土師器	製塙土器	(12.0)	4.8~	—	A区	SR01		
271	48		土師器	製塙土器	(11.0)	残高8.8~	—	A区	SR01 中央部		
272	48	56	土師器	製塙土器	(11.2)	(9.1)	—	A区	SR01 中央部		
273	48		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
274	48		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
275	48		土師器	製塙土器	(9.4)	5.2~	—	A区	SR01 東肩		
276	48		土師器	製塙土器	10.0	残高4.5~	—	A区	SR01 東肩		
277	48		土師器	製塙土器	—	残高5.3~	—	A区	SR01		
278	48		土師器	製塙土器	(12.4)	残高5.0	—	A区	SR01 東肩		
279	48		土師器	製塙土器	(11.8)	(5.5以上)	—	A区	SR01		
280	48		土師器	製塙土器	(12.8)	(5.8)	—	A区	SR01 中央部		
281	48		土師器	製塙土器	(8.0)	9.1以上	—	A区	SR01 東肩		
282	48		土師器	製塙土器	(13.4)	残高6.5	—	A区	SR01 東肩		
283	48		土師器	製塙土器	(14.6)	8.6	—	A区	SR01 東肩		
284	48・49	56	土師器	製塙土器	9.0	残高3.7~	—	A区	SR01 東肩		
285	48	56	土師器	製塙土器	10.0	残高4.5~	—	A区	SR01		
286	48		土師器	製塙土器	—	残高4.5~	—	A区	SR01		
287	48		土師器	製塙土器	(11.8)	(7.4)	—	A区	SR01 東肩		
288	48		土師器	製塙土器	13.4	残高4.8	—	A区	SR01		
289	48		土師器	製塙土器	14.6	残高4.8	—	A区	SR01 東肩		
290	48		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
291	48		土師器	製塙土器	(12.2)	(6.2)	—	A区	SR01 東肩		
292	48		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
293	48		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
294	49		土師器	製塙土器	—	(6.1)	—	A区	SR01 東肩		
295	49		土師器	製塙土器	—	7.4~	—	A区	SR01 中央部		
296	49		土師器	製塙土器	—	残高6.0~	—	A区	SR01 東肩		
297	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
298	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
299	49		土師器	製塙土器	—	6.3~	—	A区	SR01		
300	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
301	49		土師器	製塙土器	—	残高6.8~	—	A区	SR01		
302	49		土師器	製塙土器	—	4.8~	—	A区	SR01 中央部		
303	49		土師器	製塙土器	—	5.7~	—	A区	SR01		
304	49		土師器	製塙土器	—	残高6.5~	—	A区	SR01 中央部		
305	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
306	49		土師器	製塙土器	—	残高(6.0)	—	A区	SR01 東肩		
307	49		土師器	製塙土器	—	5.7~	—	A区	SR01 西肩		
308	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
309	49		土師器	製塙土器	—	残高(6.4)	—	A区	SR01 東肩		
310	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
311	49		土師器	製塙土器	—	残高4.7~	—	A区	SR01 中央部		
312	49		土師器	製塙土器	—	残高6.5~	—	A区	SR01 東肩		
313	49		土師器	製塙土器	—	残高7.3~	—	A区	SR01 東肩		
314	49		土師器	製塙土器	—	5.5~	—	A区	SR01		
315	49		土師器	製塙土器	—	残高5.2~	—	A区	SR01 東肩		
316	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
317	49		土師器	製塙土器	—	残高5.7~	—	A区	SR01		
318	49		土師器	製塙土器	—	残高5.6~	—	A区	SR01		
319	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
320	49		土師器	製塙土器	—	残高7.0~	—	A区	SR01 東肩		
321	49		土師器	製塙土器	—	5.9~	—	A区	SR01 東肩		
322	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
323	49		土師器	製塙土器	—	残高6.4~	—	A区	SR01 東肩		
324	49		土師器	製塙土器	—	残高(6.6)	—	A区	SR01 東肩		
325	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
326	49		土師器	製塙土器	—	残高5.1~	—	A区	SR01 東肩		
327	49		土師器	製塙土器	—	残高7.7~	—	A区	SR01		
328	49		土師器	製塙土器	—	6.8~	—	A区	SR01 東肩		
329	49		土師器	製塙土器	—	残高4.4~	—	A区	SR01 東肩		
330	49		土師器	製塙土器	—	残高6.7~	—	A区	SR01 中央部		
331	49		土師器	製塙土器	—	7.1	—	A区	SR01 西肩		
332	49		土師器	製塙土器	—	残高6.8	—	A区	SR01		
333	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
334	49	56	土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
335	49		土師器	製塙土器	—	残高5.2	—	A区	SR01 東肩		
336	49		土師器	製塙土器	—	(6.5)	—	A区	SR01 東肩		
337	49	56	土師器	製塙土器	—	残高5.4~	—	A区	SR01 中央部		
338	49	56	土師器	製塙土器	—	7.0	—	A区	SR01		
339	49	56	土師器	製塙土器	—	残高4.2~	—	A区	SR01 東肩		
340	49	56	土師器	製塙土器	—	残高4.5~	—	A区	SR01 東肩		
341	49	56	土師器	製塙土器	—	残高5.3~	—	A区	SR01 中央部		
342	49		土師器	製塙土器	—	残高4.0	—	A区	SR01 東肩		
343	49	56	土師器	製塙土器	—	残高5.4~	—	A区	SR01		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
344	49	56	土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
345	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
346	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
347	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
348	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 西肩		
349	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
350	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
351	—	56	土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 中央部		
352	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区			
353	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
354	欠番										
355	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01		
356	49		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SR01 東肩		
357	49		土師器	製塙土器	—	残高2.9	—	A区	SR01 東肩		
358	49		土師器	製塙土器	—	残高1.2	—	A区	SR01		
359	49		土師器	製塙土器	—	残高1.5	—	A区	SR01 中央部		
360	49		土師器	製塙土器	—	残高1.3~	—	A区	SR01 東肩		
K1	50	56	瓦	平瓦	長20.2	幅12.8	厚1.6	A区	SR01 中央部		布目、タタキ
K2	50	56	瓦	平瓦	長30.2	幅11.8	—	A区	SR01 東肩		
J1	51	57	石製品	滑石製勾玉	長25.3mm	幅15.0mm	厚7.1mm	A区	SR01	黒色シルト下の灰色粗砂	3.2g
S1	51	57	石器	すり石	長91.0mm	幅85.5mm	厚65.5mm	A区	SR01		770.0g
S2	51	57	石器	磨石	長117.5mm	幅96.5mm	厚86.5mm	A区	SR01		1510.0g
S3	51	57	石器	すり石 (叩石か)	長128.0mm	幅65.0mm	厚59.5mm	A区	SR01東肩		794.0g
W1	51	57	木製品	角材	—	—	—	A区	SR01東肩		
S4	52	58	石器	楔形石器 (削器断片か)	長21.8mm	幅33.8mm	厚6.3mm	A区	SR01西肩		3.9g
S5	52	58	石器	剥片	長60.8mm	幅76.6mm	厚18.4mm	A区	SR01中央部		124.2g
S6	52	58	石器	砥石	長124.5mm	幅133.0mm	厚87.0mm	A区	SR01		1835.0g
S7	52	58	石器	サヌカト製 大型剥片	長133.3mm	幅167.0mm	厚21.0mm	A区	SR01東肩		560.0g
361	53		須恵器	杯B蓋	13.6	—	—	A区	SE01		
362	53	59	須恵器	杯A	—	—	(10.0)	A区	SE01		黒漆付着
363	53		須恵器	杯B	13.0	4.6	9.9	A区	SE01		
364	53	59	須恵器	壺Q	—	—	(10.8)	A区	SE01		
365	53	59	土師器	杯	(8.5)	2.3	(5.7)	A区	SE01		
366	53・80	59・83	土師器	杯	13.5	3.1	12.1	A区	SE01		墨書
367	53	59	土師器	杯	15.1	2.6	12.7	A区	SE01		化粧土
368	53	59	土師器	高杯	—	—	—	A区	SE01		暗文
369	53	56・59	土師器	製塙土器	(9.6)	—	—	A区	SE01		
370	53・80	59・83	土師器	杯	縦4.3	横4.3	厚0.9	A区	SE01		墨書、化粧土
371	53・80	59・83	土師器	杯	縦4.8	横3.9	厚0.6	A区	SE01		墨書、化粧土
W2	54	60	井戸枠材	隅柱	長117.5	幅9.8	厚8.8	A区	SE01	北西	
W3	54	60	井戸枠材	隅柱	長124.4	幅9.6	厚9.7	A区	SE01	北東	
W4	54	60	井戸枠材	隅柱	長143.8	幅9.8	厚10.1	A区	SE01	南東	
W5	54	60	井戸枠材	隅柱	長119.8	幅10.3	厚8.3	A区	SE01	南西	

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
W6	54	60	井戸枠材	横棟	115.5	6.7	6.9	A区	SE01	横棟(北)の下	
W7	54	60	井戸枠材	横棟	119.8(123.0)	7.5	6.9	A区	SE01	横棟(南)の下	
W10	55	61	井戸枠材	横板	133.3	(断)12.0 (太)13.1	4.4	A区	SE01	西4段目	
W11	55	61	井戸枠材	横板	135.2	(断)24.3	4.9	A区	SE01	西8段目	
W12	55	61	井戸枠材	孔あきの板	26.7	10.2	(断)2.4	A区	SE01	南側裏	
W13	55	61	容器	曲物	直径22.0	器高11.2	側板厚0.3 底板厚1.0	A区	SE01	最下層(下段横棟の下)	
W8	55	61	井戸枠材	横板	135.0	(断)24.4	5.9	A区	SE01	東6段目	
W9	55	61	井戸枠材	横板	133.7	(断)23.8	5.2	A区	SE01	東7段目	
372	56	62	二彩	壺	-	-	(3.6)	A区	SE02		
373	56・80	62・83	土師器	杯B	(18.1)	(4.6)	(11.5)	A区	SE02		墨書
374	56	62	土師器	杯A	(14.1)	(3.4)	(9.0)	A区	SE02		暗文
375	56	62	土師器	高杯(脚)	-	-	-	A区	SE02		暗文
376	56	62	土師器	杯A	(13.0)	(3.5)	(8.8)	A区	SE02		
377	56	62	土師器	椀	9.5	3.4	4.7	A区	SE02		煤付着
378	56	62	土師器	杯(底部)	-	-	(12.0)	A区	SE02		黒漆付着
379	56・80	83	須恵器	杯身	-	-	(10.7)	A区	SE02		墨書、黒漆、生漆付着
380	56		須恵器	高杯(脚)	-	-	-	A区	SE02		
381	56	62	須恵器	壺	-	-	9.2	A区	SE02		生漆付着
382	56	62	須恵器	壺A	-	-	(14.3)	A区	SE02		
383	56・80	83	須恵器	杯	-	-	-	A区	SE02		墨書
384	56	62	須恵器	甕	(36.2)	-	-	A区	SE02		
385	56		土師器	製塙土器	(11.6)	5.3	-	A区	SE02		
386	56		土師器	製塙土器	13.4	6.3	-	A区	SE02		
387	56		土師器	製塙土器	(8.2)	6.5	-	A区	SE02		
388	56		土師器	製塙土器	-	4.1~	-	A区	SE02		
389	56		土師器	製塙土器	-	4.2~	-	A区	SE02		
390	56		土師器	製塙土器	-	5.3~	-	A区	SE02		
391	56		土師器	製塙土器	-	残高5.8	-	A区	SE02		
392	56		土師器	製塙土器	-	5.6~	-	A区	SE02		
K3	57	63	瓦	丸瓦	長(7.5)	幅(11.4)	厚1.9	A区	SE02		
K4	57	63	瓦	平瓦	長(16.5)	幅(11.3)	厚2.4	A区	SE02		
K5	57	63	瓦	平瓦	長(20.5)	幅(16.7)	厚2.4	A区	SE02		
K6	58	63	瓦	平瓦	長(15.1)	幅(9.4)	厚2.4	A区	SE02		
K7	58	63	瓦	平瓦	長(13.8)	幅(12.4)	厚2.3	A区	SE02		
K8	58	63	瓦	平瓦	長(15.1)	幅(10.6)	厚2.4	A区	SE02		
W14	59	64	井戸枠材	隅柱	長220.5	幅9.9	厚8.3	A区	SE02	北西	
W15	59	64	井戸枠材	隅柱	長216.3	幅13.0	厚8.5	A区	SE02	北東	
W16	59	64	井戸枠材	隅柱	長221.5	幅11.8	厚7.8	A区	SE02	南東	
W17	59	64	井戸枠材	隅柱	長218.5	幅10.1	厚8.8	A区	SE02	南西	
W18	60	65	井戸枠材	横棟	長743(86.7)	幅7.8	厚5.3	A区	SE02	横棟(北)の中	
W19	60	65	井戸枠材	横棟	長713(77.8)	幅7.9	厚7.5	A区	SE02	横棟(東)の下	
W20	60	65	井戸枠材	横棟	長734?(86.5)	幅7.7	厚7.8	A区	SE02	横棟(南)の下	
W21	60	65	井戸枠材	横棟	長718(78.5)	幅8.1	厚6.1	A区	SE02	横棟(西)の下	

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
W22	60	65	井戸杵材	縦板	長(61.2)	幅10.9	厚2.3	A区	SE02	縦板(南)	
393	61・80	66・83	須恵器	甕B	(21.6)	—	—	A区	SK01		刻書
394	61		須恵器	皿A	(24.9)	(3.1)	(16.9)	A区	SK03		
395	61	66	須恵器	杯L蓋	(18.1)	—	—	A区	SK11		
396	61	66	須恵器	杯A	(13.1)	3.5	(9.0)	A区	SK11		
397	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK21		
398	61	66	須恵器	円面侃	—	—	—	A区	SK12		
399	61		須恵器	皿D	(23.5)	2.3	(19.9)	A区	SK19		
400	61	66	須恵器	杯B蓋	15.2	—	—	A区	SK22		
401	61	66	須恵器	杯A	(13.2)	3.9	(8.6)	A区	SK22		
402	61	66	須恵器	杯B	11.4	3.7	8.4	A区	SK22		
403	61	66	土師器	杯A	17.0	4.4	14.5	A区	SK22		
404	61	66	土師器	杯	(11.5)	3.6	7.2	A区	SK22		
405	61	66	土師器	製塙土器	(12.6)	—	—	A区	SK22		
406	61	56・66	土師器	製塙土器	(12.6)	—	—	A区	SK22		
407	61		土師器		(14.2)	—	—	A区	SK22		
408	61		土師器		(11.0)	—	—	A区	SK22		
409	61		土師器		—	—	—	A区	SK22		
410	61		土師器		—	—	—	A区	SK22		
411	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
412	61		土師器		—	—	—	A区	SK22		
413	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
414	61		土師器		—	—	—	A区	SK22		
415	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
416	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
417	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
418	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
419	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
420	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
421	61		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SK22		
422	61	66	土師器	高杯	—	—	—	A区	SK23		
423	62	66	須恵器	皿A	(19.3)	2.0	14.6	A区	SD01		
424	62	66	須恵器	杯B	(18.0)	5.4	(12.3)	A区	SD01		
425	62	66	須恵器	杯L	—	—	(10.1)	A区	SD01		
426	62	66	須恵器	壺K	—	—	11.6	A区	SD01		
427	62	66	須恵器	甕	(23.0)	—	—	A区	SD01		
428	62	66	須恵器	杯B蓋	14.2	—	—	A区	P34		
429	62	66	土師器	甕	(25.6)	—	—	A区	P28		
430	62	66	土師器	甕	14.4	13.8	—	A区	P20		
431	62		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SD02(SR01)		
432	62		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SD02(SR01)		
433	62		土師器	製塙土器	—	—	—	A区	SD02(SR01)		
434	62		土師器	製塙土器	(13.8)	—	—	A区	SD02(SR01)	遺構精査面	

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
M1	62		鉄製品	釘	長4.2	幅0.5	厚0.45	A区	SK34		
S8	62	58	石器	鏃	長28.4mm	幅17.0mm	厚3.8mm	A区	SK31		1.8g
435	63	67	土師器	皿	7.6	1.1	5.2	B区	焼土坑2		
436	63	67	土師器	皿	8.4	1.4	6.1	B区	焼土坑2		
437	63	67	土師器	皿	7.3	1.2	5.4	B区	焼土坑2		
438	63	67	土師器	皿	8.1	1.2	5.3	B区	焼土坑2		
439	63	67	土師器	皿	8.1	1.0	6.3	B区	焼土坑2		
440	63	67	土師器	皿	(8.0)	1.2	(6.4)	B区	焼土坑2		
441	63		土師器	皿	8.0	1.4	4.9	B区	焼土坑2		
442	63	67	土師器	皿	8.2	1.4	6.8	B区	焼土坑2		
443	63	67	土師器	皿	(8.2)	1.1	6.0	B区	焼土坑2		
444	63	67	土師器	皿	8.3	1.5	6.5	B区	焼土坑2		
445	63	67	土師器	皿	(8.8)	1.5	(4.5)	B区	焼土坑2		
446	63		土師器	托	7.2	3.8	6.1	B区	焼土坑2		
447	63		土師器	皿	(15.8)	(2.4)	(9.7)	B区	焼土坑2		
448	63	67	須恵器	椀	(16.1)	4.8	(7.9)	B区	焼土坑2		回転糸切り
449	63		須恵器	鉢	(29.1)	—	—	B区	焼土坑2		
450	63		須恵器	壺	—	—	—	B区	焼土坑2		
451	63		須恵器	甕	(17.7)	—	—	B区	焼土坑2		
452	63	67	白磁	碗	—	—	(6.5)	B区	焼土坑2		
453	63	67	白磁	皿	—	—	2.9	B区	焼土坑2		
454	63	67	白磁	皿	—	—	(3.6)	B区	焼土坑2		
K9	63	67	瓦	軒丸瓦	高12.4	長(6.4)	厚1.4	B区	焼土坑2		
K10	63	67	瓦	平瓦	—	—	—	B区	焼土坑2		
K11	63	67	瓦	軒丸瓦	—	—	—	B区	焼土坑2		
K12	63	67	瓦	平瓦	長(14.7)	幅(11.0)	厚2.0	B区	焼土坑2		
S9	63	67	石製品	石鍋	(21.7)	(6.6)	—	B区	焼土坑2		
455	64	68	須恵器	皿	8.6	2.0	6.0	B区	P29		回転糸切り
456	64		土師器	皿	(7.8)	1.2	(4.9)	B区	P29		
457	64		土師器	皿	(8.8)	(1.2)	(6.4)	B区	P30		
458	64		土師器	皿	(8.6)	(1.0)	(6.9)	B区	P85		
459	64		土師器	皿	(8.6)	1.4	(6.3)	B区	P37		
460	64		須恵器	椀	(15.6)	—	—	B区	P52		
461	64		土師器	皿	(20.5)	—	—	B区	P40		
462	64	68	土師器	皿	(15.0)	2.8	(8.3)	B区	P82		
463	64		須恵器	椀	(15.5)	—	—	B区	P31		
464	64		須恵器	椀	(15.4)	—	—	B区	P53		
465	64		須恵器	椀	(15.6)	(5.0)	(5.5)	B区	P97		
466	64		須恵器	椀	(18.2)	(4.3)	(8.0)	B区	P78		回転糸切り
467	64	68	須恵器	皿	7.6	1.6	5.0	B区	SP24		回転糸切り
468	64		須恵器	甕	(23.2)	—	—	B区	SP24		
469	64	68	土師器	皿	8.4	1.5	4.3	B区	SD09		
470	64	68	土師器	皿	8.4	1.5	6.9	B区	SD09		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
471	64	68	土師器	皿	13.8	2.8	10.2	B区	SD09		
472	64		土師器	皿	(15.8)	2.8	(13.5)	B区	SD09		
473	64	68	白磁	碗	(16.3)	(3.1)	-	B区	SD12		
474	64		須恵器	杯B	(13.1)	4.2	(10.0)	B区	SD05		
475	64	68	須恵器	台付皿	17.6	4.1	(13.4)	B区	SD05		
476	64	68	須恵器	台付皿	(16.7)	3.9	(12.5)	B区	SD05		
477	64		須恵器	皿A	(24.6)	(2.8)	(21.9)	B区	SD05		
478	64		須恵器	皿A	(18.7)	2.8	(16.1)	B区	SD05		
479	64	68	須恵器	壺Q	(16.6)	-	-	B区	SD05		
480	64	68	土師器	甌	-	-	-	B区	SD05		
K13	64	68	瓦	平瓦	縦(16.3)	横(16.2)	厚(2.4)	B区	SD05		
481	65	69	弥生土器	壺	(14.5)	(12.3)	-	B区	SD01		
482	65	69	弥生土器	壺	(14.2)	(12.6)	-	B区	SD01		
483	65	69	弥生土器	壺	(25.2)	-	-	B区	SD01		
484	65	69	弥生土器	壺	(20.7)	-	-	B区	SD01-2		
485	65	69	弥生土器	鉢	(42.0)	-	-	B区	SD01-3		
486	65	69	弥生土器	鉢	(22.4)	15.7	5.7	B区	SD01		
487	65	69	弥生土器	小型器台	(10.0)	-	-	B区	SD01(第2層)		
488	65	69	弥生土器	高杯	-	-	(14.7)	B区	SD01(第2層)		
489	65	69	弥生土器	小型器台	-	-	(12.1)	B区	SD01-3		
490	66	70	弥生土器	甌	(15.6)	-	-	B区	SD01-2		
491	66	70	弥生土器	甌	(15.5)	-	-	B区	SD01-2		
492	66	70	弥生土器	甌	(16.2)	-	-	B区	SD01-2		
493	66	70	弥生土器	甌	(15.0)	-	-	B区	SD01		
494	66	70	弥生土器	甌	(15.6)	-	-	B区	SD01-2		
495	66	70	弥生土器	甌	(22.7)	-	-	B区	SD01 B断面(北側)		
496	66	70	弥生土器	甌	17.3	-	-	B区	SD01-2		
497	66	70	弥生土器	甌	15.4	-	-	B区	SD01-3		
498	66	70	弥生土器	甌	-	-	(5.9)	B区	SD01-2		
499	66	70	弥生土器	甌	-	-	(5.2)	B区	SD01-3		
500	66	70	弥生土器	壺	-	-	(13.9)	B区	SD01		
501	66	70	弥生土器	紡錘車	縦(3.0)	横4.3	厚0.5	B区	SD01		
502	66	70	縄文土器	深鉢	(27.0)	-	-	B区	SD01		
503	67		須恵器	杯B蓋	(20.5)	-	-	C区	P14		
504	67	71	須恵器	杯B	(15.8)	4.9	(11.4)	C区	P17		
505	67		須恵器	杯A	(15.8)	3.5	(12.3)	C区	P17		
506	67		土師器	杯	(13.8)	3.5	(10.5)	C区	P17		
507	67	71	須恵器	椀	(13.5)	4.9	5.3	C区	SD02		回転糸切り
508	67		土師器	托	-	-	4.7	C区	SD02		
509	67		土師器	托	-	-	5.6	C区	SD02		
510	67		土師器	托	-	-	(5.3)	C区	SD02		
511	67		土師器	托	-	-	5.2	C区	SD02		
512	67		土師器	托	-	-	5.6	C区	SD02		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
513	67		土師器	托	—	—	6.3	C区	SD02		回転糸切り
514	67		須恵器	杯B	15.9	4.9	11.8	C区	SD02		
515	67		須恵器	杯B	(15.2)	6.7	(9.9)	C区	SD02		
516	67	71	須恵器	椀A	(9.9)	4.1	(6.9)	C区	SD02		
517	67		須恵器	杯A	(12.8)	3.5	(7.8)	C区	SD02		ヘラ描き文
518	67	71	須恵器	杯L	(18.7)	5.5	(7.2)	C区	SD02		
519	67		須恵器	杯L	—	(2.3)	8.8	C区	SD02		
520	67	71	須恵器	杯A	—	(1.4)	(9.0)	C区	SD02		黒漆付着
521	67	71	須恵器	杯A	—	(3.1)	(11.3)	C区	SD02		黒漆付着
522	67・81	71・84	須恵器	杯	—	—	—	C区	SD02		墨書
523	67		須恵器	皿B蓋	(31.8)	—	—	C区	SD02		
524	67		須恵器	皿B	(23.7)	5.0	(19.3)	C区	SD02		
525	67		須恵器	高杯	(23.0)	—	—	C区	SD02		
526	67		須恵器	壺Q	—	—	(9.3)	C区	SD02		
527	67		土師器	杯	(12.3)	2.3	(10.3)	C区	SD02		
528	67		土師器	杯A	(16.3)	3.6	(12.7)	C区	SD02		
529	67	71	土師器	杯	(15.4)	(4.3)	—	C区	SD02		黒漆付着
530	67	71	土師器	甕A	(14.9)	—	—	C区	SD02		
K14	67	71	瓦	軒丸瓦	—	—	—	C区	SD02		
531	68		土師器	椀	(16.7)	5.2	(9.8)	C区	SD02付近		
532	68		須恵器	椀	(15.7)	—	—	C区	包含層		
533	68	71	須恵器	杯B蓋	(16.6)	2.7	—	C区	SD02付近		
534	68	71	須恵器	杯B	13.3	3.9	9.9	C区	SD02		
535	68	71	須恵器	杯B	(10.7)	3.9	(7.5)	C区	SD02付近		
536	68	71	須恵器	杯A	14.0	3.0	10.6	C区	SD02付近		
537	68	71	須恵器	杯A	14.2	3.5	10.8	C区	SD02付近		
538	68		土製品	土錘	長4.4	幅1.1	厚1.2	C区	包含層		
539	68		土師器	杯C	(15.5)	3.4	(11.1)	C区	SD02		
540	68		土師器	杯C	(16.0)	(4.6)	(12.3)	C区	包含層		
541	68		土師器	杯A	14.1	3.3	11.5	C区	包含層		
542	68		土師器	杯	(13.0)	3.3	(9.5)	C区	包含層		
543	68	71	土師器	杯C	—	—	(10.0)	C区	包含層		黒漆付着
544	68	71	土師器	杯	—	—	(7.0)	C区	SD02付近		黒漆付着
545	68		土師器	甕B	(27.6)	—	—	C区	包含層		
546	68		須恵器	壺A	(12.9)	—	—	C区	SD02		
547	69	72	弥生土器	甕	—	—	6.0	C区	P15		
548	69	72	弥生土器	甕	—	—	9.7	C区	SK07		
549	69	72	弥生土器	壺	—	—	—	C区	SK07		
550	69	72	弥生土器	壺	—	—	—	C区	SD07		ヘラ描き
551	69	72	弥生土器	甕	(35.3)	—	—	C区	SD02		
552	69	72	弥生土器	甕	(18.5)	—	—	C区	SD07		
553	69	72	弥生土器	甕	—	—	—	C区	SD08		
554	69	72	縄文土器	深鉢	—	—	—	C区	SD08		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
555	69	72	弥生土器	鉢	(27.4)	—	—	C区	SD08		
556	69	72	弥生土器	壺	—	—	(7.0)	C区	SD08		
557	69	72	弥生土器	壺	—	—	—	C区	包含層		
558	69	72	弥生土器	鉢	—	—	—	C区	包含層		
S10	69	72	石器	鎌	長23.5mm	幅15.0mm	厚4.5mm	C区	SD02		1.6g
S11	69	72	石器	楔形石器	長47.0mm	幅31.5mm	厚5.0mm	C区	SD08		9.7g
559	70	73	須恵器	杯B蓋	18.4	—	—	D区	S26		
560	70	73	須恵器	杯B蓋	(18.2)	—	—	D区	S26		
561	70	73	須恵器	杯L蓋	(18.3)	—	—	D区	S26		
562	70	73	須恵器	杯B	(12.1)	3.3	(8.7)	D区	S26		
563	70	73	須恵器	杯B	(18.1)	5.7	(12.1)	D区	S26		
564	70	73	須恵器	杯L	(15.4)	5.9	(8.3)	D区	S26		
565	70		須恵器	杯E	(10.8)	4.3	(8.3)	D区	S26		
566	70	73	須恵器	杯A	(14.0)	2.8	(11.9)	D区	S26		ヘラ記号
567	70	73	須恵器	壺	(7.6)	—	—	D区	S26		
568	70	73	須恵器	皿D	18.3	2.3	15.9	D区	S26		墨書
569	70		須恵器	壺	—	—	(13.5)	D区	S26		
570	70	73	土師器	甕	(20.1)	—	—	D区	S26 下底		
571	70	73	土師器	甕	(15.9)	—	—	D区	S26		
572	70	73	土師器	皿A	—	—	—	D区	S26		
573	70	73	土師器	杯	(18.0)	3.8	(14.0)	D区	S26		
574	70	73	土師器	杯C	(17.8)	3.9	—	D区	S26		
575	70	73	土師器	杯B	(18.4)	5.3	(13.4)	D区	S26		
576	70		土師器	杯	(13.9)	2.9	(10.1)	D区	S26		
577	70	73	土師器	杯	(16.0)	3.4	(12.7)	D区	S26		
578	71	73	須恵器	杯A	15.8	(3.4)	12.6	D区	SK01		
579	71	73	土師器	片口鉢	—	—	—	D区	SK01		
580	71	73	土師器	甕C	27.5	27.1	—	D区	SX01		
581	71		須恵器	杯B	—	—	(11.8)	D区	SK08		
582	71		須恵器	皿A	(17.4)	—	—	D区	SK08		
583	71		須恵器	片口鉢	(32.4)	—	—	D区	SK08		
584	71		須恵器	甕	(24.2)	—	—	D区	SD02		
585	71	73	須恵器	壺E	(8.3)	(8.1)	5.7	D区	SD01		
586	71		土師器	杯A	14.8	3.1	10.9	D区	SD01		
587	71	74	弥生土器	鉢	9.5	5.2	3.5	D区	SK06		
588	71	74	弥生土器	高杯	—	—	(7.4)	D区	SK11		
589	71	74	弥生土器	甕	(10.6)	9.3	(4.0)	D区	SK11		
590	71	74	弥生土器	高杯	11.0	—	—	D区	SK12		
591	71	74	弥生土器	器台	—	—	(9.5)	D区	SK06		
592	71	74	弥生土器	鉢	9.3	5.8	1.2	D区	SK11		
593	71	74	弥生土器	鉢	(9.6)	4.0	(2.2)	D区	SK14		
594	72	75	土師器	皿	(8.2)	(1.5)	(4.2)	D区	P43		
595	72	75	土師器	皿	8.2	1.4	5.3	D区	SK01		

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
596	72	75	土師器	皿	8.6	1.8	6.1	D区	SK01		
597	72	75	土師器	皿	7.8	1.7	4.3	D区	SK01		
598	72	75	土師器	皿	8.5	1.5	7.4	D区	SK01		
599	72	75	土師器	皿	8.2	1.6	6.9	D区	SK01		
600	72	75	土師器	皿	8.0	1.5	7.4	D区	SK02 土器群		
601	72	75	土師器	皿	8.2	1.6	6.8	D区	SK02 土器群		
602	72	75	土師器	皿	8.3	1.6	3.7	D区	SK02		
603	72	75	土師器	皿	8.1	1.6	4.0	D区	SK02		
604	72	75	土師器	皿	8.3	1.7	7.2	D区	SK02		
605	72	75	土師器	皿	8.5	1.6	7.6	D区	SK02		
606	72	75	土師器	皿	8.4	1.7	6.9	D区	SK02		
607	72	75	土師器	皿	8.7	1.6	7.5	D区	SK02		
608	72	75	土師器	皿	8.4	1.5	6.5	D区	SK02 サブレ西側		
609	72	75	土師器	皿	8.5	1.6	7.4	D区	SK02 東西アゼ		
610	72	75	土師器	皿	7.9	1.7	4.7	D区	SK02 東西アゼ		
611	72	75	土師器	皿	8.0	1.8	7.0	D区	SK02 土器群1、東西アゼ		
612	72	75	土師器	皿	7.7	1.7	3.4	D区	SK02 北側掘り残し分		
613	72	75	土師器	皿	9.0	1.6	7.6	D区	SK01, SK02 北側掘り残し分		
614	72	75	土師器	皿	8.1	2.3	5.1	D区	SK02		
615	72	75	土師器	皿	(12.7)	2.3	10.5	D区	SK02 東西アゼ		
616	72	75	土師器	皿	12.8	1.5	9.8	D区	SK02 東西アゼ		
617	72	75	土師器	皿	13.3	2.6	9.7	D区	SK02 土器群1		
618	72	75	土師器	皿	(13.1)	3.2	6.7	D区	SK02 土器群1		
619	72	75	須恵器	椀	(15.6)	4.9	(7.0)	D区	SK02		
620	72	75	須恵器	椀	(15.5)	4.2	(7.8)	D区	SK02		
621	72	75	瓦器	椀	(14.7)	—	—	D区	SK02		
622	72	75	須恵器	鉢	(28.5)	—	—	D区	SK02		
623	72	75	青磁	碗	(16.7)	(2.3)	—	D区	SK02		
624	72	75	白磁	碗	(15.4)	(2.5)	—	D区	SK02		
625	72	75	瓦器	羽釜	(19.1)	(5.4)	—	D区	SK02		
626	72	75	土師器	甕	(16.7)	(7.0)	—	D区	SK02		
627	72	75	土師器	鍋	(31.2)	(6.5)	—	D区	SK02 土器群1		
628	72	75	須恵器	椀	(16.0)	4.2	6.4	D区	包含層		回転糸切り
629	72	75	須恵器	椀	(17.0)	5.2	5.2	D区	包含層		回転糸切り
630	72	75	無釉陶器	壺	(9.8)	(14.4)	—	D区	包含層1		
631	72	75	土師器	皿	7.8	1.4	5.7	D区	包含層		灯明の痕跡、回転糸切り
M10	73	76	銅製品	錢(寛永通寶)	φ2.475	厚0.145	0.0	D区	搅乱01		
M11	73	76	銅製品	錢(寛永通寶)	φ2.46	厚0.135	0.0	D区	搅乱06周辺	第7層(包含層2)	
M12	73	76	銅製品	錢(寛永通寶)	φ2.44	厚0.13	0.0	D区			
M2	73	76	鉄製品	釘	長3.72	幅0.69	厚0.47	D区	SK02	南北アゼ断面上層部	
M3	73	76	鉄製品	釘	長3.0	幅0.3	厚0.4	D区	SK07	第3層	
M4	73	76	鉄製品	釘	長4.75	幅0.4	厚0.4	D区		包含層	No.5・No.6一括
M5	73	76	鉄製品	釘	長6.6	幅0.6	厚0.5	D区		包含層	No.5・No.6一括

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			地区	出土遺構	層位	備考
					口径	器高	底径				
M6	73	76	鉄製品	釘	長6.6	巾0.4	厚0.45	D区	石組み遺構		
M7	73	76	鉄製品	小札?	長5.5	巾2.4	厚0.15	D区	SD01		
M8	73	76	銅製品	鏡(神功開寶)	φ2.5(?)	—	厚2.15mm	D区	SK05	①上層	
M9	73	76	銅製品	鏡(咸平元寶)	φ2.44	—	厚0.85mm	D区		暗灰色シルト層	
632	74	77	土師器	杯A	13.2	2.9	9.3	E区	SK02		
633	74	77	土師器	杯A	(16.8)	4.7	12.2	E区	SK05		
634	74	77	土師器	杯A	14.9	4.2	9.0	E区	SK05		
635	74	77	土師器	杯A	(17.6)	3.9	(13.3)	E区	SK05		
636	74		須恵器	杯B蓋	(19.5)	—	—	E区	SK05		
637	74	77	須恵器	杯B蓋	(19.6)	—	—	E区	SK05		
638	74・81	77・84	須恵器	杯B	(17.3)	6.2	(11.4)	E区	SK05		墨書
639	欠番										
640	74	77	須恵器	壺	—	—	14.8	E区	SK05		
641	74		須恵器	杯A	(13.8)	2.9	(10.1)	E区	SK05		
642	74	77	土師器	皿	(12.9)	2.2	(9.5)	F区	SD01		
643	74	77	土師器	皿	(13.2)	2.5	—	F区	SD01、SD02		
644	74	77	須恵器	椀	—	—	(6.1)	F区	SD01		
645	74	77	須恵器	鉢	—	—	(8.5)	F区	SD01		
646	74	77	土師器	甕	(30.6)	—	—	F区	P17		
647	74	77	土師器	甕	(35.0)	(26.7)	—	F区	P17		
648	74	77	土師器	杯	14.7	3.2	9.4	F区	P11		

第13表 出土遺物一覧(2)近世の陶磁器他

報告番号	出土場所	種別	成器種	口径(cm)	す器高(cm)	底径(cm)	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
649	A区 SD01	染付磁器	皿	1.85	6	6	高台は浅く削りだす。底部の器壁は非常に厚い。	内面 吳須で草花文施文。	高台削付に砂付着。肥前系。波佐見産。
650	A区 SD01南側	染付磁器	皿	11.7	1.2	6	高台は低く、細い。底部の器壁は比較的厚い。	底部内面 吳須で草花文施文。	高台削付に砂付着。肥前系。
651	A区	陶胎染付	蓋	3.6	5	5	器部は僅かに内湾。つまみは比較的高く、外方に開く。若干「ハ」の字状に、外方に開く。	外面 吳須文字施文。内面 無文。	碗蓋。产地不明。
652	A区	施釉陶器	瓶	5.7	8.1	9.2	平底。体部直立。	内外面ともロクロナテ調整。	体部外表面の下位にスタンプ。外面鉛釉施釉。
653	A区	施釉陶器	秉燭	8.7	3.85	4.1	体部は中空。平底。体部は大きく外反し、口縁部内面に凸起が1条。巡る。	口縁部内面～外面 透明釉施釉。底部外面上は露胎。底部外面上に糸切り痕。	京・信楽系。19世紀前半以降。
654	A区	施釉陶器	蓋	1.8			落し蓋。体部はほぼ直立。口縁部は外方に水平に折り曲げる。上面の中央部につまみを貼り付ける。	外面 施釉。内面 露胎。露胎部にヘラ削り痕が観察される。	京焼系。19世紀前半以降。
655	A区	無釉陶器	甕	5.9			口縁部は断面楕円形状に肥厚。	内外面ともナデ調整。	備前焼IV期。15世紀代。
656	A区	染付磁器	皿	2.3	5.4	5.4	高台は低く、細い。底部の器壁は比較的厚い。体部は内湾気味に斜め上方に立ち上る。	内面 吳須で草花文施文。	高台削付に砂付着。肥前系。
657	A区	施釉陶器	蓋	1.75	4	4	器壁は全体に比較的薄い。高台は幅が広く浅く削りだす。	内面～外表面の高台脇今まで灰釉施釉。外表面の高台脇以下露胎。	底部内面 砂目跡4箇所。肥前系唐津。17世纪前半。
658	A区	白磁	碗	2.1	4.3	4.3	底部の器壁は非常に厚い。高台は比較的厚く、低い。高台削付中央をト巾状に削り残す。	内外面とも透明釉施釉。外表面の高台脇以下露胎。	产地不明。
659	A区	白磁	皿	1.7	4	4	器壁は全体に比較的薄い。高台は比較的細く低い。体部は内湾気味に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に收まる。	内外面とも唐草文を吳須で描く。高台裏に各印捺印。	肥前系。波佐見産の粗製の磁器皿。18世纪前半。
660	A区	染付磁器	皿	10.9	2.25	6.15	型作り成形。内面に布目压模が見られる。穿孔1箇所。	内外面ともナデ調整。	清朝青花あるいはその写し。19世紀前半以降。
661	A区	無釉陶器	蓋	8.3	2.2				产地不明。
662	A区	土製品	面子	4.4	幅 4.6	厚さ 1.2	型作り成形。上面に型押して木ノ葉文施文。	内外面ともナデ調整。	彩色は全て剥落。
663	A区	施釉陶器	碗	5.7	4.2	2.7	高台は比較的細く、高い。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。	外面 ナマコ釉施釉。	产地不明。
664	A区	染付磁器	小碗	6.5	4.4	3	高台は細く低い。体部は僅かに内湾気味に斜め上方に延びる。口縁部は僅かに外反する。	外面 吳須 草花文施文。内面 無文。	肥前系？ 19世紀前半以降か？。
665	A区	染付磁器	角皿	9	1.9	5.9	型作り成形。平面形状は菱形。	内面 馬・唐草文施文。外面 菱形文施文。产地不明。あるいは京焼系か？。	
666	A区	染付磁器	蓋	7.3	2.3		つまみは比較的細く高い。体部は僅かに内湾。口縁端部は尖り気味。	外面 吳須 巴文。内面 界線1条。	产地不明。あるいは瀬戸・美濃系か？。
667	A区	染付磁器	德利	14.5	5.7	5.7	平底。体部は僅かに内湾してほぼ直線上に延びる。底部の器壁は薄い。	外面 吳須 山水楼閨文。	产地不明。
668	A区	青磁	蓋				つまみは比較的幅が広く、低い。体部は内湾する。底部の器壁は比較的厚い。	内面 吳須 絵格子文・界線2条・コニニヤ ク印判で五弁蓮花文施文。	肥前系。碗蓋。18世紀後半～19世紀前半。

第14表 出土遺物一覧(3)汽車土瓶他

報告番号	種別	器種	法量 口径(cm)	法量 底径(cm)	器高(cm)	外 色	内 調(油漬)	胎土	特 微	
									外 面	内 面
659	施釉陶器	碗	(14.0)	(5.8)	6.7	N8/灰白	N8/灰白	1/5	10YR8/3浅黄橙, 砂粒少量	白釉→鉢身(蒸氣燒過), 高台端部:無釉
670	施釉陶器	湯呑	5.7	3.0	3.5	10YR6/4N-5N-6N-7N-8N-9N-10N-11N-12N-13N-14N-15N-16N-17N-18N-19N-20N-21N-22N-23N-24N-25N-26N-27N-28N-29N-30N-31N-32N-33N-34N-35N-36N-37N-38N-39N-40N-41N-42N-43N-44N-45N-46N-47N-48N-49N-50N-51N-52N-53N-54N-55N-56N-57N-58N-59N-60N-61N-62N-63N-64N-65N-66N-67N-68N-69N-70N-71N-72N-73N-74N-75N-76N-77N-78N-79N-80N-81N-82N-83N-84N-85N-86N-87N-88N-89N-90N-91N-92N-93N-94N-95N-96N-97N-98N-99N-100N-101N-102N-103N-104N-105N-106N-107N-108N-109N-110N-111N-112N-113N-114N-115N-116N-117N-118N-119N-120N-121N-122N-123N-124N-125N-126N-127N-128N-129N-130N-131N-132N-133N-134N-135N-136N-137N-138N-139N-140N-141N-142N-143N-144N-145N-146N-147N-148N-149N-150N-151N-152N-153N-154N-155N-156N-157N-158N-159N-160N-161N-162N-163N-164N-165N-166N-167N-168N-169N-170N-171N-172N-173N-174N-175N-176N-177N-178N-179N-180N-181N-182N-183N-184N-185N-186N-187N-188N-189N-190N-191N-192N-193N-194N-195N-196N-197N-198N-199N-200N-201N-202N-203N-204N-205N-206N-207N-208N-209N-210N-211N-212N-213N-214N-215N-216N-217N-218N-219N-220N-221N-222N-223N-224N-225N-226N-227N-228N-229N-230N-231N-232N-233N-234N-235N-236N-237N-238N-239N-240N-241N-242N-243N-244N-245N-246N-247N-248N-249N-250N-251N-252N-253N-254N-255N-256N-257N-258N-259N-260N-261N-262N-263N-264N-265N-266N-267N-268N-269N-270N-271N-272N-273N-274N-275N-276N-277N-278N-279N-280N-281N-282N-283N-284N-285N-286N-287N-288N-289N-290N-291N-292N-293N-294N-295N-296N-297N-298N-299N-300N-301N-302N-303N-304N-305N-306N-307N-308N-309N-310N-311N-312N-313N-314N-315N-316N-317N-318N-319N-320N-321N-322N-323N-324N-325N-326N-327N-328N-329N-330N-331N-332N-333N-334N-335N-336N-337N-338N-339N-340N-341N-342N-343N-344N-345N-346N-347N-348N-349N-350N-351N-352N-353N-354N-355N-356N-357N-358N-359N-360N-361N-362N-363N-364N-365N-366N-367N-368N-369N-370N-371N-372N-373N-374N-375N-376N-377N-378N-379N-380N-381N-382N-383N-384N-385N-386N-387N-388N-389N-390N-391N-392N-393N-394N-395N-396N-397N-398N-399N-400N-401N-402N-403N-404N-405N-406N-407N-408N-409N-410N-411N-412N-413N-414N-415N-416N-417N-418N-419N-420N-421N-422N-423N-424N-425N-426N-427N-428N-429N-430N-431N-432N-433N-434N-435N-436N-437N-438N-439N-440N-441N-442N-443N-444N-445N-446N-447N-448N-449N-450N-451N-452N-453N-454N-455N-456N-457N-458N-459N-460N-461N-462N-463N-464N-465N-466N-467N-468N-469N-470N-471N-472N-473N-474N-475N-476N-477N-478N-479N-480N-481N-482N-483N-484N-485N-486N-487N-488N-489N-490N-491N-492N-493N-494N-495N-496N-497N-498N-499N-500N-501N-502N-503N-504N-505N-506N-507N-508N-509N-510N-511N-512N-513N-514N-515N-516N-517N-518N-519N-520N-521N-522N-523N-524N-525N-526N-527N-528N-529N-530N-531N-532N-533N-534N-535N-536N-537N-538N-539N-540N-541N-542N-543N-544N-545N-546N-547N-548N-549N-550N-551N-552N-553N-554N-555N-556N-557N-558N-559N-560N-561N-562N-563N-564N-565N-566N-567N-568N-569N-570N-571N-572N-573N-574N-575N-576N-577N-578N-579N-580N-581N-582N-583N-584N-585N-586N-587N-588N-589N-589N-590N-591N-592N-593N-594N-595N-596N-597N-598N-599N-599N-600N-601N-602N-603N-604N-605N-606N-607N-608N-609N-609N-610N-611N-612N-613N-614N-615N-616N-617N-618N-619N-619N-620N-621N-622N-623N-624N-625N-626N-627N-628N-629N-629N-630N-631N-632N-633N-634N-635N-636N-637N-638N-639N-639N-640N-641N-642N-643N-644N-645N-646N-647N-648N-649N-649N-650N-651N-652N-653N-654N-655N-656N-657N-658N-658N-659N-660N-661N-662N-663N-664N-665N-666N-667N-668N-669N-669N-670N-671N-672N-673N-674N-675N-676N-677N-678N-679N-680N-681N-682N-683N-684N-685N-686N-687N-688N-689N-689N-690N-691N-692N-693N-694N-695N-696N-697N-698N-698N-699N-699N-700N-701N-702N-703N-704N-705N-706N-707N-708N-709N-709N-710N-711N-712N-713N-714N-715N-716N-717N-718N-719N-719N-720N-721N-722N-723N-724N-725N-726N-727N-728N-729N-729N-730N-731N-732N-733N-734N-735N-736N-737N-738N-739N-739N-740N-741N-742N-743N-744N-745N-746N-747N-748N-749N-749N-750N-751N-752N-753N-754N-755N-756N-757N-758N-758N-759N-759N-760N-761N-762N-763N-764N-765N-766N-767N-768N-769N-769N-770N-771N-772N-773N-774N-775N-776N-777N-778N-778N-779N-779N-780N-781N-782N-783N-784N-785N-786N-787N-788N-788N-789N-789N-790N-791N-792N-793N-794N-795N-796N-797N-798N-798N-799N-799N-800N-801N-802N-803N-804N-805N-806N-807N-808N-808N-809N-809N-810N-811N-812N-813N-814N-815N-816N-816N-817N-817N-818N-819N-819N-820N-821N-822N-823N-824N-825N-826N-827N-828N-829N-829N-830N-831N-832N-833N-834N-835N-836N-837N-838N-839N-839N-840N-841N-842N-843N-844N-845N-846N-847N-848N-849N-849N-850N-851N-852N-853N-854N-855N-856N-857N-858N-858N-859N-859N-860N-861N-862N-863N-864N-865N-866N-867N-868N-869N-869N-870N-871N-872N-873N-874N-875N-876N-877N-878N-878N-879N-879N-880N-881N-882N-883N-884N-885N-886N-887N-888N-888N-889N-889N-890N-891N-892N-893N-894N-895N-896N-897N-898N-898N-899N-899N-900N-901N-902N-903N-904N-905N-906N-907N-908N-908N-909N-909N-910N-911N-912N-913N-914N-915N-916N-916N-917N-917N-918N-919N-919N-920N-921N-922N-923N-924N-925N-926N-927N-928N-929N-929N-930N-931N-932N-933N-934N-935N-936N-937N-938N-939N-939N-940N-941N-942N-943N-944N-945N-946N-947N-948N-949N-949N-950N-951N-952N-953N-954N-955N-956N-957N-958N-958N-959N-959N-960N-961N-962N-963N-964N-965N-966N-967N-968N-969N-969N-970N-971N-972N-973N-974N-975N-976N-977N-978N-978N-979N-979N-980N-981N-982N-983N-984N-985N-986N-987N-988N-988N-989N-989N-990N-991N-992N-993N-994N-995N-996N-997N-997N-998N-998N-999N-999N-1000N-1001N-1002N-1003N-1004N-1005N-1006N-1007N-1008N-1008N-1009N-1009N-1010N-1011N-1012N-1013N-1014N-1015N-1016N-1016N-1017N-1017N-1018N-1019N-1019N-1020N-1021N-1022N-1023N-1024N-1025N-1026N-1027N-1028N-1029N-1029N-1030N-1031N-1032N-1033N-1034N-1035N-1036N-1037N-1038N-1039N-1039N-1040N-1041N-1042N-1043N-1044N-1045N-1046N-1047N-1048N-1049N-1049N-1050N-1051N-1052N-1053N-1054N-1055N-1056N-1057N-1058N-1058N-1059N-1059N-1060N-1061N-1062N-1063N-1064N-1065N-1066N-1067N-1068N-1069N-1069N-1070N-1071N-1072N-1073N-1074N-1075N-1076N-1077N-1078N-1078N-1079N-1079N-1080N-1081N-1082N-1083N-1084N-1085N-1086N-1087N-1088N-1088N-1089N-1089N-1090N-1091N-1092N-1093N-1094N-1095N-1096N-1097N-1097N-1098N-1098N-1099N-1099N-1100N-1101N-1102N-1103N-1104N-1105N-1106N-1107N-1108N-1108N-1109N-1109N-1110N-1111N-1112N-1113N-1114N-1115N-1116N-1116N-1117N-1117N-1118N-1119N-1119N-1120N-1121N-1122N-1123N-1124N-1125N-1126N-1127N-1128N-1129N-1129N-1130N-1131N-1132N-1133N-1134N-1135N-1136N-1137N-1138N-1139N-1139N-1140N-1141N-1142N-1143N-1144N-1145N-1146N-1147N-1148N-1149N-1149N-1150N-1151N-1152N-1153N-1154N-1155N-1156N-1157N-1158N-1158N-1159N-1159N-1160N-1161N-1162N-1163N-1164N-1165N-1166N-1167N-1168N-1169N-1169N-1170N-1171N-1172N-1173N-1174N-1175N-1176N-1177N-1178N-1178N-1179N-1179N-1180N-1181N-1182N-1183N-1184N-1185N-1186N-1187N-1188N-1188N-1189N-1189N-1190N-1191N-1192N-1193N-1194N-1195N-1196N-1197N-1197N-1198N-1198N-1199N-1199N-1200N-1201N-1202N-1203N-1204N-1205N-1206N-1207N-1208N-1208N-1209N-1209N-1210N-1211N-1212N-1213N-1214N-1215N-1216N-1216N-1217N-1217N-1218N-1219N-1219N-1220N-1221N-1222N-1223N-1224N-1225N-1226N-1227N-1228N-1229N-1229N-1230N-1231N-1232N-1233N-1234N-1235N-1236N-1237N-1238N-1239N-1239N-1240N-1241N-1242N-1243N-1244N-1245N-1246N-1247N-1248N-1249N-1249N-1250N-1251N-1252N-1253N-1254N-1255N-1256N-1257N-1258N-1258N-1259N-1259N-1260N-1261N-1262N-1263N-1264N-1265N-1266N-1267N-1268N-1269N-1269N-1270N-1271N-1272N-1273N-1274N-1275N-1276N-1277N-1278N-1278N-1279N-1279N-1280N-1281N-1282N-1283N-1284N-1285N-1286N-1287N-1288N-1288N-1289N-1289N-1290N-1291N-1292N-1293N-1294N-1295N-1296N-1297N-1297N-1298N-1298N-1299N-1299N-1300N-1301N-1302N-1303N-1304N-1305N-1306N-1307N-1308N-1308N-1309N-1309N-1310N-1311N-1312N-1313N-1314N-1315N-1316N-1316N-1317N-1317N-1318N-1319N-1319N-1320N-1321N-1322N-1323N-1324N-1325N-1326N-1327N-1328N-1329N-1329N-1330N-1331N-1332N-1333N-1334N-1335N-1336N-1337N-1338N-1339N-1339N-1340N-1341N-1342N-1343N-1344N-1345N-1346N-1347N-1348N-1349N-1349N-1350N-1351N-1352N-1353N-1354N-1355N-1356N-1357N-1358N-1358N-1359N-1359N-1360N-1361N-1362N-1363N-1364N-1365N-1366N-1367N-1368N-1369N-1369N-1370N-1371N-1372N-1373N-1374N-1375N-1376N-1377N-1378N-1378N-1379N-1379N-1380N-1381N-1382N-1383N-1384N-1385N-1386N-1387N-1388N-1388N-1389N-1389N-1390N-1391N-1392N-1393N-1394N-1395N-1396N-1397N-1397N-1398N-1398N-1399N-1399N-1400N-1401N-1402N-1403N-1404N-1405N-1406N-1407N-1408N-1408N-1409N-1409N-1410N-1411N-1412N-1413N-1414N-1415N-1416N-1416N-1417N-1417N-1418N-1419N-1419N-1420N-1421N-1422N-1423N-1424N-1425N-1426N-1427N-1428N-1429N-1429N-1430N-1431N-1432N-1433N-1434N-1435N-1436N-1437N-1438N-1439N-1439N-1440N-1441N-1442N-1443N-1444N-1445N-1446N-1447N-1448N-1449N-1449N-1450N-1451N-1452N-1453N-1454N-1455N-1456N-1457N-1458N-1458N-1459N-1459N-1460N-1461N-1462N-1463N-1464N-1465N-1466N-1467N-1468N-1469N-1469N-1470N-1471N-1472N-1473N-1474N-1475N-1476N-1477N-1478N-1478N-1479N-1479N-1480N-1481N-1482N-1483N-1484N-1485N-1486N-1487N-1488N-1488N-1489N-1489N-1490N-1491N-1492N-1493N-1494N-1495N-1496N-1497N-1497N-1498N-1498N-1499N-1499N-1500N-1501N-1502N-1503N-1504N-1505N-1506N-1507N-1508N-1508N-1509N-1509N-1510N-1511N-1512N-1513N-1514N-1515N-1516N-1516N-1517N-1517N-1518N-1519N-1519N-1520N-1521N-1522N-1523N-1524N-1525N-1526N-1527N-1528N-1529N-1529N-1530N-1531N-1532N-1533N-1534N-1535N-1536N-1537N-1538N-1539N-1539N-1540N-1541N-1542N-1543N-1544N-1545N-1546N-1547N-1548N-1549N-1549N-1550N-1551N-1552N-1553N-1554N-1555N-1556N-1557N-1558N-1558N-1559N-1559N-1560N-1561N-1562N-1563N-1564N-1565N-1566N-1567N-1568N-1569N-1569N-1570N-1571N-1572N-1573N-1574N-1575N-1576N-1577N-1578N-1578N-1579N-1579N-1580N-1581N-1582N-1583N-1584N-1585N-1586N-1587N-1588N-1588N-1589N-1589N-1590N-1591N-1592N-1593N-1594N-1595N-1596N-1597N-1597N-1598N-1598N-1599N-1599N-1600N-1601N-1602N-1603N-1604N-1605N-1606N-1607N-1608N-1608N-1609N-1609N-1610N-1611N-1612N-1613N-1614N-1615N-1616N-1616N-1617N-1617N-1618N-1619N-1619N-1620N-1621N-1622N-1623N-1624N-1625N-1626N-1627N-1628N-1629N-1629N-1630N-1631N-1632N-1633N-1634N-1635N-1636N-1637N-1638N-1639N-1639N-1640N-1641N-1642N-1643N-1644N-1645N-1646N-1647N-1648N-1649N-1649N-1650N-1651N-1652N-1653N-1654N-1655N-1656N-1657N-1658N-1658N-1659N-1659N-1660N-1661N-1662N-1663N-1664N-1665N-1666N-1667N-1668N-1669N-1669N-1670N-1671N-1672N-1673N-1674N-1675N-1676N-1677N-1678N-1678N-1679N-1679N-1680N-1681N-1682N-1683N-1684N-1685N-1686N-1687N-1688N-1688N-1689N-1689N-1690N-1691N-1692N-1693N-1694N-1695N-1696N-1697N-1697N-1698N-1698N-1699N-1699N-1700N-1701N-1702N-1703N-1704N-1705N-1706N-1707N-1708N-1708N-1709N-1709N-1710N-1711N-1712N-1713N-1714N-1715N-1716N-1716N-1717N-1717N-1				

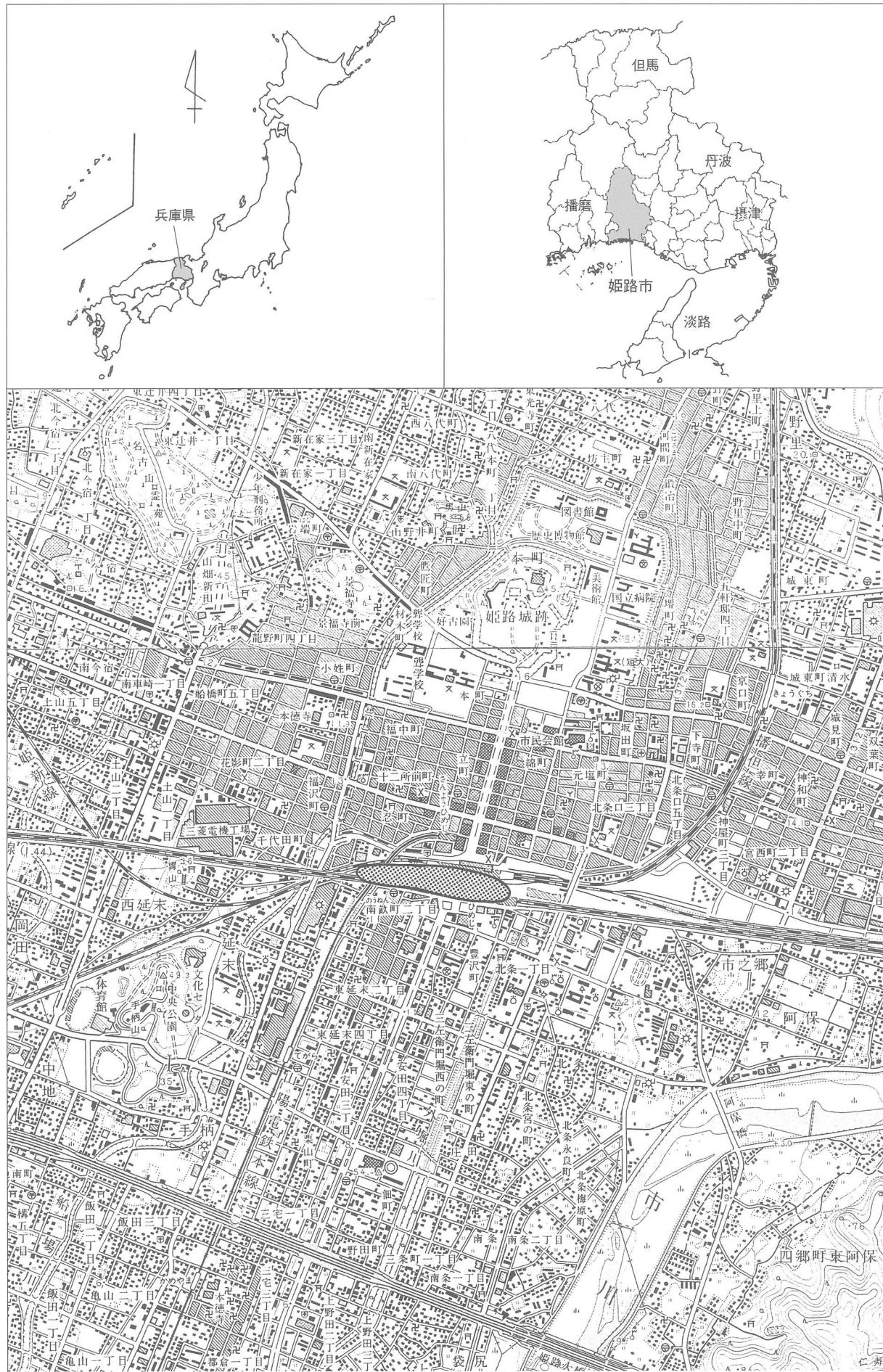
報告番号	種別	器種	法量	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調(翡翠)		残存率	胎土	特 微			
							外	内			外 面	内 面	成形	形状
635	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	10Y6/2オーバー灰(透明度:高)	10YR6/4ニッペイ黄(無釉部分)	砂片	10Y6/灰、砂粒多量	体部：回転ナギ、体部下位：無釉、体部：回転ナギ、無釉	輪噐成形	-	日類	b1類
636	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/1灰白(透明度:低)	2.5Y8/3浅黄(無釉部分)	破片	2.5Y8/3浅黄、砂粒多量	体部下半：回転ヘラ削り、体部下位：無釉、体部：回転ナギ、無釉	輪噐成形	内半	B類	a2類
637	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	10Y6/2オーバー灰(透明度:高)	2.5Y3/7浅黄(無釉部分)	破片	2.5Y7/1灰白、砂粒多量	体部下半：回転ヘラ削り、体部下位：無釉、体部：回転ナギ、無釉	輪噐成形	-	B類	b1類
638	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	10YR6/4ニッペイ黄(透明度:低)	10YR7/2ニッペイ黄(無釉部分)	破片	10YR7/2ニッペイ黄、砂粒少量	体部上位：鉛絵「[ぼさ」	輪噐成形	内半	B類	a1類
639	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	5Y3/7浅黄(透明度:高)	10YR7/3ニッペイ黄(無釉部分)	破片	N7灰白、砂粒多量	口縁端部：鉛洗剥落有り、体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	b1類
640	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	透明釉	7.5Y7/1灰白(無釉部分)	破片	N8灰白、砂粒多量	体部下半：無釉、体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	b1類
641	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/4浅黄(透明度:低)	2.5Y8/2灰白(無釉部分)	破片	2.5Y8/2灰白、砂粒少量	体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	a1類
642	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	透明釉	2.5Y7/1灰白(無釉部分)	破片	7.5Y7/1灰白、砂粒多量	体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	-	B類	b1類
643	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/3浅黄(透明度:低)	10YR7/3ニッペイ黄(無釉部分)	破片	2.5Y7/3浅黄、砂粒少量	体部上位：鉛絵「[まつ」」	輪噐成形	内半	B類	a1類
644	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y8/2灰白(透明度:低)	10YR8/3浅黄(無釉部分)	破片	2.5Y8/4浅黄、砂粒少量	体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	a1類
645	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/3浅黄(透明度:高)	2.5Y8/3浅黄(無釉部分)	破片	2.5Y8/3浅黄、砂粒少量	体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	a1類
646	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	5Y7/1灰白(透明度:高)	10YR6/4ニッペイ黄(無釉部分)	破片	N7灰白、砂粒少量	口縁端部：鉛洗剥落有り、体部上位：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	b1類
647	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/3浅黄(透明度:低)	2.5Y8/3浅黄(無釉部分)	破片	2.5Y8/3浅黄、砂粒少量	体部：鉛絵「[かた」」	輪噐成形	内半	B類	a1類
648	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/3浅黄(透明度:低)	透明釉	破片	2.5Y8/3浅黄、砂粒少量	体部：口縁部：施釉、体部：鑿刻「[」」	泥漿堆积法	-	B類	a1類
649	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	透明釉	N7/灰白(透明度:低)	破片	2.5Y6/2灰白、砂粒少量	底部：無釉、体部：鑿刻「[」」	泥漿堆积法	-	A類	c1類
700	磁器	茶瓶	-	-	-	透明釉	透明釉	破片	7.5Y7/1灰白、砂粒少量	体部：施釉、体部上位：鑿刻「[」」局指定期定、鑿刻光桙「[カサ」」	泥漿堆积法	-	A類	d1類
701	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	透明釉	透明釉	破片	7.5Y6/1灰白、砂粒少量	体部：口縁部：施釉	泥漿堆积法	-	A類	c1類
702	施釉陶器	茶瓶	-	-	-	透明釉	透明釉	破片	2.5Y7/1灰白、砂粒少量	体部：印刻文様（魚）	泥漿堆积法	-	A類	c1類
703	磁器	茶瓶	-	-	-	2.5Y7/3浅黄(透明度:低)	7.5Y8/1灰白(無釉部分)	破片	7.5Y8/1灰白、磁器質	体部：無釉	泥漿堆积法	-	B類	d2類

※法量で（ ）を付した数値は復元值

第15表 出土遺物一覧(4)煉瓦

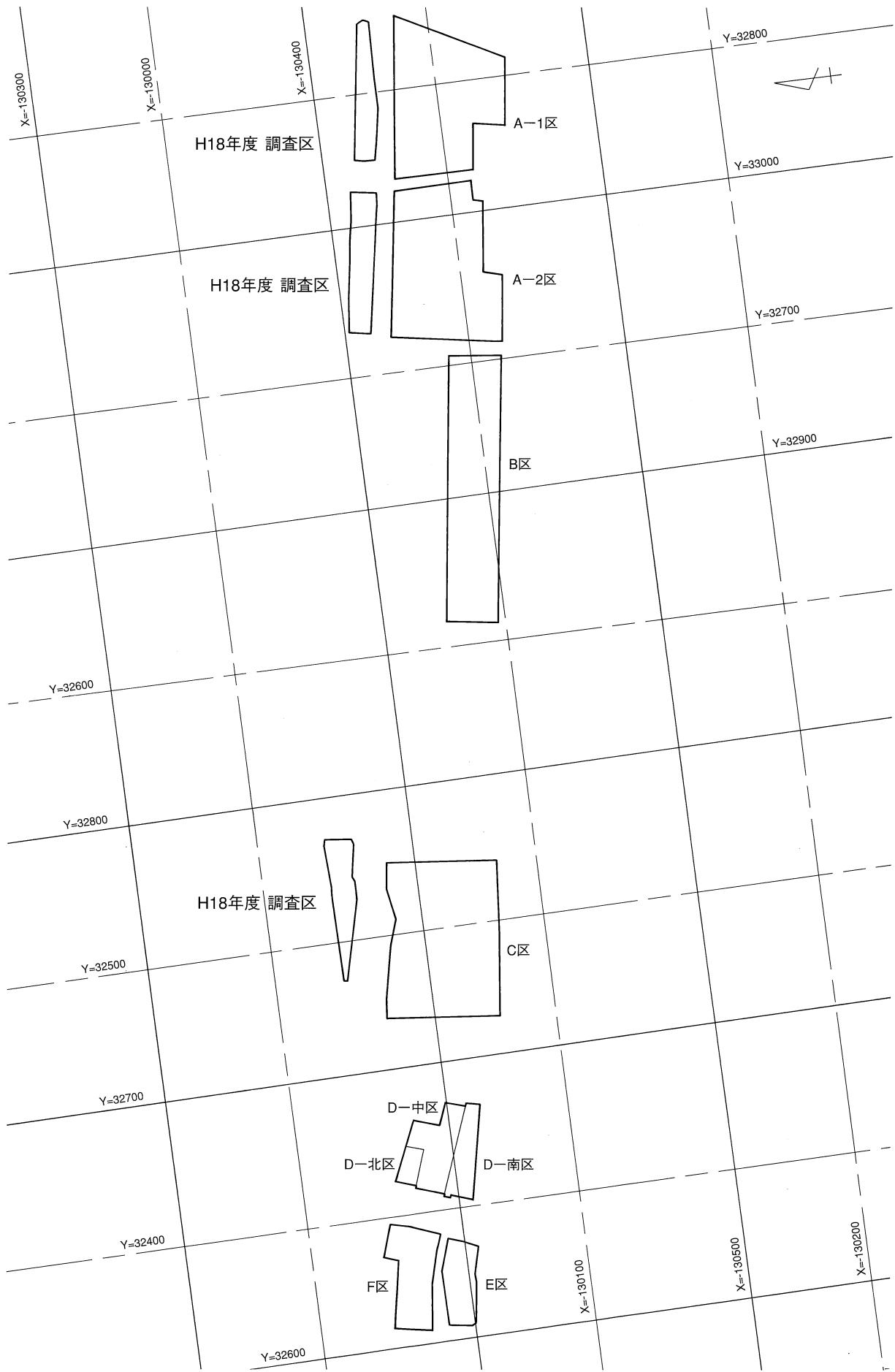
報告番号	分類	調査区	出土位置	寸法			調整			砂付着の有無	胎土	色調		
				長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(kg)	表	裏	目幅(cm)				
B1	I-a	C	扇形庫北側	21.5	10.2	5.4	2.3	ナデ*	ナデ*	8本	1.5	全面に極細砂付着 (表面の密度は疎)	3~5mm大の礫 含有	2.5YR6/6橙
B2	I-a	C	扇形庫北側	21.6	10.4	5.3	2.3	ナデ*	ナデ*	5本	2.1	全面に極細砂付着 (表面の密度は疎)	2~3mm大の礫 含有	10R6/8赤橙
B3	I-b	C	調査区外の扇形庫	23.0	11.0	6.0	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	全面に極細砂付着 (表面の密度は疎)	3~7mm大の礫 含有	2.5YR5/6明赤褐
B4	I-a	C	扇形庫北側	21.5	10.2	5.2	2.3	ナデ*	ナデ*	5本	2.4	全面に極細砂付着 (表面の密度は疎)	2~5mm大の礫 含有	10R5/6赤
B5	II 1-a	C	扇形庫北側	21.6	10.0	5.0	2.3	ナデ*	ナデ*	9本	4.1	裏面を除き極細砂付着 (表面の密度は疎)	1~4mm大の礫 含有	10R5/8赤
B6	II 1-b	C	引き込み線	22.0	10.5	6.5	3.1	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	7mm大の礫 少量含有	2.5YR7/4淡赤橙
B7	II 1-b	C	扇形庫北側	21.5	10.0	4.8	2.3	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除く面に極細砂付着 (裏面の密度は疎)	2~7mm大の礫 少量含有	10R5/8赤
B8	II 2-a	C	扇形庫北側	21.6	10.3	5.1	2.4	ナデ*	ナデ*	20本	3.7	裏面を除き極細砂付着 (表面の密度は疎)	0.5~1mm大、 7mm大の礫 少量含有	10R6/8赤橙
B9	II 2-a	C	扇形庫北側	21.7	10.3	5.0	2.2	ナデ*	ナデ*	8本	4.6	裏面を除き極細砂付着 (表面の密度は疎)	1~4mm大の礫 少量含有	10R6/6赤橙
B10	II 2-a	C	扇形庫北側	21.6	10.0	4.9	2.2	ナデ*	ナデ*	11本	3.7	裏面を除き極細砂付着 (表面の密度は疎)	1~2mm大の礫 少量含有	10R6/8赤橙
B11	II' 2-a	C	扇形庫北側	21.7	10.3	5.0	2.4	ナデ*	ナデ*	8本	4.5	側面のみ極細砂付着	1~2mm大の礫 含有	10R5/8赤
B12	II' 2-a	C	扇形庫北側	22.0	10.3	5.0	2.3	ナデ*	ナデ*	10本	3.3	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	疎なし	5YR7/4淡黄橙
B13	III 2-a	C	扇形庫北側	22.0	10.5	5.1	2.4	ナデ*	ナデ*	8本	1.5	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	5mm大の礫 板少量含有	10R5/8赤
B14	III 2-a	C	扇形庫北側	22.1	10.6	5.2	2.5	ナデ*	ナデ*	5本	1.6	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~2mm大の礫 含有	10R5/6赤
B15	III 2-a	C	扇形庫北側	22.3	10.6	5.2	2.4	ナデ*	ナデ*	6本	1.7	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~2mm大の礫 含有	10R4/6赤
B16	III 2-a	C	扇形庫北側	21.9	10.6	5.3	2.4	ナデ*	ナデ*	6本	1.2	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~2mm大の礫 含有	10R4/6赤
B17	III 2-b	C	引き込み線	22.0	10.7	7.1	3.1	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~2mm大の礫 含有	10R4/6赤
B18	III' 2-a	C	扇形庫北側	22.2	10.5	5.2	2.5	ナデ*	ナデ*	5本	1.0	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	3~5mm大の礫 含有	10R5/8赤
B19	III' 2-a	C	扇形庫北側	22.2	10.3	5.3	2.5	ナデ*	ナデ*	5本	1.5	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~3mm・1cm 大の礫含有	10R5/6赤
B20	III・III' -a	C	扇形庫北側	21.6	10.3	5.3	2.3	ナデ*	ナデ*	4本	0.8	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	5mm大の礫 板少量含有	10R5/8赤
B21	III・III' -a	C	扇形庫北側	21.6	10.4	5.0	2.4	ナデ*	ナデ*	8本	1.5	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 含有	10R4/6赤
B22	III・III' -b	C	引き込み線	22.8	10.8	7.1	3.1	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~2mm大の礫 含有	10R5/8赤
B23	III・III' -a	C	扇形庫北側	22.2	10.5	5.2	2.4	ナデ*	ナデ*	5本	1.5	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	3mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B24	III・III' -a	C	扇形庫北側	22.5	10.3	5.5	2.5	ナデ*	ナデ*	7本	1.3	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~2mm大の礫 含有	10R5/6赤
B25	IV・V 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.5	10.9	5.5	2.8	ナデ*	ナデ*	-	-	漆喰付着のため不明	1mm大の礫 少量含有	10R4/8赤
B26	IV・V 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.6	10.8	5.5	2.8	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B27	IV・V 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.5	10.5	5.5	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	漆喰付着のため不明	1mm大の礫 少量含有	7.5R4/8赤
B28	IV' 2・V 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.6	10.8	5.5	2.7	ナデ*	ナデ?	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B29	IV' 2・V 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.8	11.0	5.5	2.7	ナデ*	ナデ?	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B30	IV' 2・VI 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.7	10.5	5.5	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/8赤
B31	IV' 2・VI 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.5	10.8	5.4	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/8赤
B32	VII 2-a	C	扇形庫北側	21.4	10.2	4.8	2.3	ナデ*	ナデ*	5本	2.0	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1~4mm大の礫 含有	2.5YR5/6明赤褐
B33	VII 2-a	A	煉瓦積建物 の基礎	22.3	10.5	5.3	2.4	ナデ*	ナデ*	5本	2.2	表面を除く面に極細砂付着 (裏面の密度は疎)	2~5mm大の礫 含有	10R5/6赤
B34	VII 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.6	10.6	5.4	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	2mm大の礫 少量含有	10R5/8赤
B35	VII' -b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.6	10.7	5.4	2.6	ナデ*	ナデ*	-	-	漆喰付着のため不明	1~3mm大の礫 含有	10R5/6赤
B36	V' 2・XI 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.4	10.7	5.5	2.8	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R4/6赤
B37	IV' 2・V 2・VII 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	21.9	10.4	5.2	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	漆喰付着のため不明	1mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B38	IV' 2・V' 2・XI 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.6	10.6	5.6	2.8	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B39	IV' 2・V' 2・X' 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.5	10.6	5.6	2.8	ナデ*	筵庄真	-	-	漆喰付着のため不明	1mm大の礫 少量含有	10R4/8赤
B40	IV' 2・V 2・X' 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.0	10.5	5.4	2.8	ナデ*	ナデ*	-	-	漆喰付着のため不明	1mm大の礫 少量含有	10R4/8赤
B41	IV' 2・V 2・X 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.4	10.8	5.4	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R5/6赤
B42	V' 2・VI 2・IX 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.5	10.9	5.5	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	漆喰付着のため不明	1~2mm大の礫 含有	7.5R4/6赤
B43	IV' 2・V 2・VI 2・XII 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.5	10.4	5.2	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R4/6赤
B44	IV' 2・V 2・VI' 2・XII 2-b	A	煉瓦積建物 の基礎	22.8	10.6	5.5	2.7	ナデ*	ナデ*	-	-	表面を除き極細砂付着 (裏面の密度は疎)	1mm大の礫 少量含有	10R4/6赤

図版



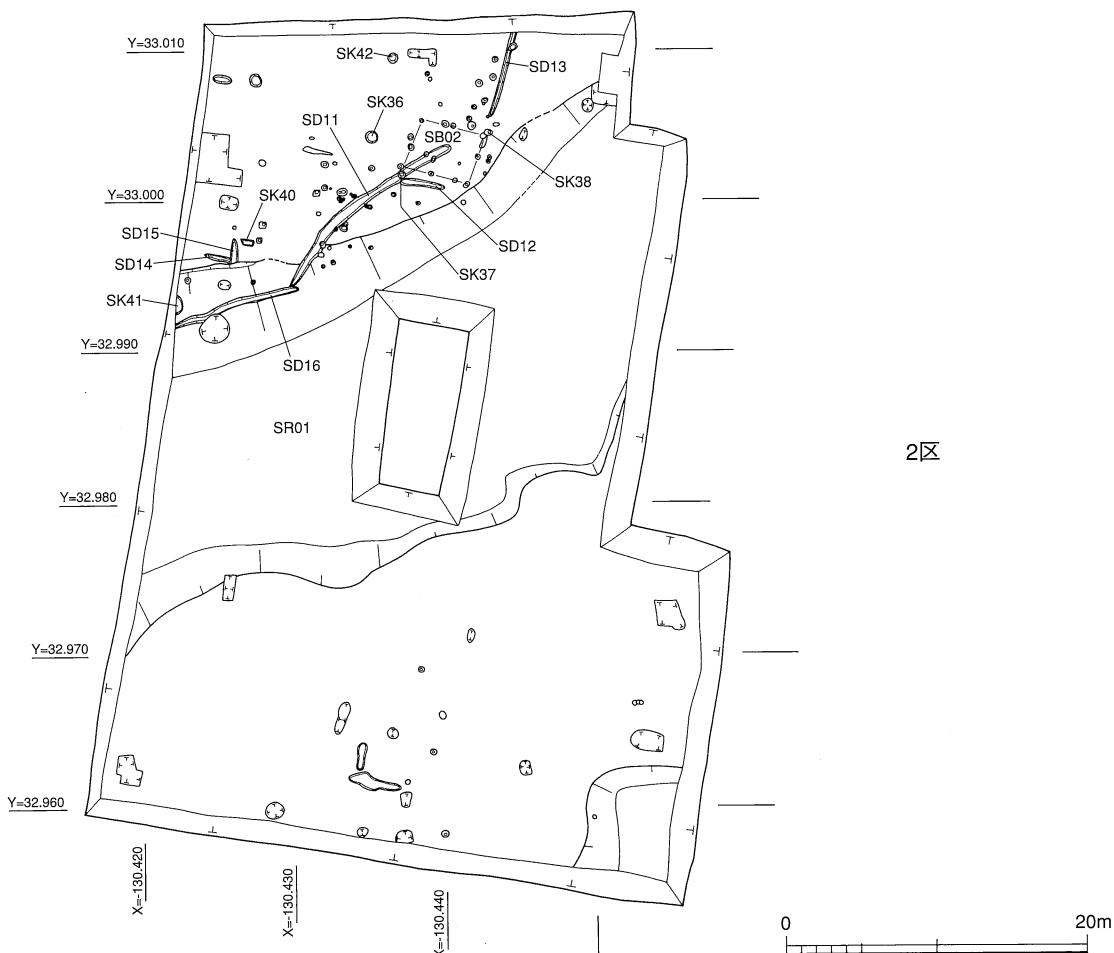
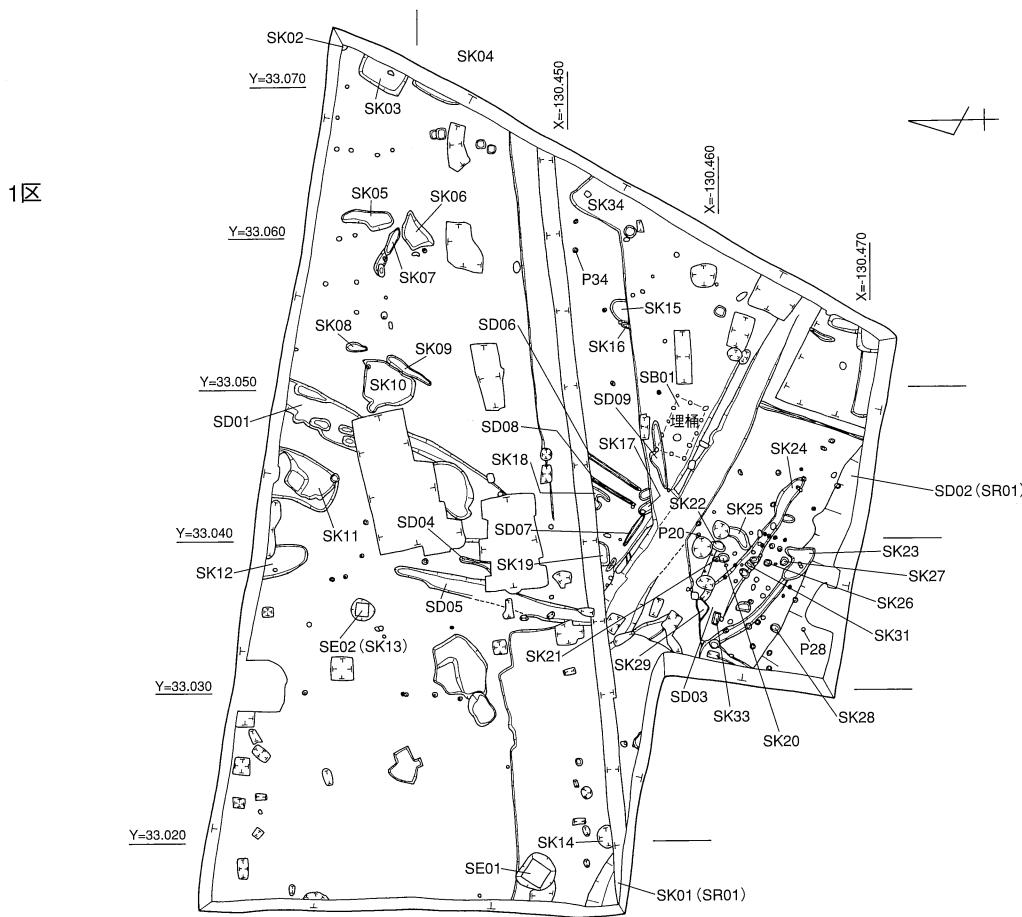
兵庫県・姫路市・豆腐町遺跡の位置

図版2



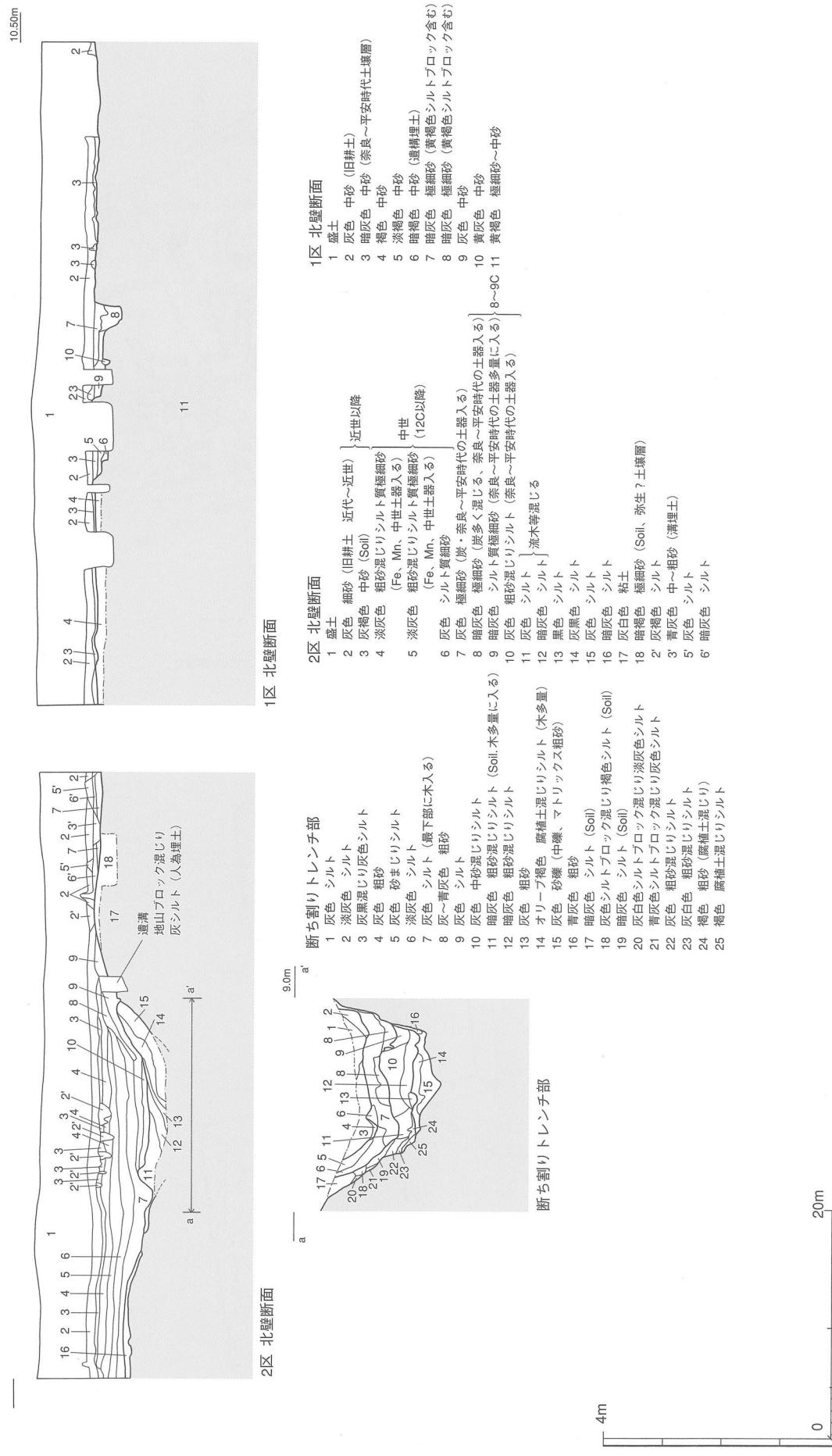
調査区配置図 (1 : 2,000)

A (1)



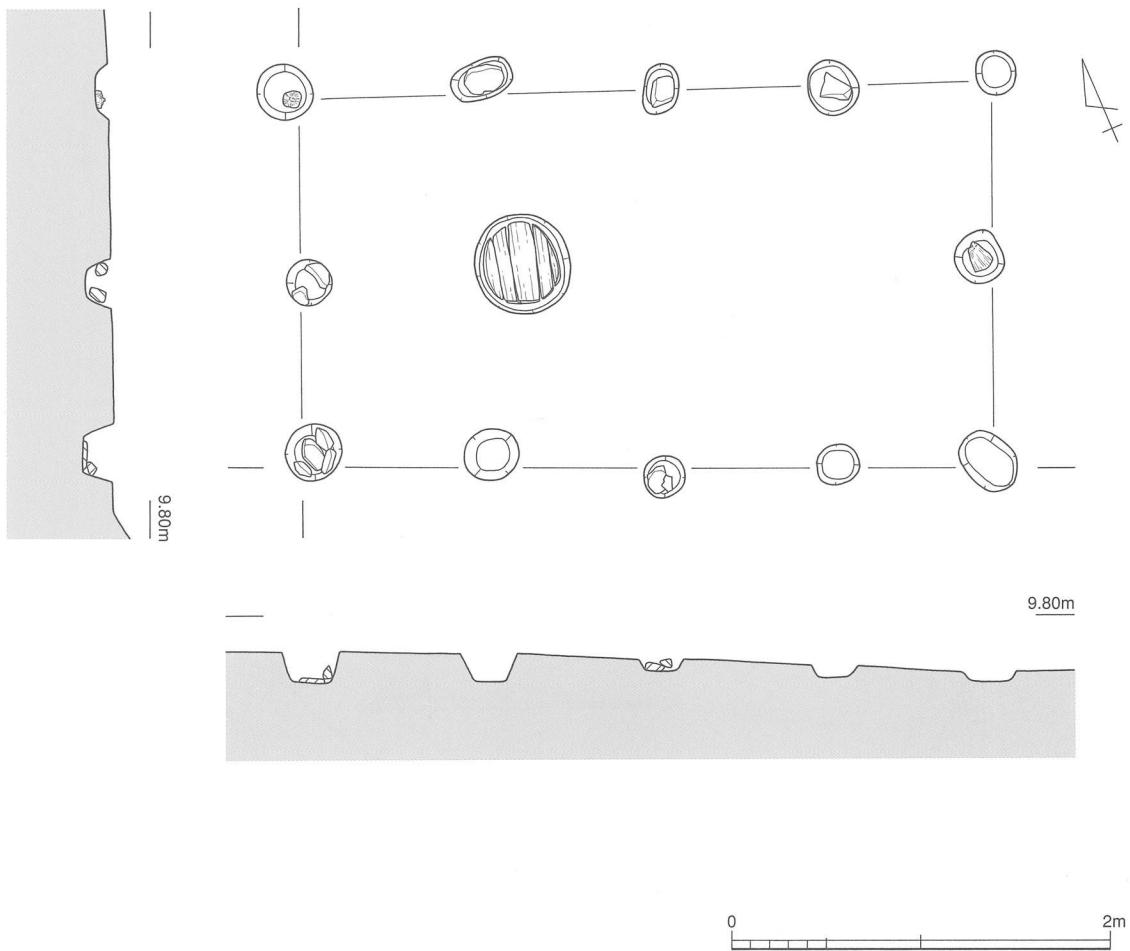
全体図

A
☒
(2)



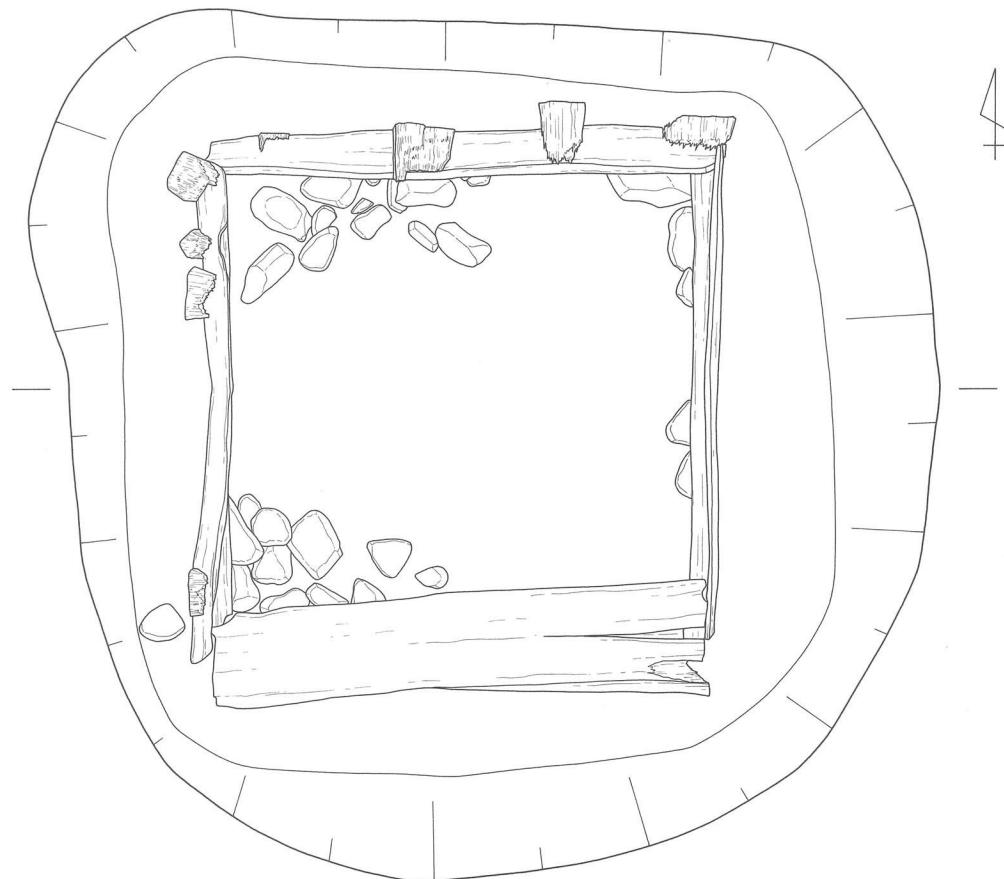
断面図

A区(3)

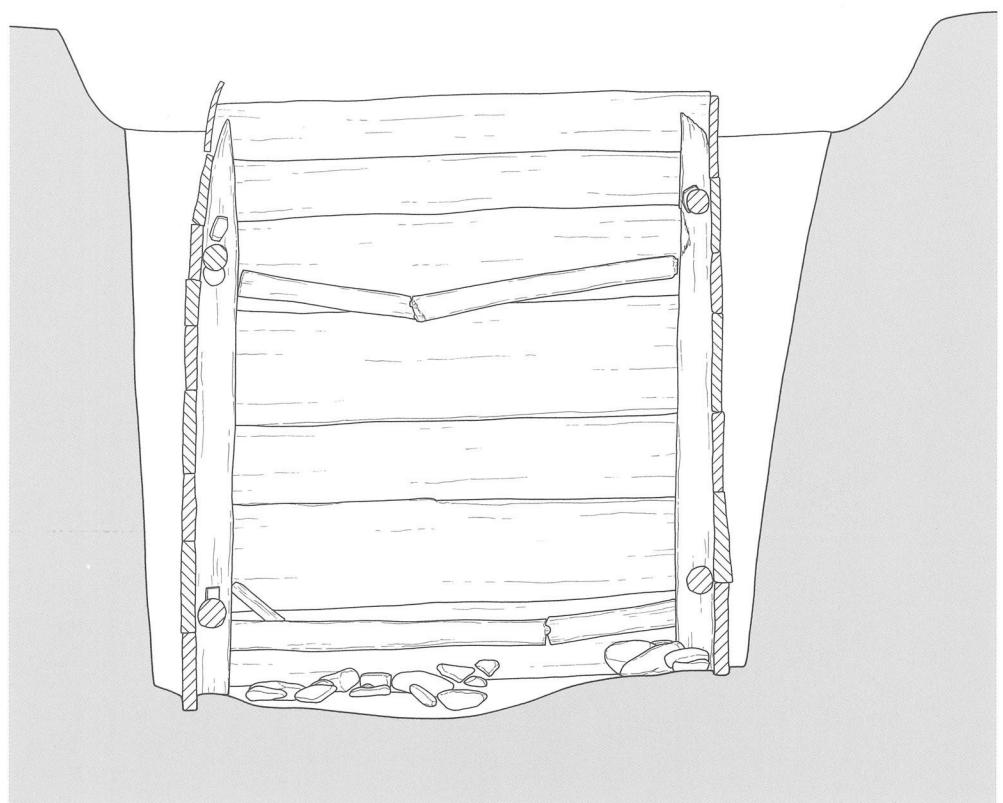


掘立柱建物SB01

A区
(4)



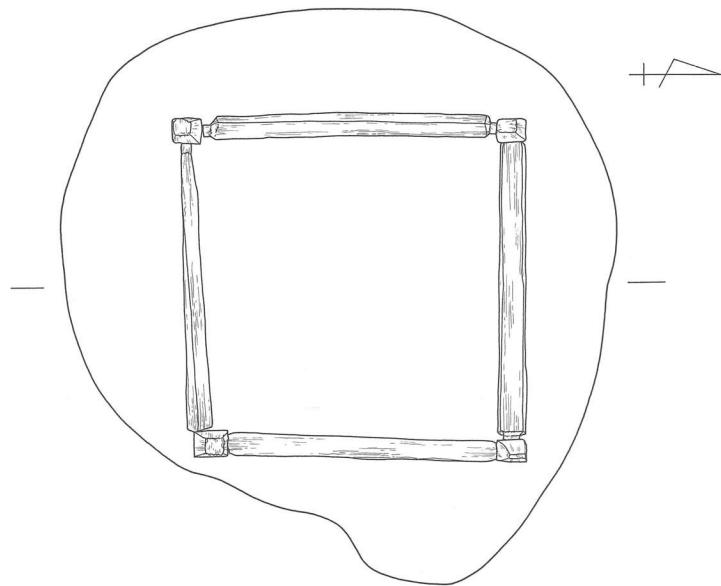
9.00m



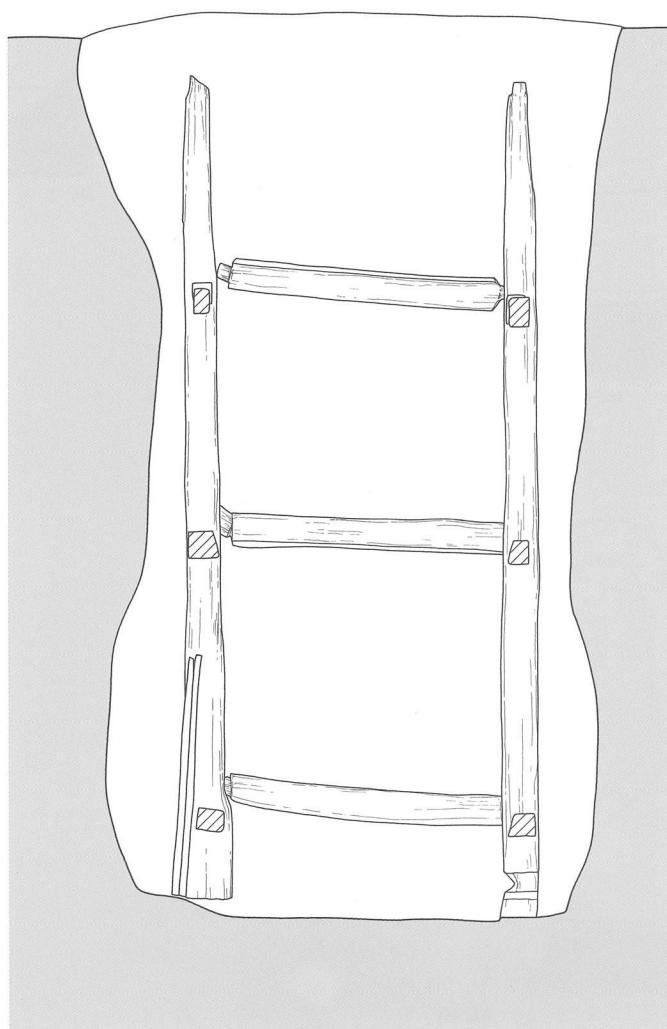
0 1m

井戸SE01

A区(5)



9.20m

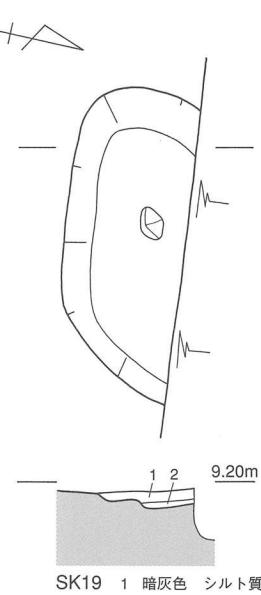
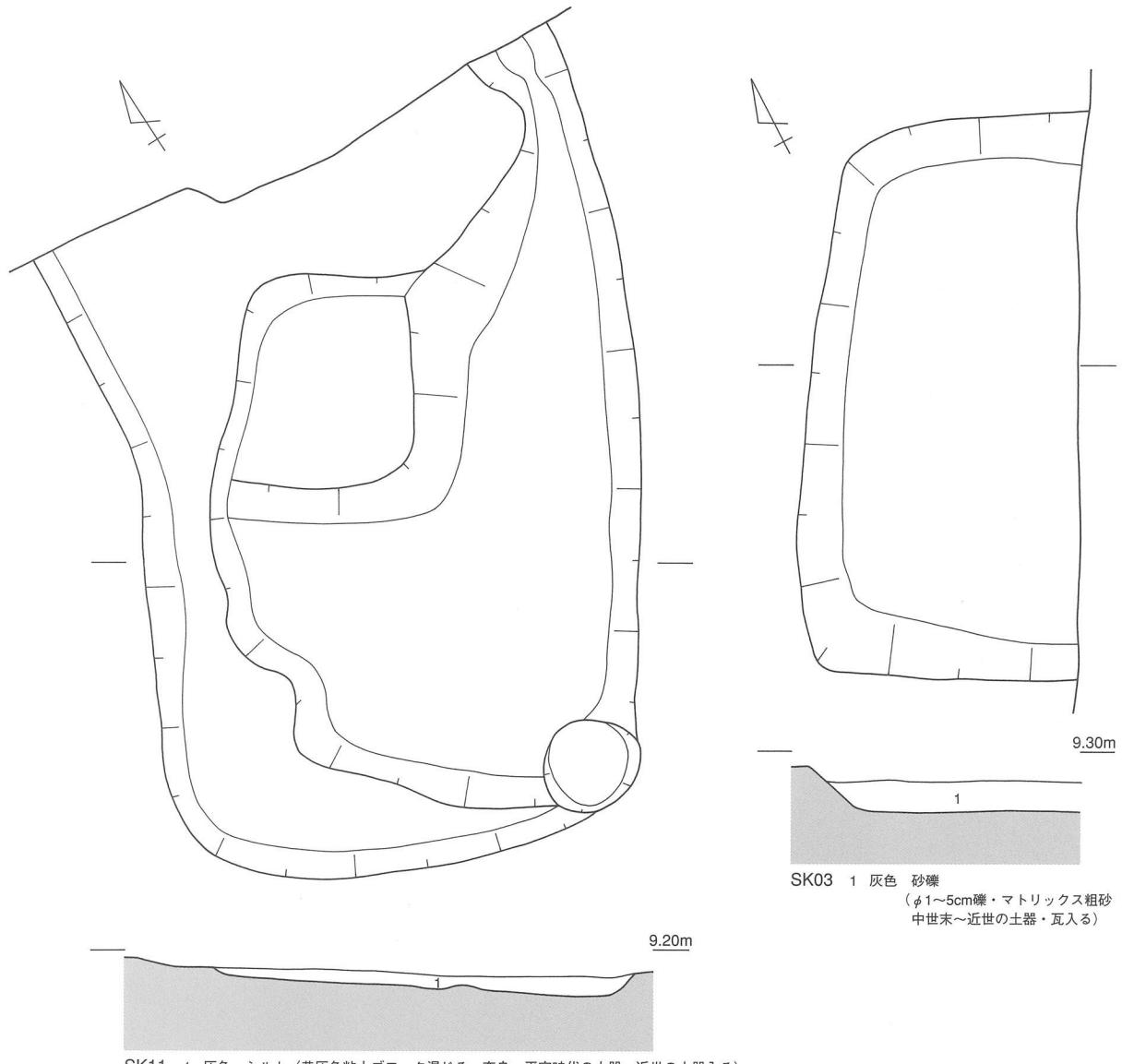


0 1m

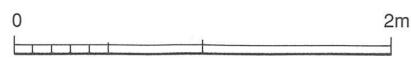
井戸SE02

図版8

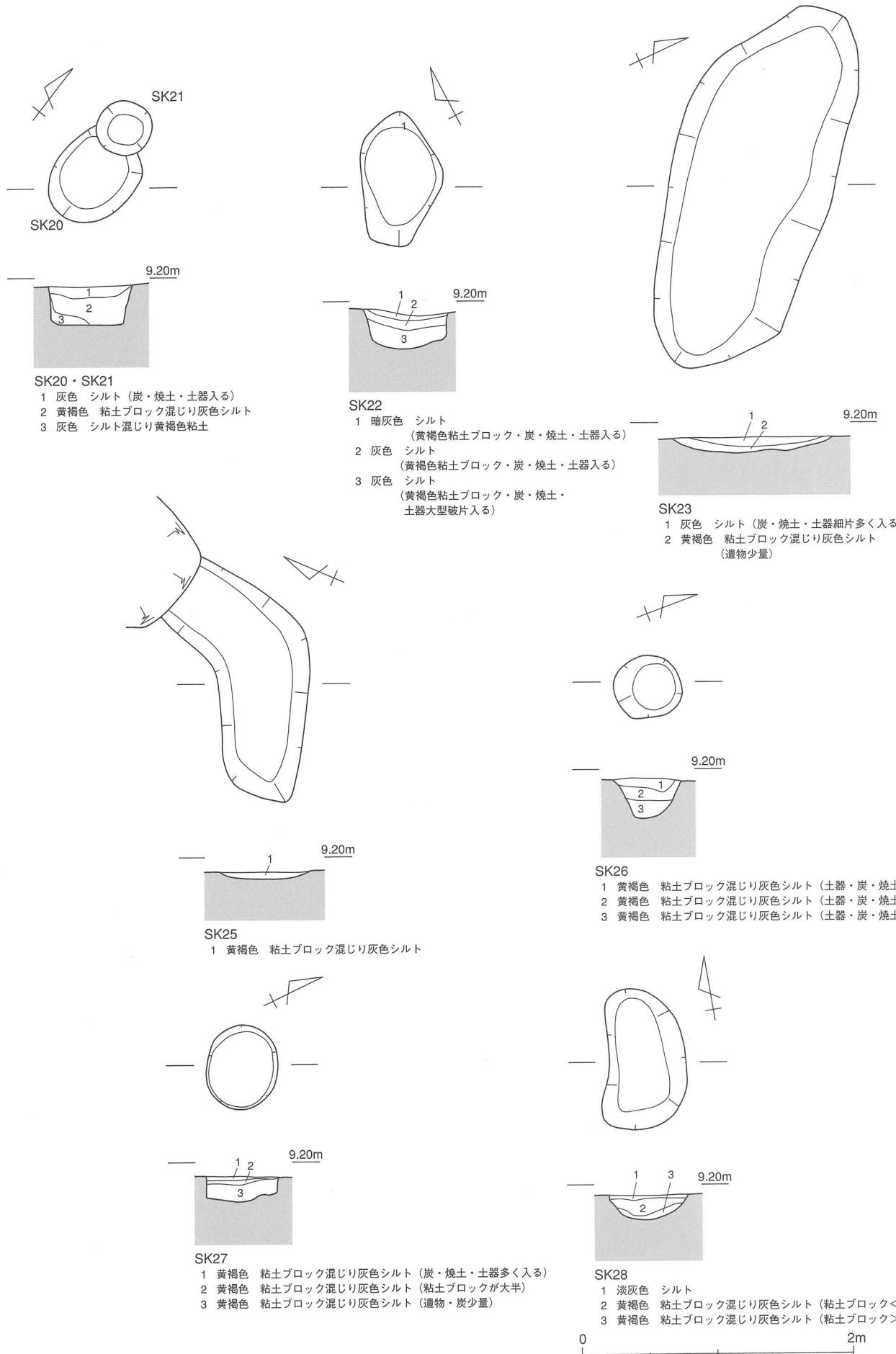
A区(6)



土坑 (1)

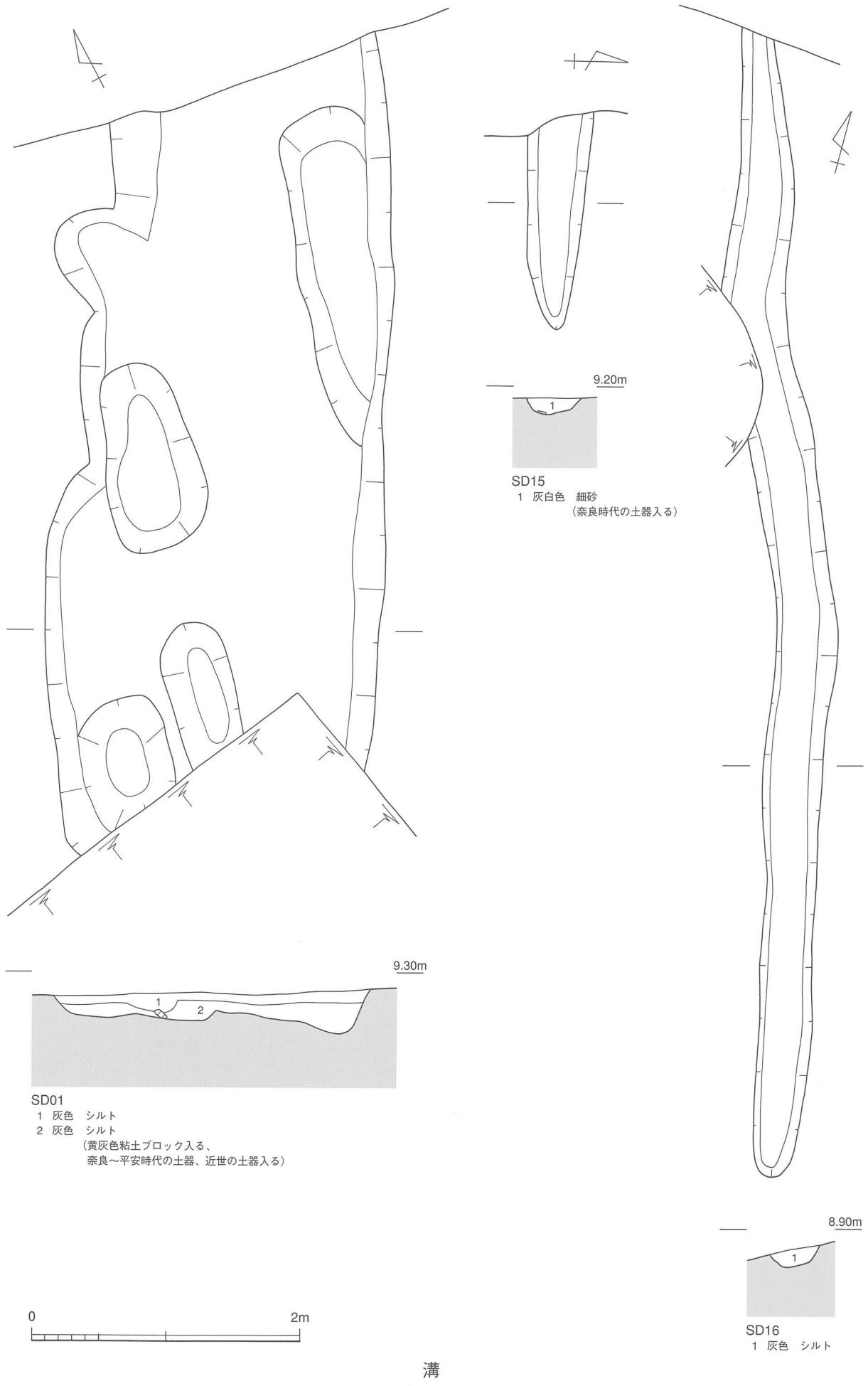


A区(7)



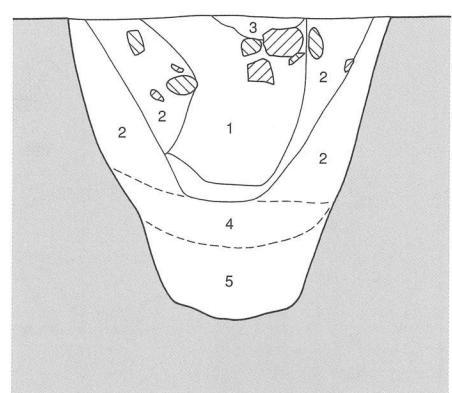
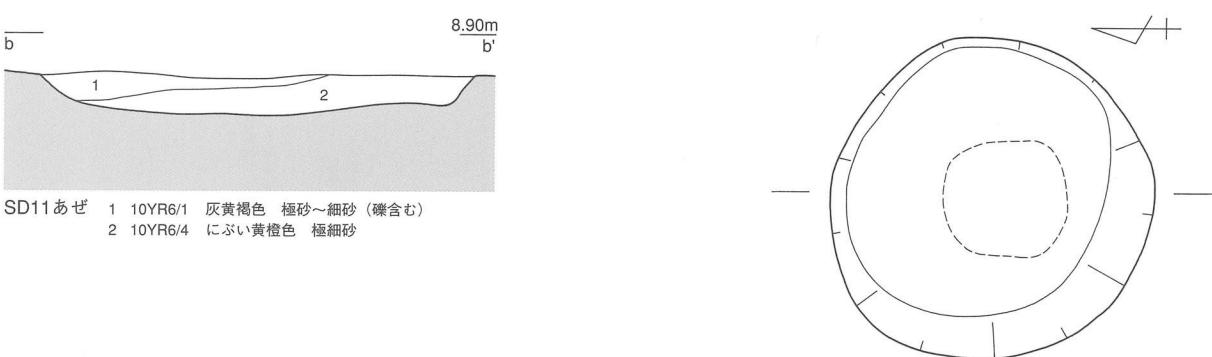
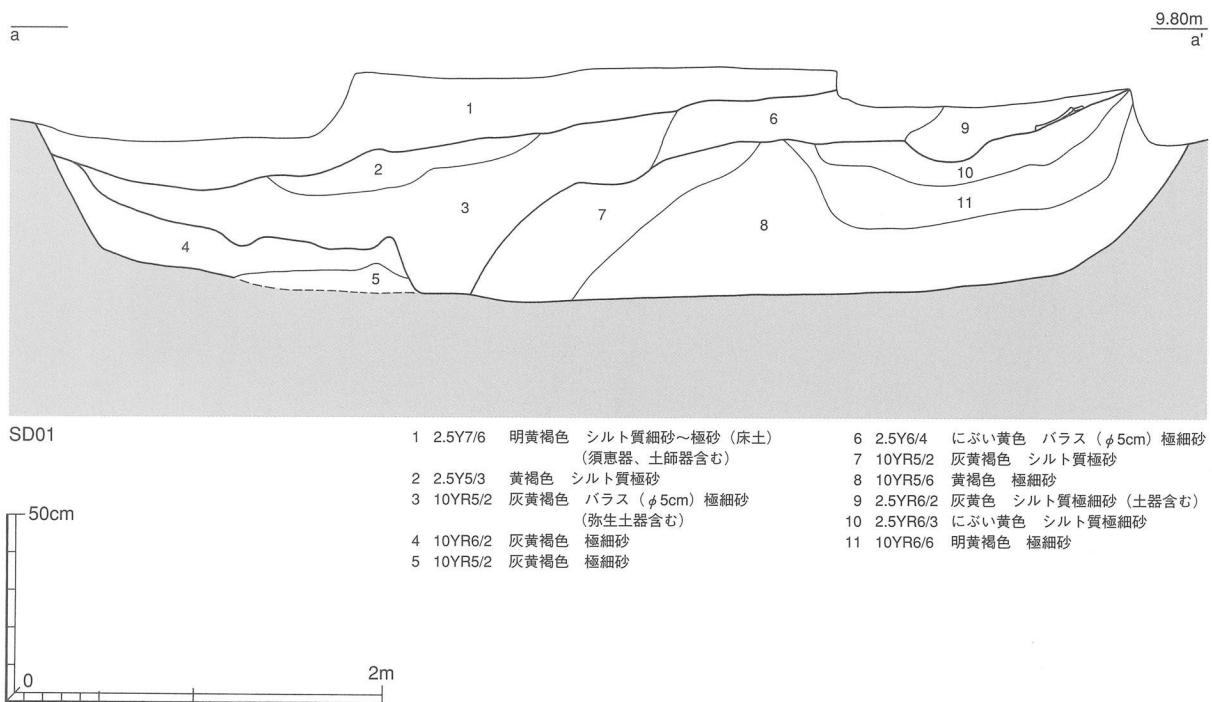
土坑 (2)

A区(8)



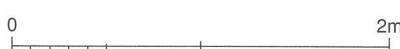


全体図・断面図

B区
(2)

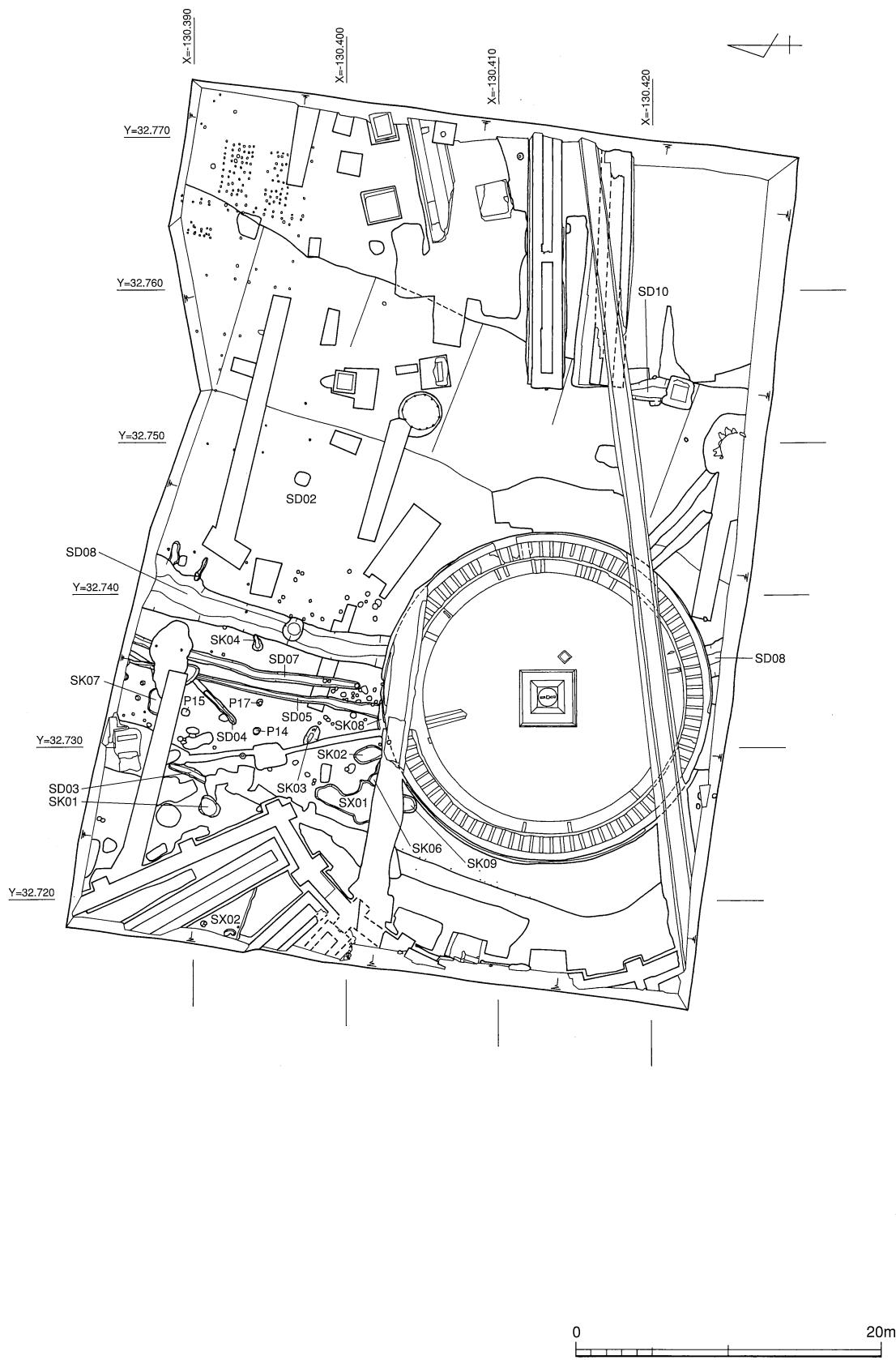
焼土坑 2

1 7.5YR4/2 灰褐色 シルト質極砂
（炭・焼土・大礫・土器含）
2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極砂
（小礫含）
3 10YR5/1 褐灰色 極細砂
4 10YR4/1 褐灰色 シルト質細砂～極細砂
（大礫含 ϕ 10cm）
5 10YR5/2 灰黄褐色 細砂～極細砂
（大礫含 ϕ 10cm）



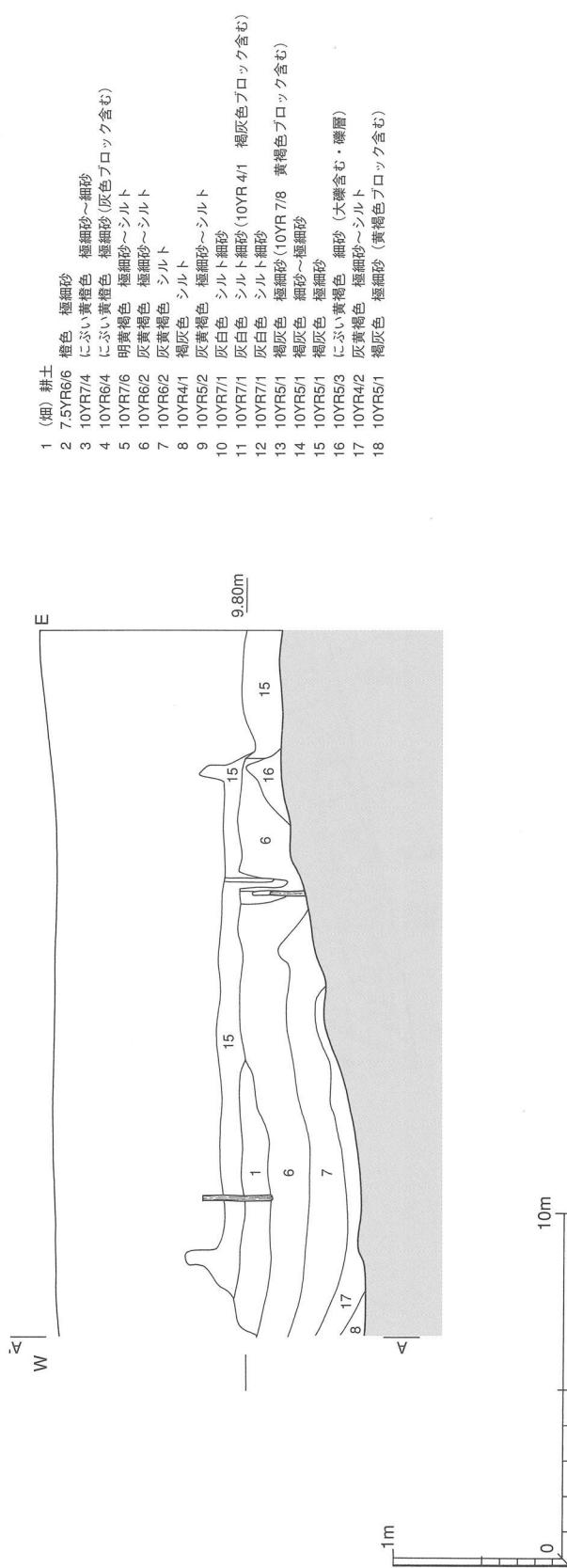
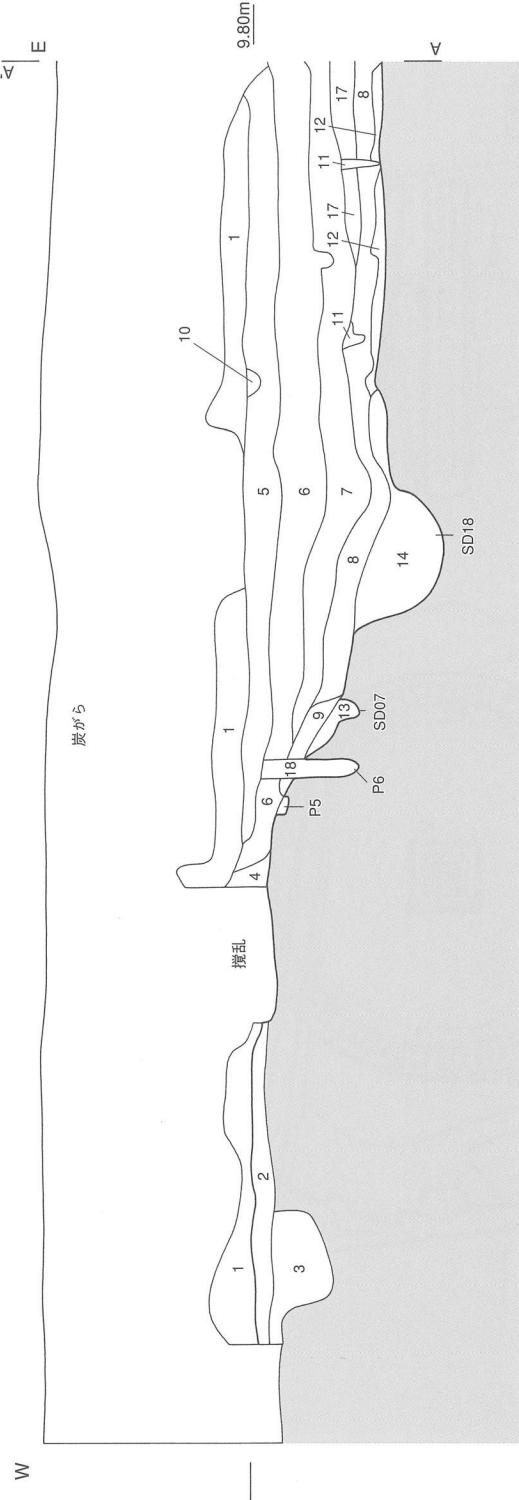
溝・土坑

(1) 図C



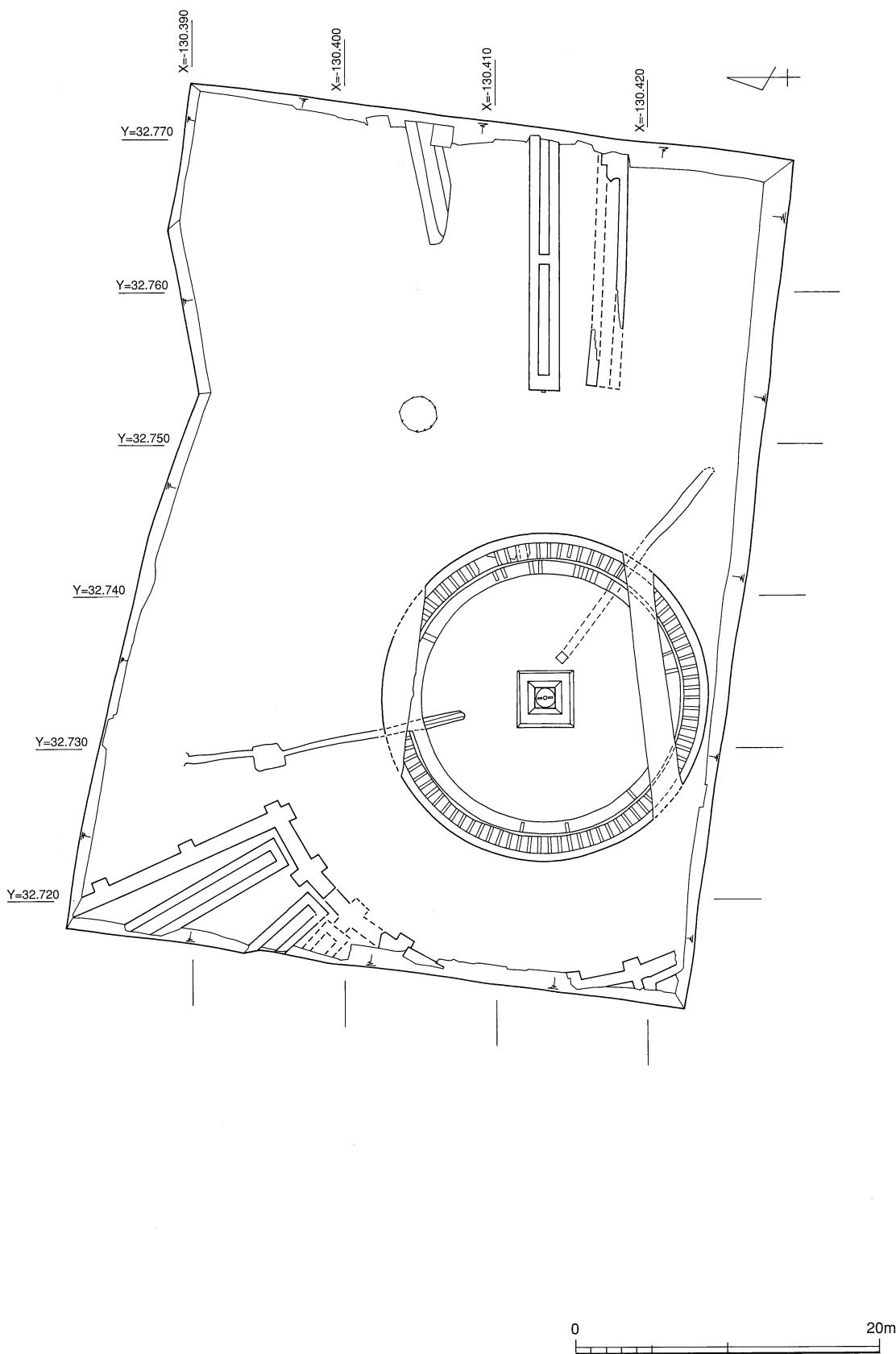
全体図

(N) □○



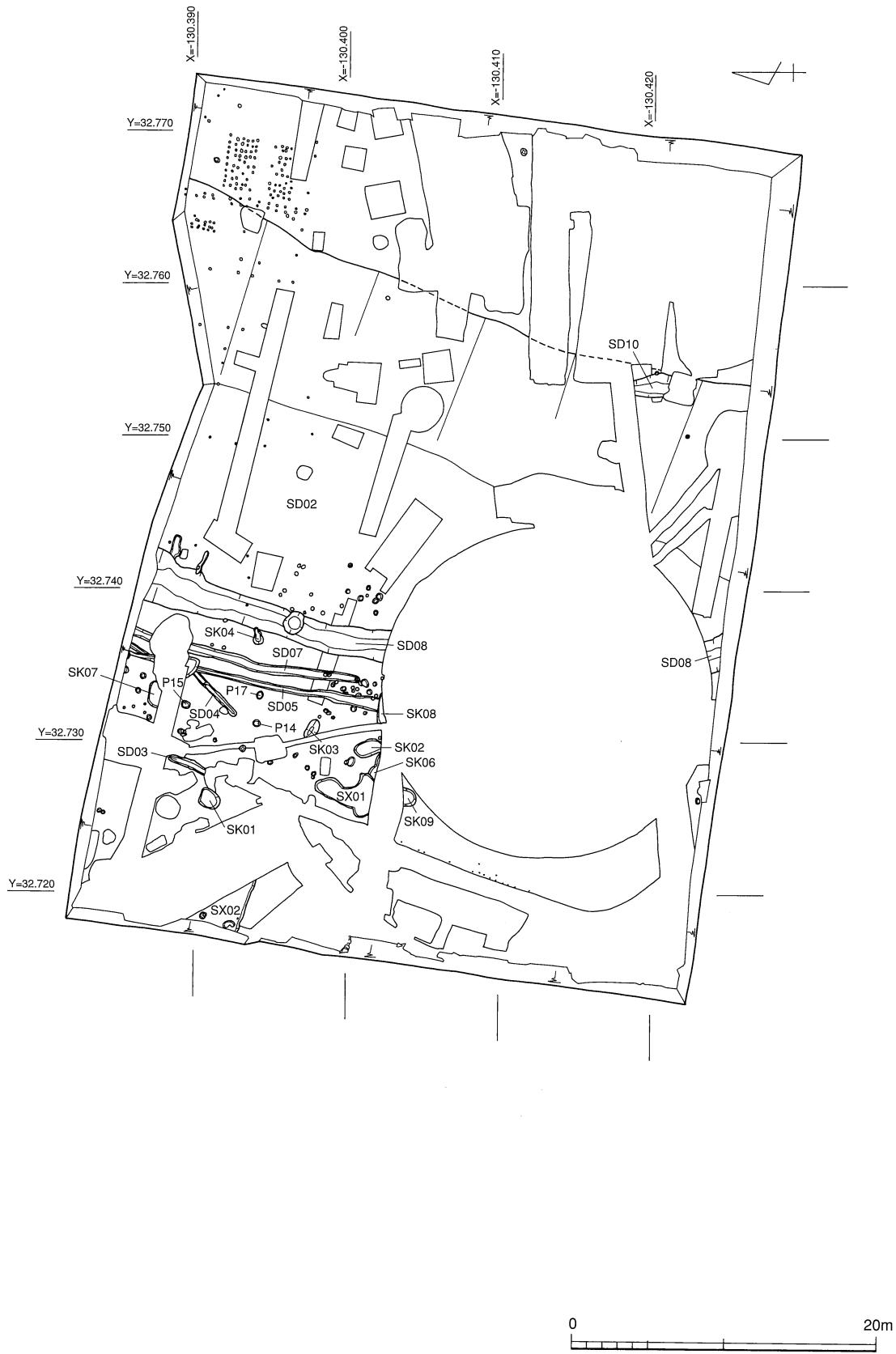
断面図

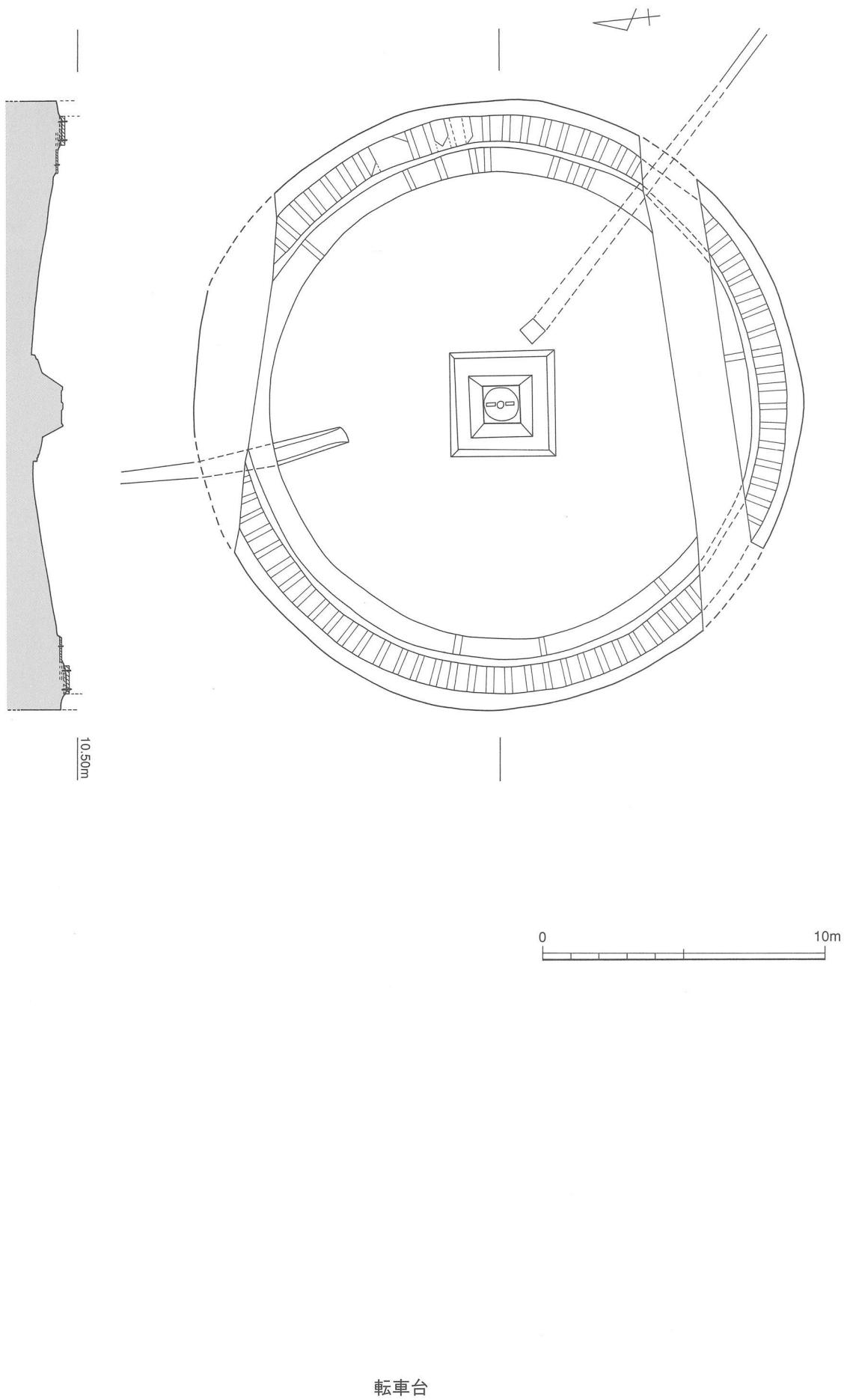
(3) 図C



近代平面図

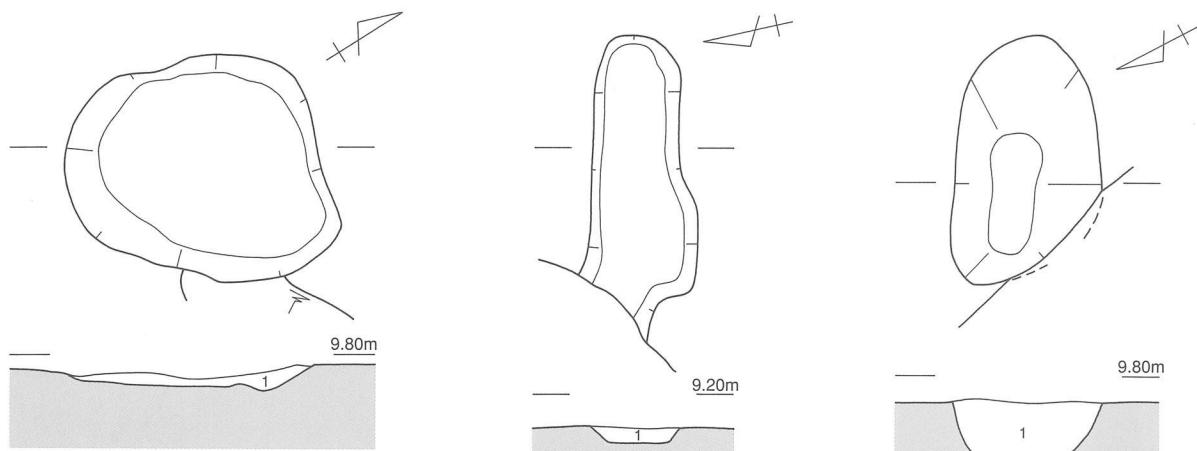
(4) 図C





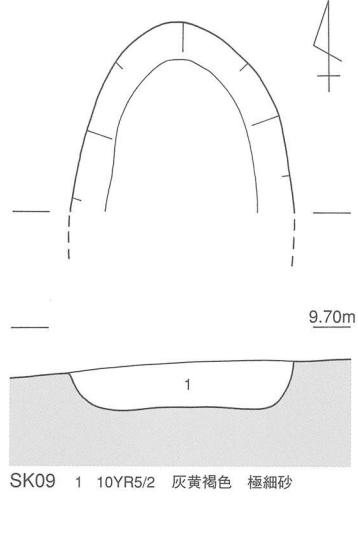
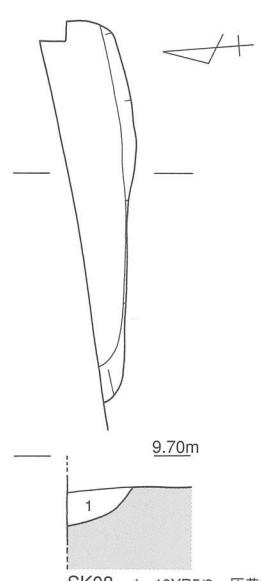
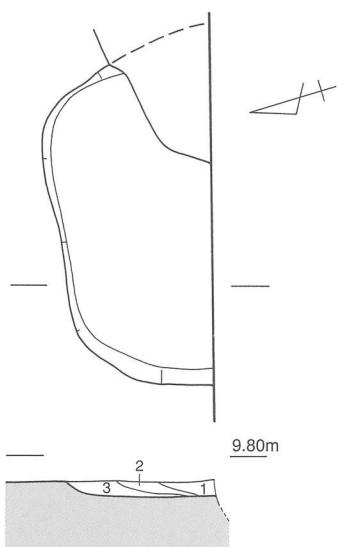
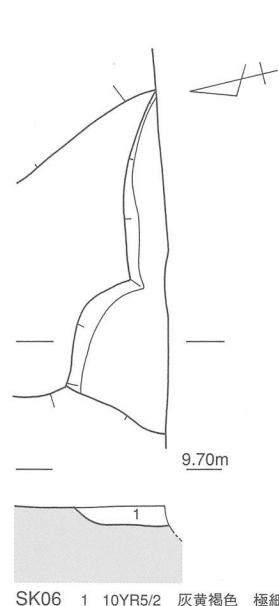
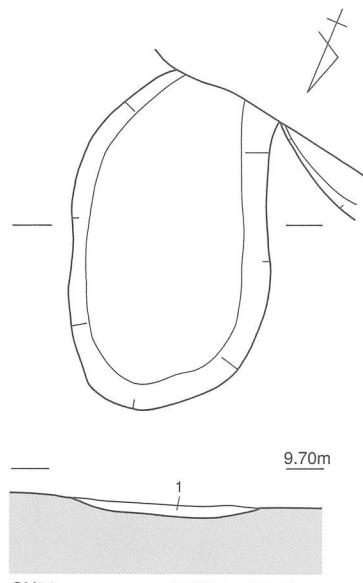
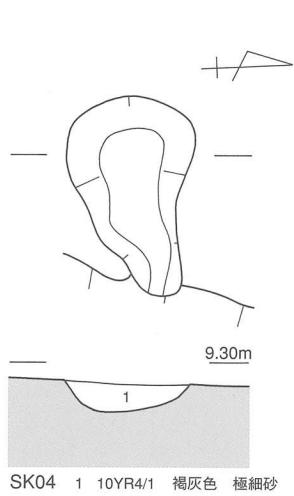
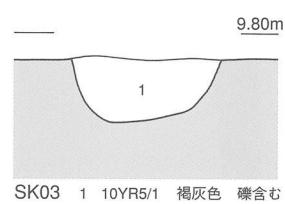
図版18

C (6)

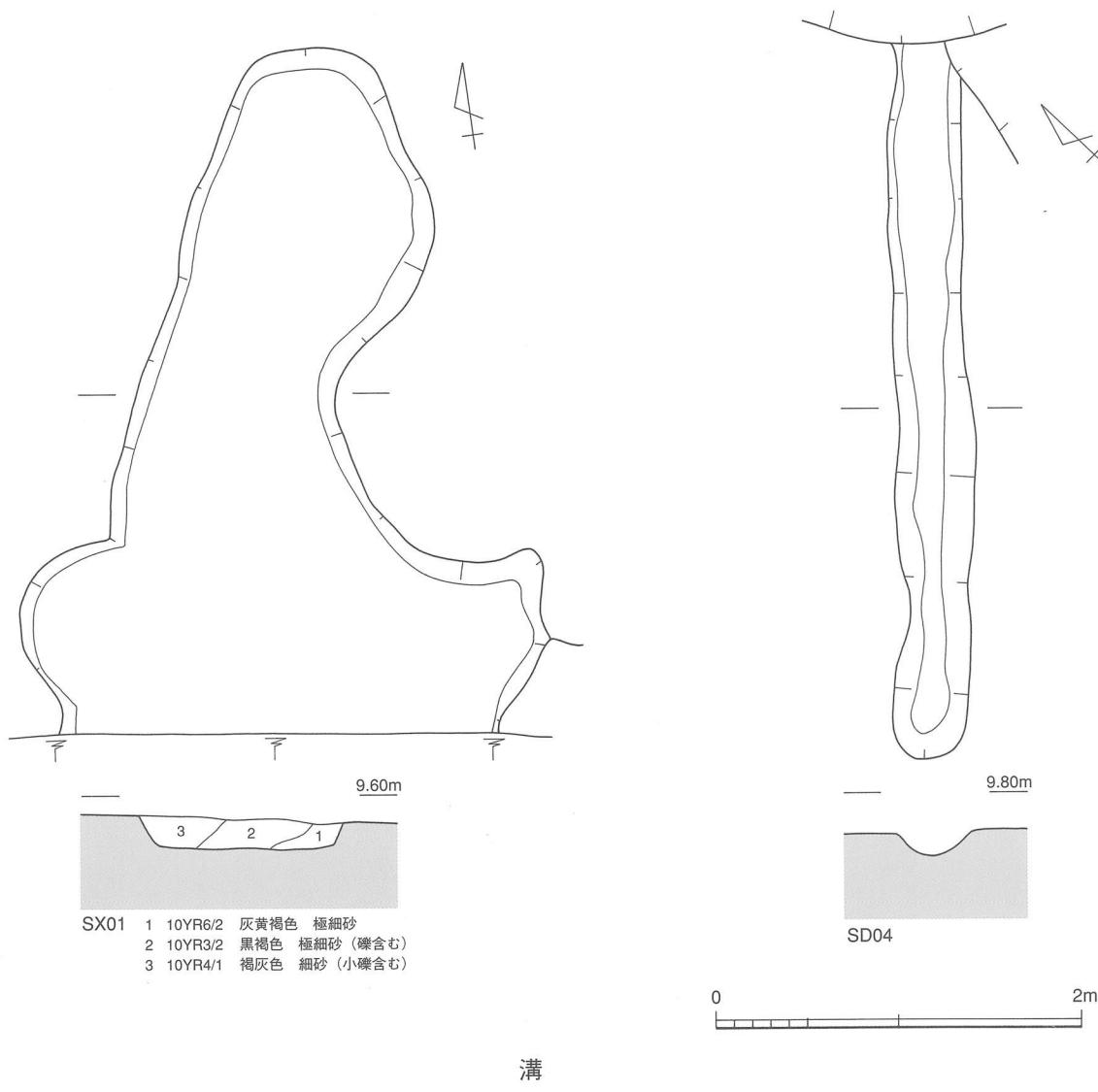
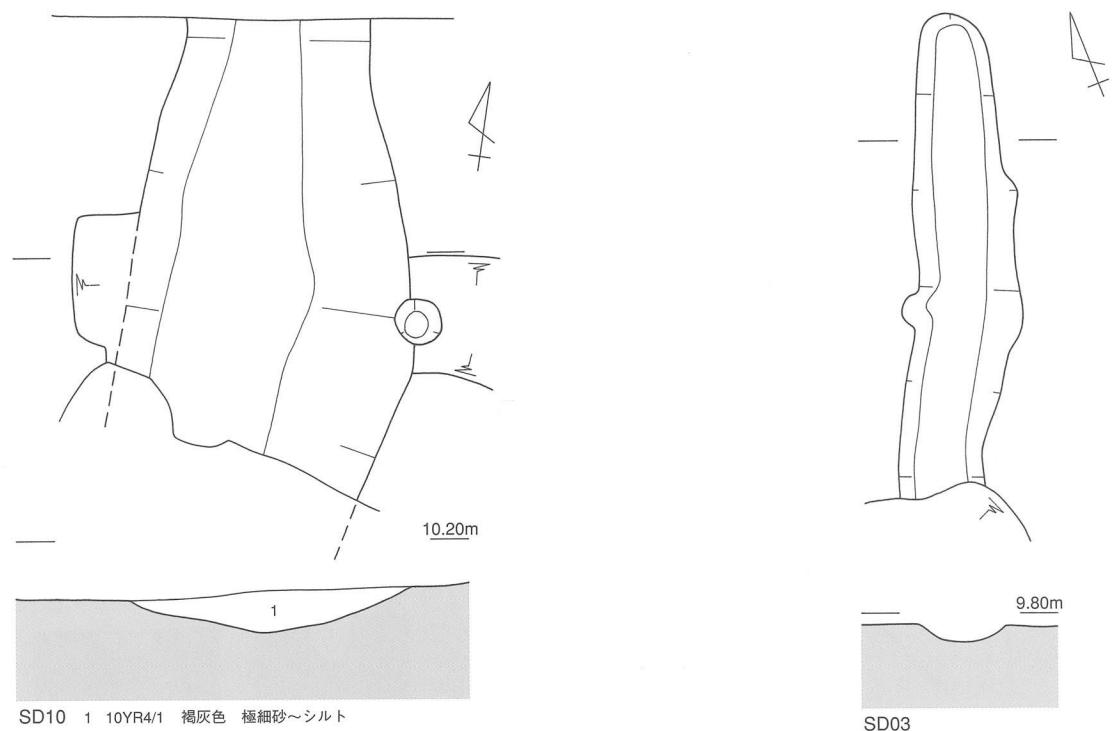


SK05 1 10YR4/1 褐灰色 極細砂

9.20m

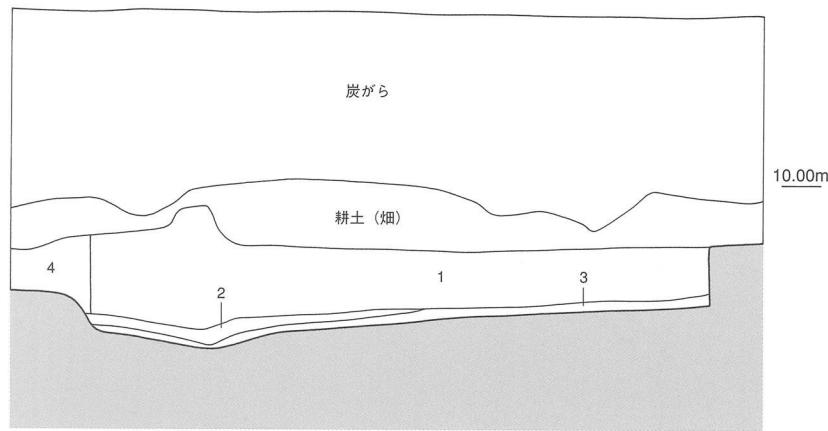
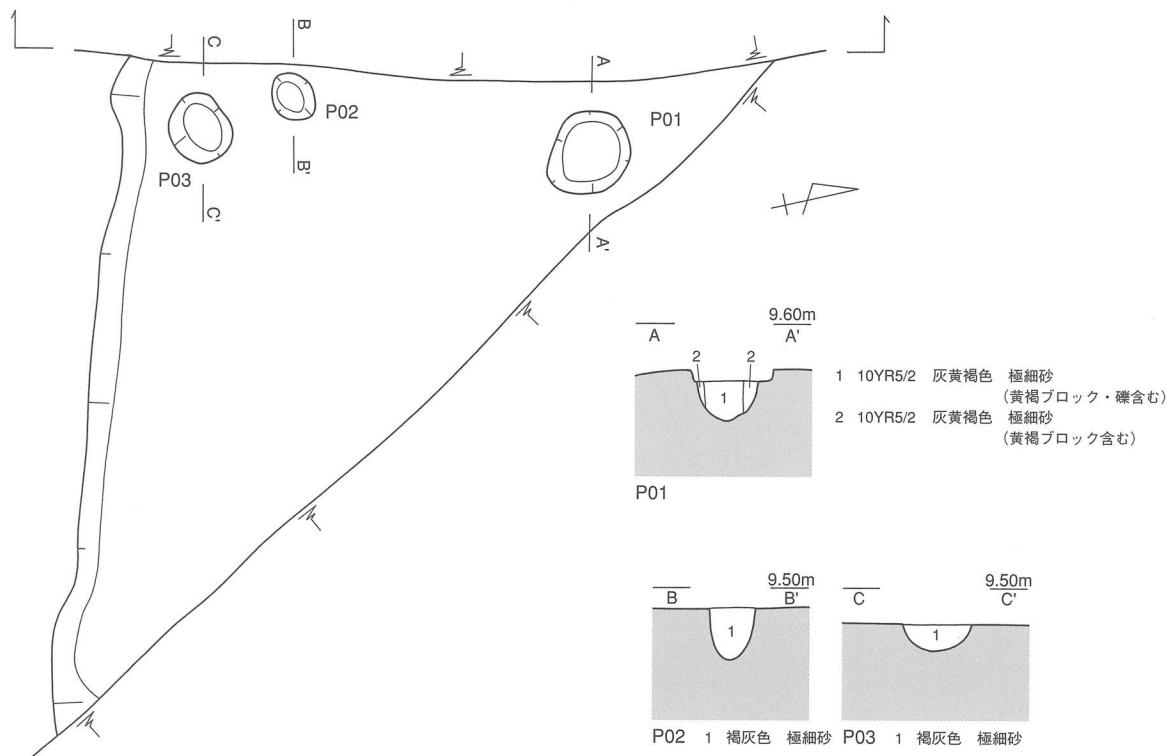


土坑



図版20

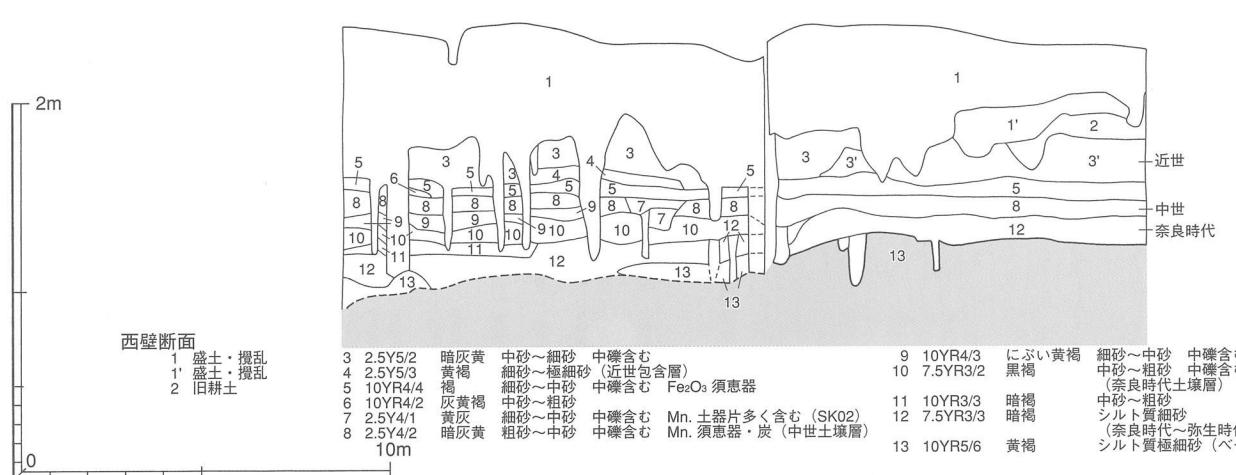
C (8)



0 2m

落ち込み・柱穴

D (1)

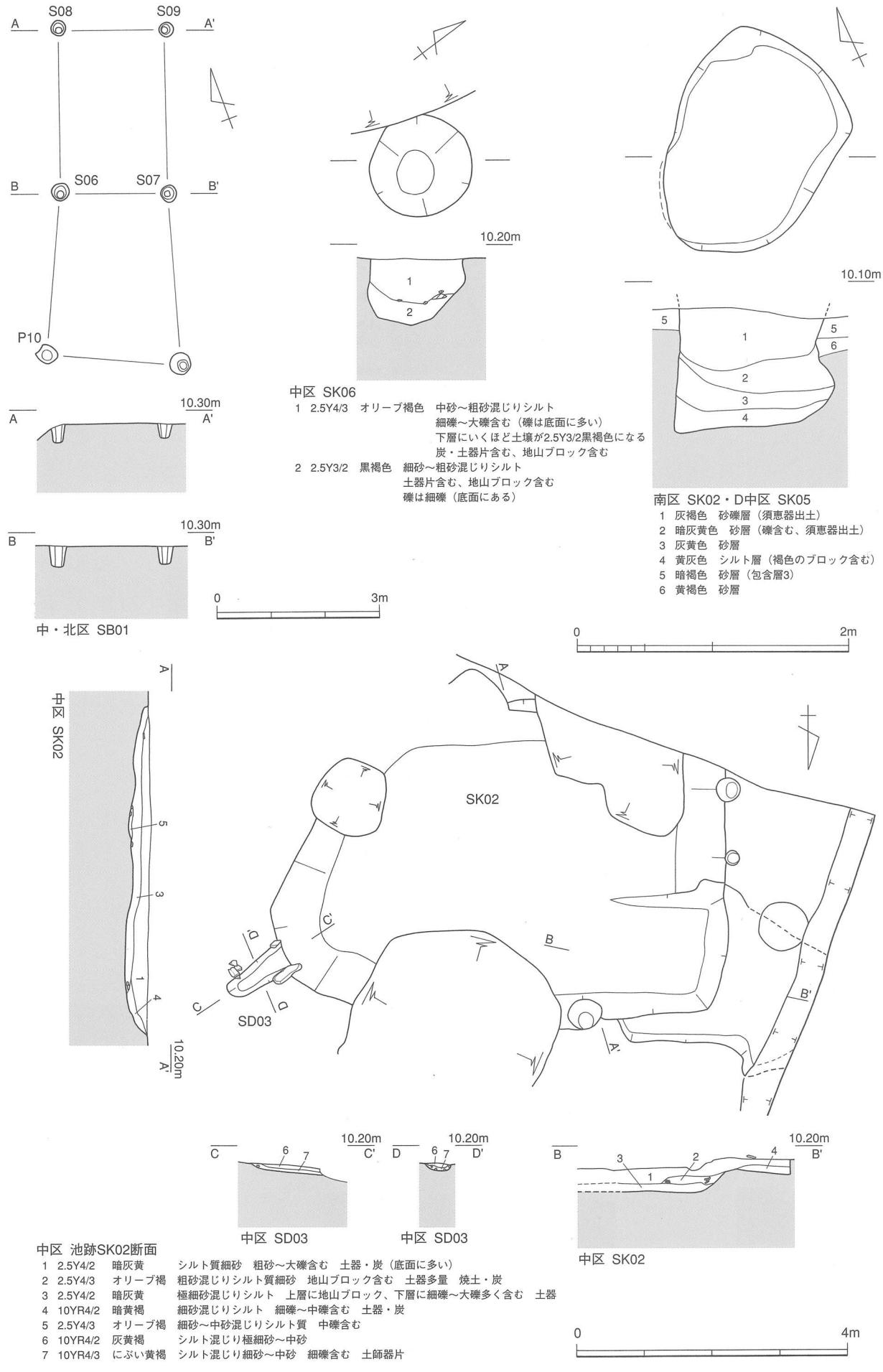


全体図・断面図 (1)

図版22



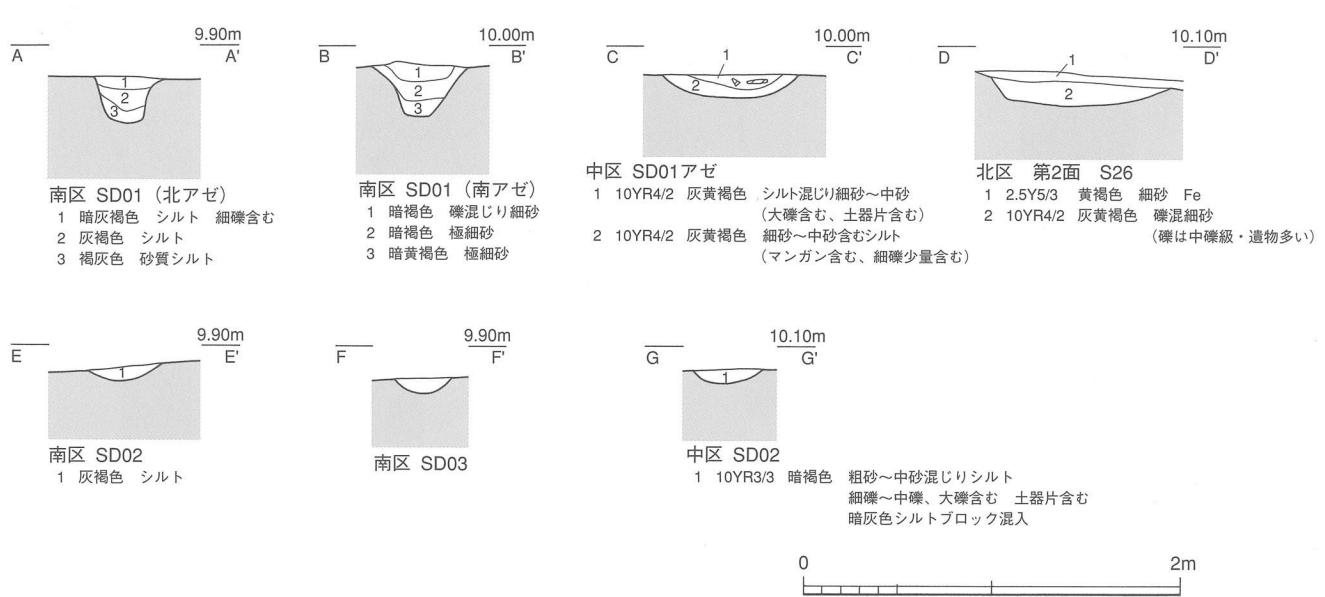
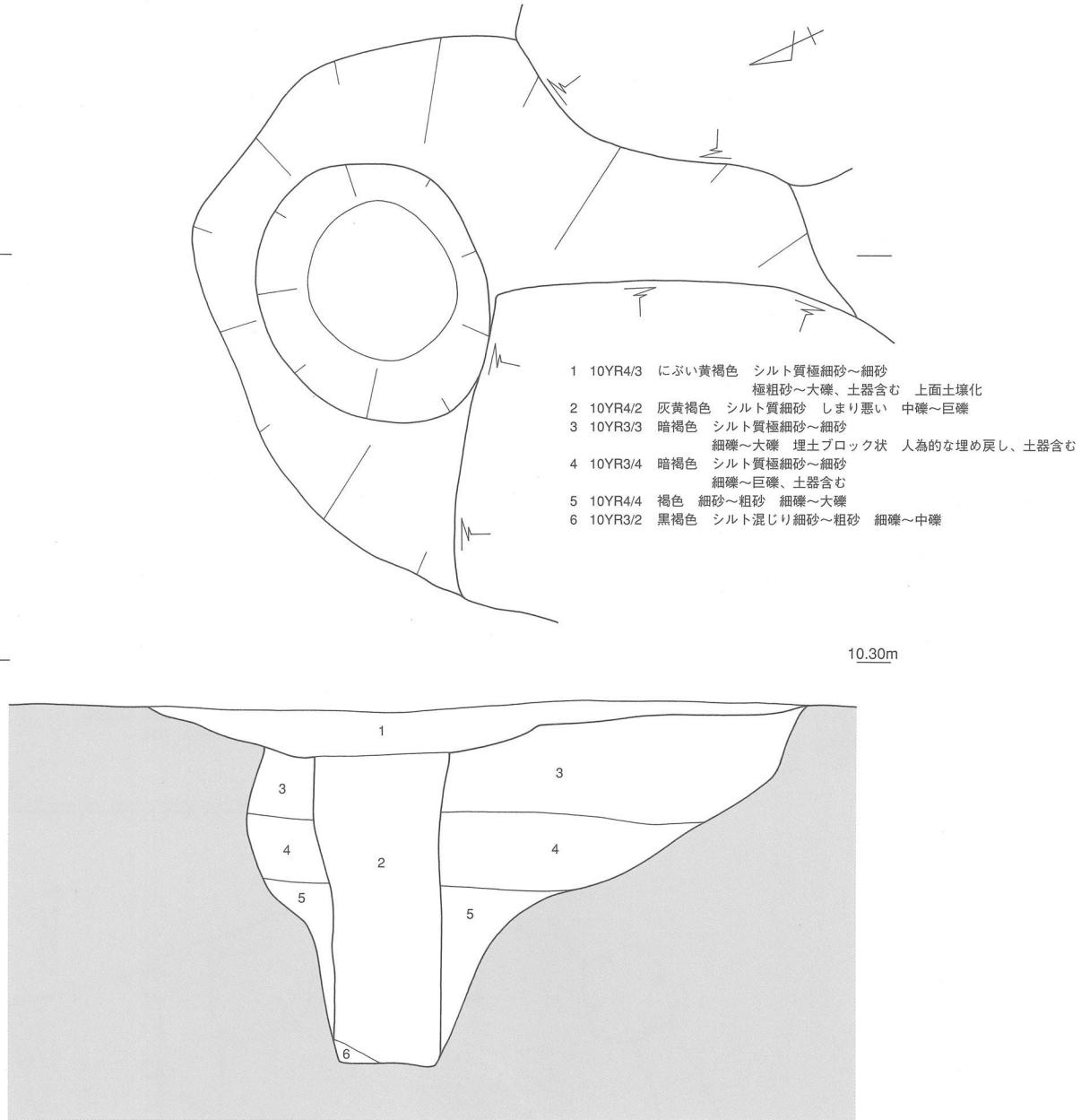
北区 奈良～平安時代・弥生時代平面図、断面図（2）



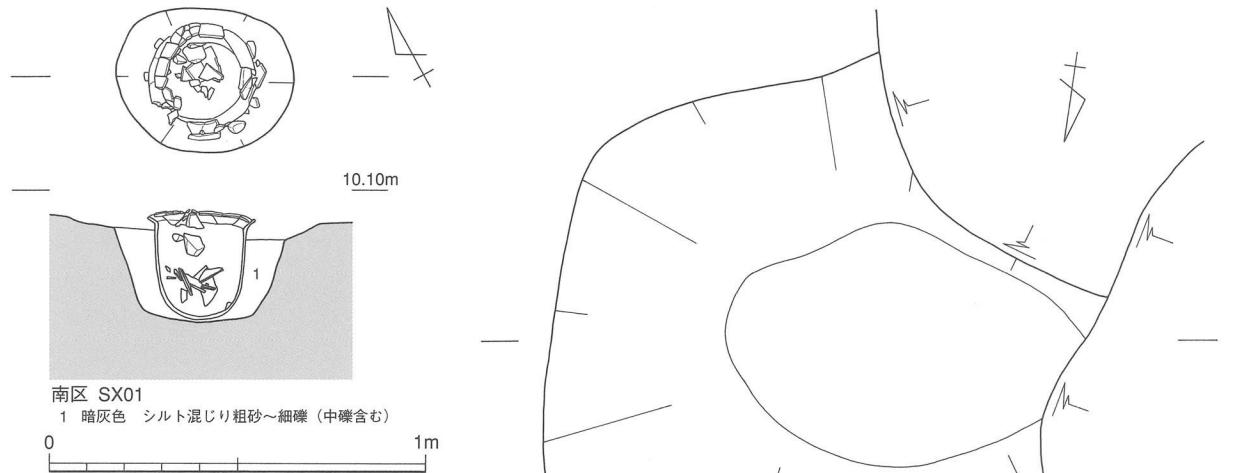
D区(3)

図版24

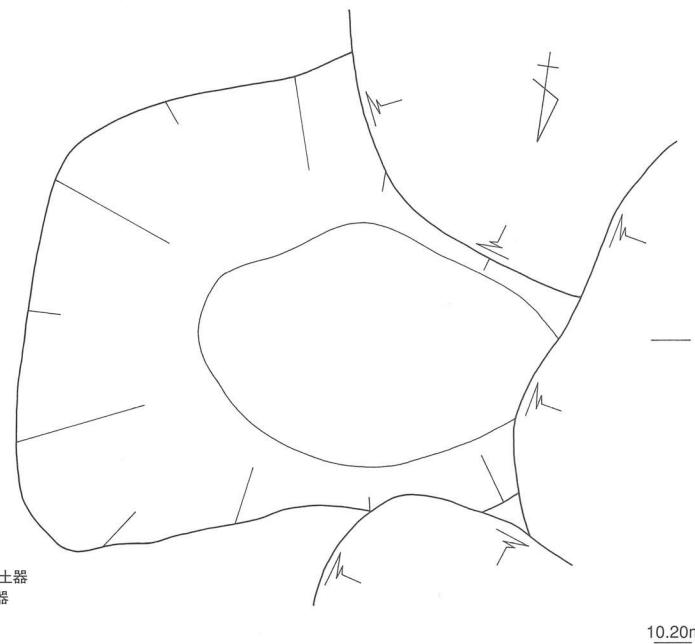
D区(4)



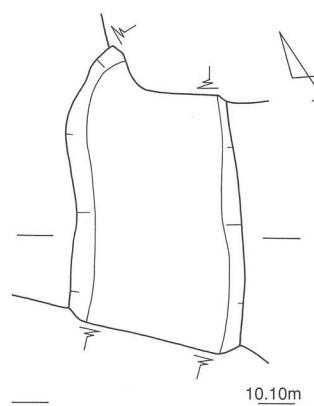
奈良～平安時代 井戸・溝



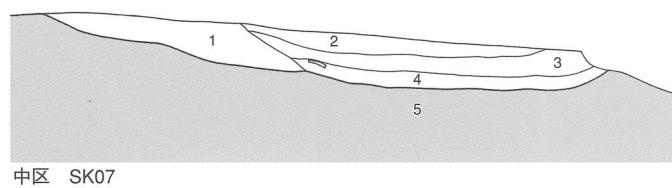
中区 SK07
1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～中砂、細礫（底）
2 10YR4/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂～粗砂、細礫、土器、炭
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 シルト混じり細砂～粗砂、細礫、炭（多い）、土器
4 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり中砂～極粗砂、細礫（多い）、炭、土器
5 砂礫層（上部にシルト～砂堆積）



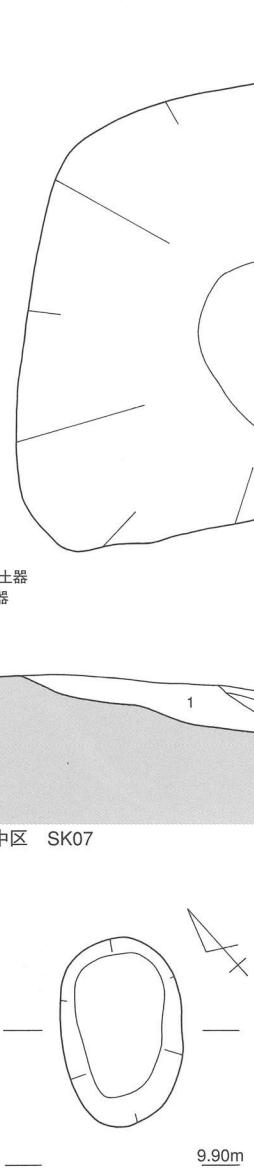
D区(5)



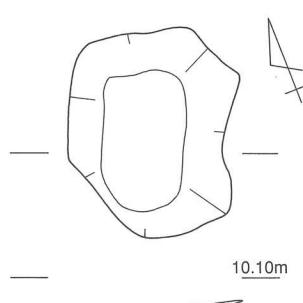
南区 SK01
1 褐色 極細砂 礫混じり
2 暗褐色 極細砂 礫混じり
3 暗褐色 極細砂



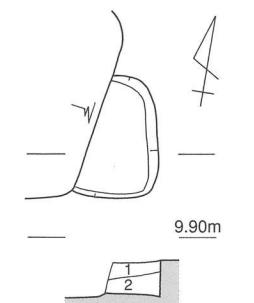
南区 SK03
1 灰褐色 砂質シルト



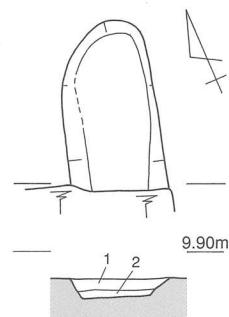
南区 SK09
1 灰褐色 シルト（中～大礫含む）
2 灰褐色 シルト（黄色シルトブロック含む）



南区 SK13
1 褐灰色 細砂（中礫～大礫、土器含む）
2 灰褐色 シルト質細砂（土器含む）
3 暗褐色 細砂～中礫



南区 SK10
1 灰褐色 シルト
2 灰褐色 砂質シルト 中礫含む

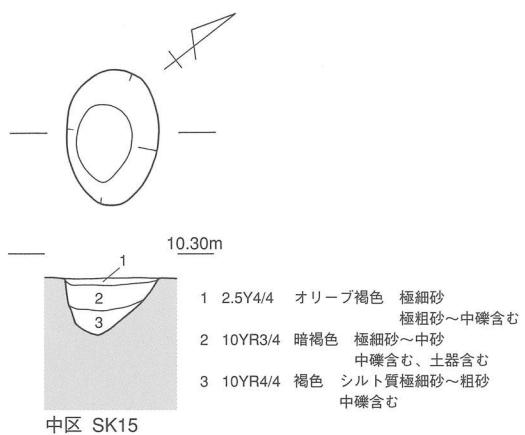
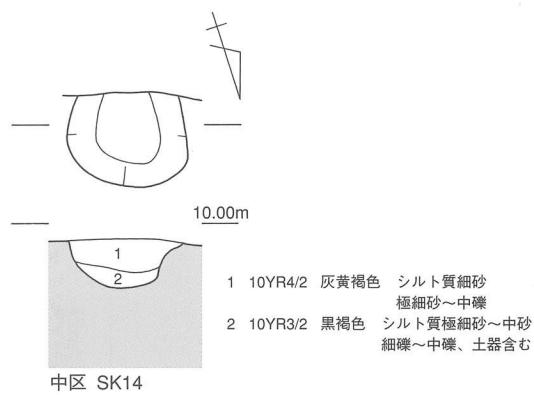
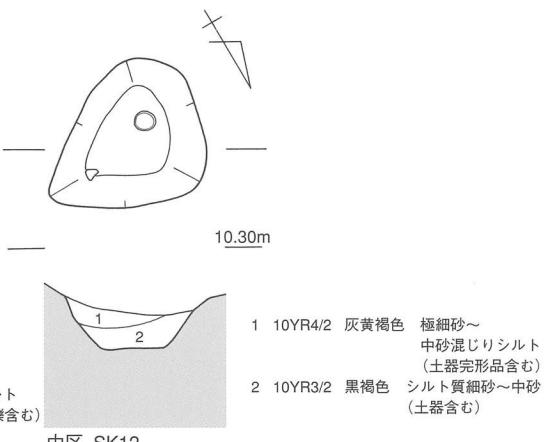
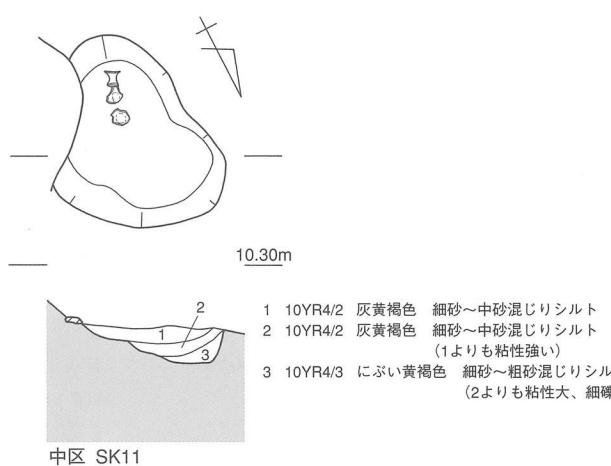
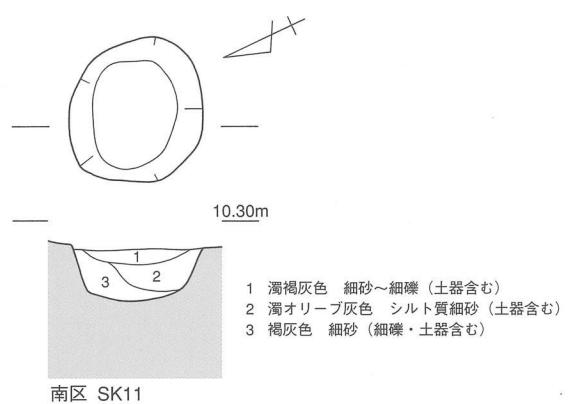
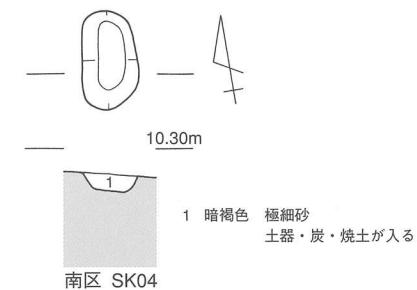
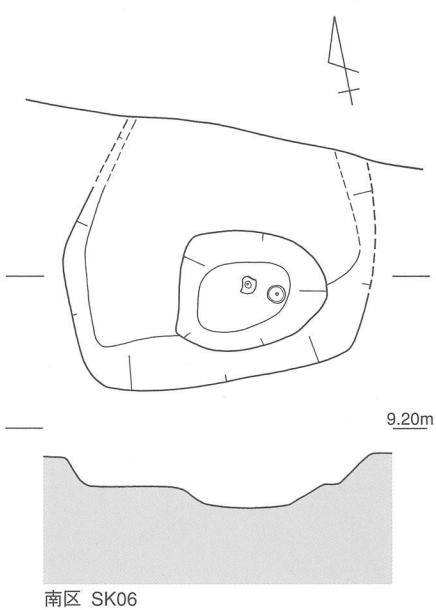


南区 SK12
1 灰褐色 シルト（中礫含む）
2 灰褐色 シルト（黄色シルトブロック含む）

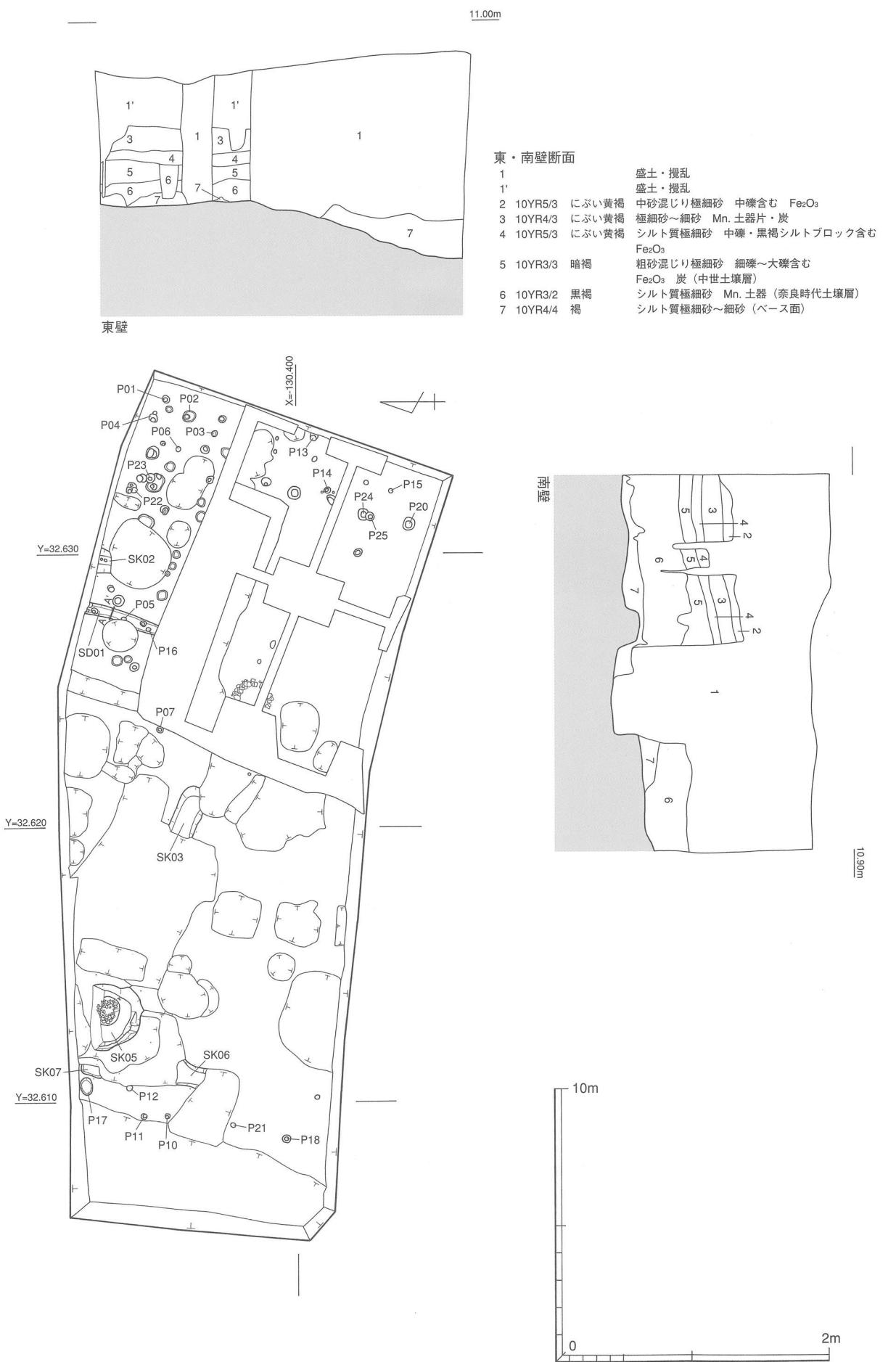
0 2m

奈良～平安時代 埋甕・土坑

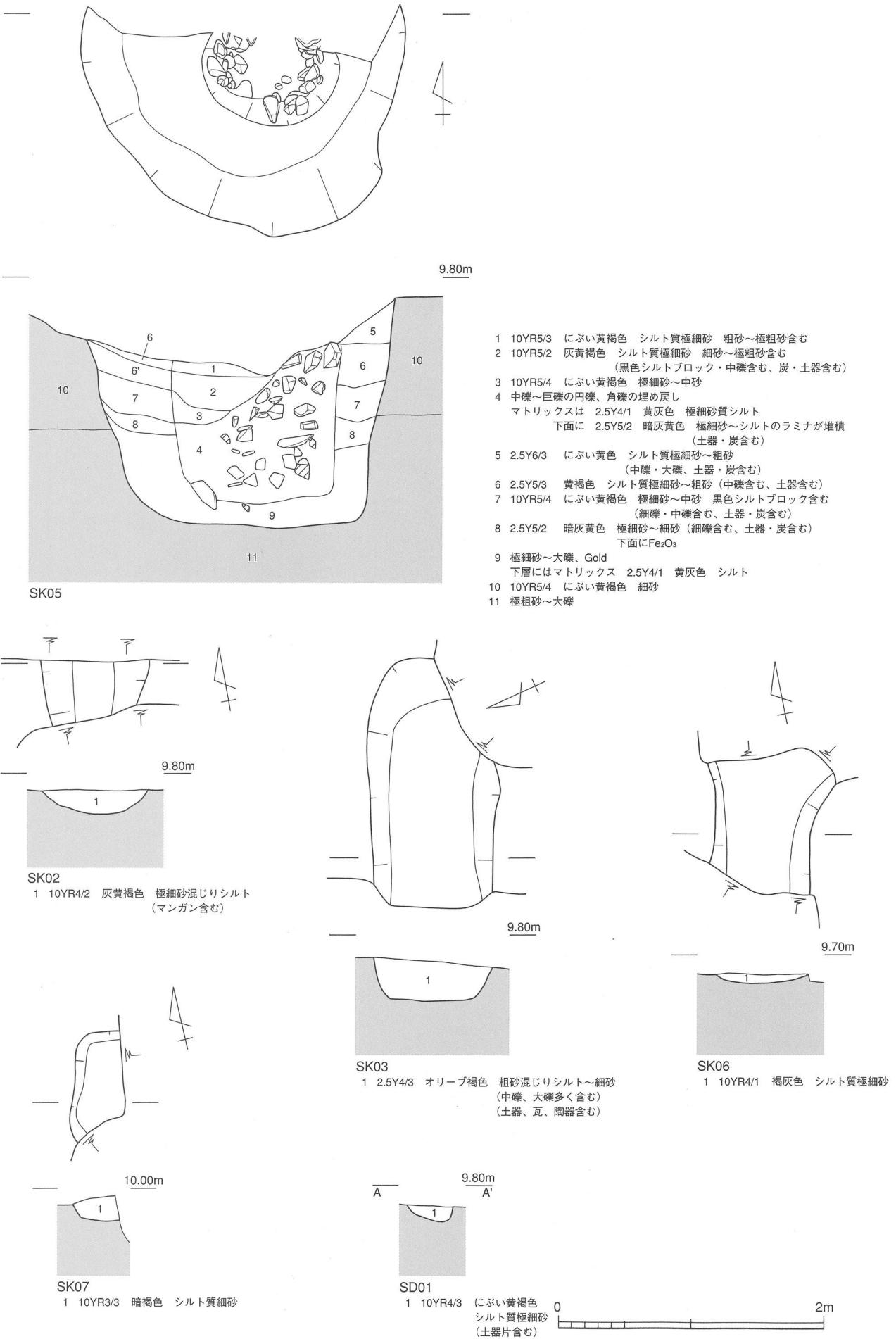
D区(6)



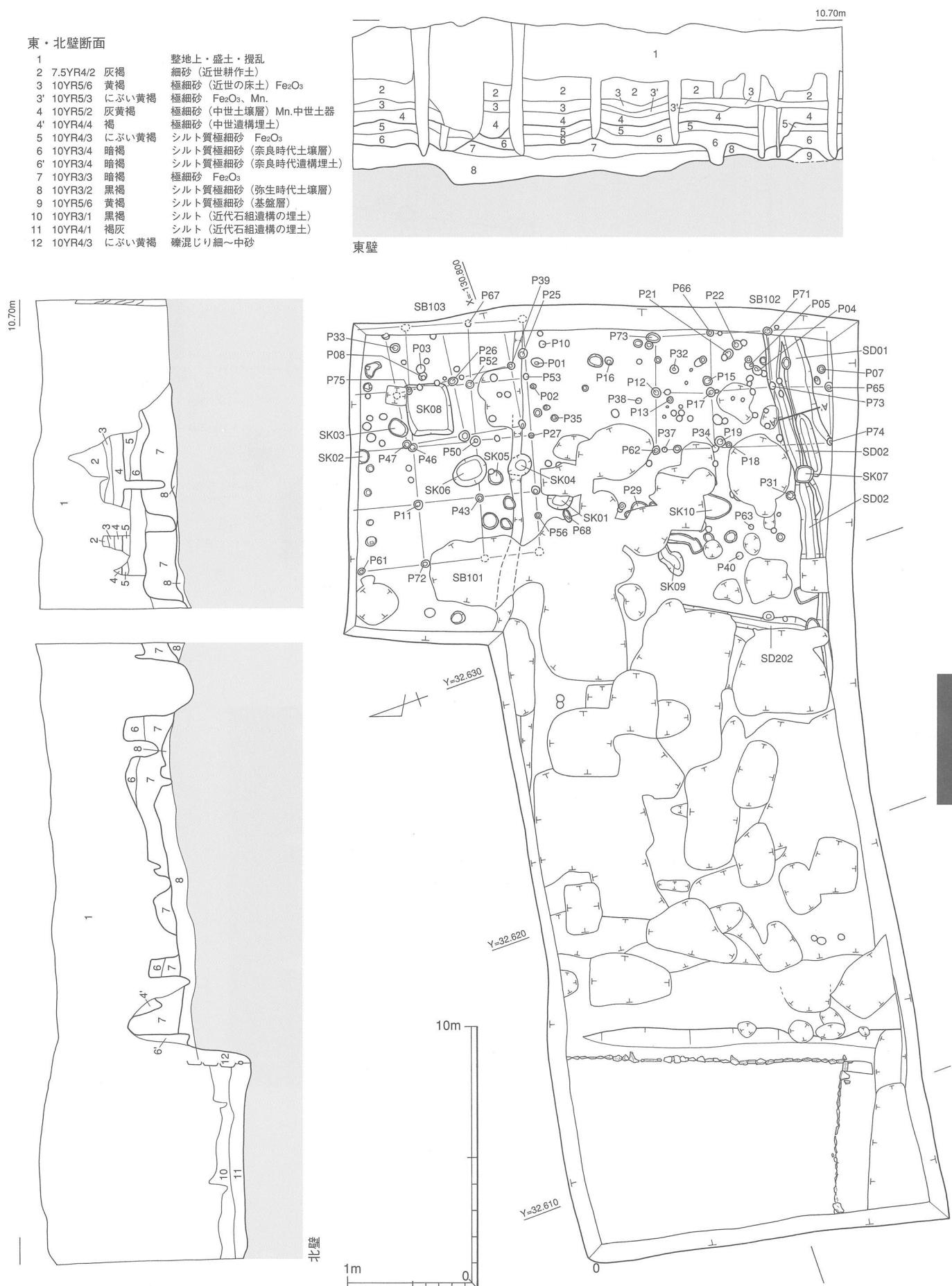
弥生時代 土坑



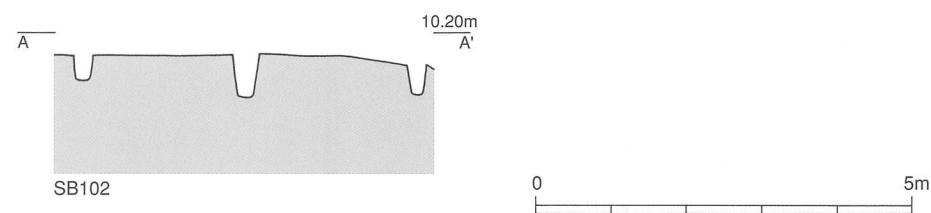
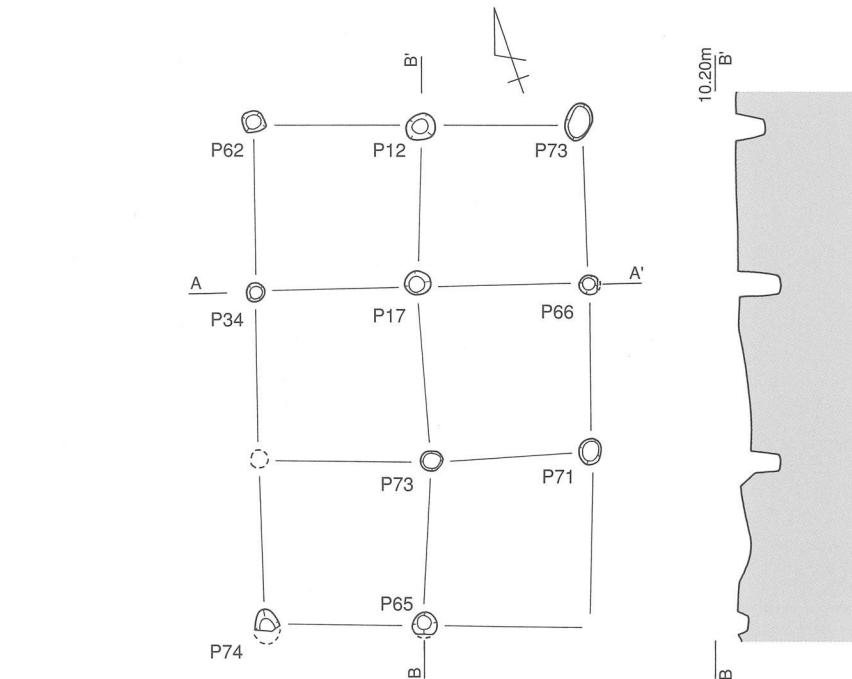
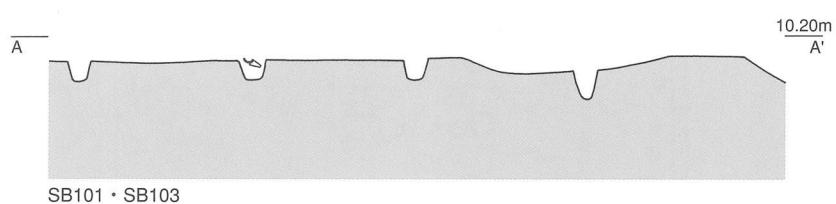
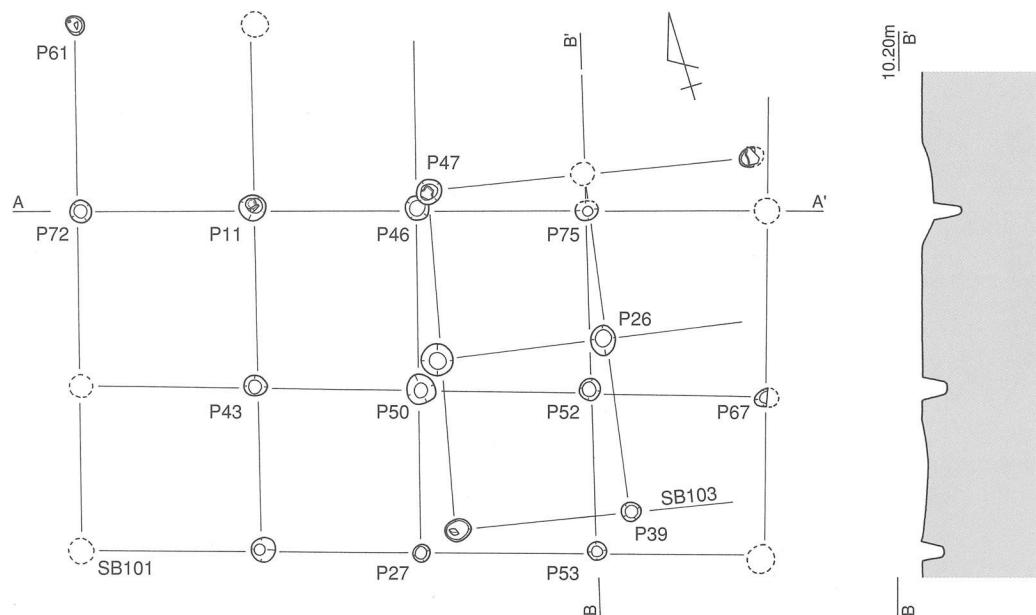
全体図・断面図



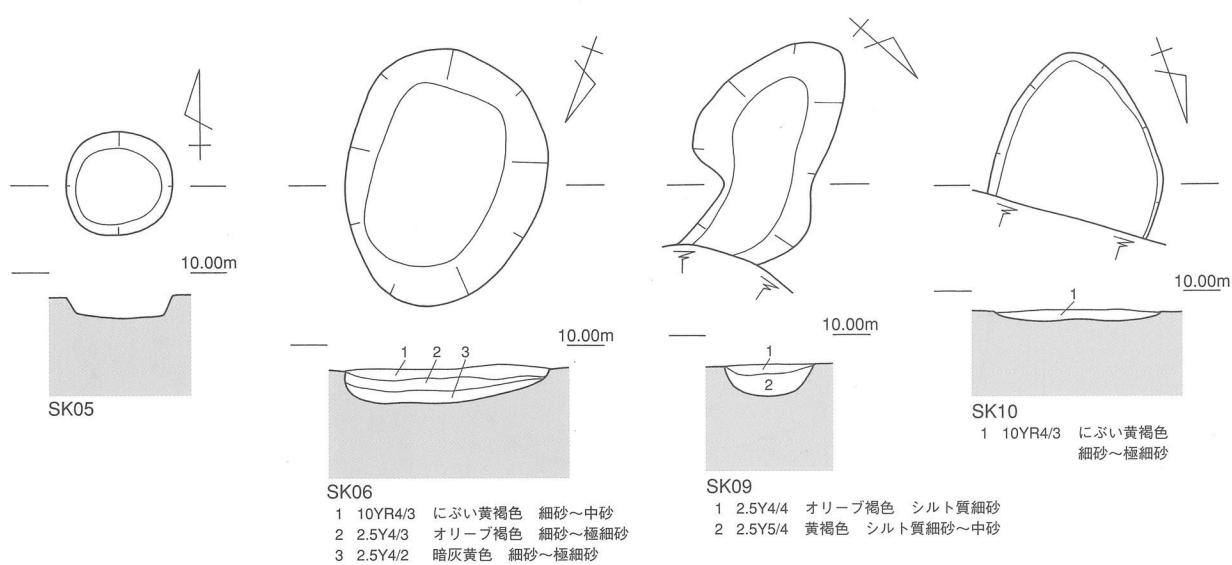
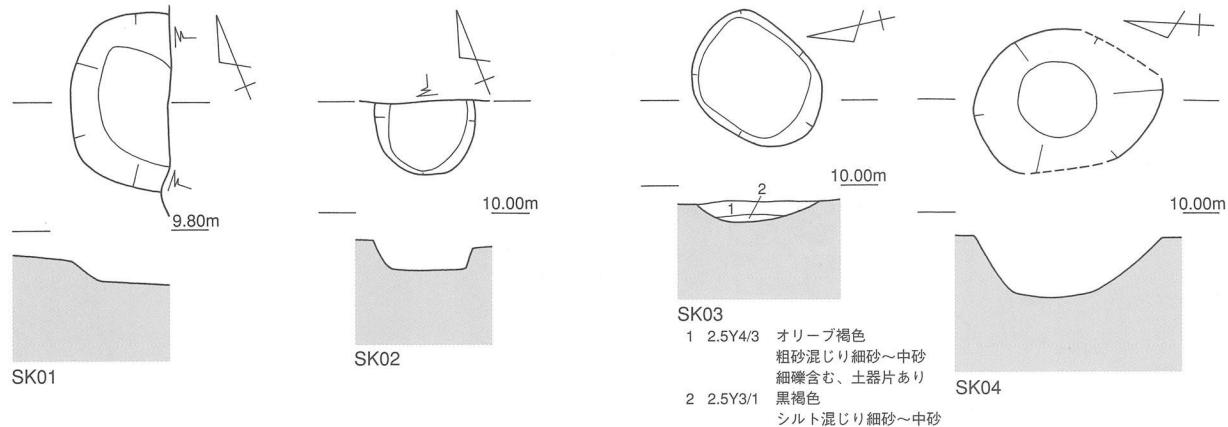
奈良～平安時代 井戸・土坑・溝



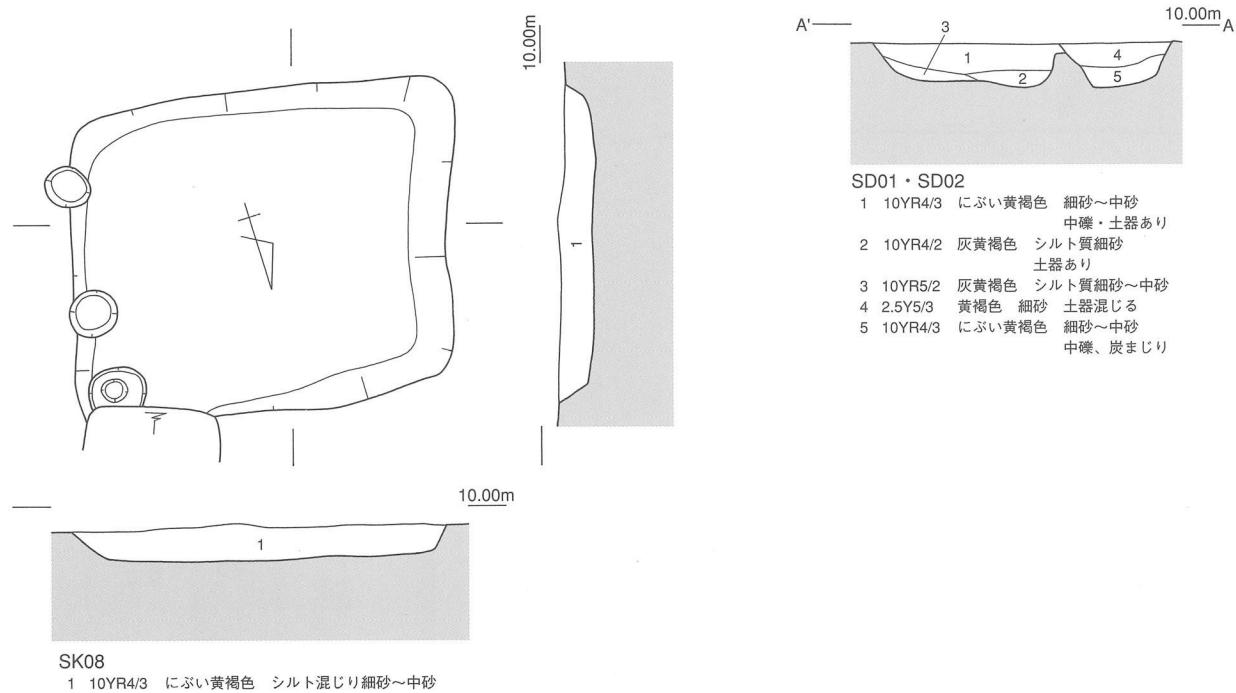
中世全体図・断面図 (1)



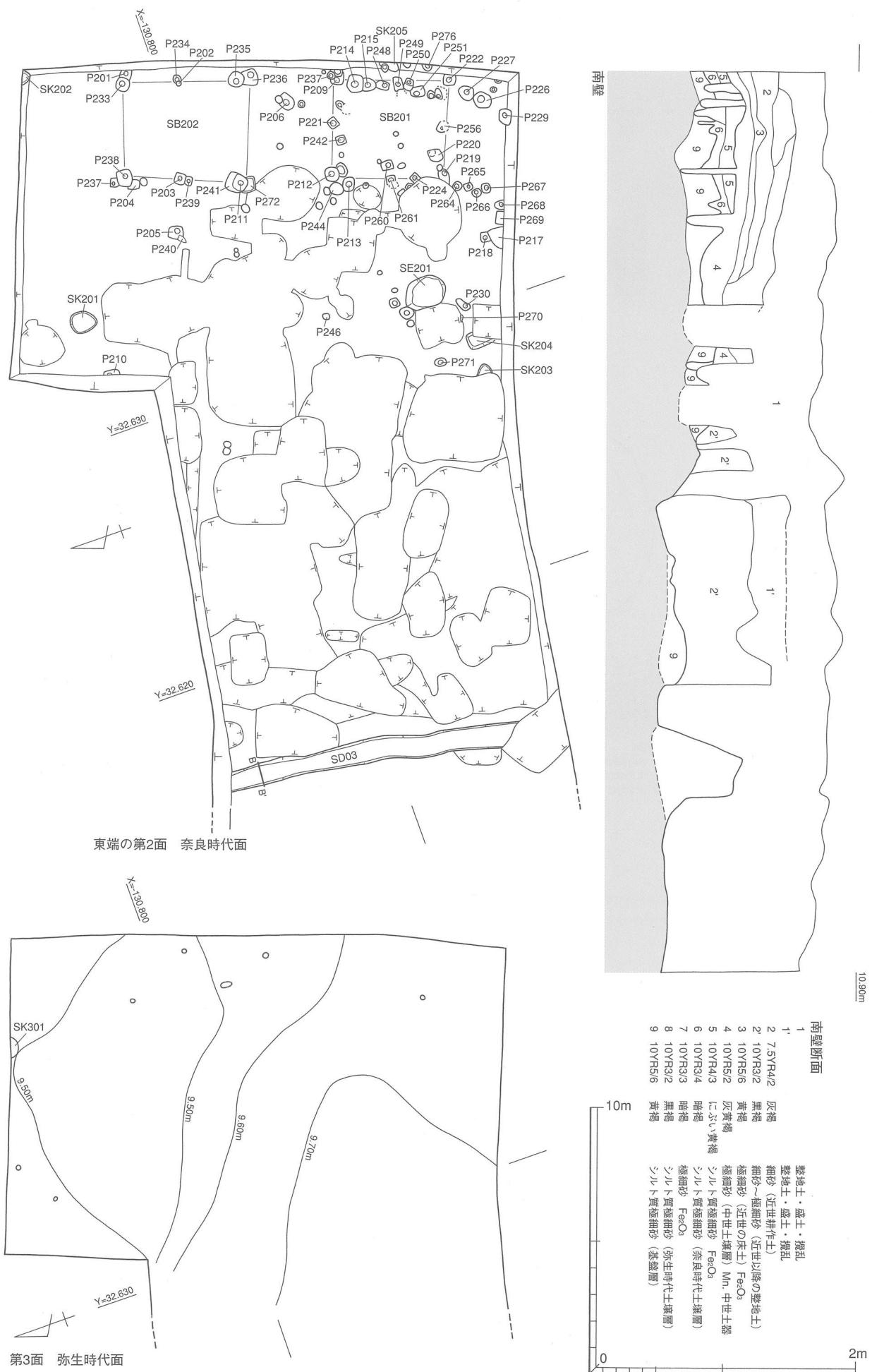
中世 掘立柱建物

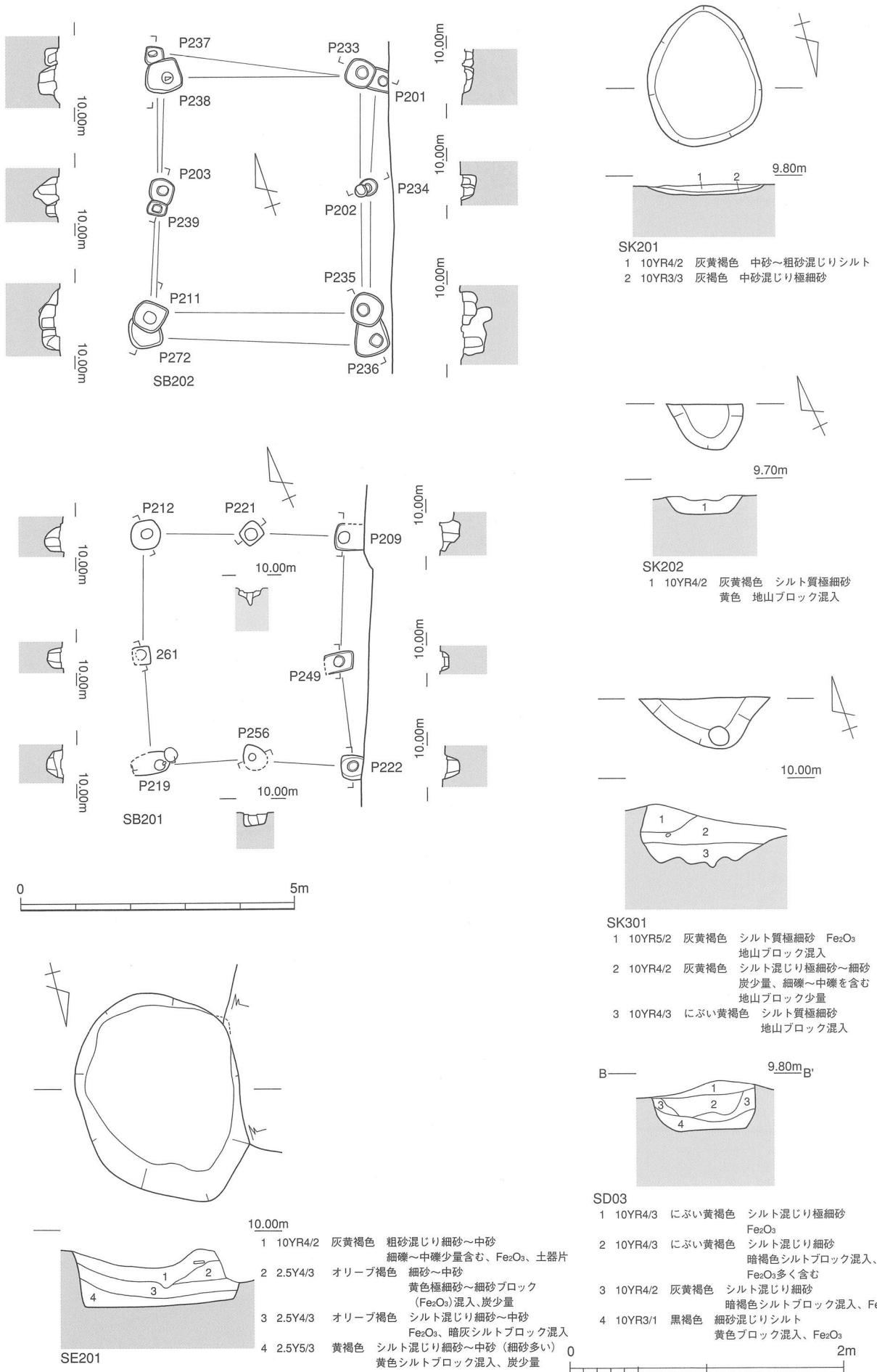


F区(3)



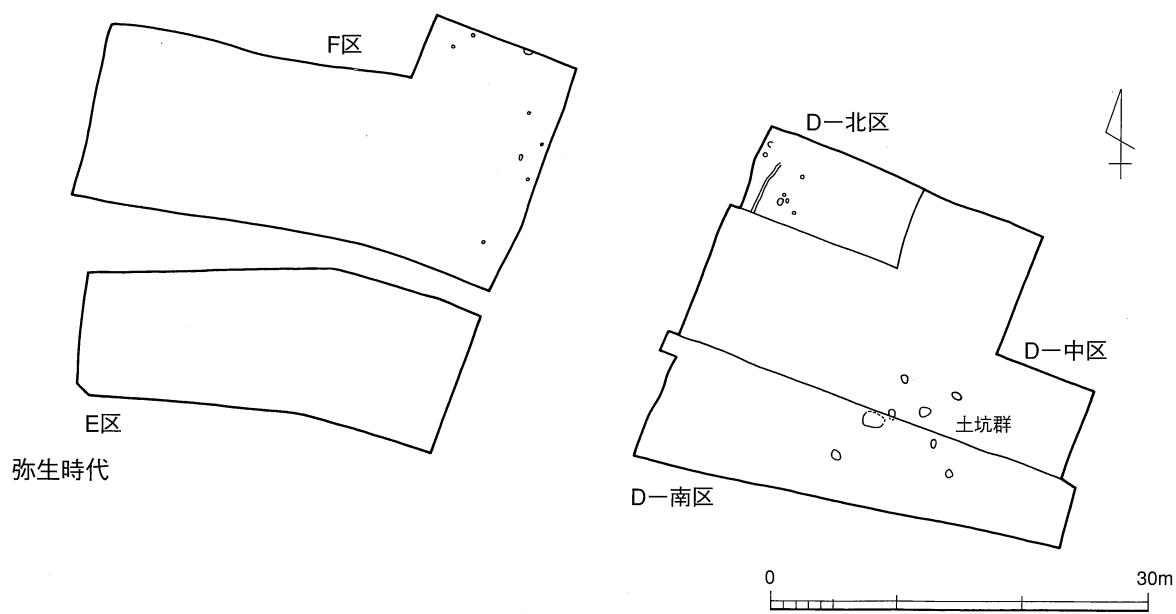
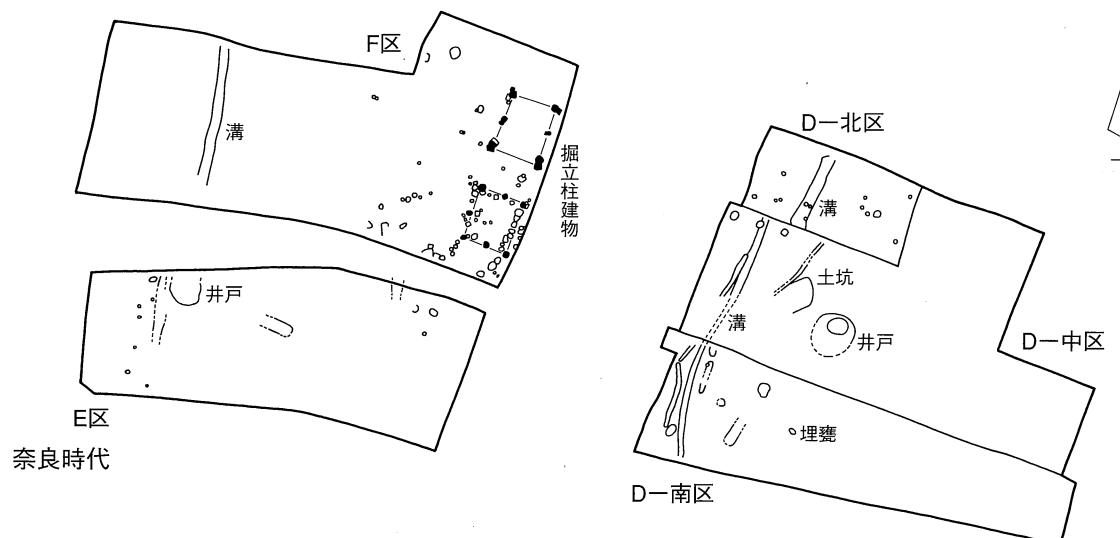
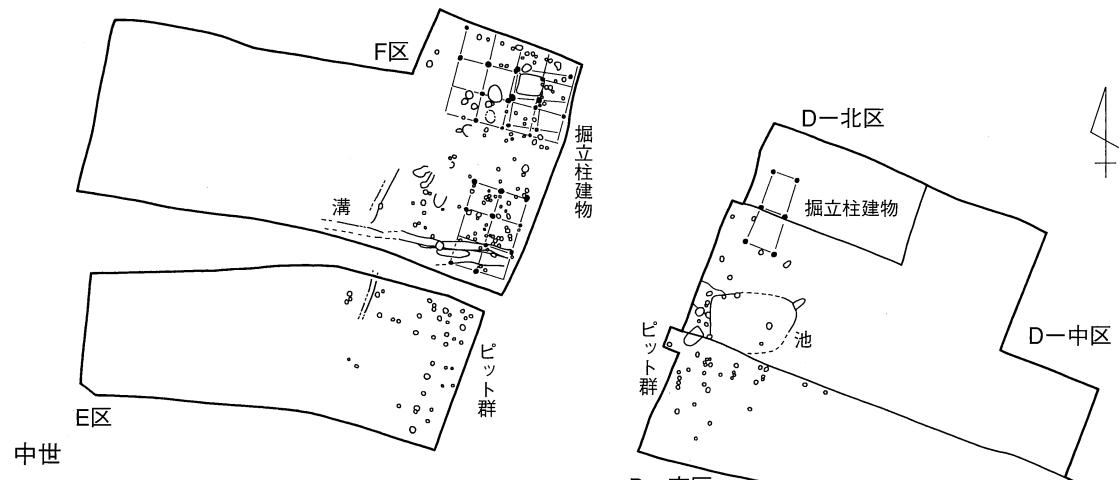
中世 土坑・溝





奈良時代 掘立柱建物・土坑・溝

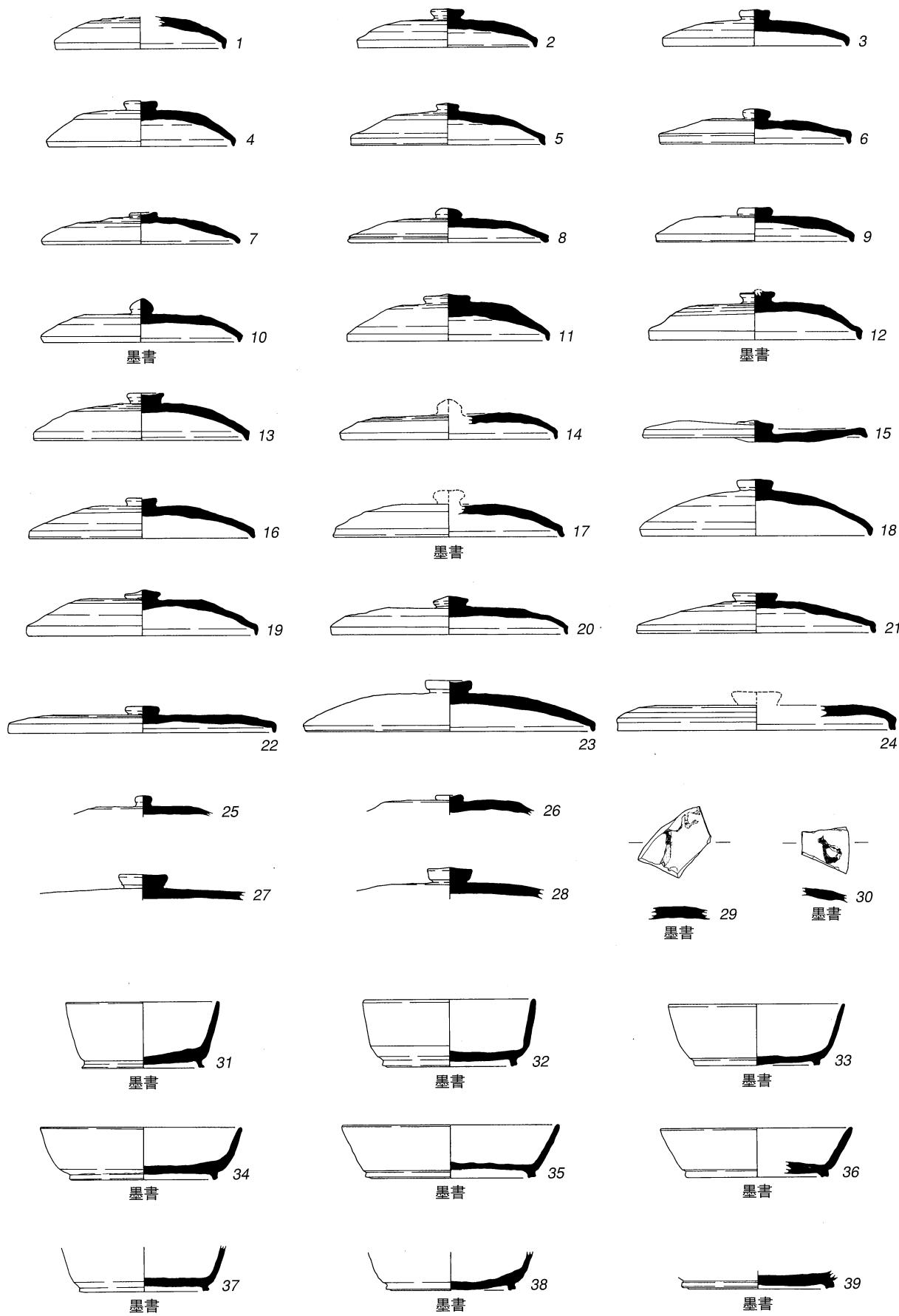
図版34



D～F区の遺構変遷図

0 30m

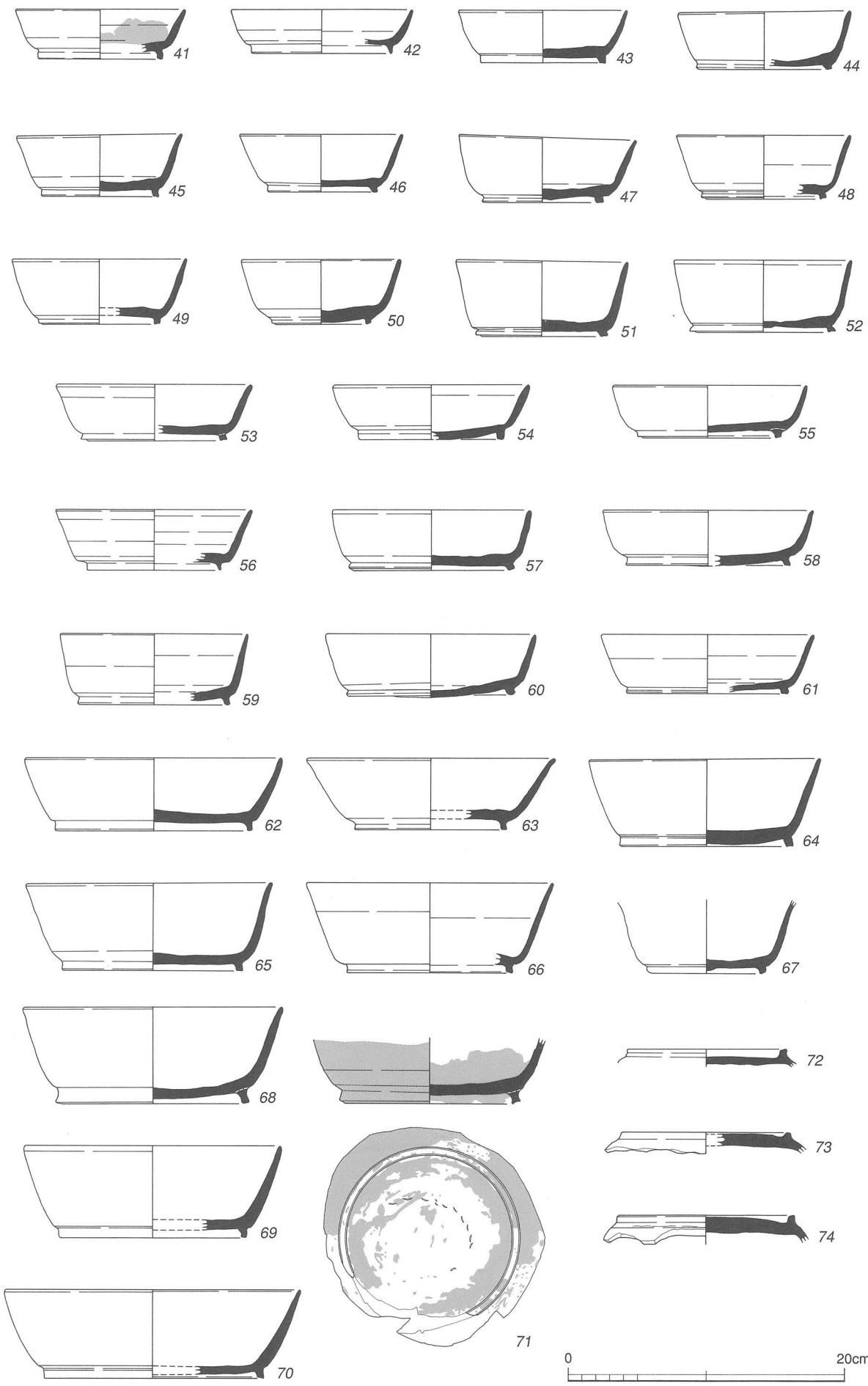
A区(1)



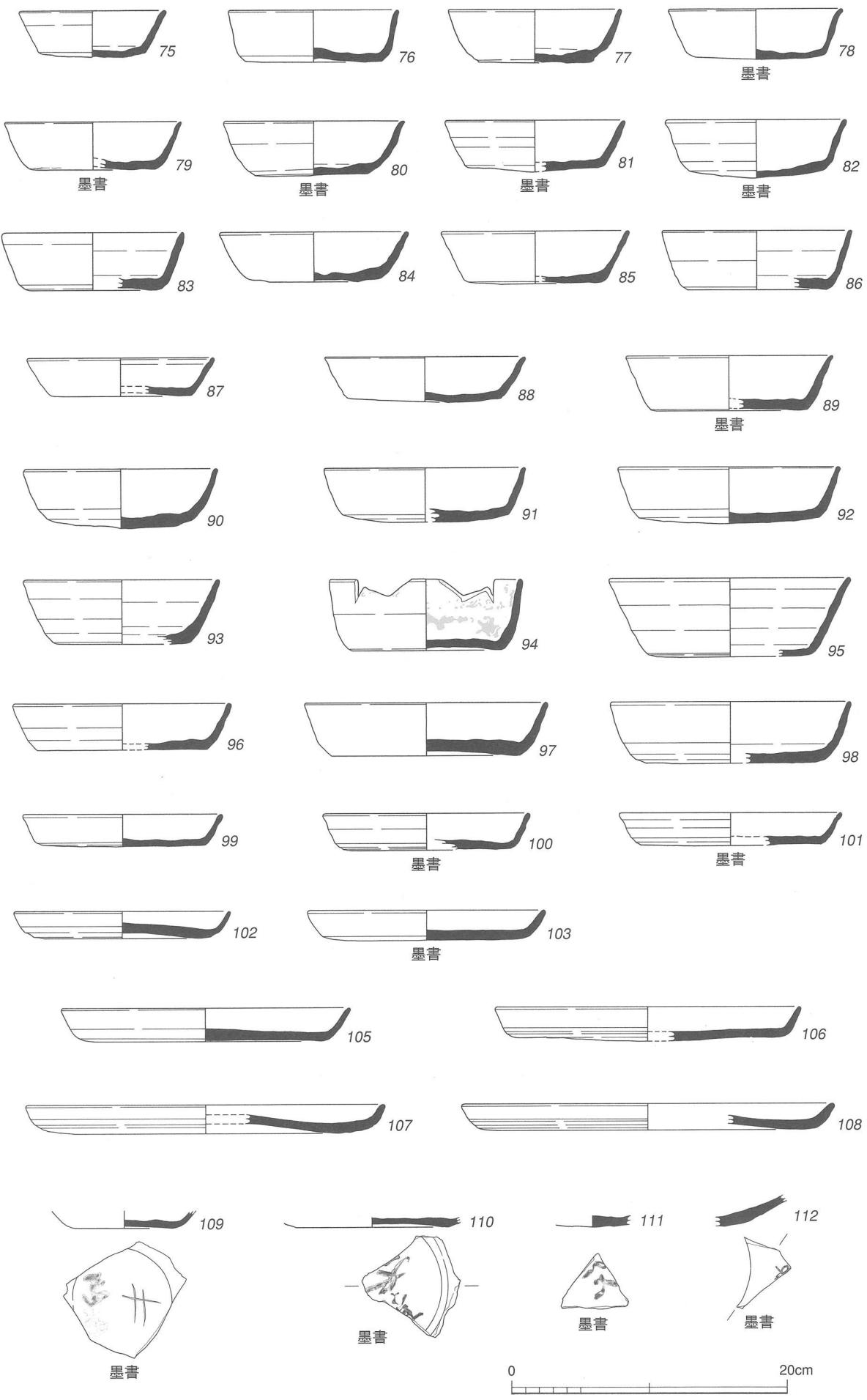
旧河道出土土器(1)



A区(2)

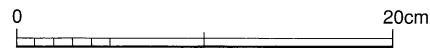
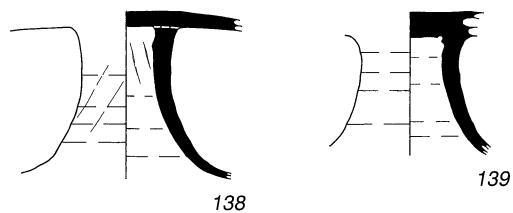
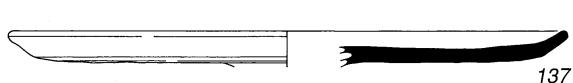
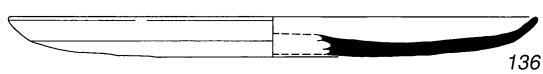
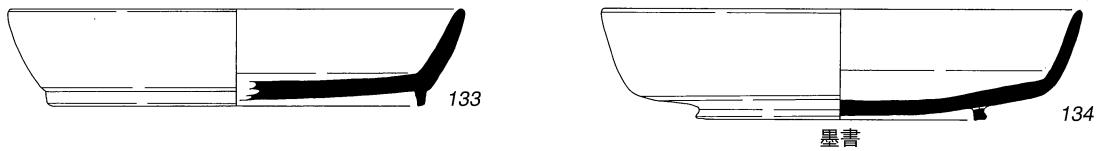
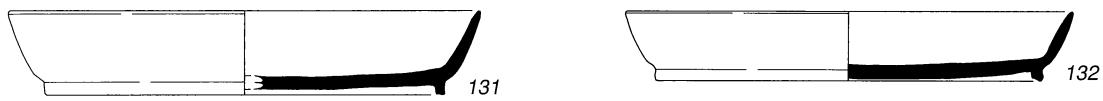
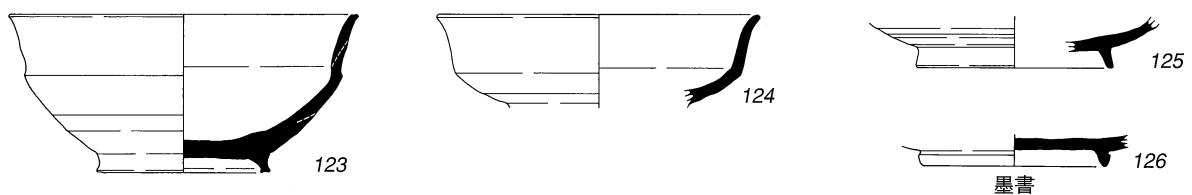
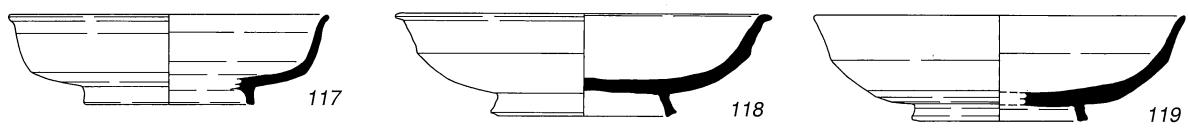


旧河道出土土器(2)



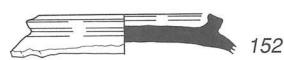
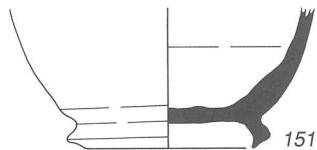
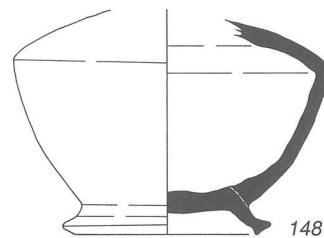
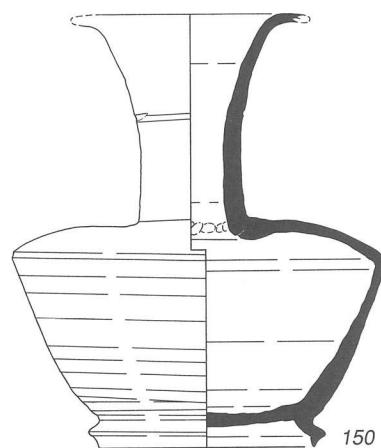
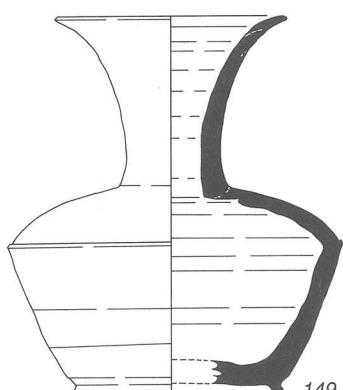
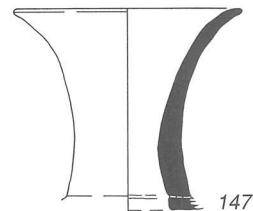
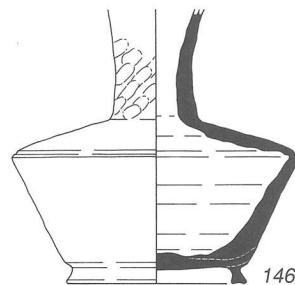
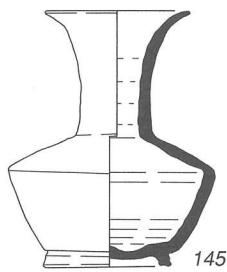
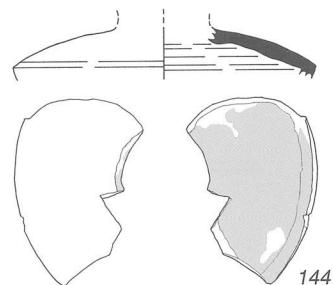
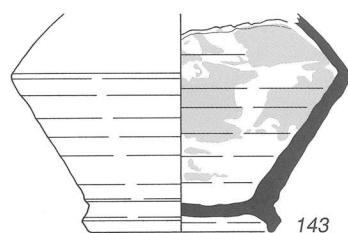
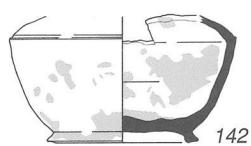
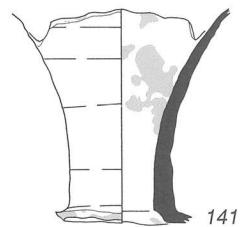
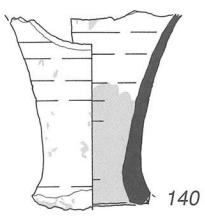
旧河道出土土器(3)

A区(4)



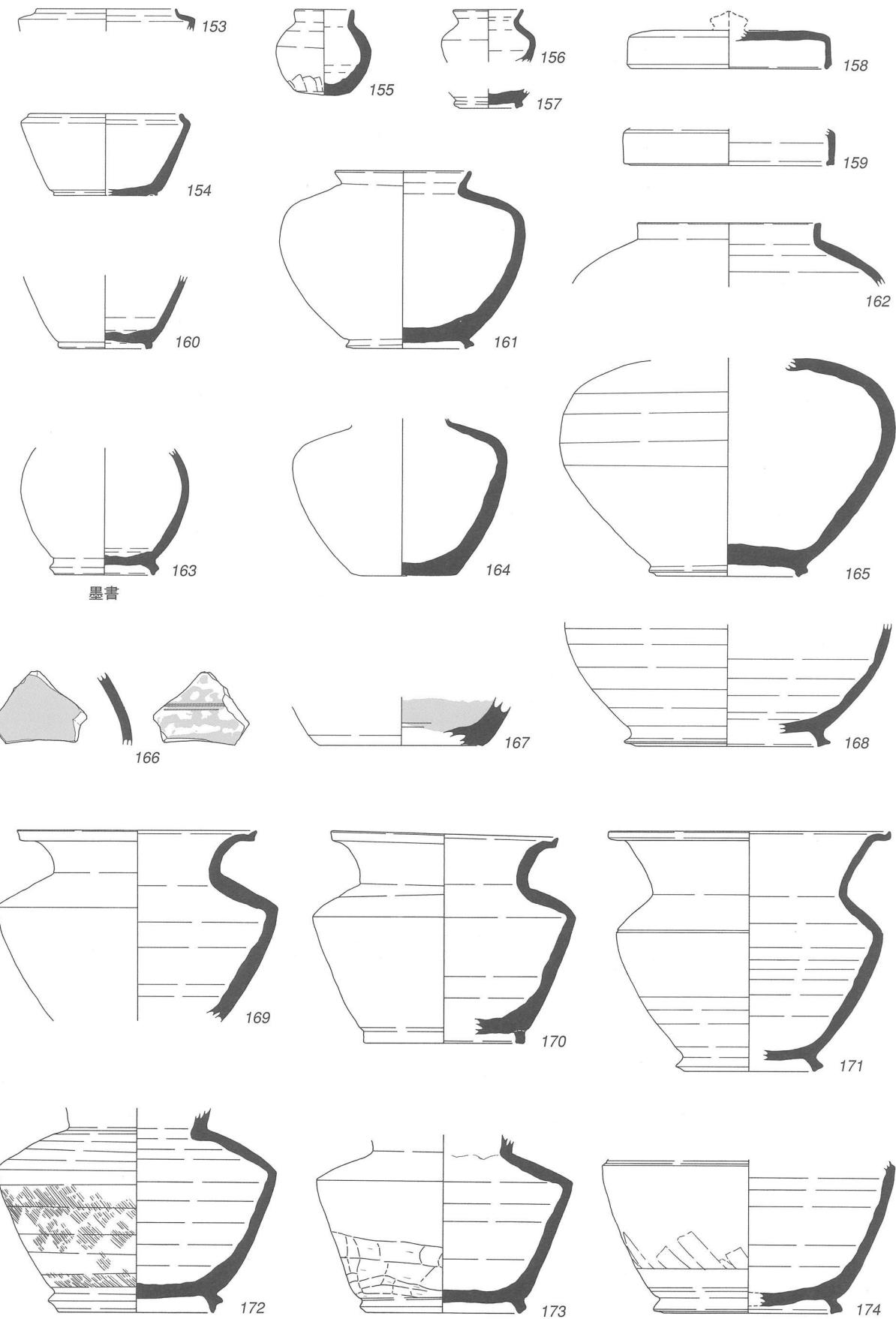
旧河道出土土器(4)

A区(5)



旧河道出土土器(5)

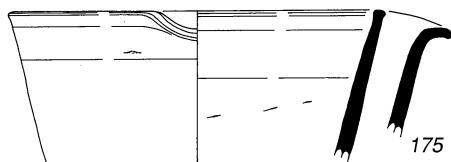
A区(6)



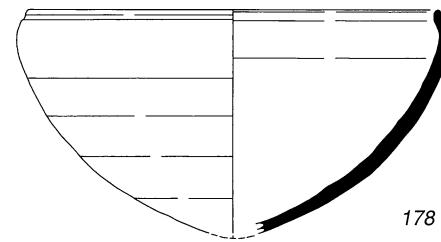
0 20cm

旧河道出土土器(6)

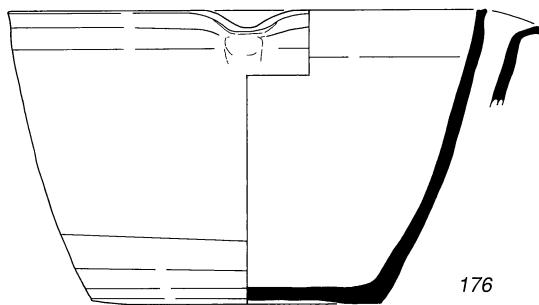
A区(7)



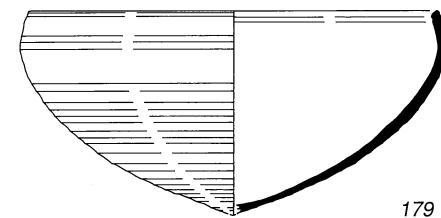
175



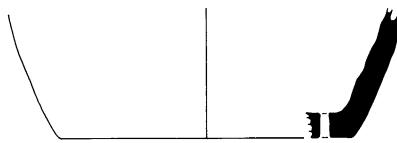
178



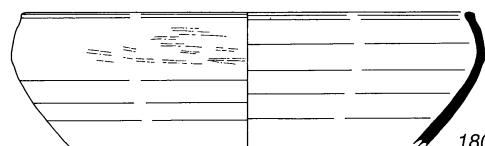
176



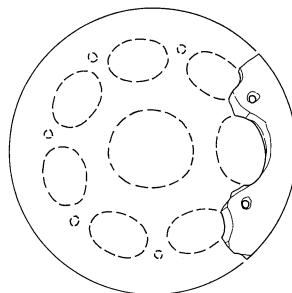
179



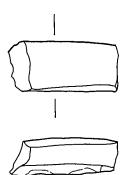
177



180



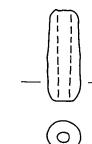
181



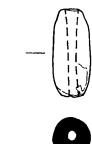
182



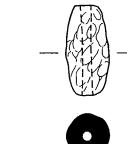
183



184



185



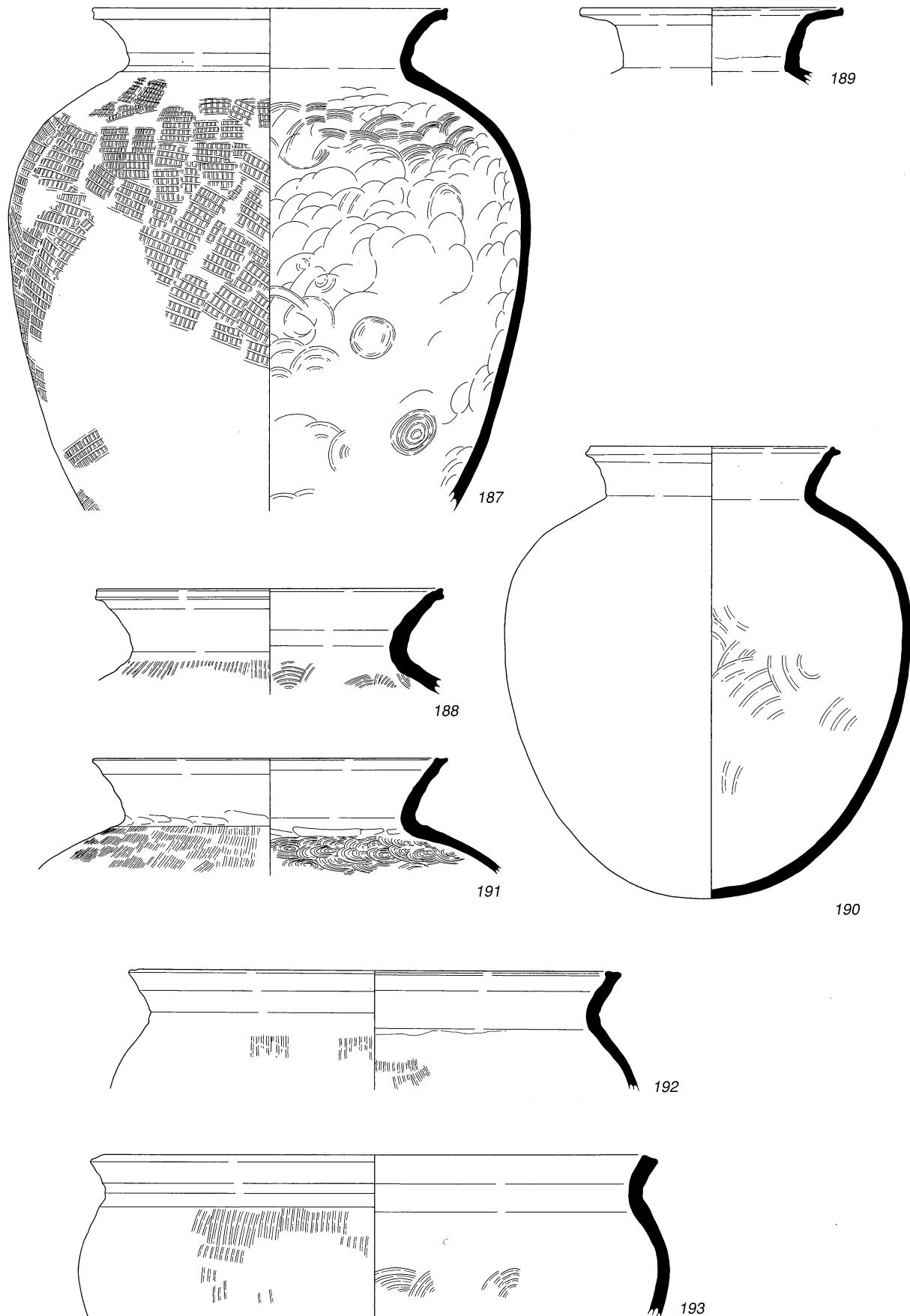
186



旧河道出土土器(7)

図版42

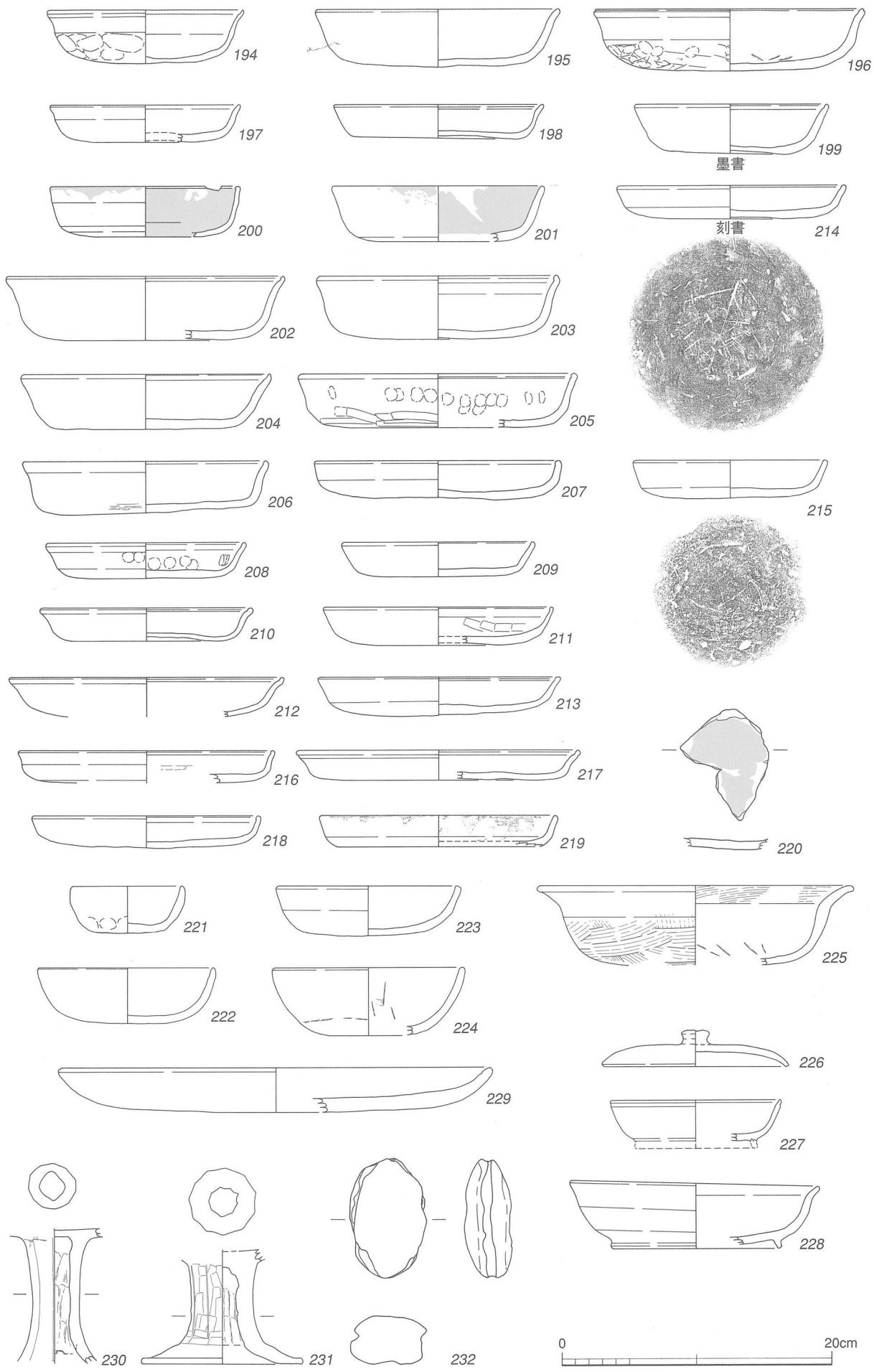
A区
(8)



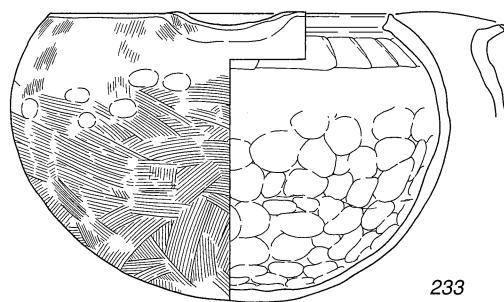
0 20cm

旧河道出土土器(8)

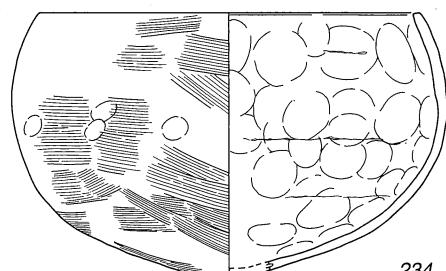
A区(9)



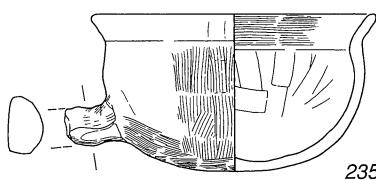
旧河道出土土器(9)

A区
(10)

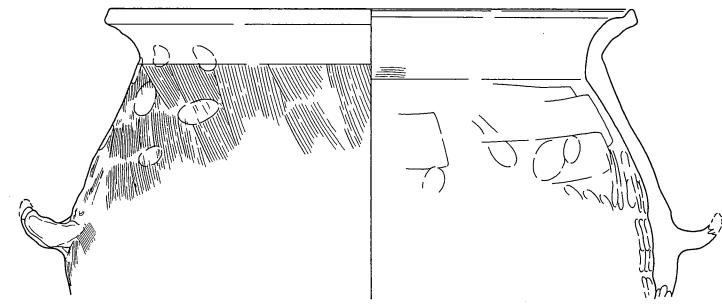
233



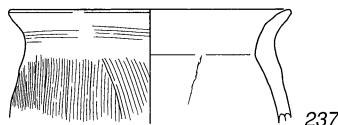
234



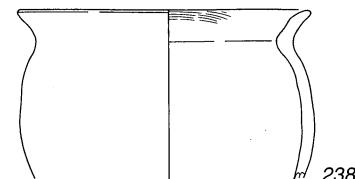
235



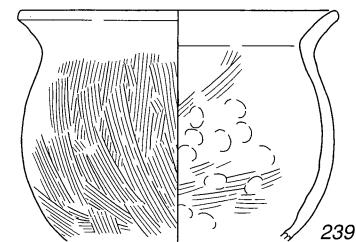
236



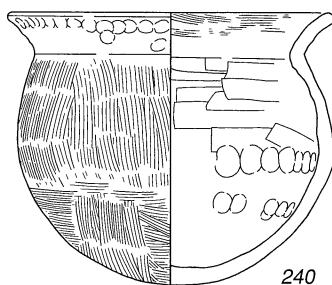
237



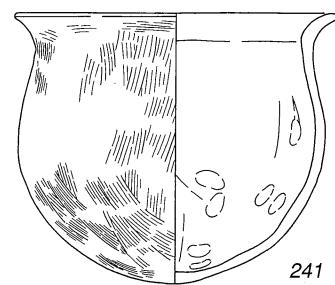
238



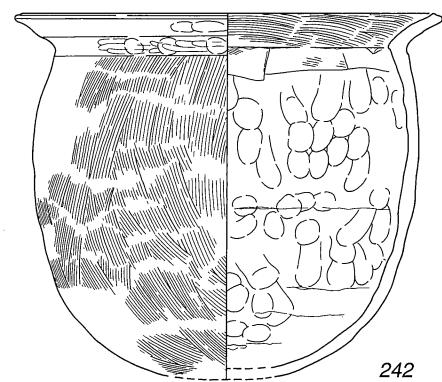
239



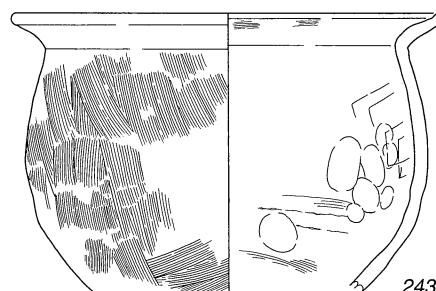
240



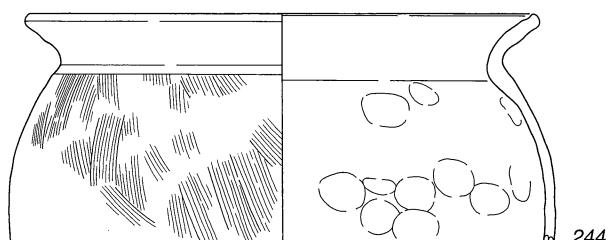
241



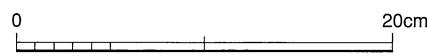
242



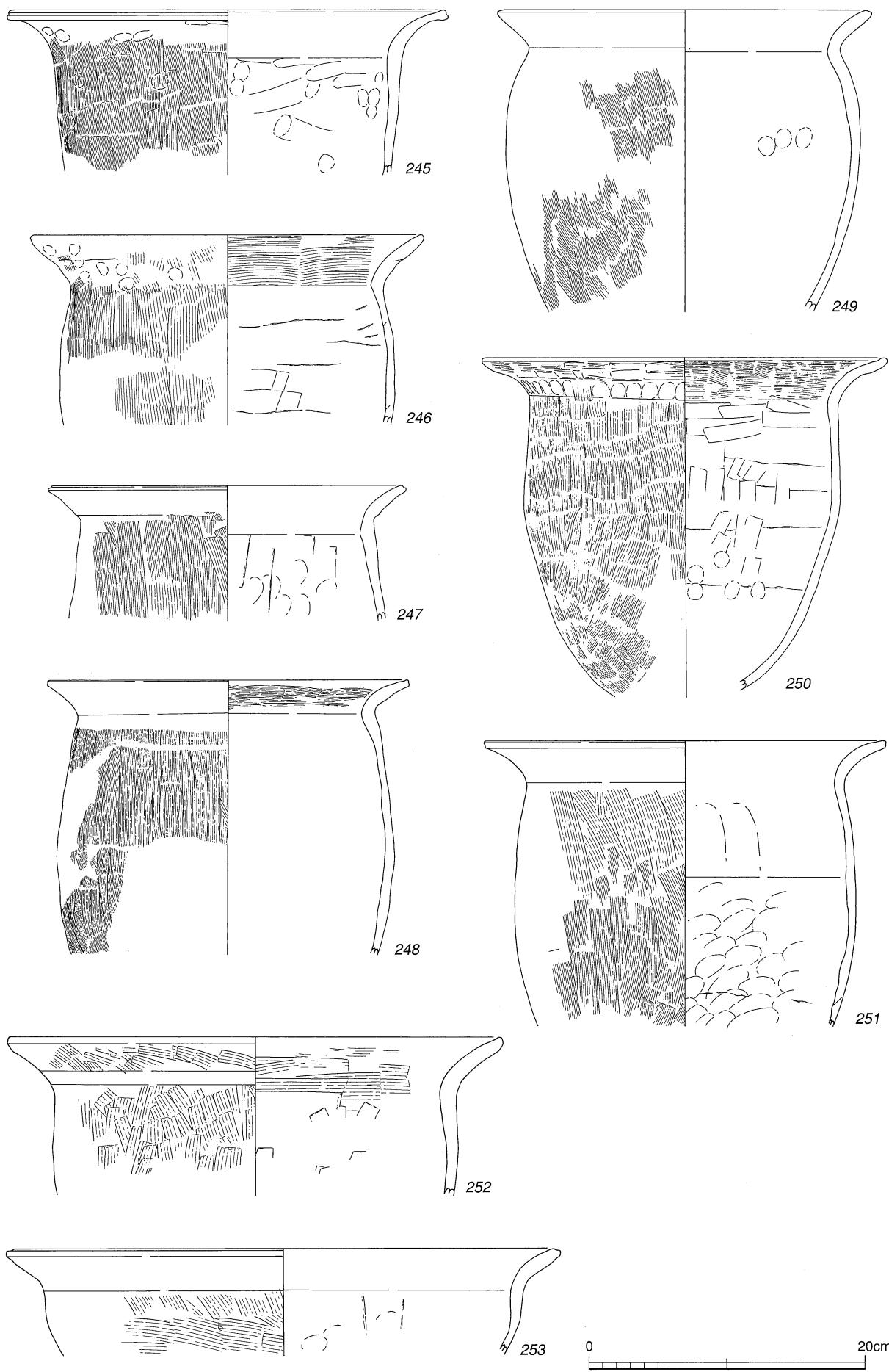
243



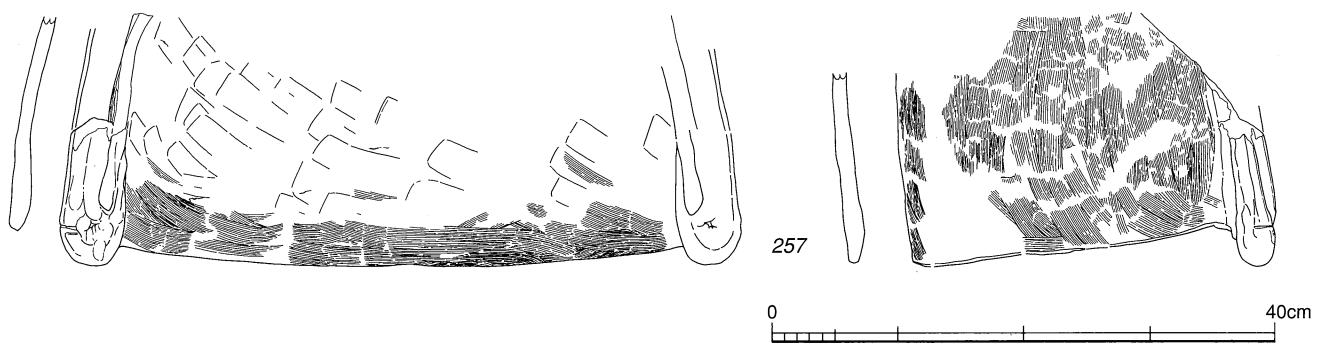
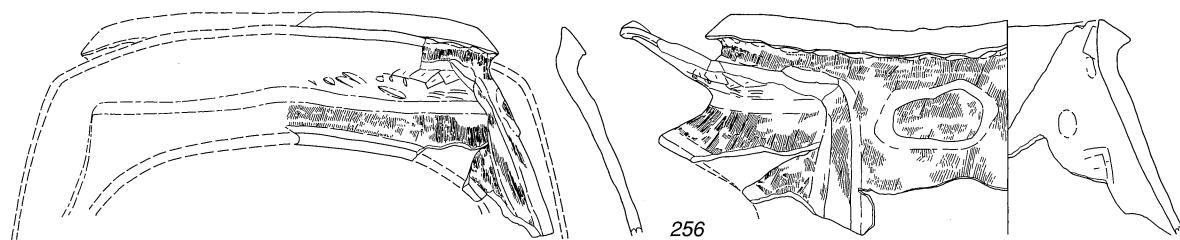
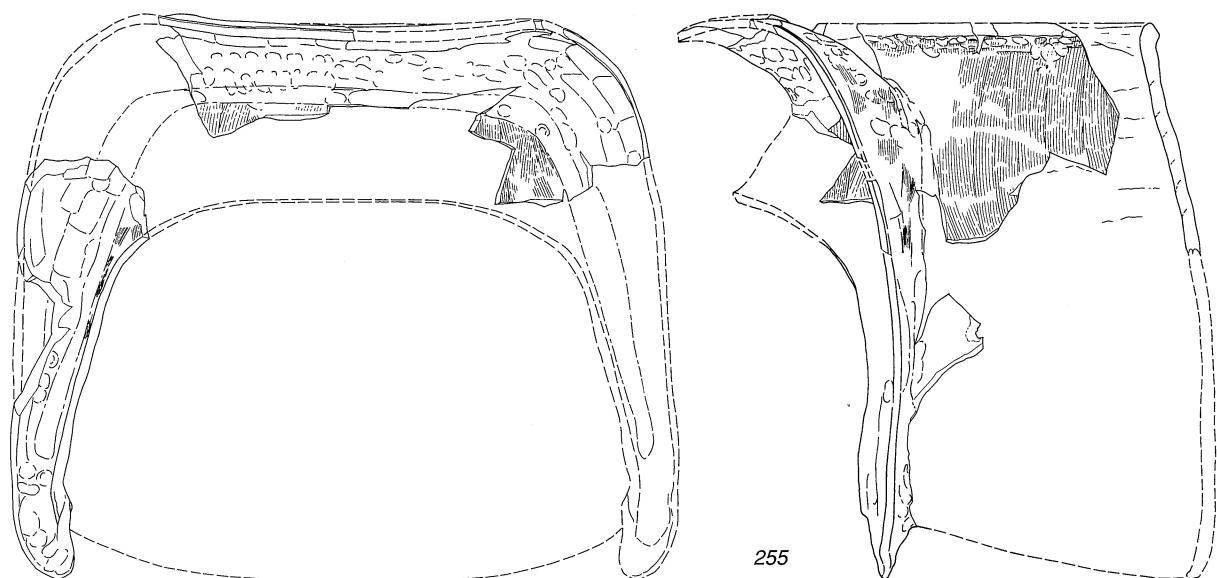
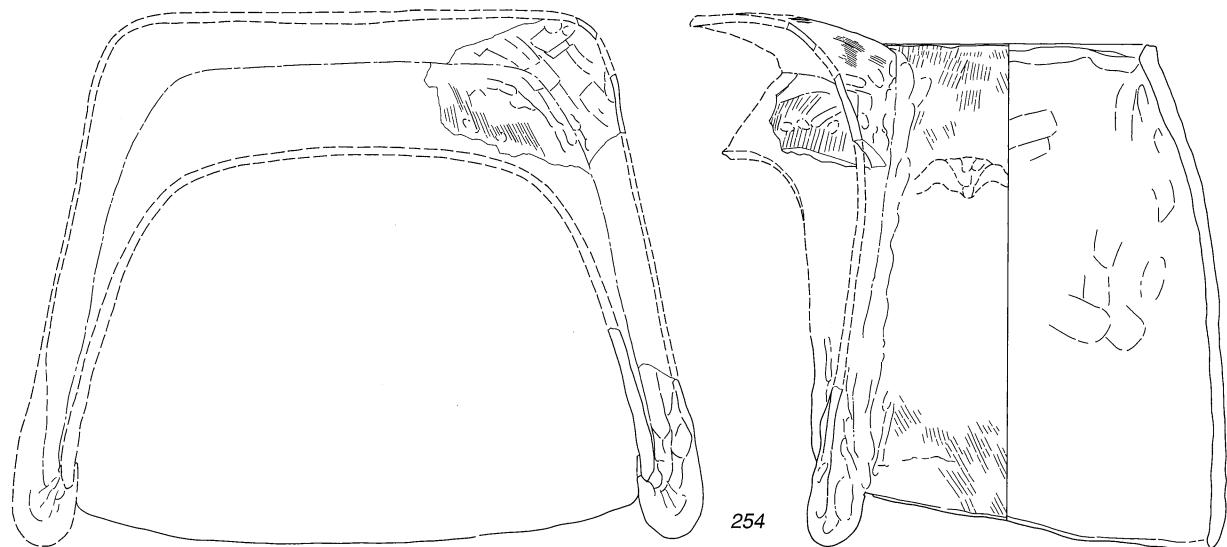
244



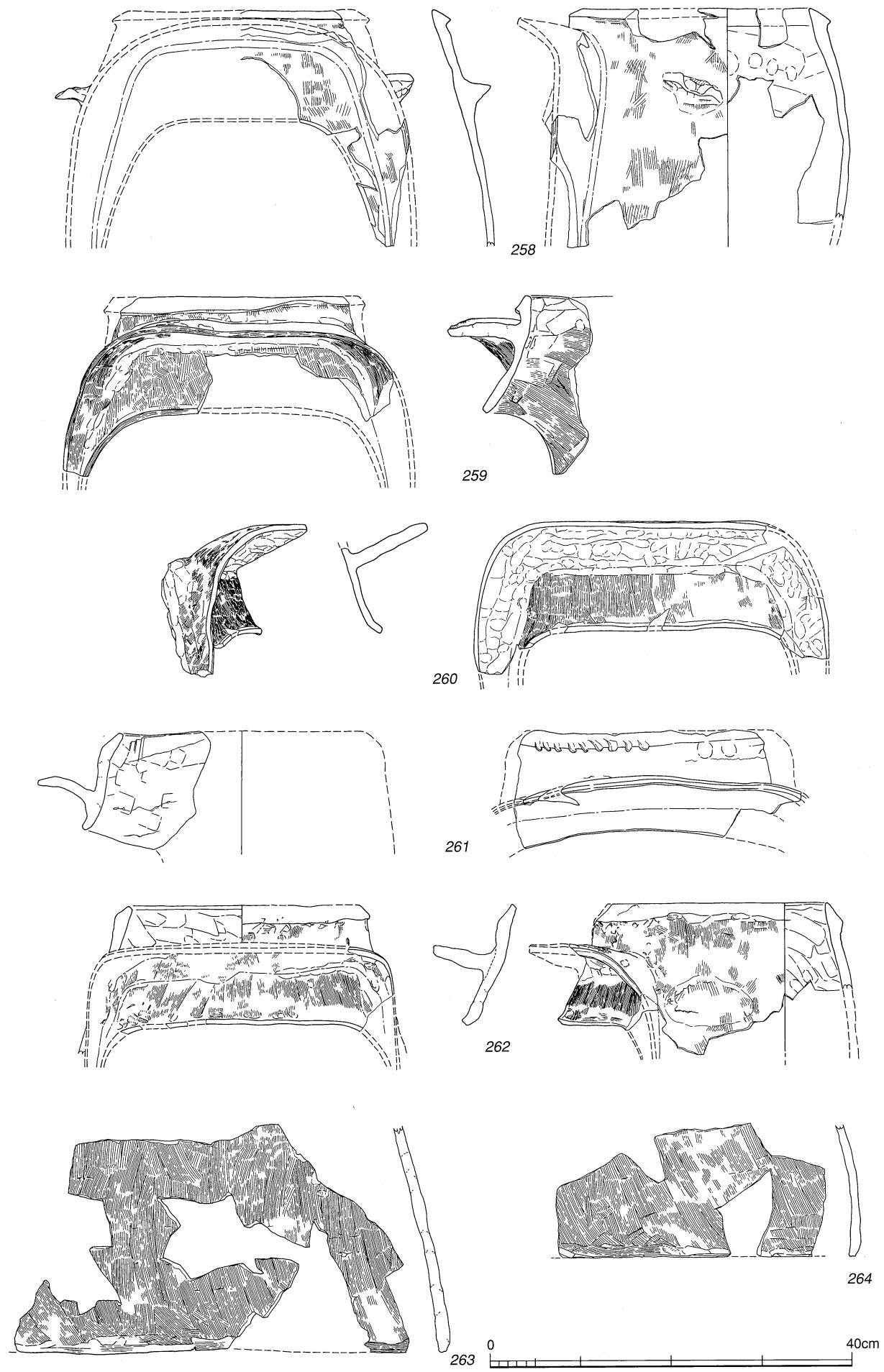
旧河道出土土器(10)

A区
11

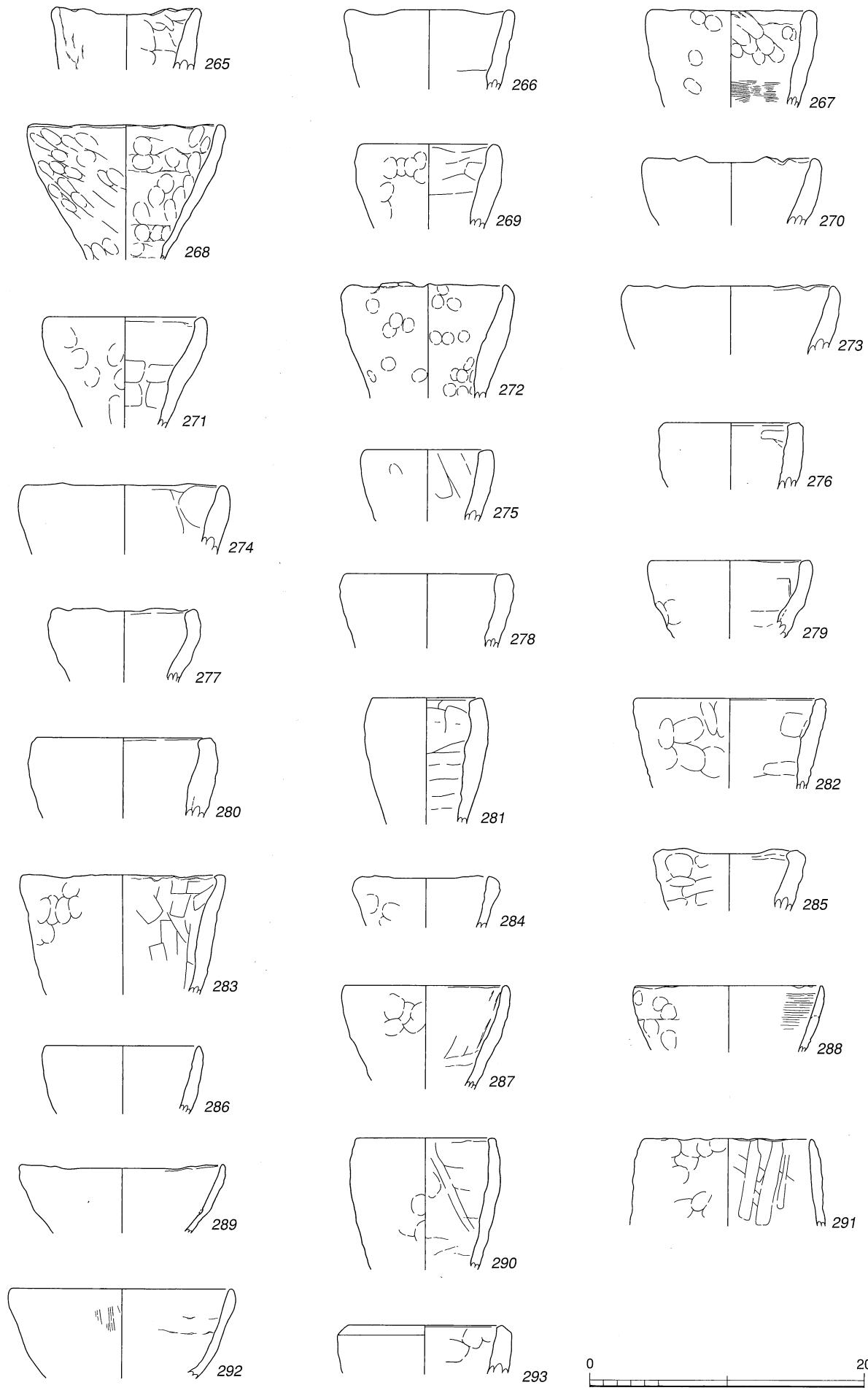
旧河道出土土器(11)

A
区
12

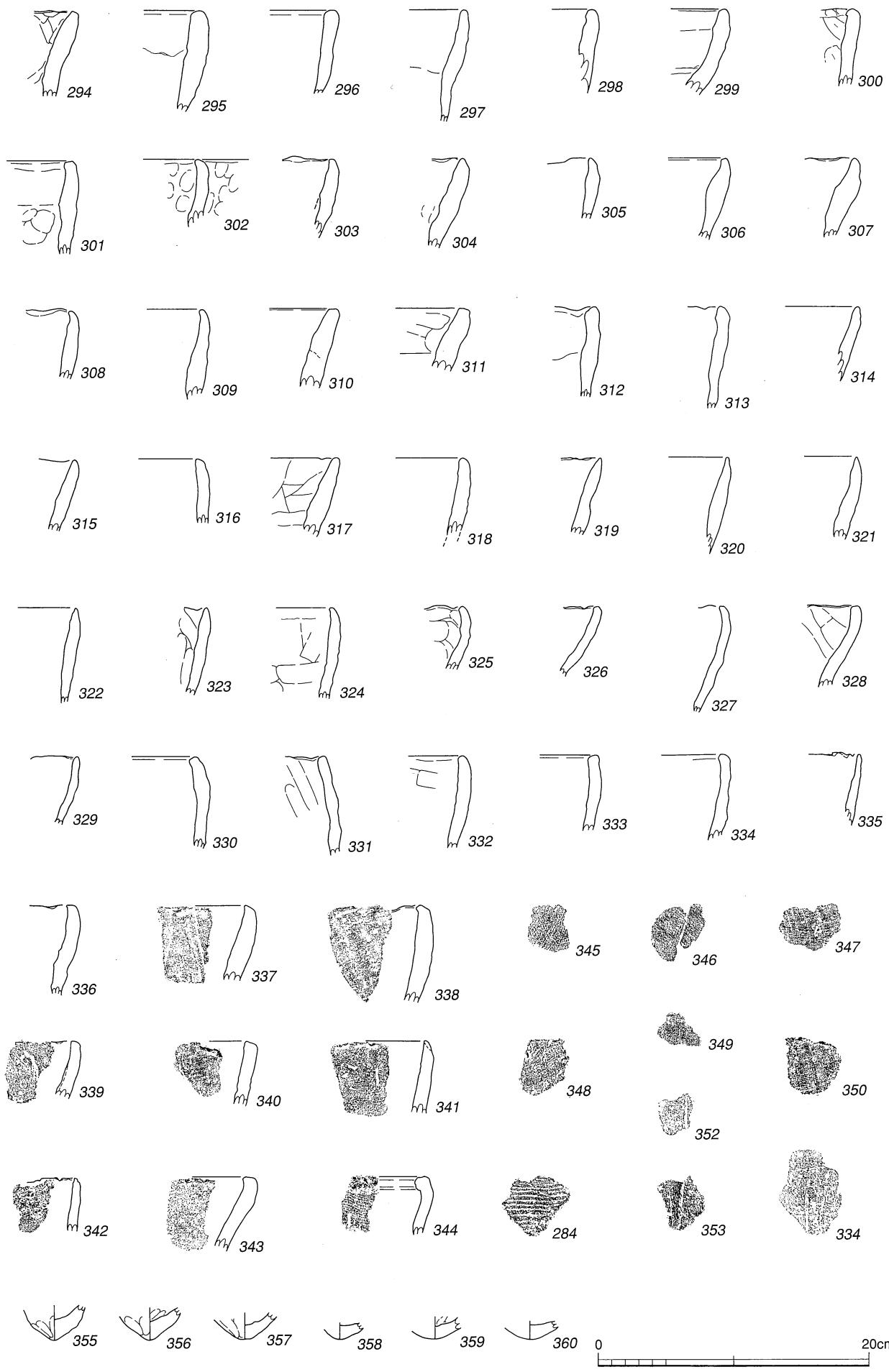
旧河道出土土器(12)

A区
(13)

旧河道出土土器(13)

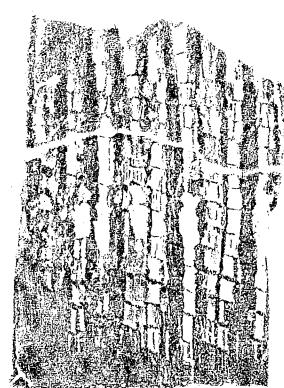
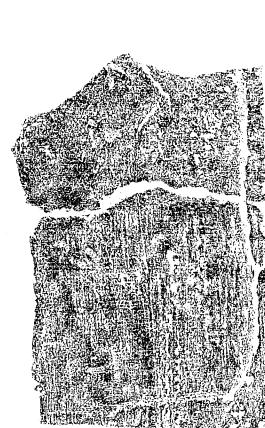
A
区
(14)

旧河道出土土器(14)



旧河道出土土器(15)

A
区
(16)



k1

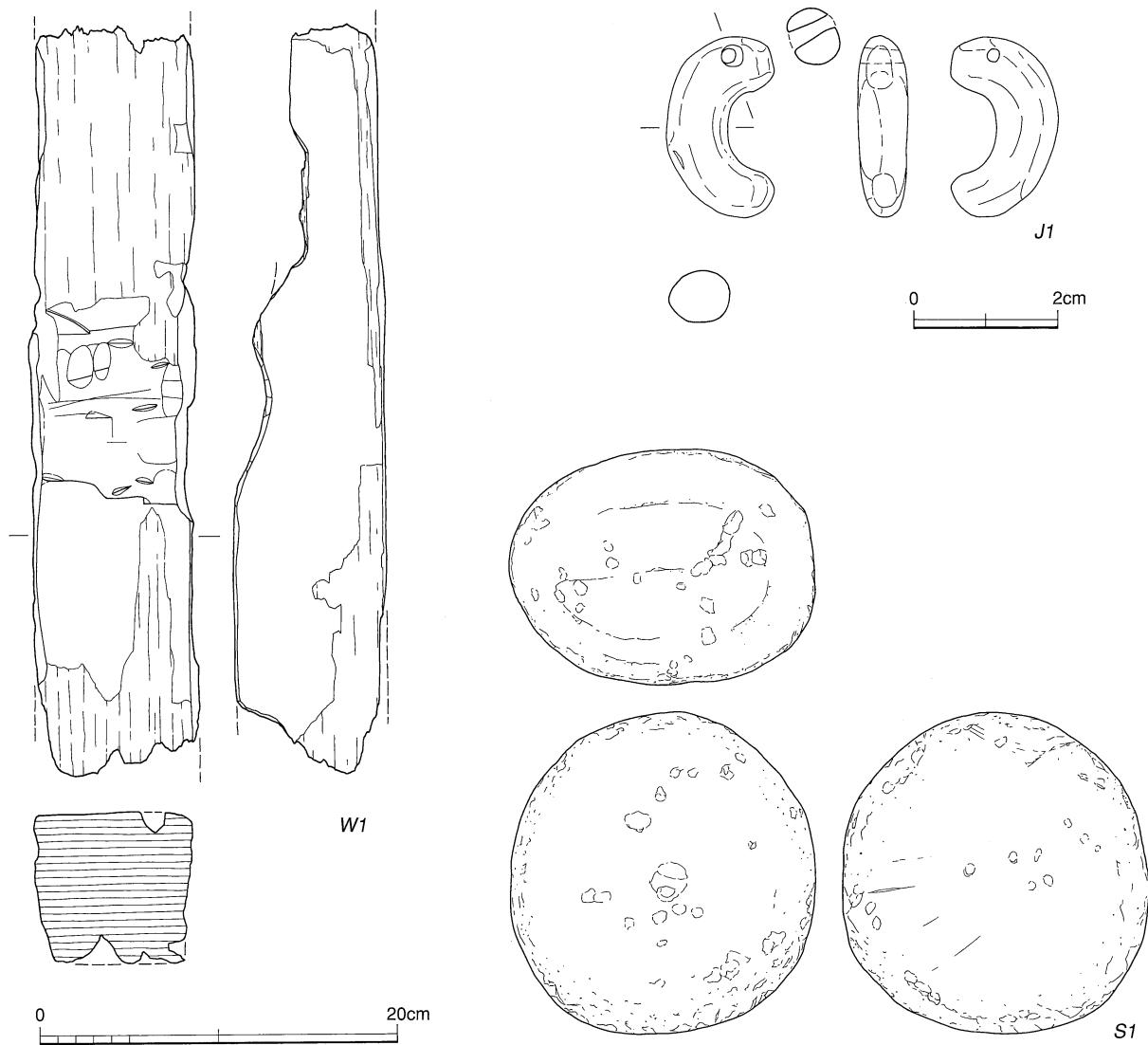


k2

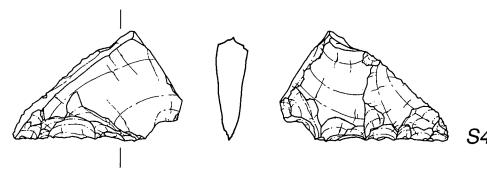


旧河道出土瓦

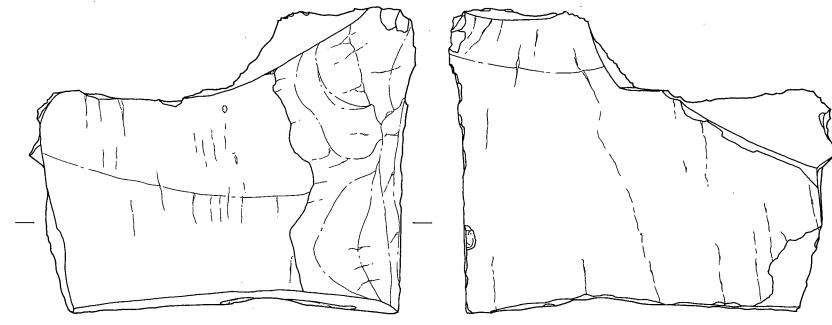
A区(17)



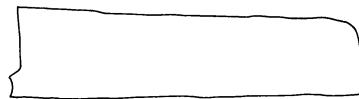
旧河道出土木器・勾玉・石器

A区
(18)

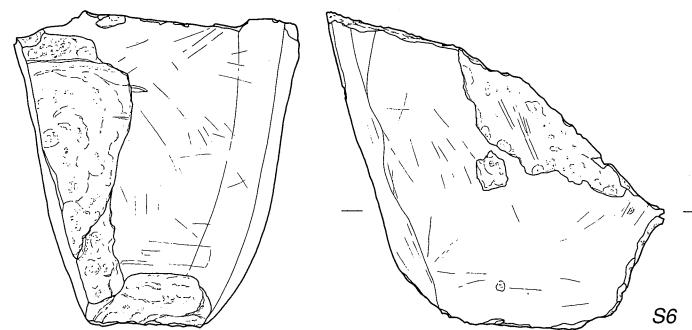
S4



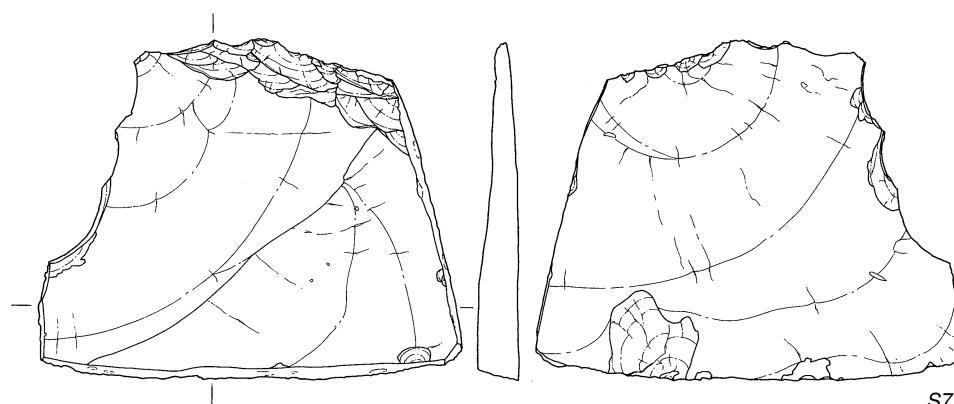
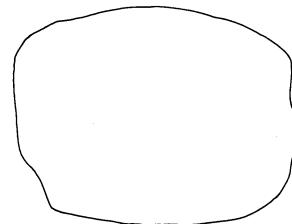
S5



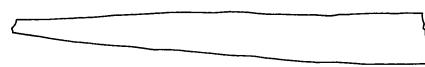
0 10cm



S6



S7



0 20cm

旧河道出土石器

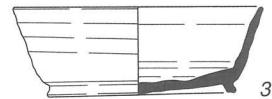
A区(19)



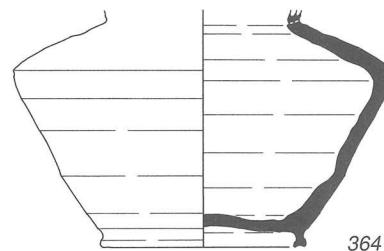
361



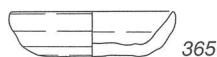
362



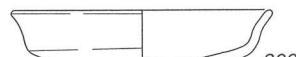
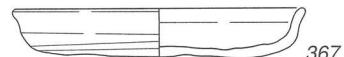
363



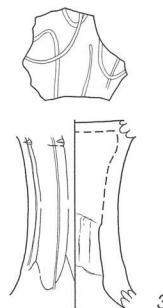
364



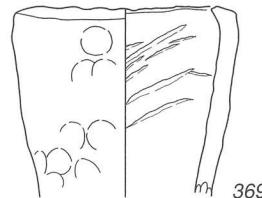
365

366
墨書

367



368



369

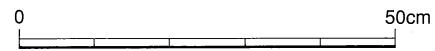
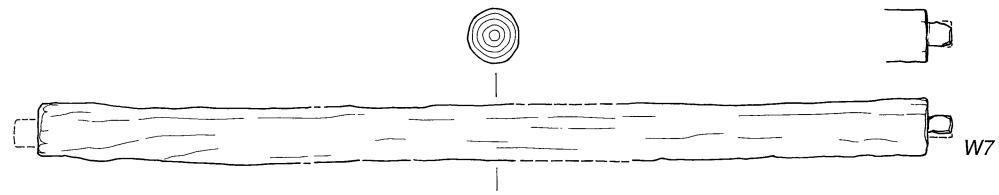
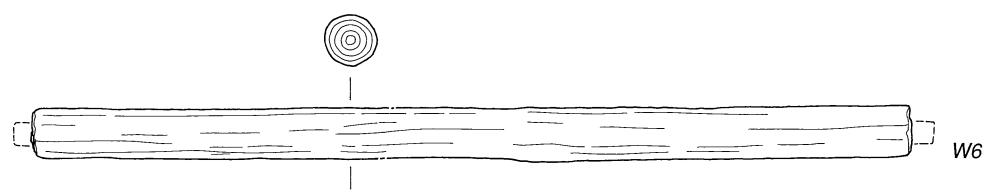
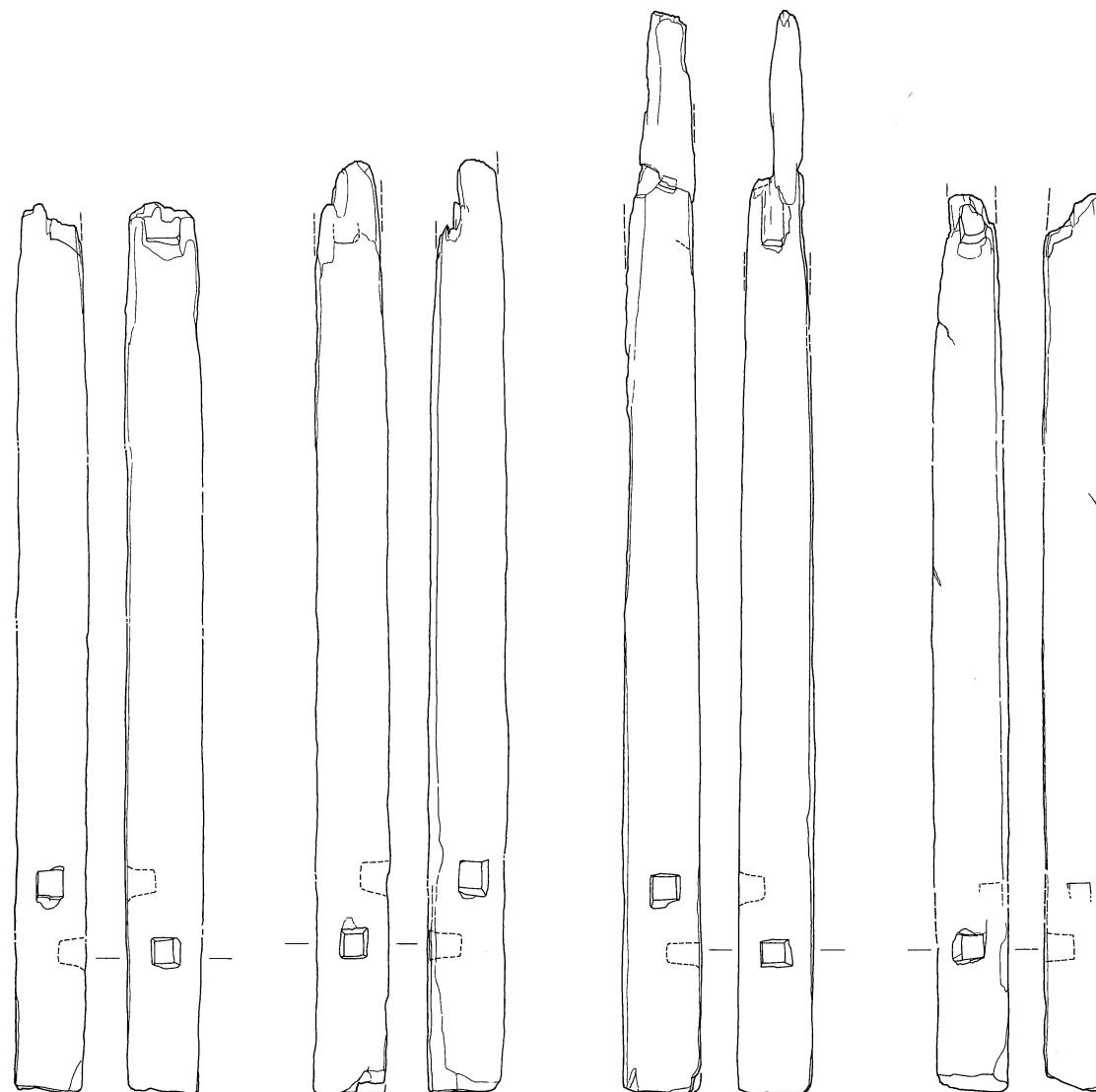


墨書

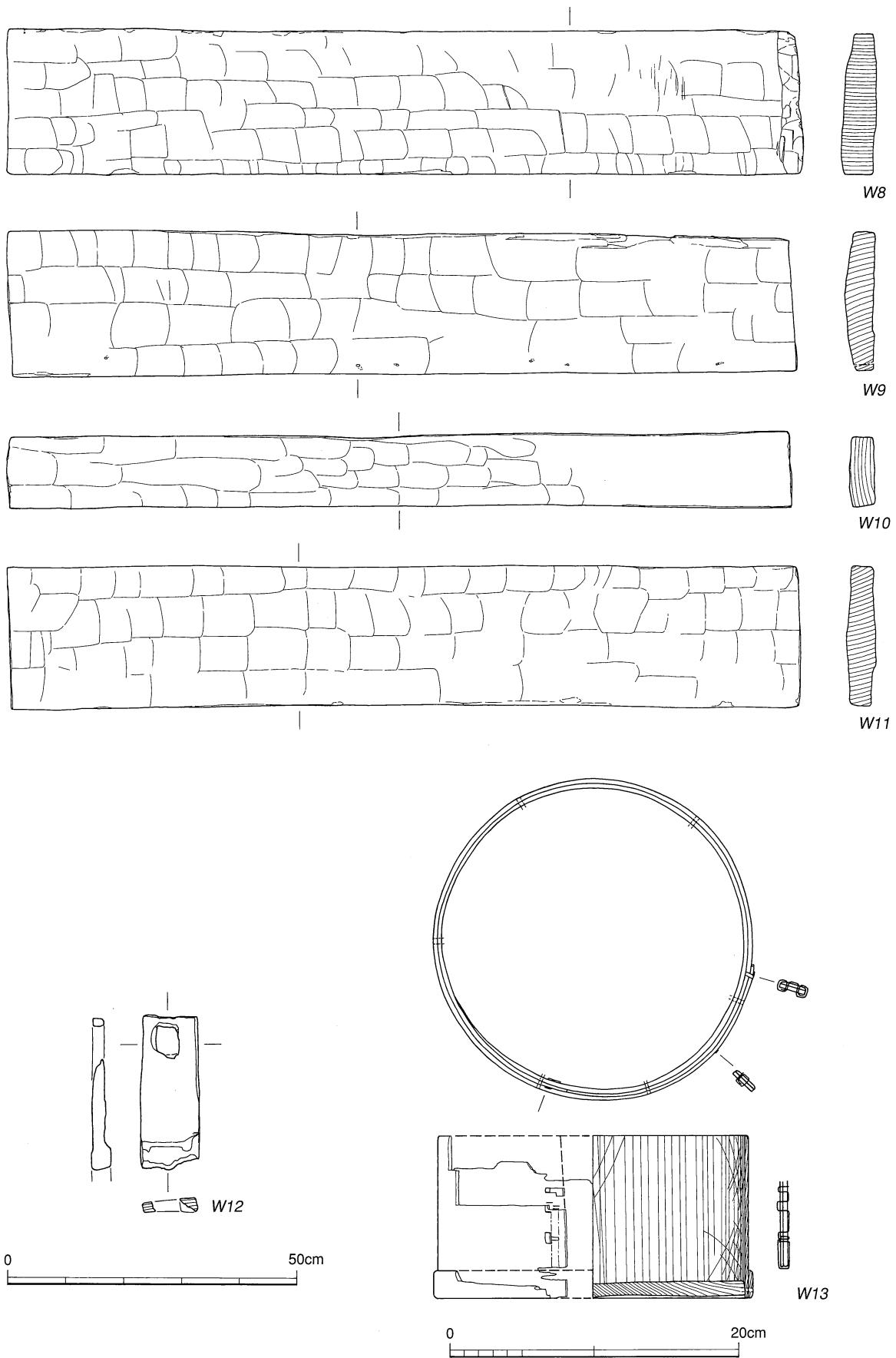


墨書



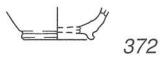
A区
(20)

井戸SE01出土木製品(1)

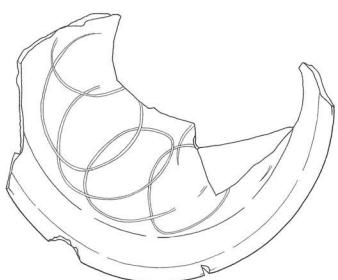


井戸SE01出土木製品(2)

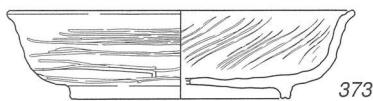
A区(22)



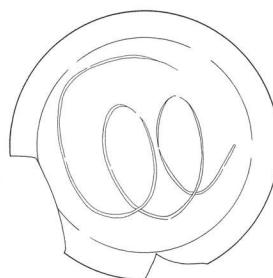
372



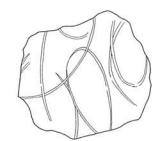
373



374



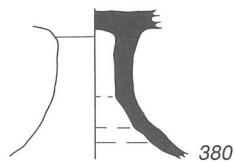
375



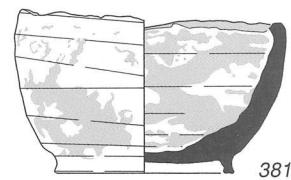
377



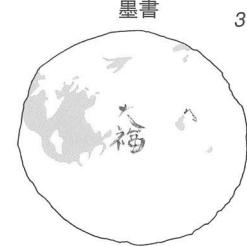
378



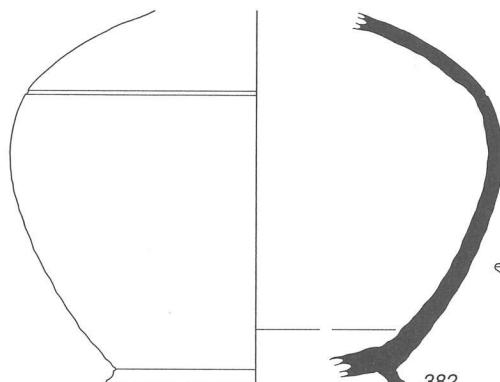
墨書 379



380



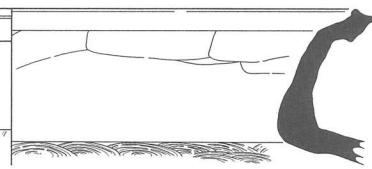
381



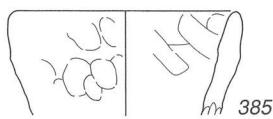
382



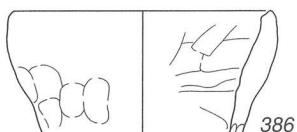
墨書 383



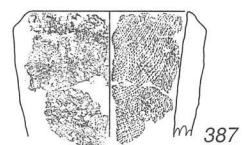
384



385



386



387



388



389



390



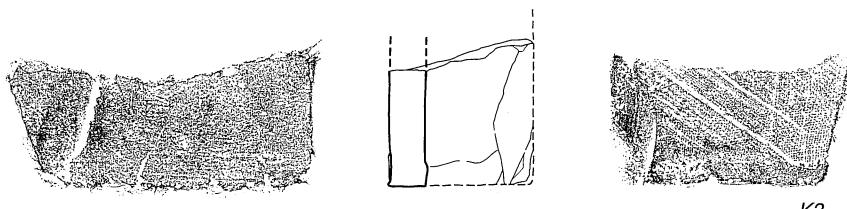
391



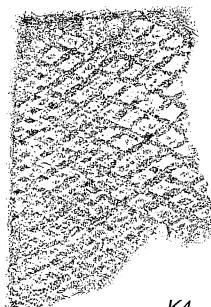
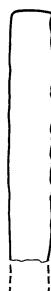
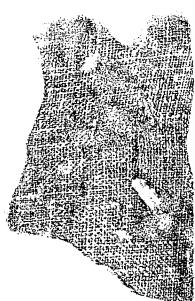
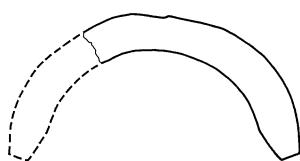
392

0

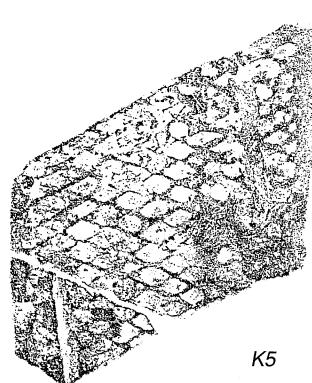
20cm

A区
(23)

K3



K4

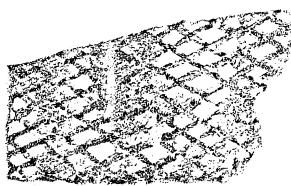
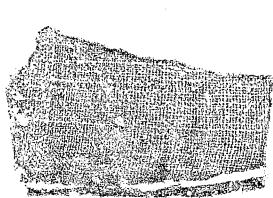


K5

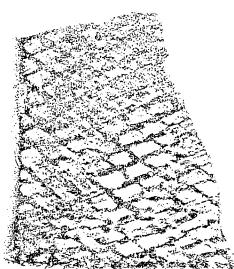


井戸SE02出土瓦(1)

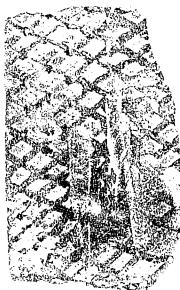
A区
(24)



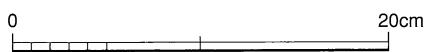
K6



K7

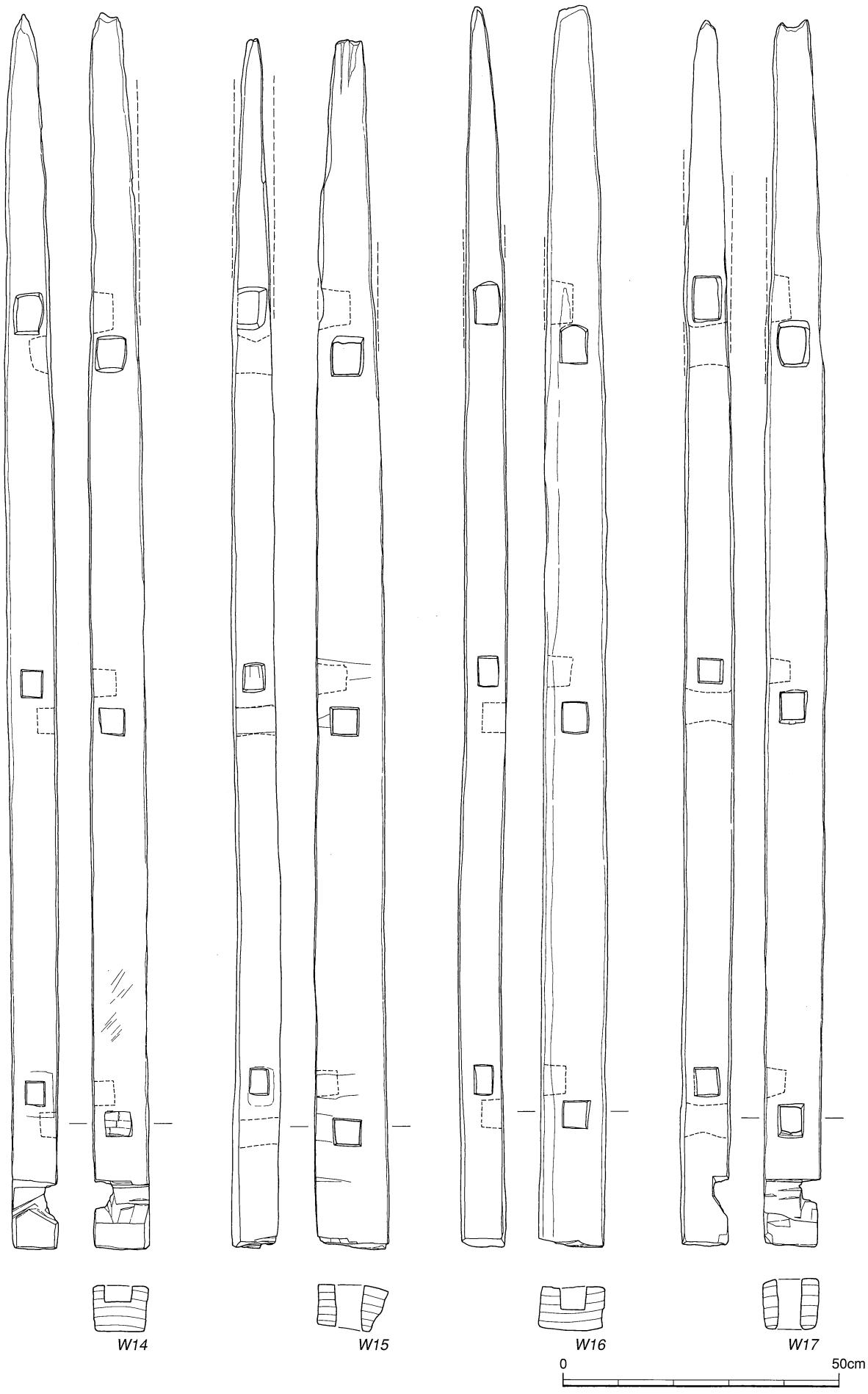


K8

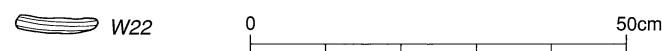
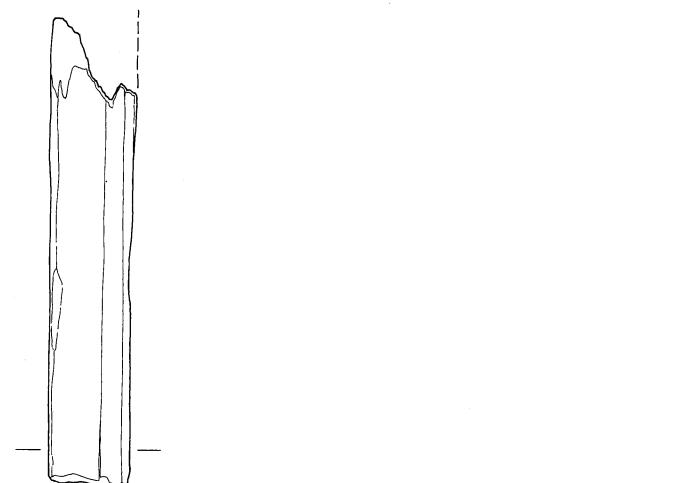
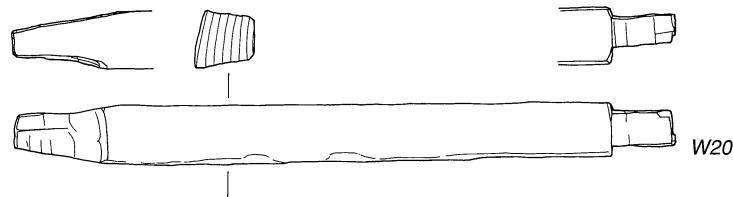
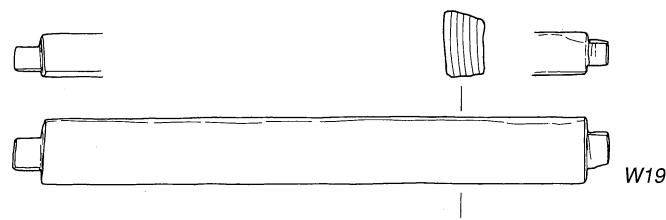


井戸SE02出土瓦(2)

A区(25)

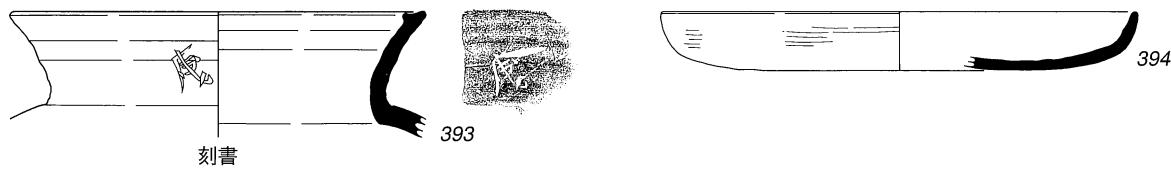


井戸SE02出土木製品(1)

A区
(26)

井戸SE02出土木製品(2)

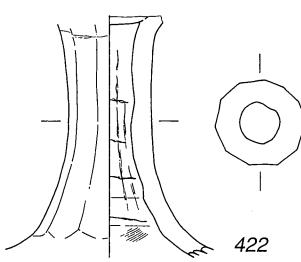
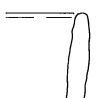
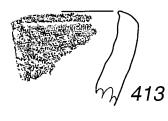
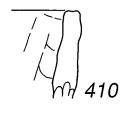
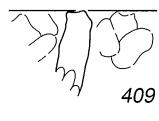
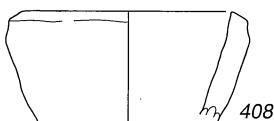
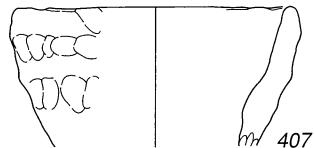
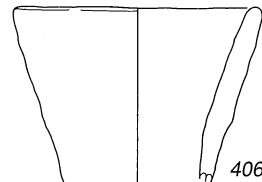
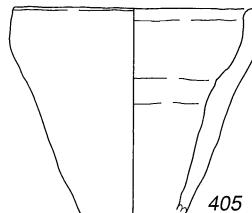
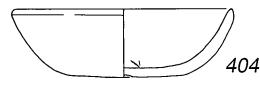
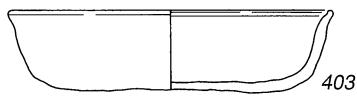
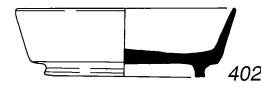
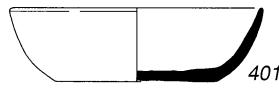
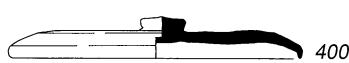
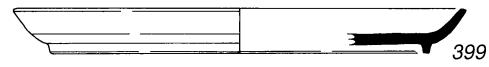
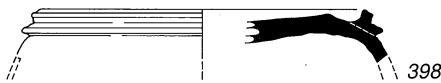
A区(27)



395

396

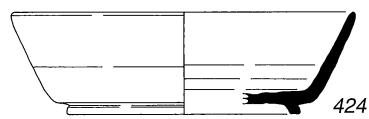
397



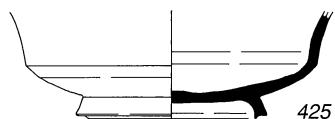
土坑・柱穴・溝出土土器

A
区
(
28
)

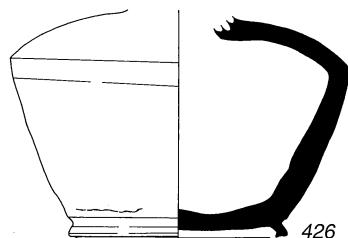
423



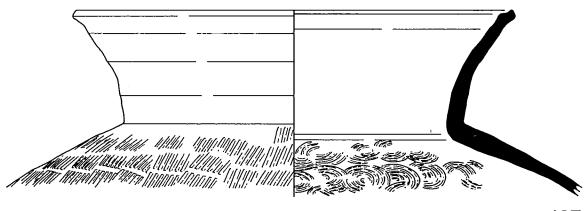
424



425



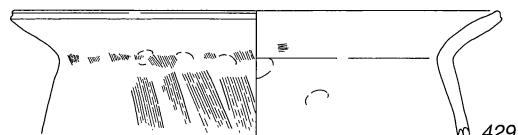
426



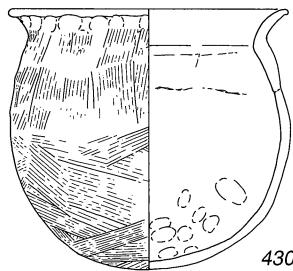
427



428



429



430



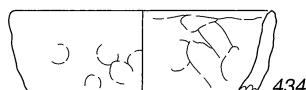
431



432



433



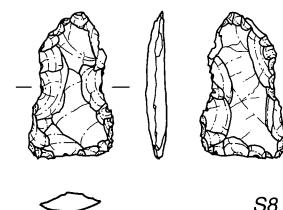
434

0 20cm



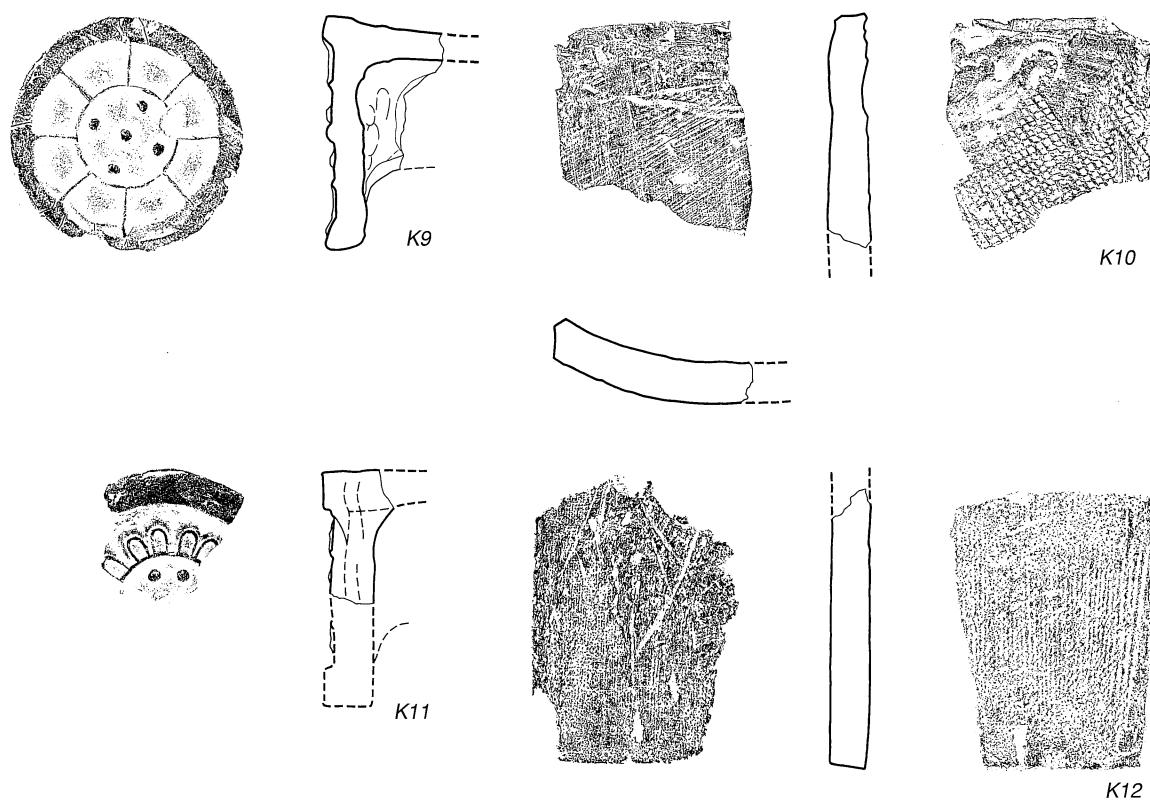
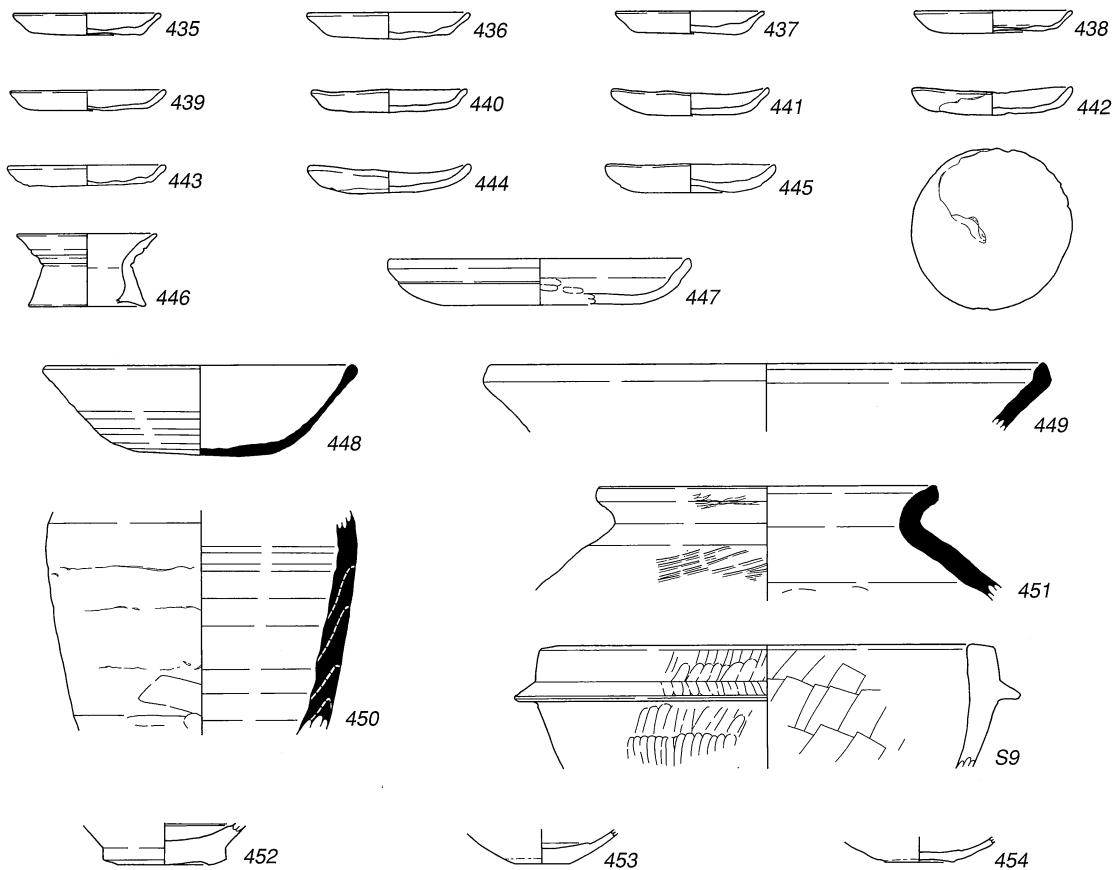
M1

0 5cm



S8

0 5cm

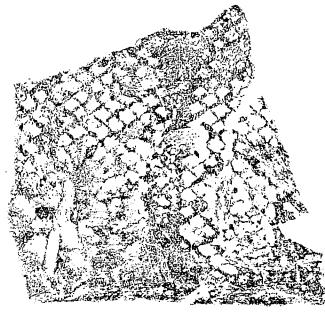
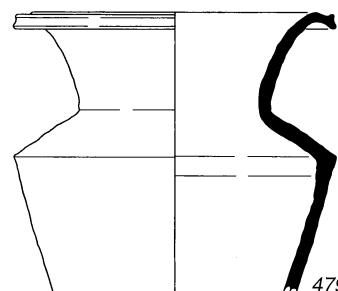
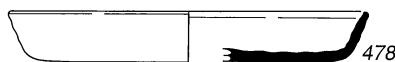
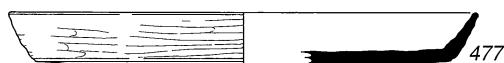
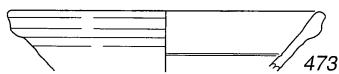
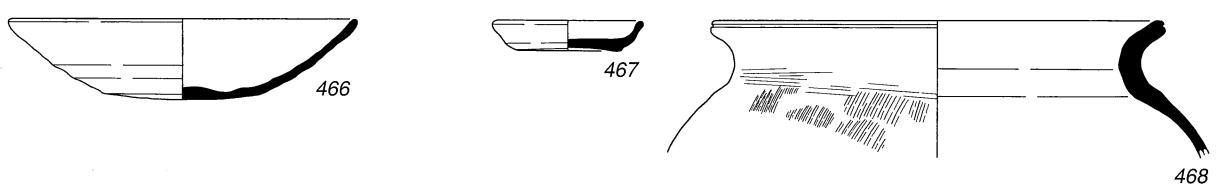
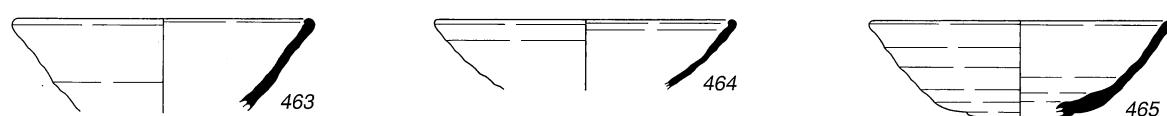
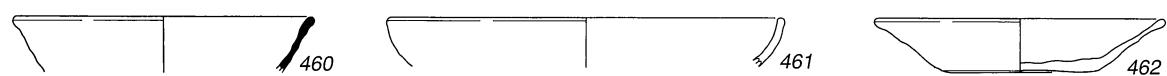
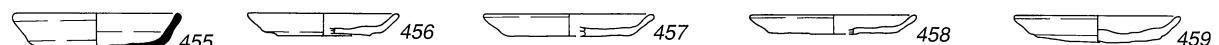
B区
(1)

0

20cm

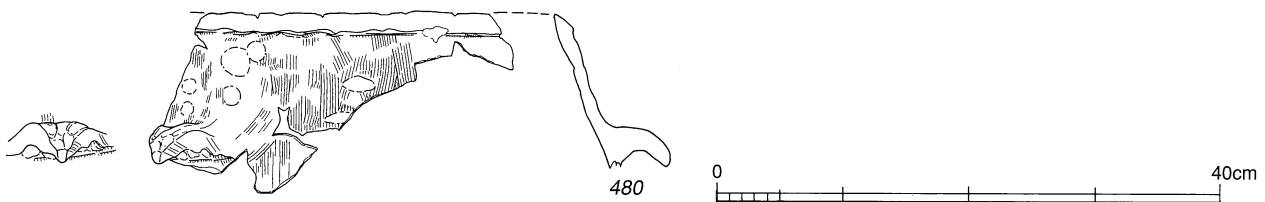
焼土坑2出土土器・石製品・瓦

図版64



K13

0 20cm

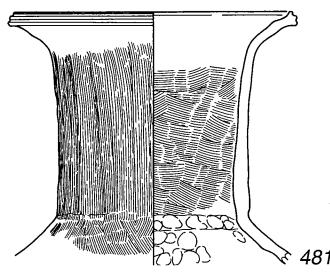


0 40cm

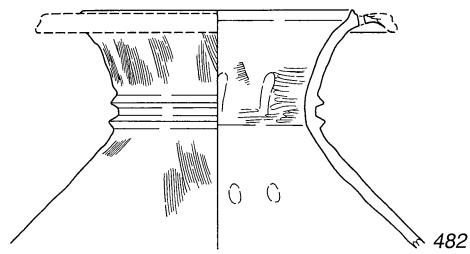
柱穴・溝出土土器・瓦

B
区
2

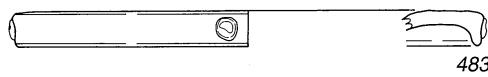
B区(3)



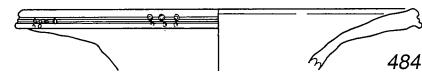
481



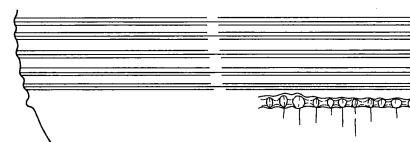
482



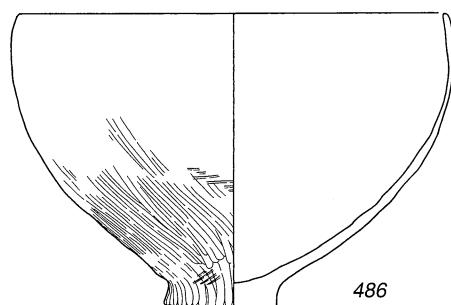
483



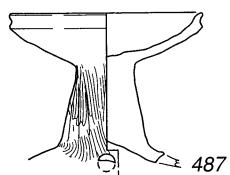
484



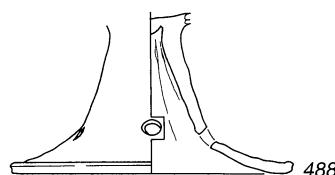
485



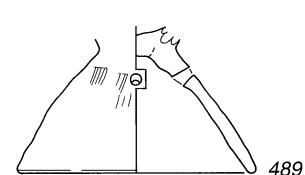
486



487



488

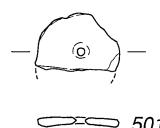
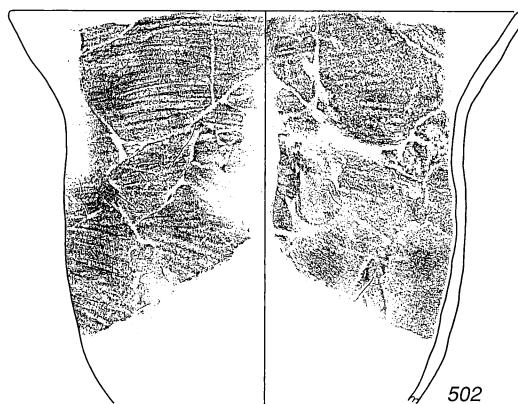
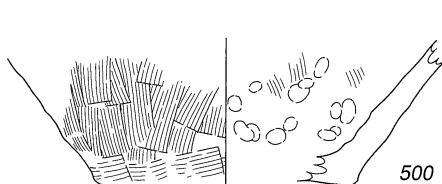
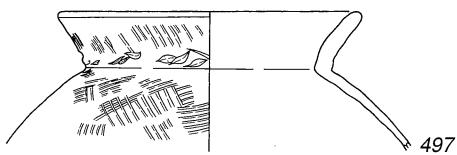
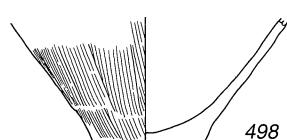
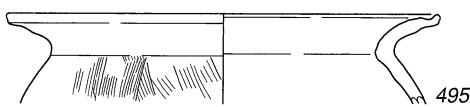
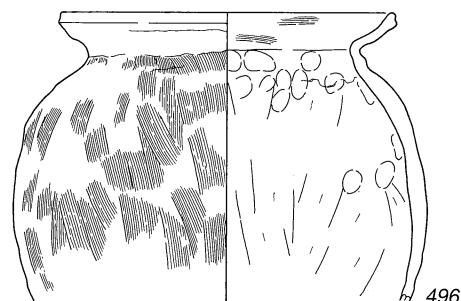
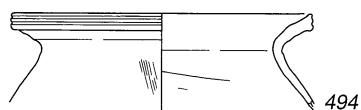
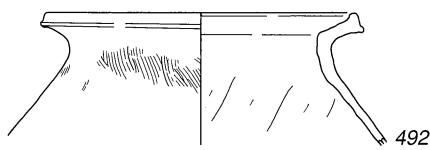
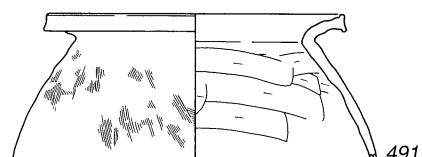
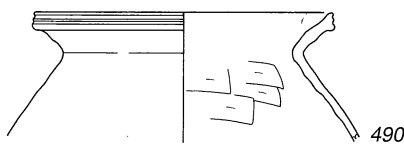


489

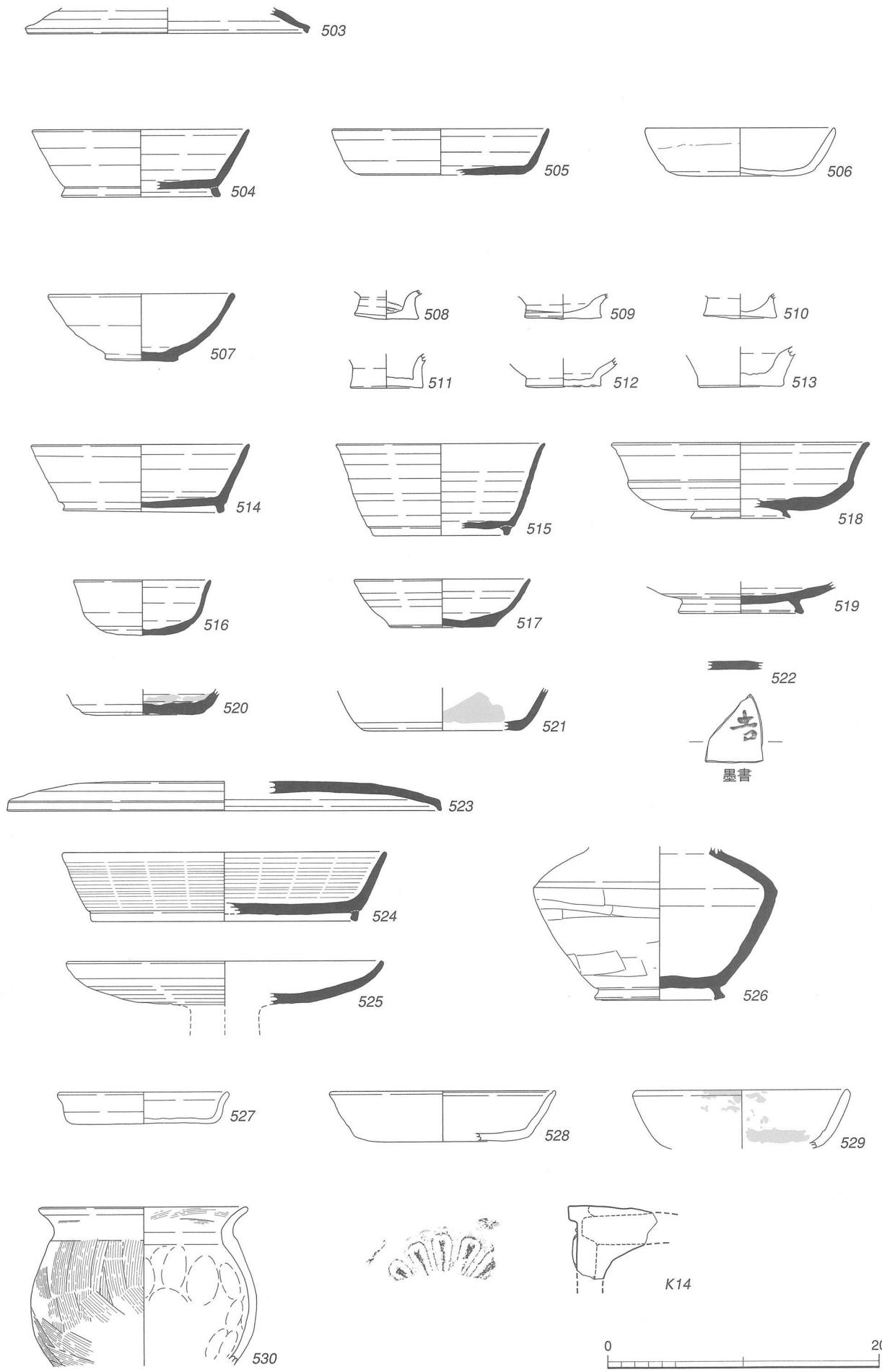


溝SD01出土弥生土器

(B)区(4)



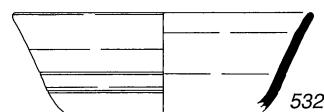
溝SD01出土縄文土器・弥生土器・紡錘車



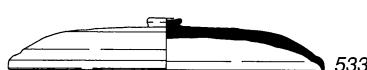
柱穴・溝SD02出土土器・瓦



531



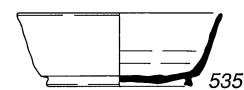
532



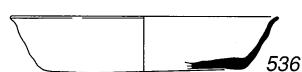
533



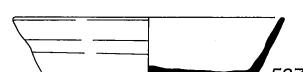
534



535



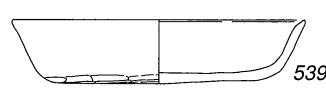
536



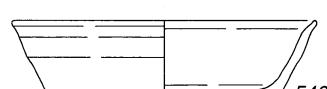
537



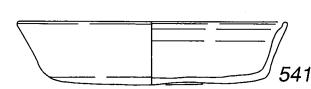
⑤ 538



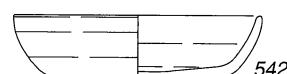
539



540



541



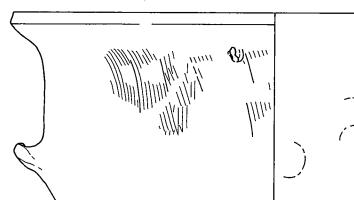
542



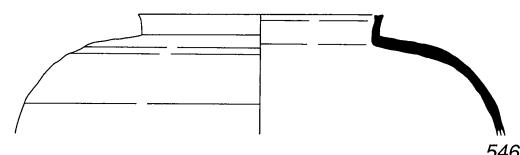
543



544



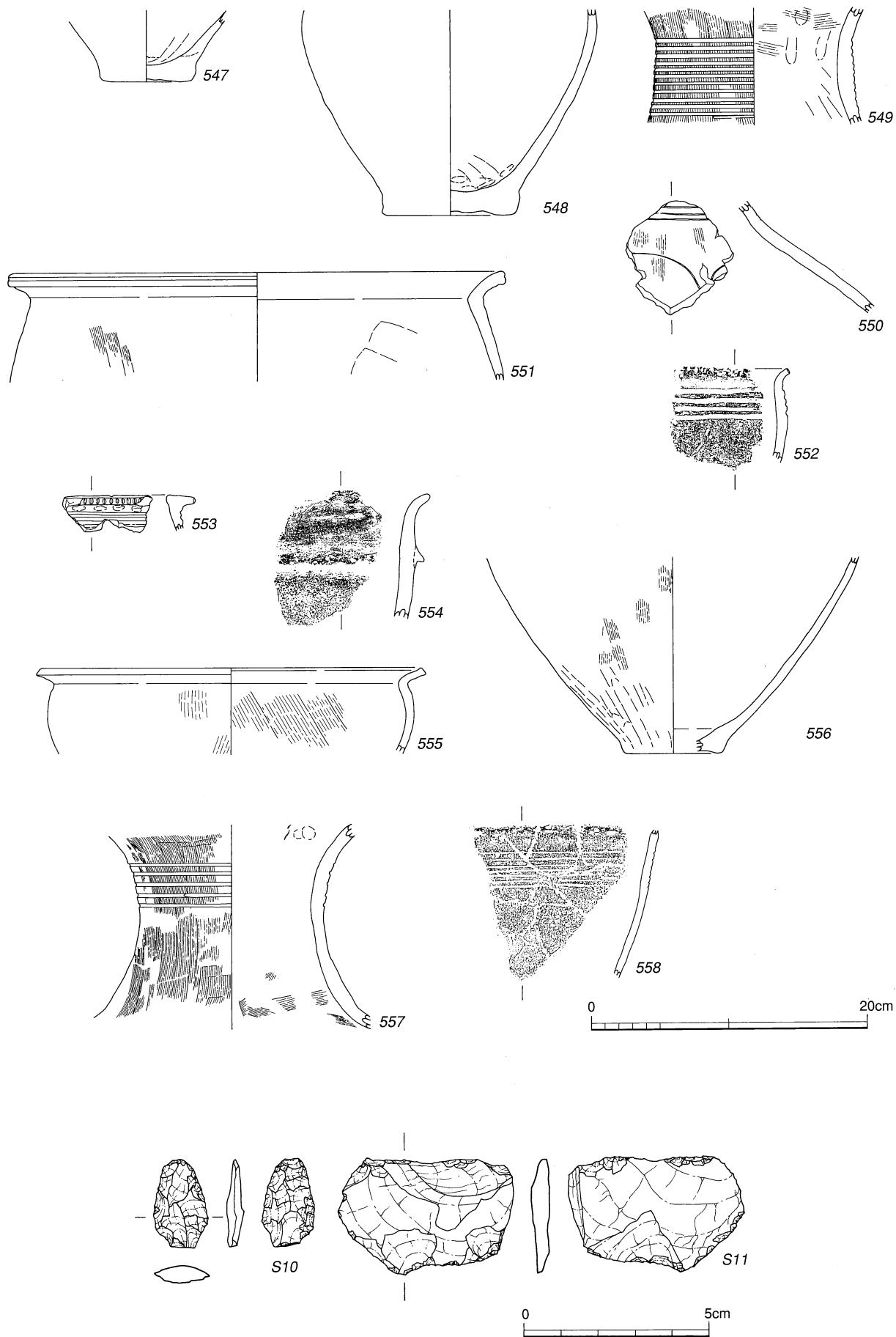
545



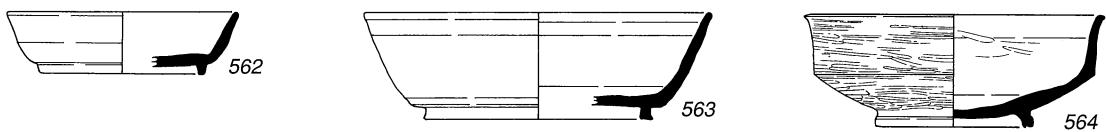
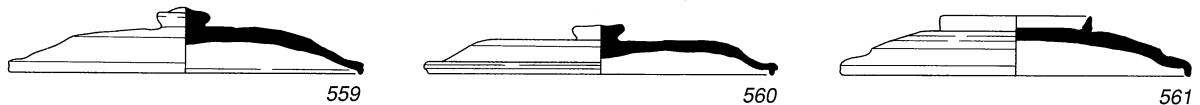
546



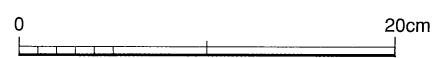
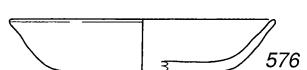
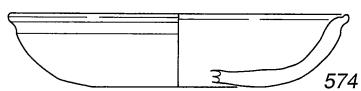
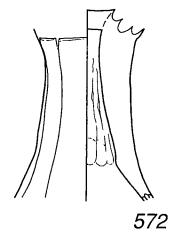
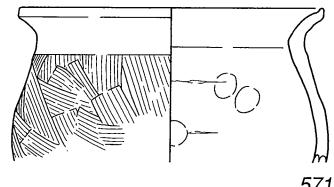
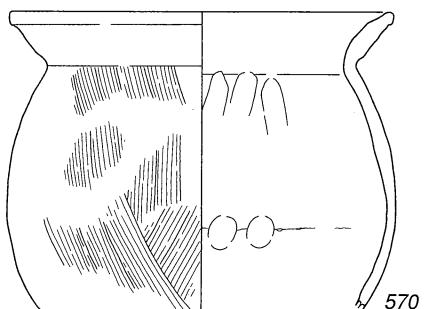
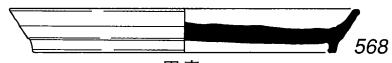
C (3)



土坑・溝出土弥生土器・石製品



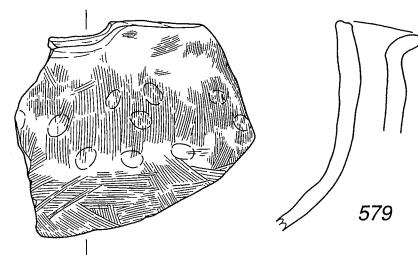
D
区
(1)



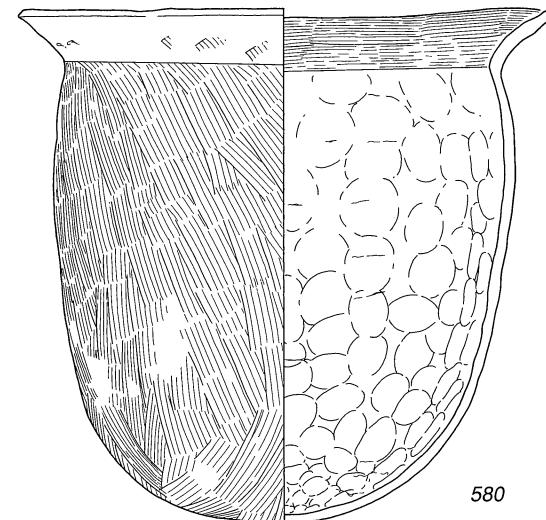
溝S26出土土器



578



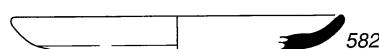
579



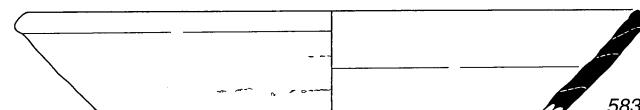
580



581



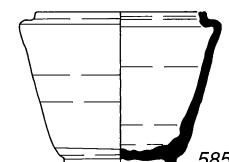
582



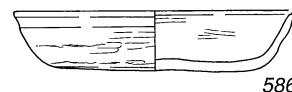
583



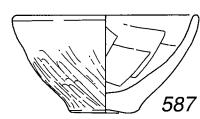
584



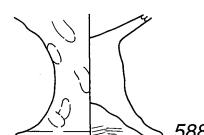
585



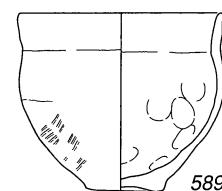
586



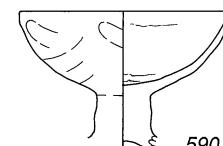
587



588



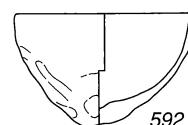
589



590



591



592



593

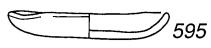


土坑出土土器

D区(2)



594



595



596



597



598



599



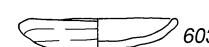
600



601



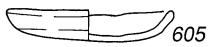
602



603



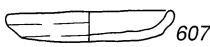
604



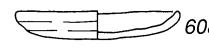
605



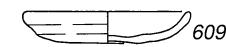
606



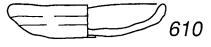
607



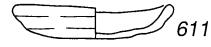
608



609



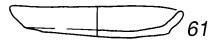
610



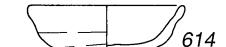
611



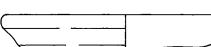
612



613



614



615



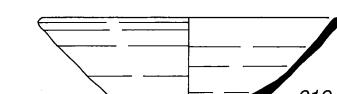
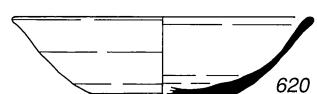
616



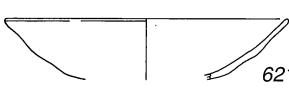
617



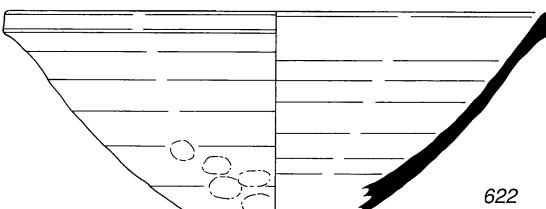
618



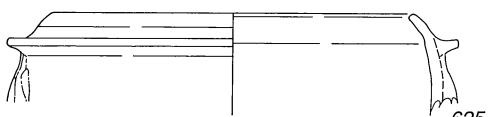
619



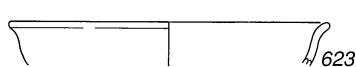
621



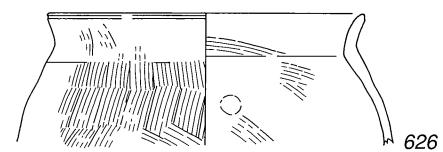
622



625



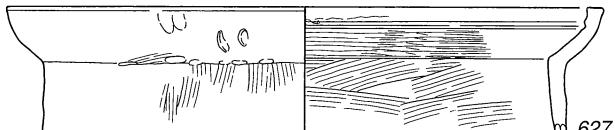
623



626



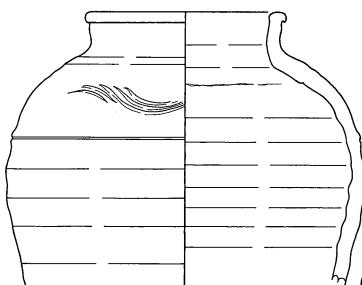
624



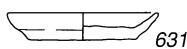
627



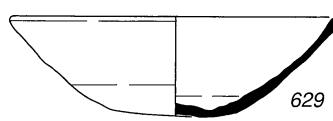
628



630



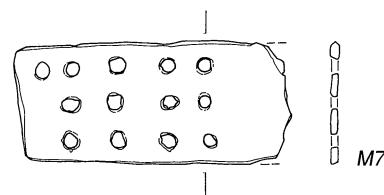
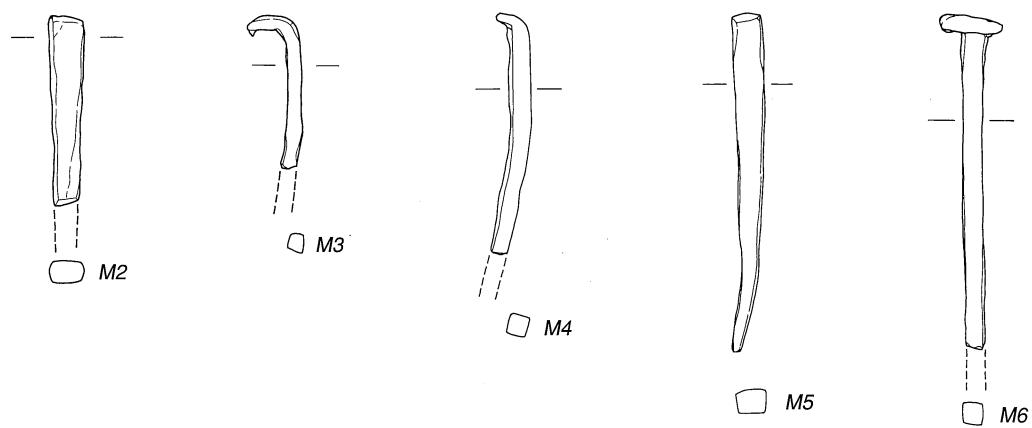
631



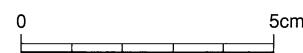
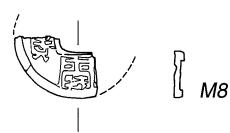
629



池跡・包含層出土土器

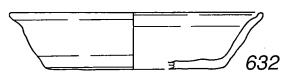


D (4)

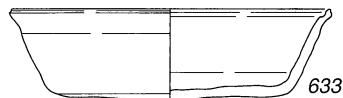


金属製品

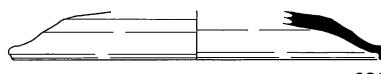
図版74



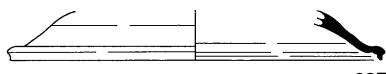
632



633



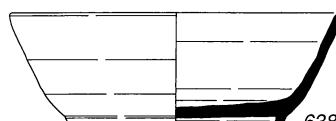
636



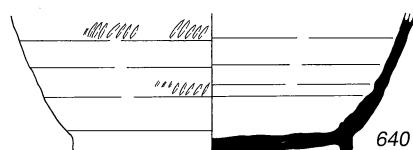
637



634



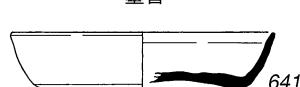
638



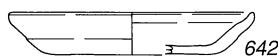
640



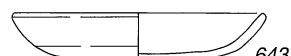
635



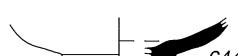
641



642



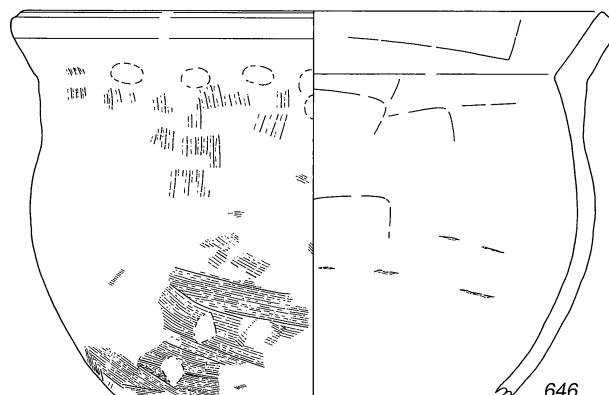
643



644



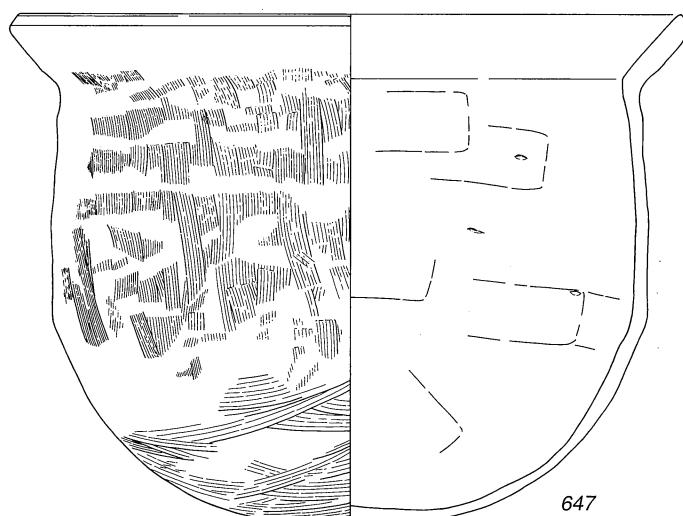
645



646



648



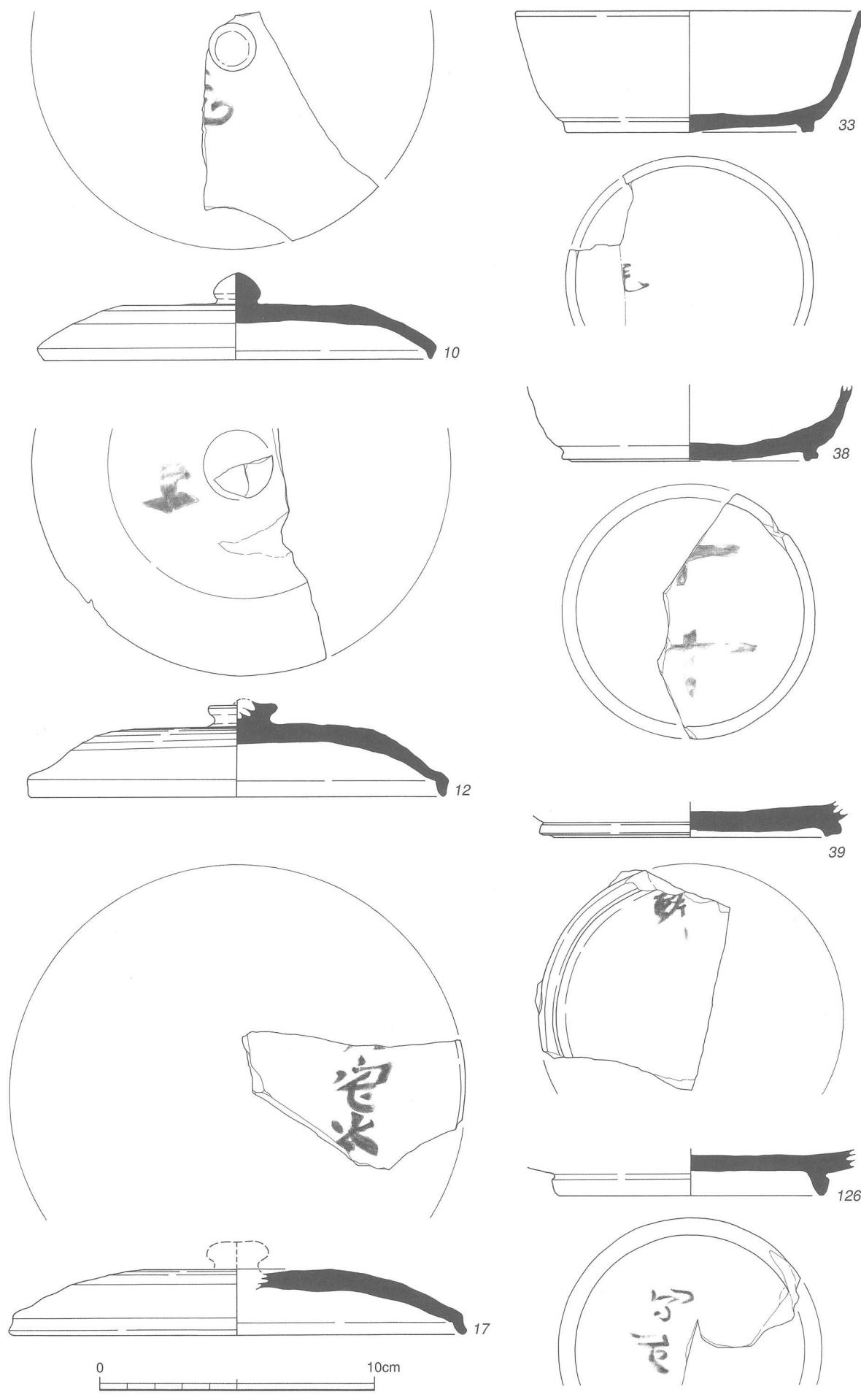
647



土坑・溝・柱穴出土土器

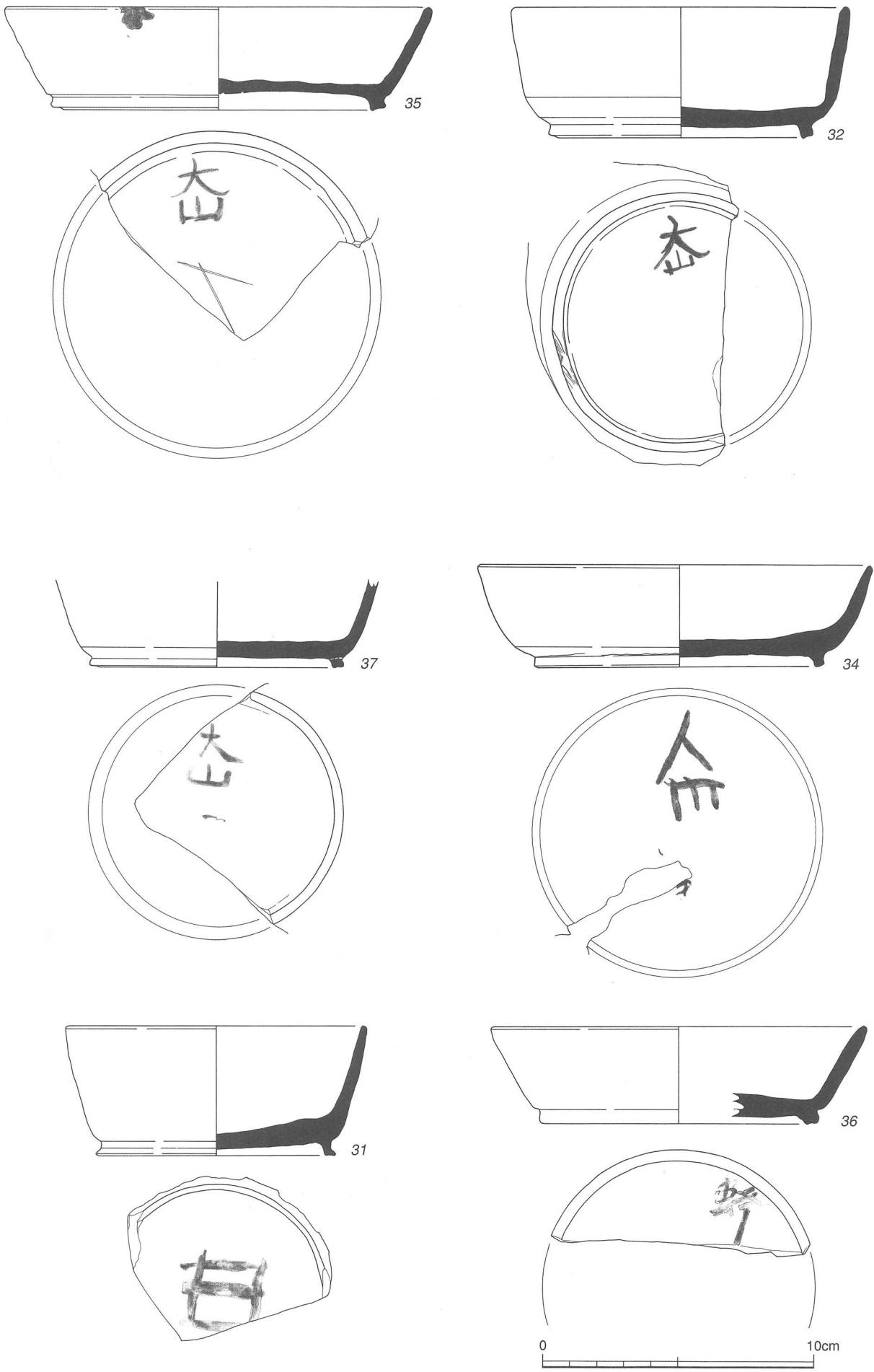
E
区

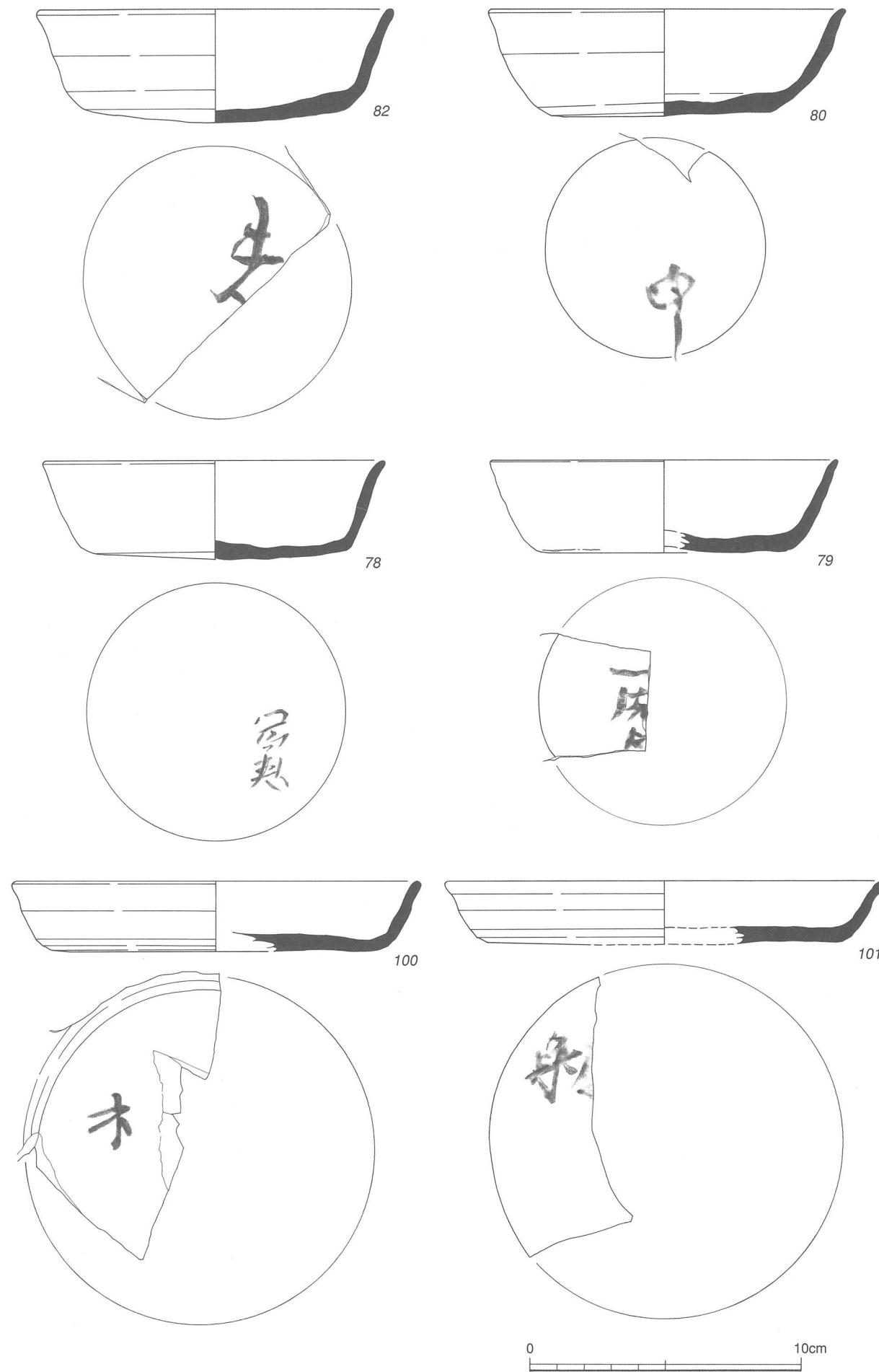
F
区



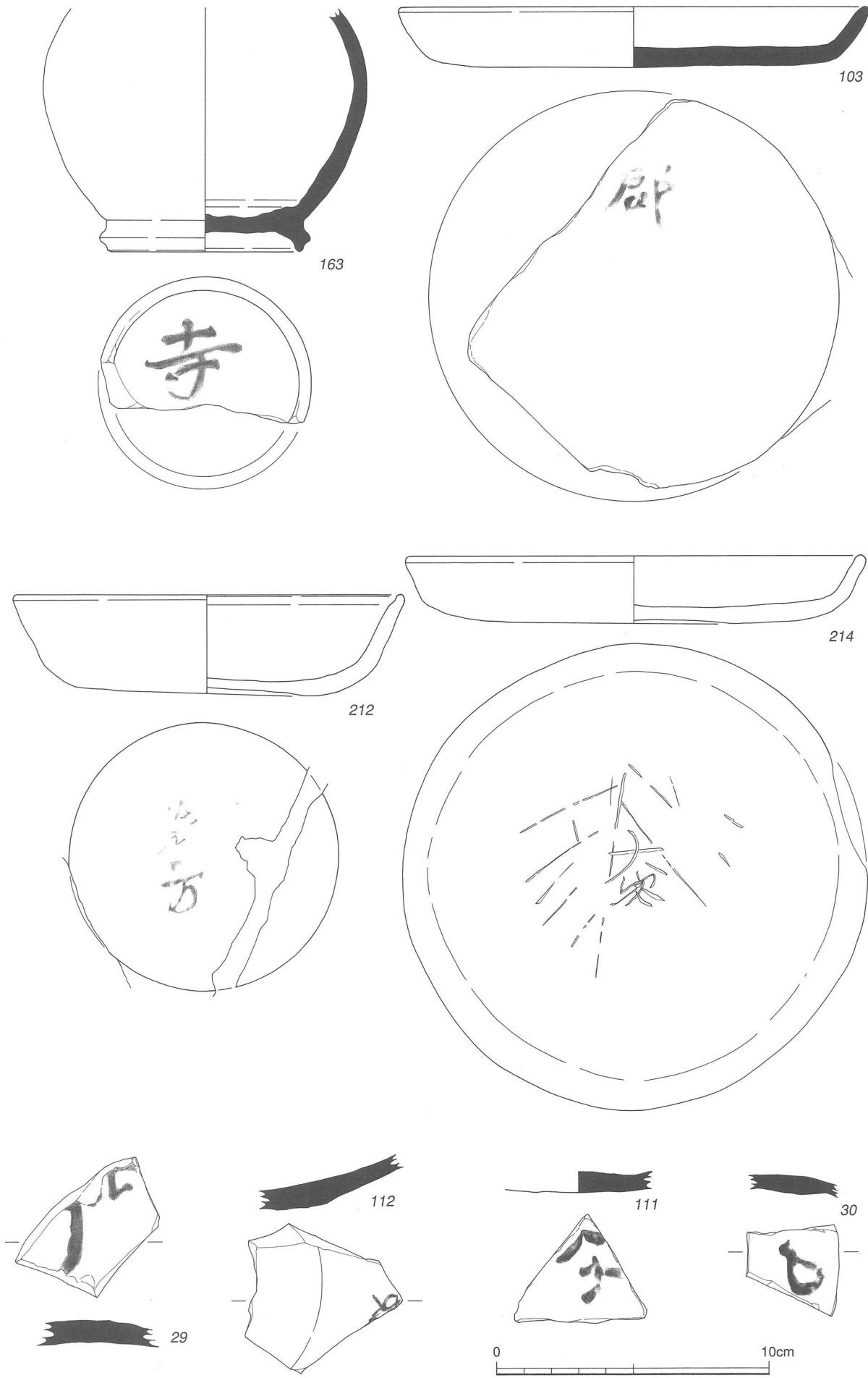
墨書土器(1)

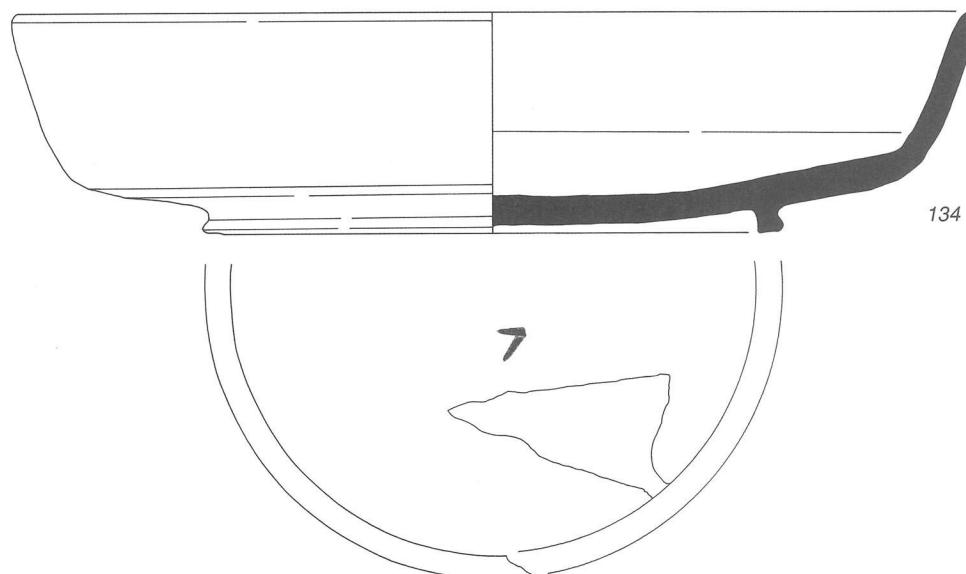
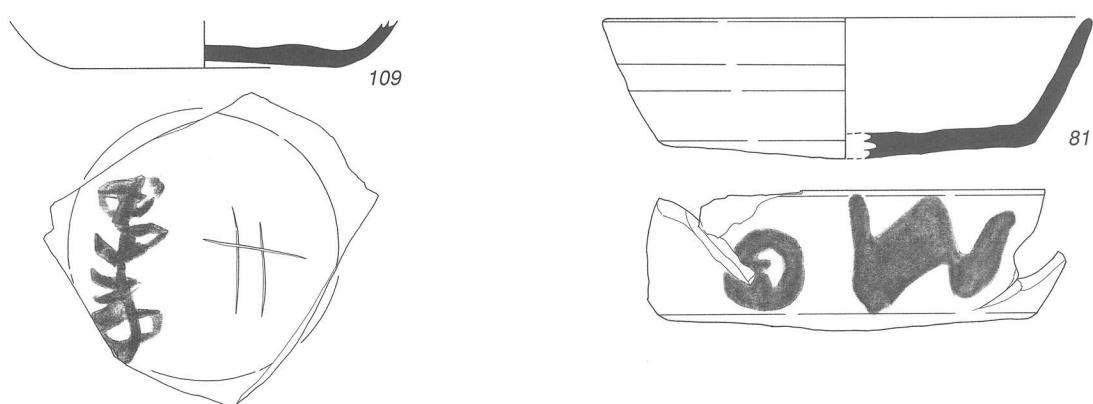
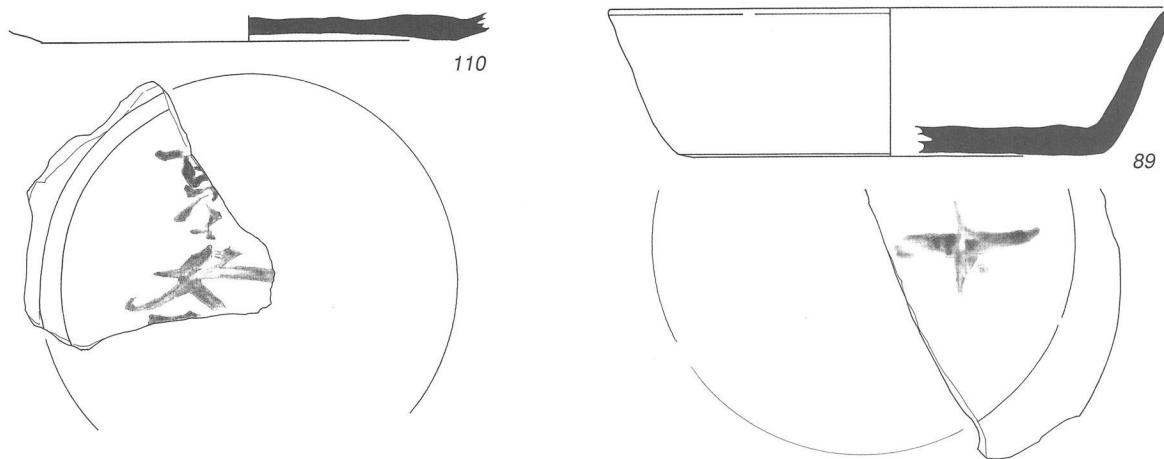
墨書土器(1) (A区旧河道)





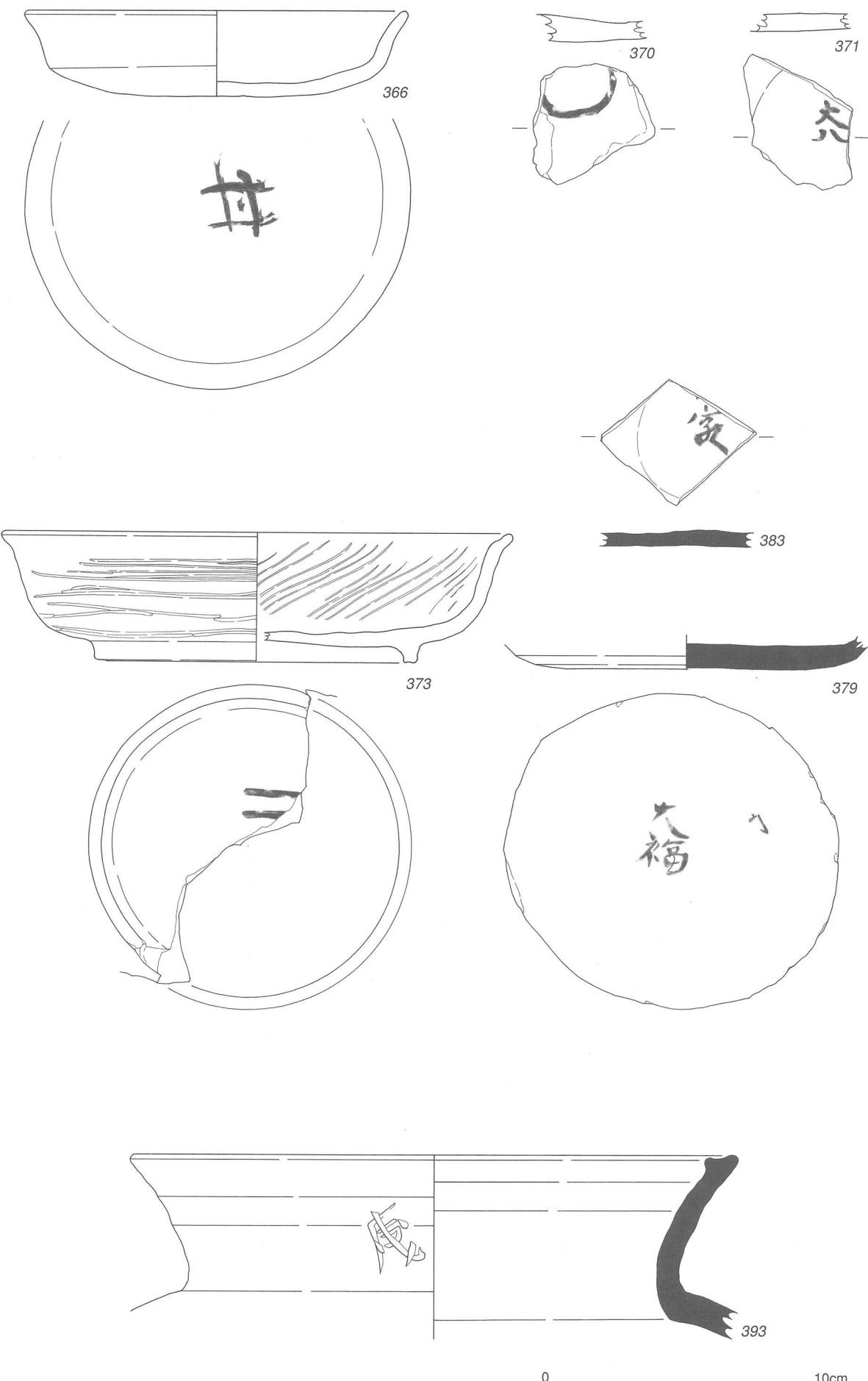
墨書土器(3) (A区旧河道)



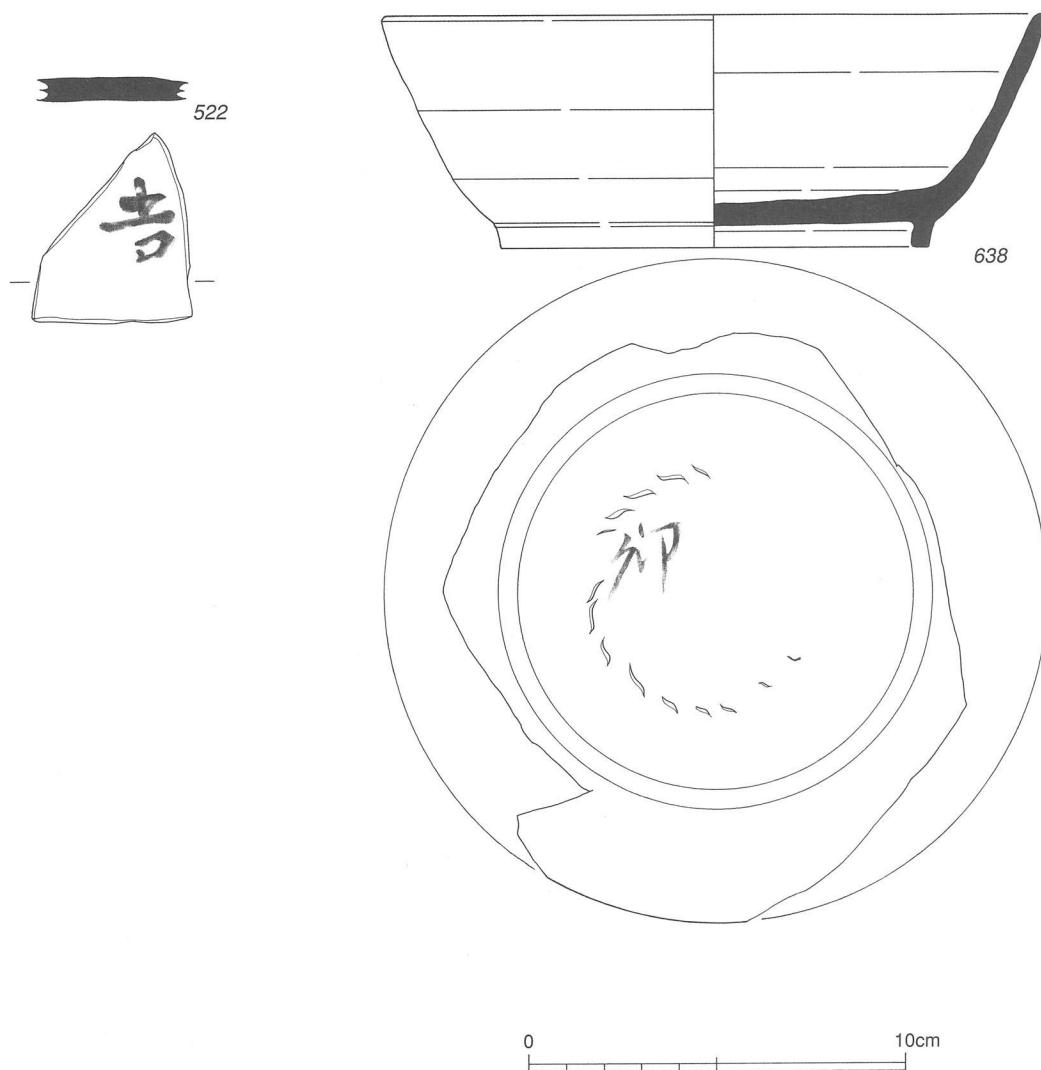


0 10cm

墨書土器(5) (A区旧河道)

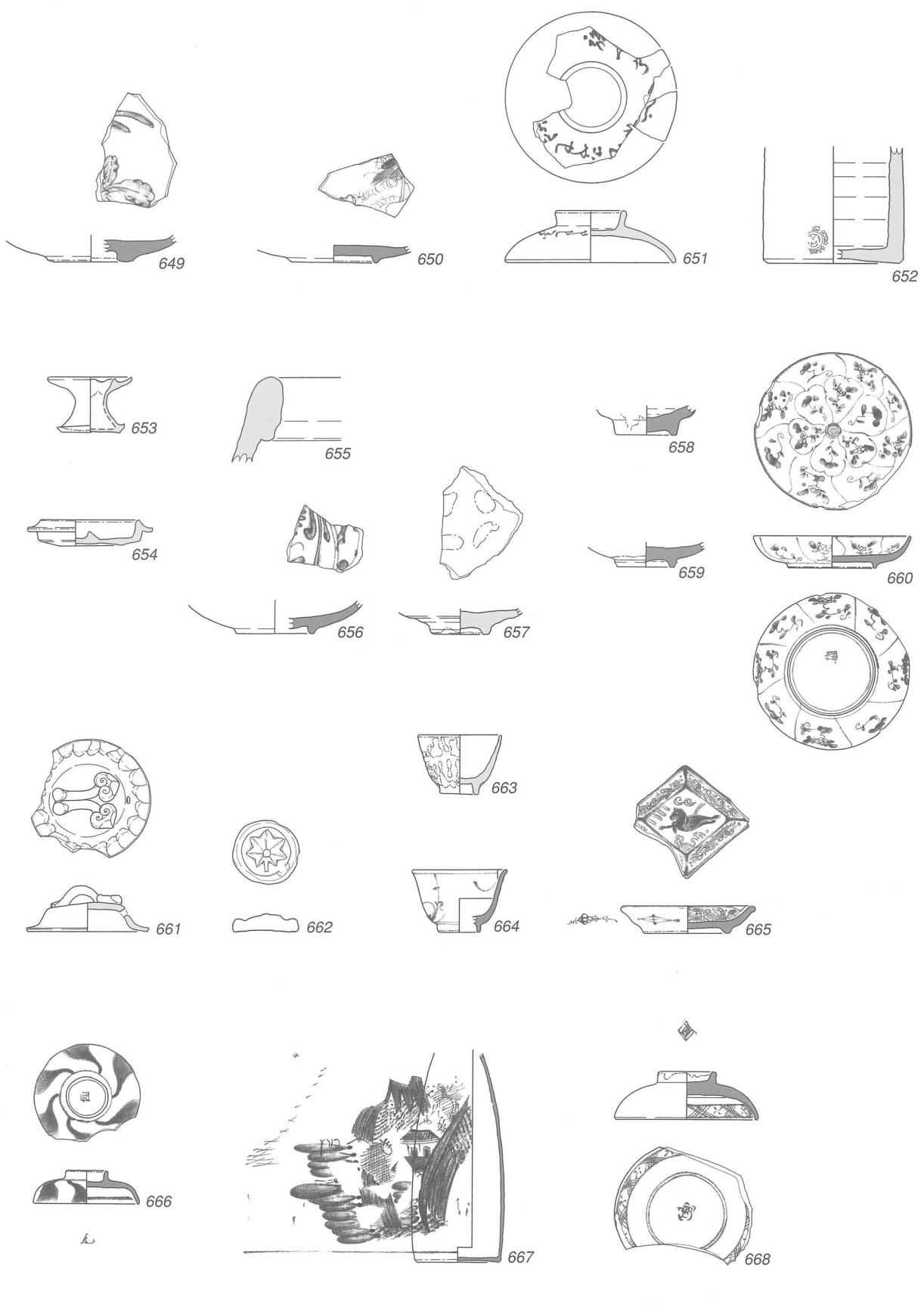


墨書土器(6) (A区井戸・土坑)・刻書土器(2) (A区旧河道)



墨書土器(7)

墨書土器(7) (C区SD02・E区SK05)

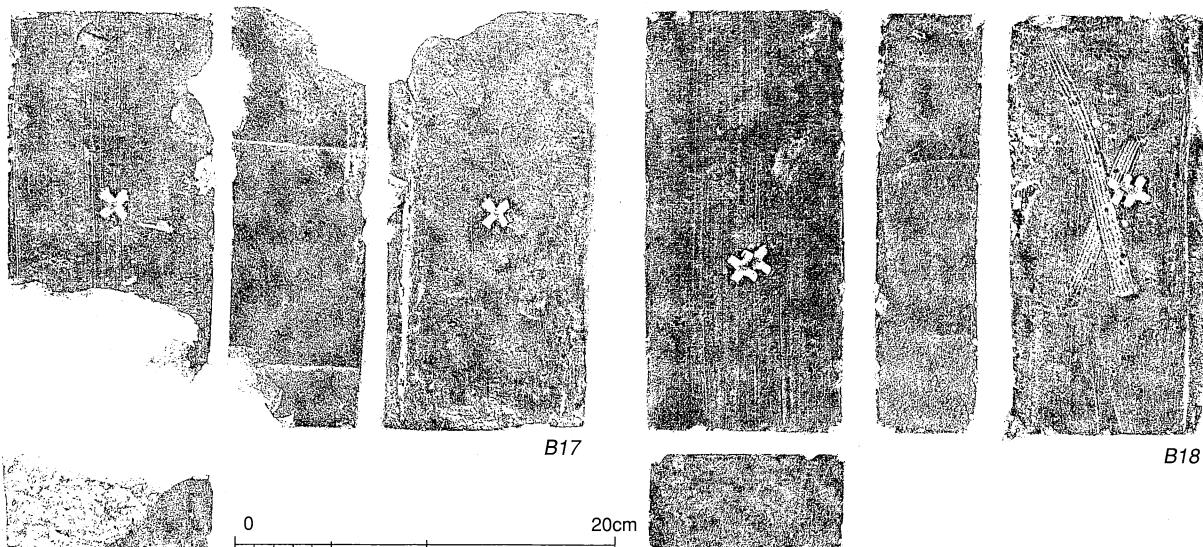
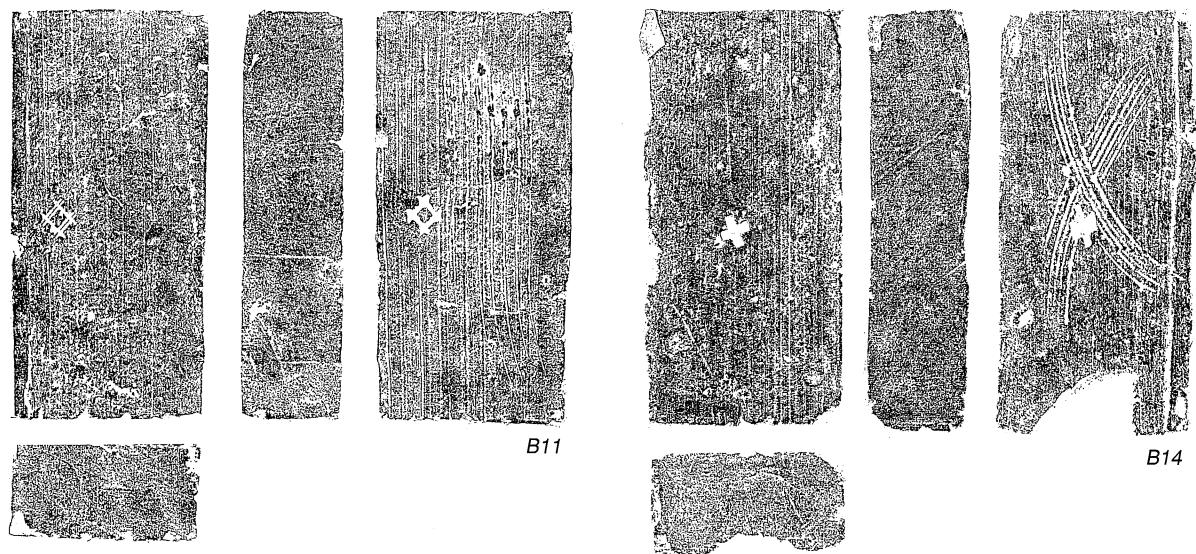
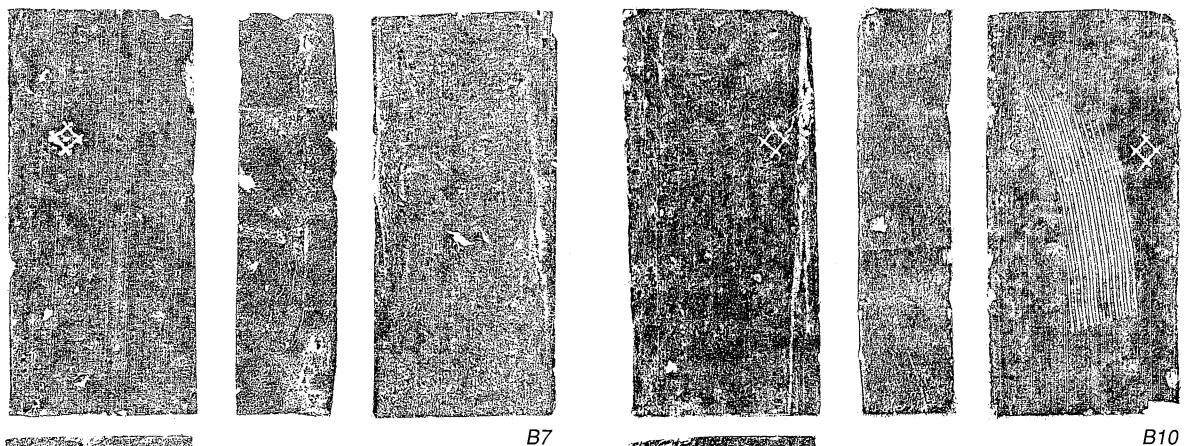


0 20cm

近世の陶磁器・土製品



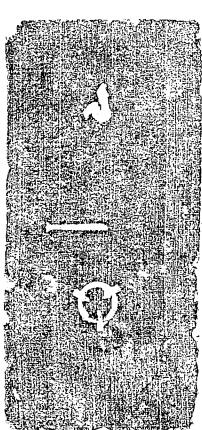
旧山陽鉄道関連施設煉瓦(1)



旧山陽鉄道関連施設煉瓦(2)



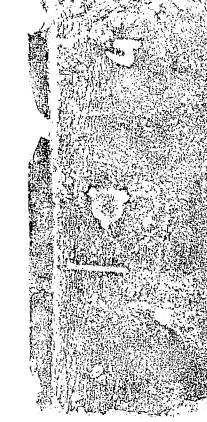
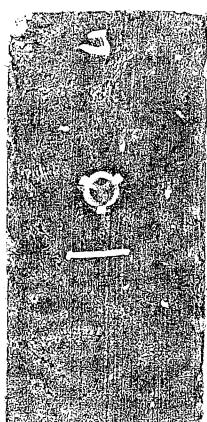
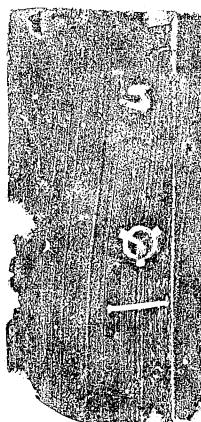
旧山陽鉄道関連施設煉瓦(3)



B37

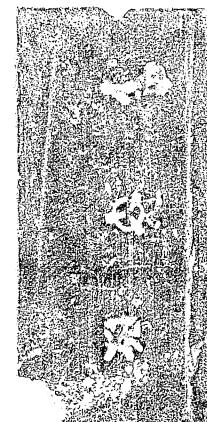


B38



B39

B40



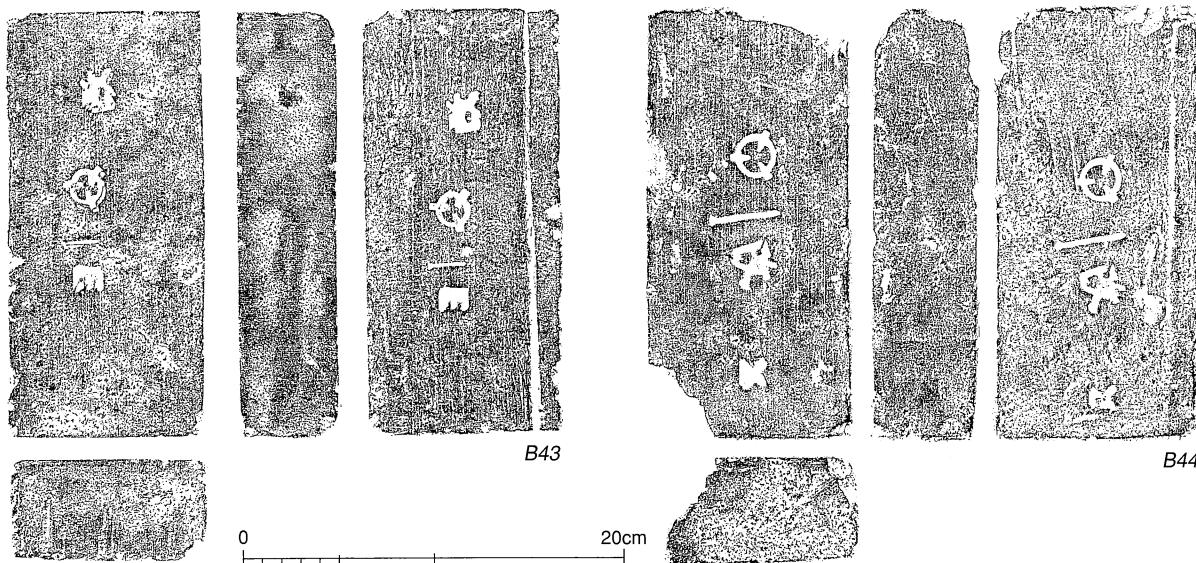
B41

B42

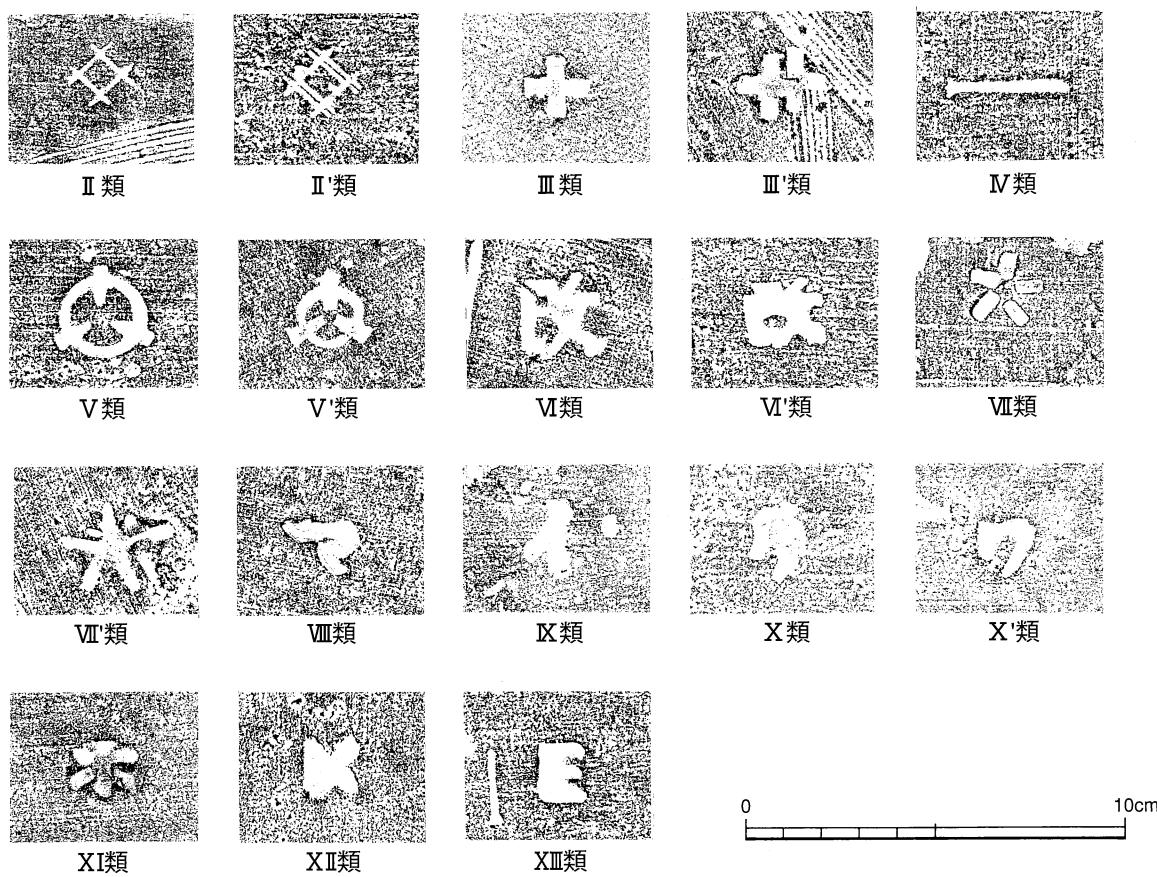


0 20cm

旧山陽鉄道関連施設煉瓦(4)



旧山陽鉄道関連施設煉瓦(5)



出土煉瓦刻印分類

写 真 図 版

航空写真 (1)



1 JR姫路駅と調査区（南上空から）

A区(1)



2 全景（北上空から）

航空写真 (2)

A区
(2)



1 全景（北上空から）



2 全景（東上空から）

全景 A-1区

A区(3)



1 全景（東から）

2 奈良時代遺構集中部
(北から)

3 同上（東から）

全景 A-2区



1 全景（南から）



2 奈良時代遺構集中部
(南から)



3 旧河道SR01（南西から）

奈良時代 井戸 (1)

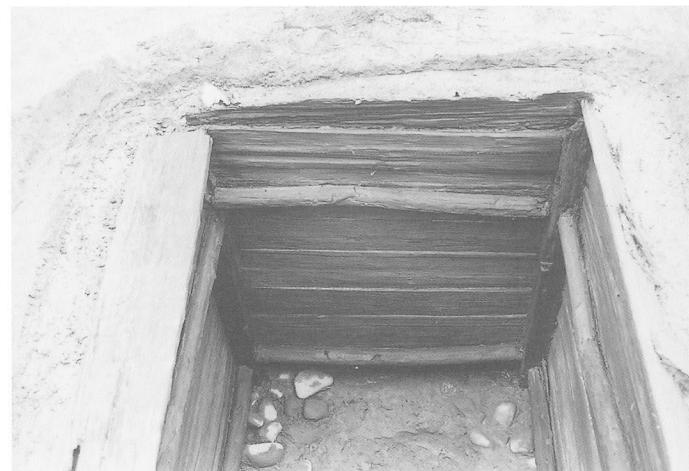
A区(5)



1 井戸SE01 (東から)

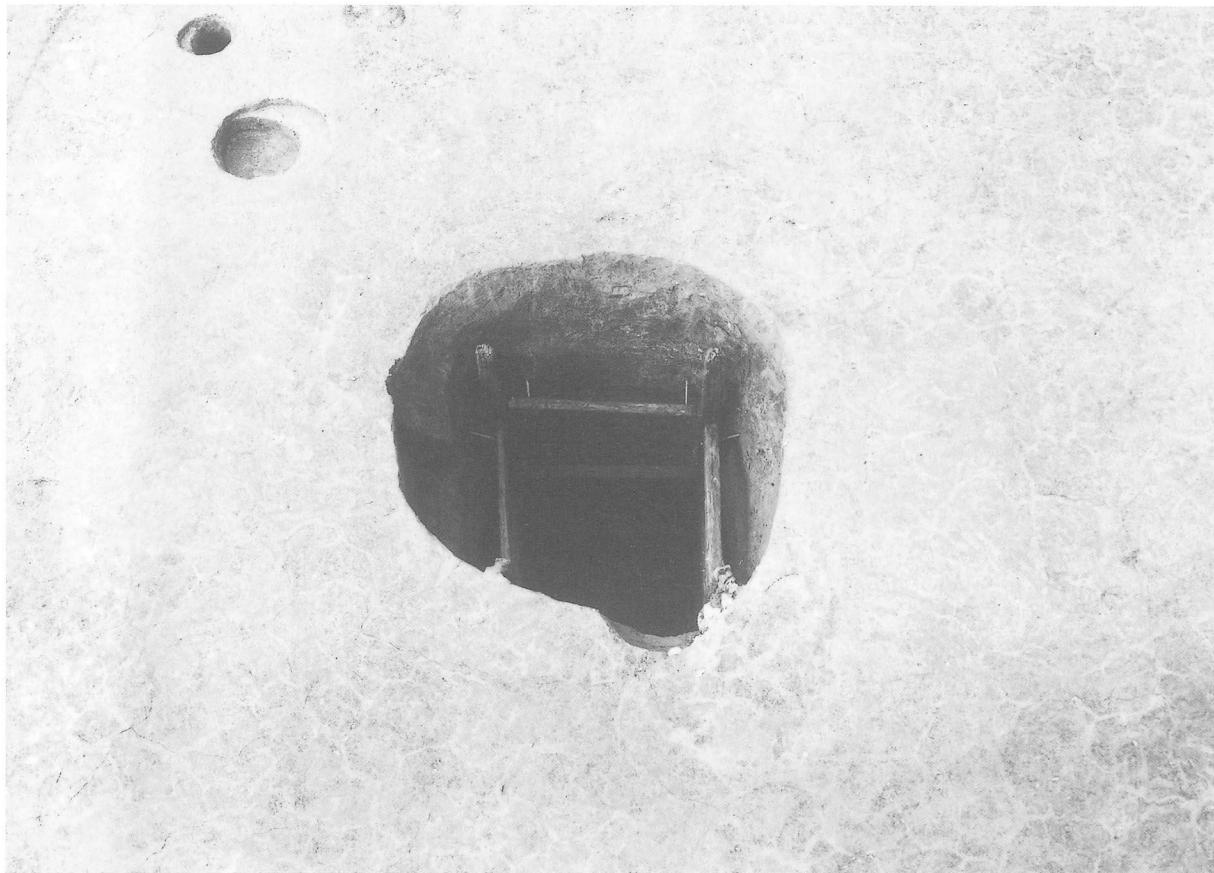


2 同上 断面 (東から)



3 同上 井戸枠 (東から)

A区
(6)



1 井戸SE02 (SK13) (東から)



2 同上 断面 (東から)



3 同上 井戸枠 (北東から)

土坑・溝

A区(7)



1 土坑SK20（南から）



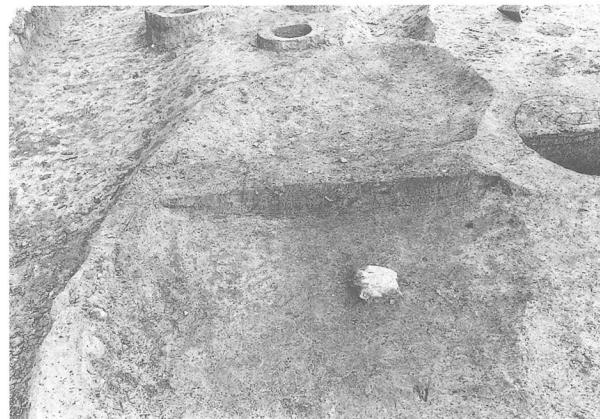
2 同左 断面（南から）



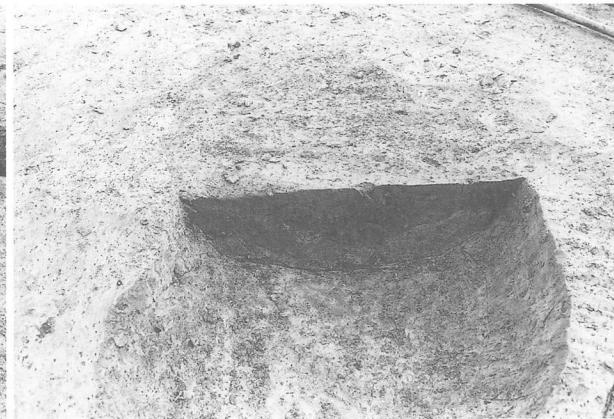
3 土坑SK22（南から）



4 同左 断面（南から）



5 土坑SK23（東から）



6 土坑SK28（南から）



7 溝SD01断面（南から）



8 溝SD16断面（南から）

調査風景

A区 (8)



A区 調査風景

全景 (1)



1 全景（東から）

B区
(1)

2 全景（西から）

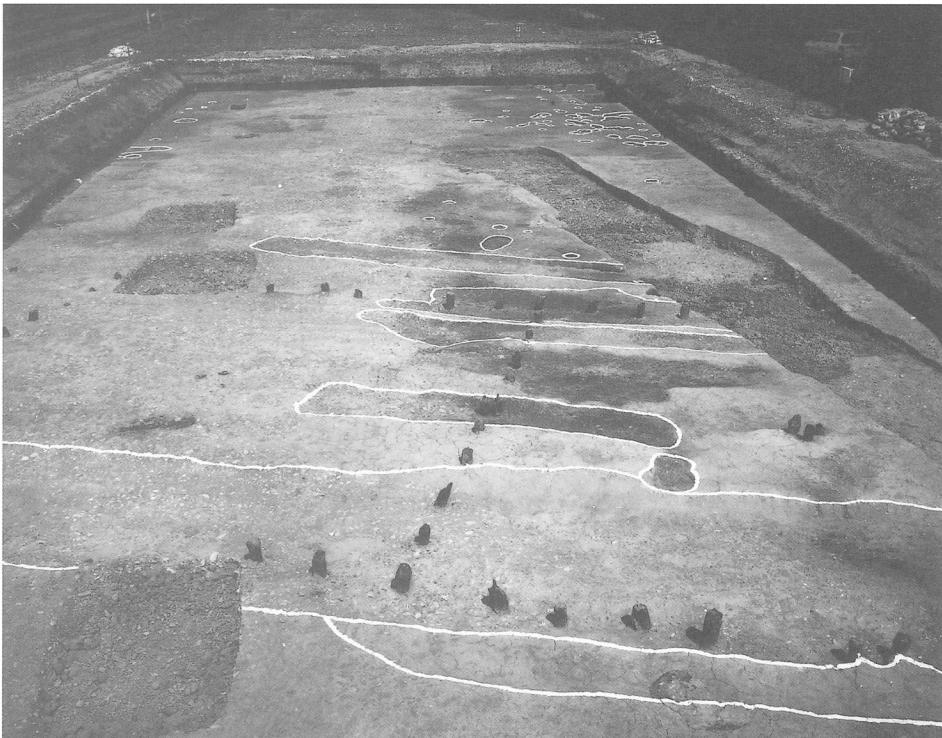


3 全景（西から）

B区(2)



1 調査区西半部（東から）



2 調査区東半部（西から）

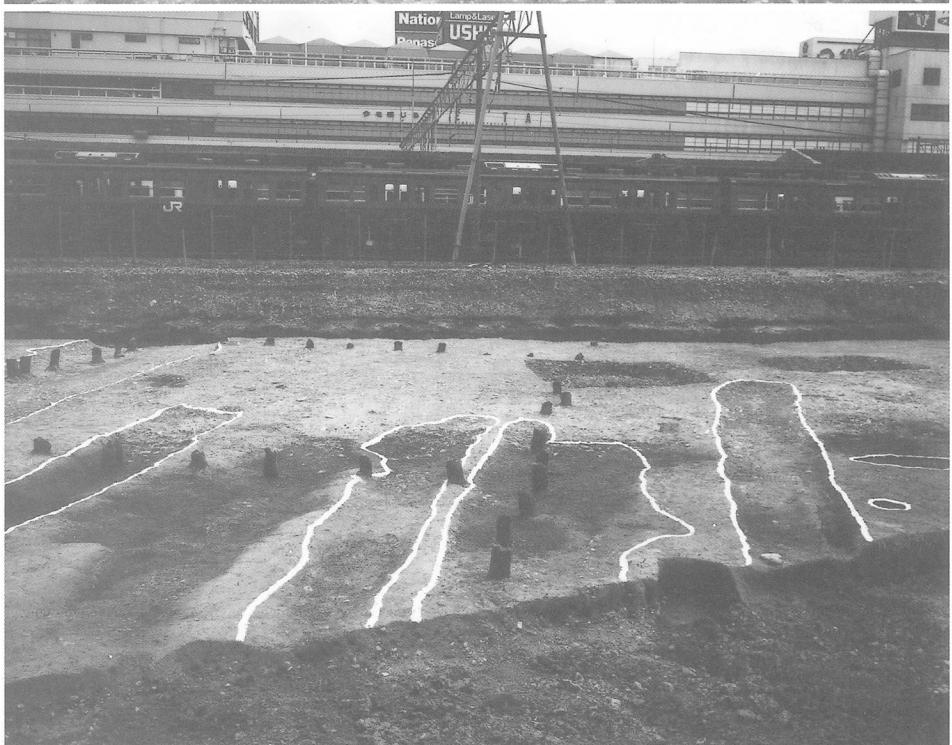


3 溝SD01（北から）

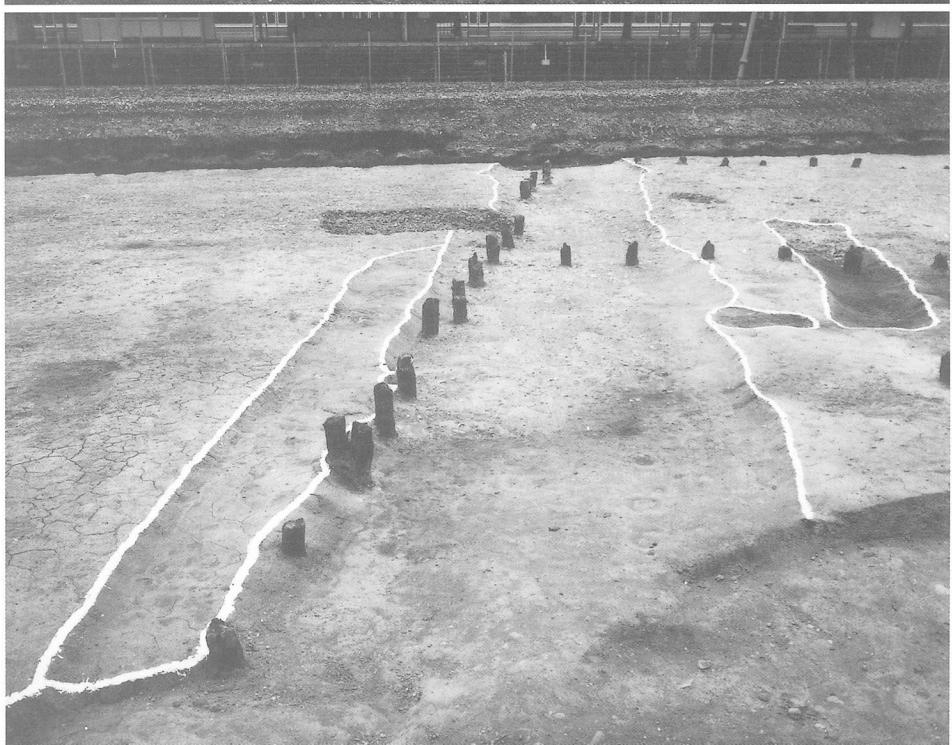
溝 (2)



1 溝SD01A断面（北から）



2 溝SD02～04（南から）



3 溝SD05～07（南から）

B区
（3）

溝 (3)・柱穴群 (1)

B区(4)



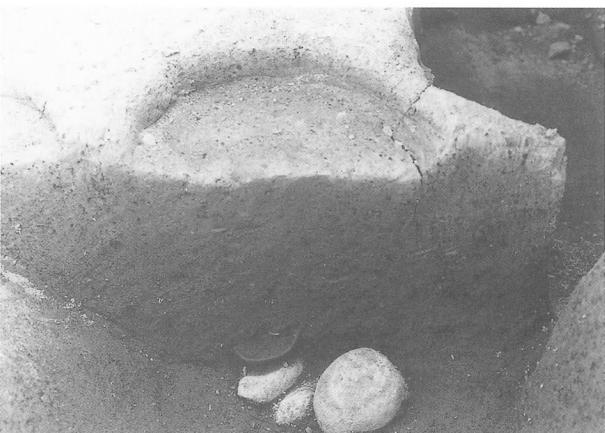
1 溝SD01土器出土状況（南から）



2 溝SD05土器出土状況（東から）



3 溝SD09土器出土状況（東から）



4 P29断面（西から）



5 B14～15 ピット群（南から）

柱穴群 (2)・焼土坑

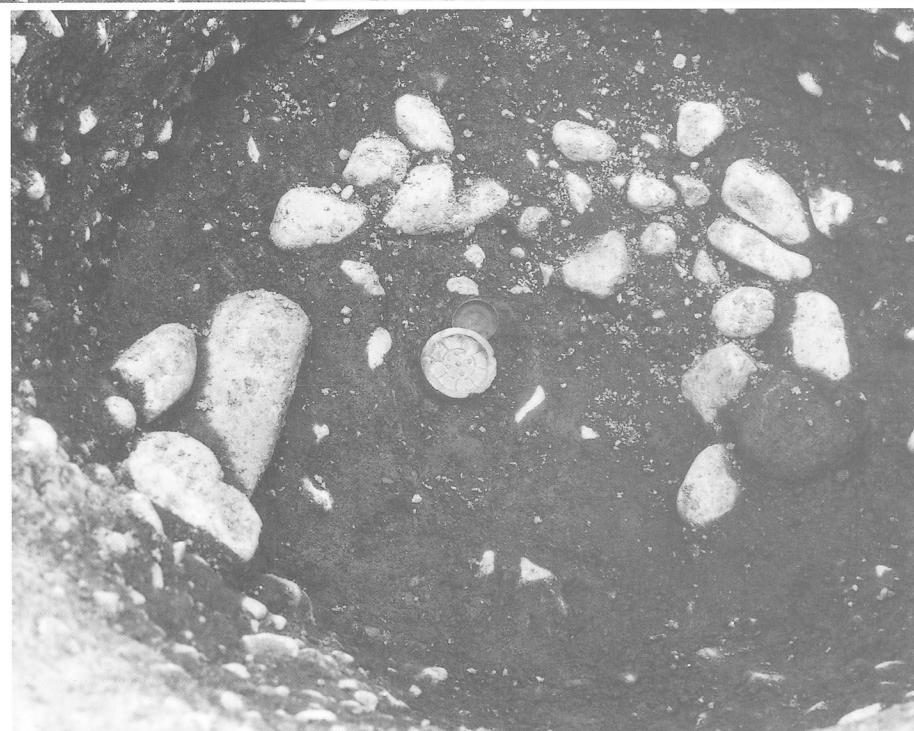
B区(5)



1 調査区南東部ピット群
(南から)



中央左)
2 焼土坑2検出状況
(西から)
中央右)
3 同左 南北断面
(西から)



4 同上 軒丸瓦・土師器出土状況 (西から)

航空写真（1）



1 JR姫路駅と調査区（西上空から）



2 同上（北上空から）

C区(1)

航空写真 (2)



1 調査区全景（西から）



2 調査区北側（西から）



3 調査区全景（北西から）

C区(2)

全景 (1)

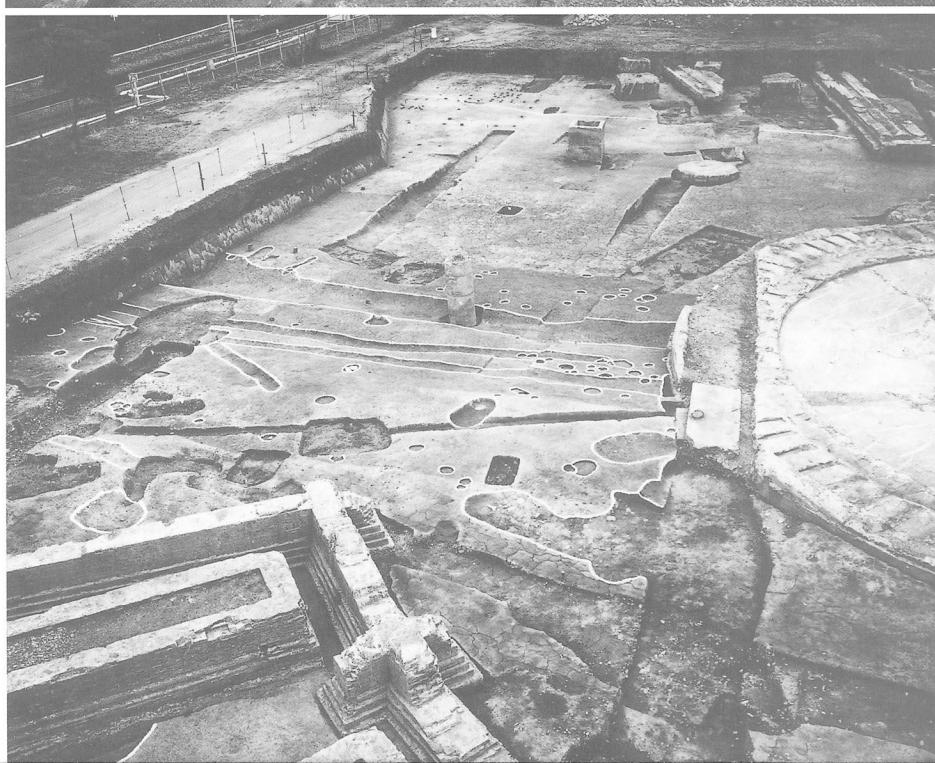
C区(3)



1 調査区全景（東から）



2 同上（西から）



3 調査区北側（西から）

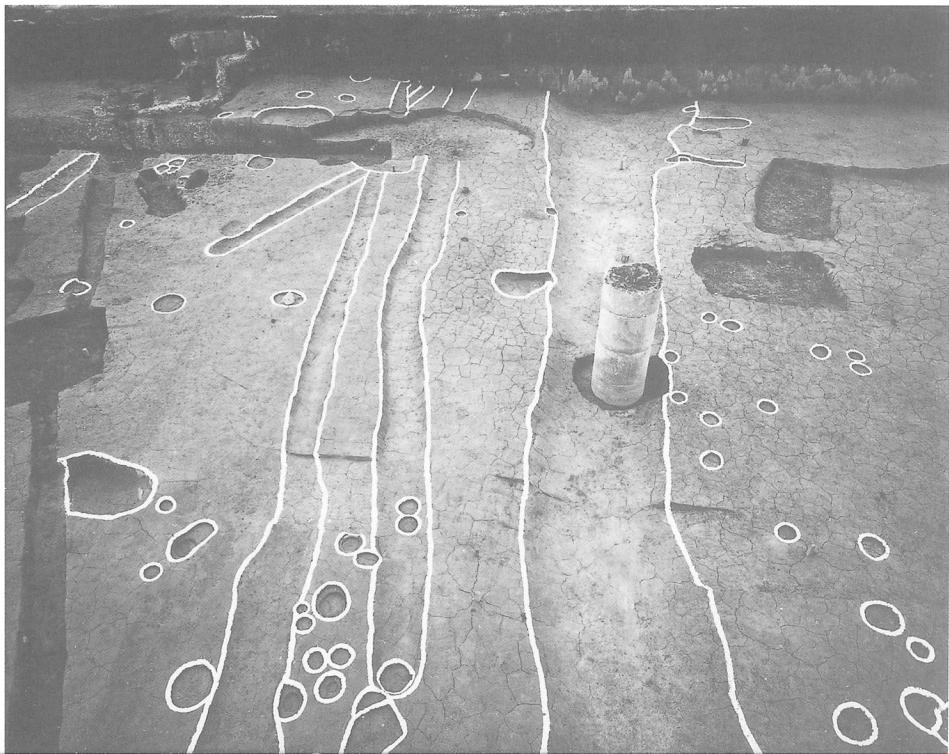
全景 (2)



1 調査区北側（南西から）



2 調査区北西側（東から）

3 溝SD05・07・08
(南から)

C区(4)

転車台 (1)

C区(5)



1 SX02西壁（東から）



2 JR姫路駅旧転車台
(ターンテーブル)(西から)



3 調査区南西側車庫跡
(東から)

転車台 (2)



C区(6)

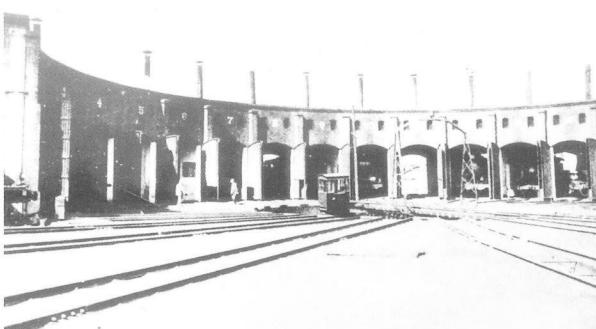
1 姫路駅航空写真（南から） 兵庫県立歴史博物館所蔵（高橋秀吉コレクション）



2 姫路駅機関庫（昭和29年） 同上



3 姫路駅機関庫（昭和50年） 同上



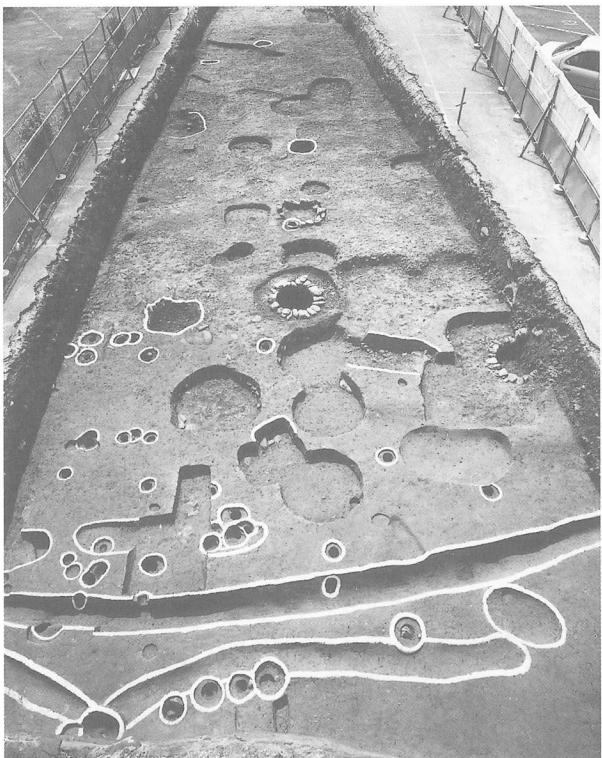
機関庫全景（其三）明治卅六年十月建築

4 姫路駅機関庫（北から） 同上



5 姫路駅機関庫（南から） 同上

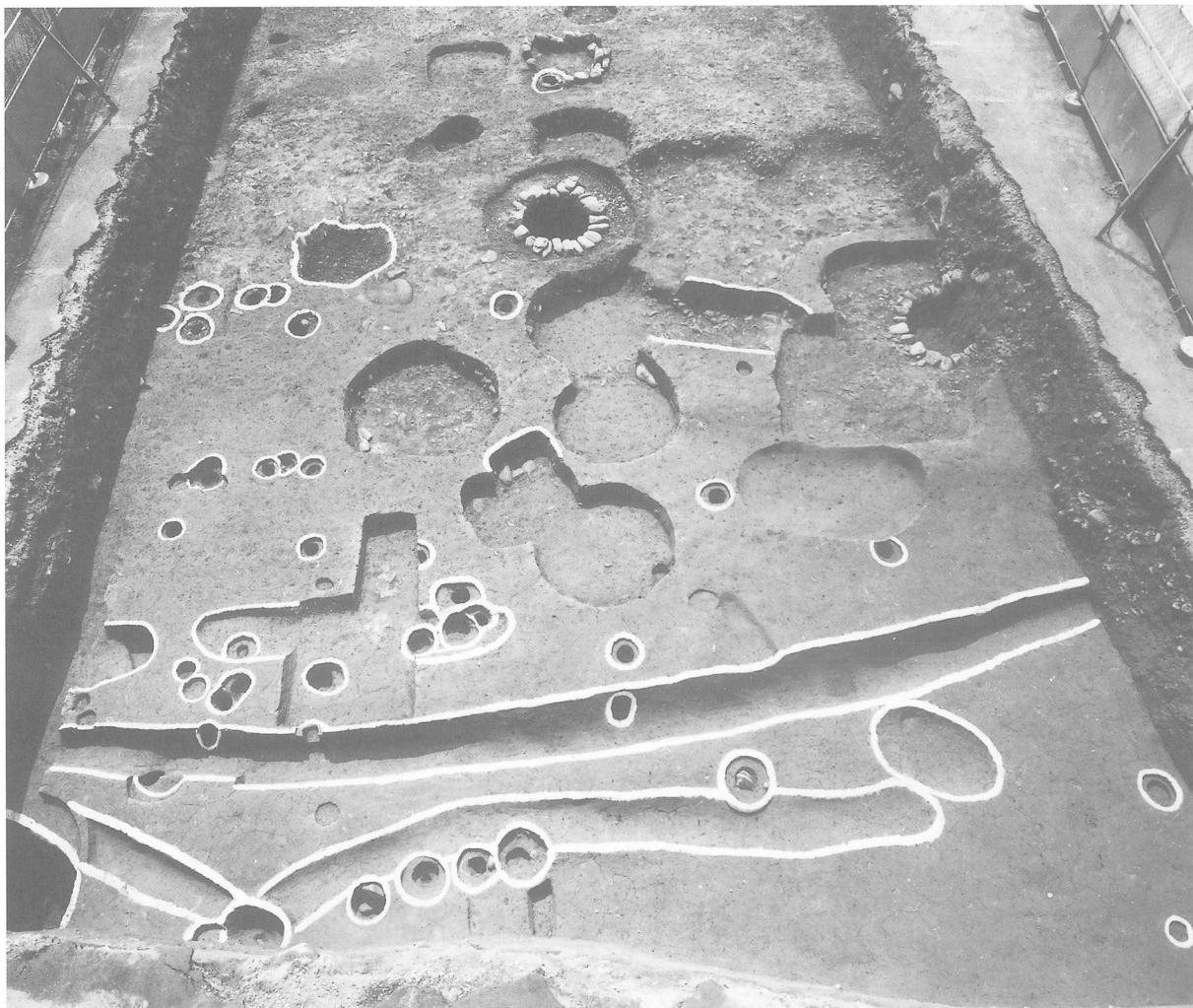
全景 南区



1 全景（西から）



2 同左（東から）



3 西半部（西から）

D
区
（1）